福山医学

第 30 号 2025.5

第 30 号

2025.5

〈第30号:臨床研究〉	
病院内における多職種間での口腔内情報共有による窒息・誤飲予防の取り組み	
	1
RPAを活用した働き方改革への取り組み 	11
個性症でクラー人田記が内に 物川みゆき 間	11
Super PATH法を用いたTHA患者の歩行獲得時期について	
脳神経センター大田記念病院 急性期リハビリテーション課 藤原 陵次 他	17
福山市における日本紅斑熱の検討	20
	23
当院における筋萎縮性側索硬化症に対する多職種連携によるチーム医療	
	29
〈第30号:症例報告〉	
薬剤リンパ球刺激試験が有用であったアナストロゾールによる薬剤性肺障害の1例	
	33
新たな人道支援としての遠隔リハビリの可能性	
	39
血糖管理が出来なかった患者への行動変容の動機付けを促す指導	
	45
取名を打造すると、とでからみいませんのと、いこ然は中に行はと入す	
緊急透析導入となった不安が強い患者へのシャント管理に向けた介入 ~フィンクの危機モデルを用いて~	
	51
	01
当院における血縁者間同種骨髄移植	
中国中央病院 血液内科・感染症内科 増成 太郎 他	55
〈第28回 福山医学祭抄録〉	61
〈福山市医師会関係医療機関の学術業績(2020年1月~2023年12月)〉	83
	00
〈編集後記〉	190

2025.5

CONTENTS

⟨No30 C	Clinical	Research
---------	----------	----------

Y. Yoshida: Enhancing patient safety in hospitals: Interdisciplinary oral information sharing for prevention	
of choking and aspiration ····································	1
M. Yanagawa:	
Efforts to reform Work Styles Using RPA ·····	11
R. Fujiwara:	
Regarding the timing of gait acquisition in THA patients using the Super PATH method	17
K. Shiromoto:	
A Study of Japanese Spotted Fever in Fukuyama City ·····	23
K. Sato:	
The effect of multidisciplinary collaboration on amyotrophic lateral sclerosis practice	29
⟨No30 Case⟩	
S. Fujii:	
A case of drug-induced lung injury due to anastrozole in which drug lymphocyte stimulation test was useful	33
K. Tawara:	
The possibility of tele-rehabilitation as a new humanitarian aid	39
M. Hiraoka:	
Guidance to motivate patients who have not been able to control their blood glucose to change	
their behavior.	45
M. Morimoto:	
Intervention for shunt management in highly anxious patients undergoing emergency dialysis	
-Using Fink's crisis model-	51
T. Masunari:	
Allogeneic bone marrow transplantation from related donor at our hospital	55

臨床研究

病院内における多職種間での口腔内情報共有による 窒息・誤飲予防の取り組み

吉田泰子¹⁾ 佐能紗希¹⁾ 中濵加奈子¹⁾ 佐々木和希¹⁾ 大島營子¹⁾ 坪井綾香¹⁾²⁾ 松永一幸¹⁾²⁾ 田中朗雄¹⁾

要旨 当院では、2021年2~5月の期間で、窒息・誤飲関連の報告のうち、アクシデントに相当するレベル3bの報告が3件あった。今回、窒息・誤飲予防に向けて、多職種間で口腔内情報を共有する取り組みを実施し、その効果を検討した。窒息・誤飲予防に向けて、従来の口頭での情報共有に加えて、2021年6月から、掲示物による注意喚起や、フローチャートによる手順の明確化を行い、情報共有体制を整備した。体制整備による効果を検証するため、整備前、整備直後、定着後の各4ヶ月間において、情報共有件数、レベル3b以上の報告件数を調査した。情報共有件数は、整備直後で増加し、定着後で減少した。レベル3b以上の報告は、整備前で3件だったが、整備直後で1件、定着後で0件と減少した。窒息・誤飲予防に向けて多職種間で口腔内情報を共有することで、窒息・誤飲件数は減少することが示唆された。

Key words:窒息、誤飲、多職種連携、口腔内情報共有

緒言

2021年の人口動態統計によると、不慮の窒息による年間の死亡者数は約8,000例で、交通事故に比べて、2倍以上多い状況にある¹⁾。また、不慮の窒息による死亡は、65歳以上の高齢者で最も多く、そのほとんどが病院での死亡となっている¹⁾。さらに、広島市の病院で診断された異物誤飲・誤嚥のうち、歯や歯の被せなどの異物は年間2.3例、その他異物は年間15.3例あったことが報告されている²⁾。

このような背景から、当院では従来から窒息・誤飲リスクのある患者を歯科職員が発見した際には、口頭で病棟看護師に報告し、その旨をカルテに記載する等の情報共有を実施してきた。しかし、このような対策を実施しているにも関わらず、2021年2月から5月までの期間で、窒息・誤飲関連の報告は、アクシデントに相当するレベル3b(表1)が3件報告されており、その内訳は動揺歯の誤飲が2件、義歯の誤飲が1件という状況であった。

〒 720-0825 広島県福山市沖野上町 3-6-28 脳神経センター大田記念病院¹⁾ 岡山大学病院 歯科・歯周科部門²⁾ ここで、当院で実際に発生した窒息・誤飲関連の報告事例を一部紹介したい(図1)。左の写真は、口腔衛生状態が非常に不良で、口腔内乾燥も非常に顕著で、口蓋や咽頭部には多量に剥離性上皮膜が付着していたため、窒息リスクが高いと判断した事例である。また、右の写真は、経鼻経管栄養チューブの挿入位置を確認するためにレントゲン画像を撮影したところ、胃内部において歯の被せ物の誤飲が見つかった事例である。病院内において、このような窒息・誤飲関連の事例が発生した場合には、呼吸不全や消化管穿孔などを生じる恐れがあり、最悪の場合には死亡に繋がる危険性がある。

そこで当院では、病院内の窒息・誤飲予防に向けて、多職種間で口腔内情報を共有する取り組みを実施し、その効果を検証した。

方 法

1. 要因解析

病院内において窒息・誤飲予防ができていない要因を把握するため、まずはフィッシュボーンチャートを用いた要因解析を実施した(図2)。

要因解析では、窒息・誤飲の要因として考えられ

る項目を可能な限り列挙し、これらを人・環境・方 法に分類してこの中から特に重要と考えられる項目 を抽出した。

その結果、歯科介入後の口腔環境・注意事項が看護師に伝わっていないこと、窒息・誤飲リスクのある患者を発見した際の報告の流れが決まっていないことの2つを、重要な要因と判断した。

2. 対策立案と実施

次に、要因解析で抽出した上記2項目を当院の課題と捉え、課題解決のためには多職種間での口腔内情報の共有が必要と考えた。

方法として、まずは2つの課題への対策をそれぞ れ検討した。

課題①への対策としては、従来行っていた口頭と カルテ記載による報告に加えて、掲示物による注意 喚起を実施した。

具体的には、動揺歯の誤飲や付着物による窒息のリスクがある場合には、歯科衛生士がベッドサイドに口腔内の状況を掲示し、義歯の持参がある場合には、義歯ケースに義歯の個数や管理方法を掲示した(図3)。

課題②への対策としては、誤飲の恐れがある動揺 歯や義歯を発見した場合には、歯科職員と歯科以外 の職種間で必ず情報共有を行うよう、フローチャー ト(図4)を作成した。

また、窒息リスク患者を発見した場合についても フローチャート(図5)を作成した。

具体的には、発見した職員は、まず医師や看護師に報告を行い、次に口腔ケア・摂食嚥下支援チームにも情報共有を行うことで、リスク評価や対応を検討する流れとした。

3. 効果の検証

以上の対策を8ヶ月間実施して、体制整備による効果を検証した。すなわち、体制整備前、体制整備直後、体制定着後の各4ヶ月間において、情報共有件数、レベル3b以上の報告件数を調査した。

また、体制定着後に病棟職員を対象に、窒息・誤 飲予防に関してアンケートを用いた意識調査を実施 した。

4. 倫理的配慮

本研究は、脳神経センター大田記念病院における倫理委員会(承認番号246)の承認を得て実施した。

成績

図6は、窒息・誤飲リスクのある患者を多職種間で情報共有した件数とレベル3b以上のインシデント件数の変化である。

情報共有件数は、体制整備前で月平均9件だったが、体制整備直後で11.3件に増加し、体制定着後では7.5件に減少した。

一方で、レベル3b以上の報告は、体制整備前は3件だったが、体制整備直後で1件、体制定着後では0件に減少した。

さらに、体制定着後の病棟職員を対象とした、窒 息・誤飲予防に関する意識調査の結果を図7に示し た。意識調査では、病棟職員213人の回答があり、 職種の内訳は、医師7人、薬剤師6人、看護師86 人、准看護師3人、介護士10人、管理栄養士5人、 歯科衛生士3人、言語聴覚士9人、作業療法士18 人、理学療法士21人、臨床検査技師13人、臨床工学 技士13人、放射線技師19人であった。意識調査の 質問事項で、「① 窒息しそうな患者さんを発見し たことがあるか?」に対しては、病棟職員の28.2% が「はい」と回答し、「② 誤嚥、誤飲を起こしそ うな患者さんを発見したことがあるか?」に対して は、44.1%が「はい」と回答していた。また、「③ 歯科が口腔内状況を掲示物によって情報共有してい ることを知っているか?」に対しては、病棟職員の 61.0%が「はい」と回答し、「④ 掲示物を用いて情 報共有を行うことについて、どう思うか?」に対し ては、70.9%が「良い」と回答していた。さらに、 「⑤ 院内の窒息、誤嚥、誤飲の対策についてどう思 うか?」に対しては、「出来ている」と回答した病 棟職員は9.4%と少なく、70.0%は「分からない」と

考 察

回答していた。

今回、窒息・誤飲予防に向けて、多職種間で口腔 内情報を共有する取り組みを8ヶ月間にわたって実 施したところ、窒息・誤飲関連のインシデントレベ ル3b以上の報告件数は、体制整備前は3件だった が、体制整備直後は1件となり、体制定着後は0件 に減少した。

一方で情報共有件数は、体制整備前に比べて、体 制整備直後は増加したが、体制定着後は減少してい た。この結果について考察すると、体制整備前は、 主に歯科職員が病棟看護師に対して、口頭とカルテ記載による報告を行っていたが、体制整備後は掲示物やフローチャートを用いた多職種間での情報共有体制に変更したことで、情報共有の量よりも質が向上したことによって、窒息・誤飲の予防に繋がったものと考える。

また、体制定着後に実施した病棟職員に対する意 識調査の結果では、歯科以外の病棟職員においても 半数程度は、窒息・誤飲リスクのある患者を発見し たことがあると回答しており、窒息・誤飲リスク患 者発見時の多職種間での情報共有方法や対策内容が 院内で整備されたことで、窒息・誤飲事故の減少に 繋がった可能性がある。さらに、歯科が口腔内状況 を掲示物で情報共有することについては、70.9%の 病棟職員が好意的に捉えており、掲示物を用いた情 報共有は病棟職員への注意喚起にも有効といえる。 一方で、意識調査の結果によると、70%の病棟職員 が窒息・誤飲リスクの対策について「分からない」 と回答しており、病院内での周知や啓発については 継続課題である。ただし、「分からない」と回答し た職種の中には、他職種に比べて病室を訪問する機 会の少ない臨床工学技士や放射線技師が多く含まれ ており、そもそも病室内の掲示物を目にする機会が 少なかったことも要因として考えられる。また、意 識調査の質問内容が漠然としていて、窒息・誤飲患 者発見時の対策なのか、掲示物などを用いた窒息・ 誤飲予防対策なのか、質問の意図が分かりにくい内 容だったことも結果に影響した可能性があり、活動 の振り返りの際には今後修正していく必要があると 考えている。

以上のことから、窒息・誤飲予防に向けて、多職 種間で口腔内情報を共有する取り組みを実施したと ころ、掲示物やフローチャートを用いた情報共有方 法によって、窒息・誤飲件数は減少することが示唆 された。

現在当院では、窒息・誤飲予防を更に推進していくため、窒息・誤飲リスクのある患者を発見した場合には、院内の医療安全委員会にインシデントレベル0または1で報告する取り組みも追加して行っている。

具体例としては、病棟職員が脱落しそうな動揺歯を発見し、誤飲リスクが高いと判断した場合にはレベル0で報告を行っている。また、口蓋や咽頭部に

剥離性上皮膜が多量に付着し、窒息リスクが高いと 判断した場合で、直後に付着物を取り除いた際に は、レベル1での報告を行っている。そして、病棟 カンファレンスや口腔ケア・摂食嚥下支援チームで 情報共有し、窒息・誤飲予防に向けた対応を検討 することで、直近6ヶ月間においても、レベル3b 以上の報告件数は0件に抑えることができている (図8)。

このように、病院内において窒息・誤飲予防を推進するためには、多職種間での情報共有や早期対応の仕組み作りが重要と考えられる。今後は病院内だけでなく、地域においても窒息・誤飲予防に向けた啓発活動に努めていきたい。

文 献

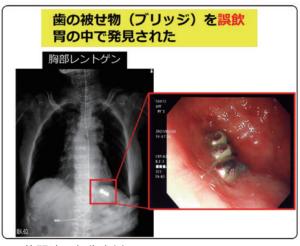
- 1) 厚生労働省:令和3年(2021) 人口動態統計 (確定数)の概況
 - 第7表死因簡単分類別にみた性別死亡数・死亡率(人口10万対)https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei21/dl/11_h7.pdf
- 間島徹ほか:歯科関連の異物誤飲・誤嚥症例の 検討.老年歯科医学 360-365, 2010.

表1 インシデント・アクシデントのレベル表

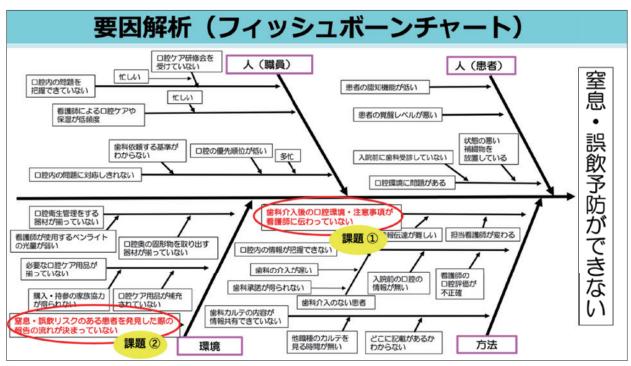
1	0	エラーや医薬品・医療用具の不具合が見られたが、患者には実施されなかった
ンシ	1	患者への実害はなかった(何らかの影響を与えた可能性は否定できない)
デン	2	処置や治療は行わなかった(患者観察の強化,バイタルサインの軽度変化, 安全確認のための検査などの必要性は生じた)
	3a	簡単な処置や治療を要した (消毒,湿布,皮膚の縫合,鎮痛剤の投与など)
アク	3b	濃厚な処置や治療を要した(バイタルサインの高度変化,人工呼吸器の装着, 手術,入院日数の延長,外来患者の入院,骨折など)
シデ	4a	永続的な障害や後遺症が残ったが,有意な機能障害や美容上の問題は伴わない
2	4b	永続的な障害や後遺症が残り,有意な機能障害や美容上の問題を伴う
7	5	死亡(原疾患の自然経過によるものを除く)

国立大学付属病院医療安全管理協議会,





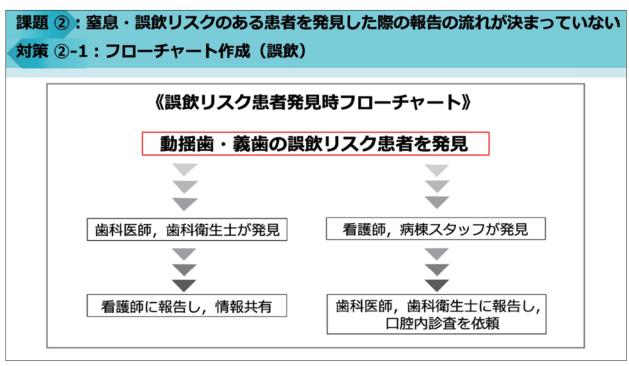
(図1) 当院における窒息・誤飲関連の報告事例



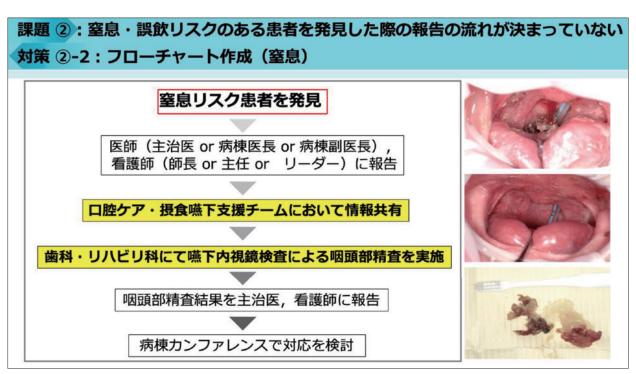
(図2) 要因解析 (フィッシュボーンチャート)



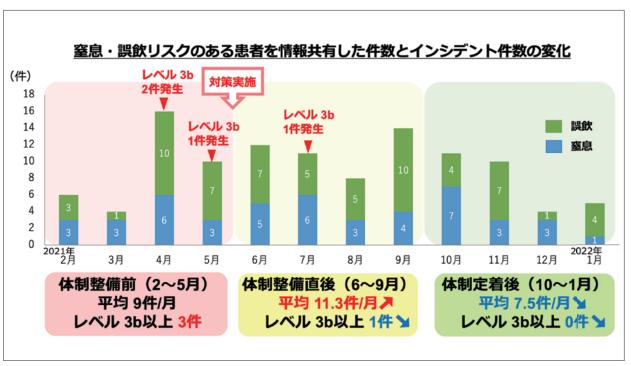
(図3) 課題①への対策①



(図4) 課題②への対策②-1



(図5) 課題②への対策②-2



(図6) 窒息・誤飲リスクのある患者を情報共有した件数とインシデント件数の変化



(図7) 窒息・誤飲予防に関する意識調査

窒息・誤飲予防に向けた現在の体制(2023年 4月~9月)

窒息・誤飲リスクのある患者を発見

医師・看護師に報告,掲示物による注意喚起 (情報共有件数 平均 12.3件/月)

医療安全委員会にインシデント報告

インシデントレベル 0および 1 報告件数 インシデントレベル 3b以上の報告件数 平均 3.8件/ 月 0件

病棟カンファレンス, 口腔ケア・摂食嚥下支援チームで情報共有し, 対応を検討







《カンファレンスでの検討》

《口腔ケアに関する情報共有》

《 摂食嚥下機能に関する情報共有 》

(図8) 窒息・誤飲予防に向けた現在の体制

Enhancing patient safety in hospitals: Interdisciplinary oral information sharing for prevention of choking and aspiration

In our hospital, there were 3 reports of Level 3b incidents related to choking and aspiration out of the reports on choking and aspiration from February to May 2021. This study implemented an initiative to share oral information among multiple disciplines for the prevention of choking and aspiration and evaluated its effectiveness. In addition to conventional verbal information sharing for choking and aspiration prevention, from June 2021, we implemented measures such as signage for alerting, and clarification of procedures using flowcharts to enhance the information sharing system. To assess the effect of this system enhancement, we investigated the number of information sharing instances and reports of Level 3b or higher incidents before, immediately after, and four months after the implementation. The number of information sharing instances increased immediately after the implementation and decreased after it was firmly established. Reports of Level 3b or higher incidents decreased from 3 before the enhancement to 1 immediately after and to 0 after it was firmly established. Sharing oral information among multiple disciplines for the prevention of choking and aspiration suggests a reduction in incidents of choking and aspiration.

臨床研究

RPA を活用した働き方改革への取り組み

柳川みゆき 1) 松岡弘晃 1) 藤岡愛華 1) 黒石有里 1) 田中朗雄 1)

要旨 当院医事課では、2023年1月よりRPA(Robotic Process Automation:ソフトウェアロボットによる業務自動化)のテスト運用を開始し、3月より本格導入した。導入へ向け、まずは「ファイルを開く」といった簡単な作業からRPAに置き換えるという「草の根活動」を実施した。より早く部署内にRPAを広めるため、一つの作業を全て自動化せず、一部の作業工程のみ自動化する方針でロボット作成に取り組んだ。本格導入後約1年間で、ひと月あたり22時間相当の業務を自動化することに成功した。ロボット作成時に作業工程を洗い出す必要があったことから、マニュアルの整備や処理方法の見直しにも繋がった。RPAの導入により、部署として働き方改革への一歩を踏み出せた。しかし自動化への取り組みはまだスタッフ間に温度差があり、全てのスタッフがロボット作成を主体的に取り組める環境を構築することが今後の課題と思われる。

Key words: RPA、働き方改革、時間外労働、医療 DX

緒言

近年、医療現場での働き方改革が叫ばれている。

2018年6月に「働き方改革関連法」が成立し、罰則付きの時間外労働の上限規制が設けられたが、医師については応招義務を負っていることや地域医療への影響を考慮し、5年間の猶予期間が設けられていた。ついに猶予期間も終了し、2024年4月から医師に対しても法律の適用が開始された。このたびの2024年度診療報酬改定1)においても、「働き方改革」「タスクシフト・タスクシェア」「勤務環境の改善」といった言葉が並んでいるが、その範囲は医師のみならず医療に携わる各職種へも広がっている。例えば、「夜間看護体制加算」では、看護業務の負担軽減へ向

「夜間看護体制加算」では、看護業務の負担軽減へ向けてICT、AI、IoT等の活用による業務負担軽減の取り組みが要件化されるなど、医療DXの要素を取り入れて今までの業務処理方法を見直す、抜本的な運用変更も求められるようになっている。

当院は以前から医療DXの具体的な取り組みとして、特に事務部門を中心にRPA (Robotic Process

〒 720-0825 広島県福山市沖野上町 3-6-28 脳神経センター大田記念病院¹⁾ Automation: ソフトウェアロボットによる業務自動化)の導入を検討していた。しかし、突発的なイベント対応や人事異動などが重なり、導入の話はなかなか進まず、時間だけが経過していた。

その後、2022年に事務部門の組織改編が行われ、 今までの業務の在り方を見直す機会が増えたことに加 え、雑誌メディア等で医療DXの報道が目立つように なり、事務部門における働き方改革=RPA導入の機 運が高まっていった。

特に医事業務においては、エクセル帳票の出力と保存など定型的な業務が多いものの、「個人の能力に差があり、業務精度とスピードが一定ではない」、「患者対応や電話対応により定型作業の時間が確保しにくい」という課題があり、定型業務の存在が時間外発生の一因にもなっていた。

これらの解決に向け、2022年12月からRPAの導入 検討が具体的に進み始めた。本論文では、具体的な取り組み方法、活用結果、今後の展望について述べる。

方 法

院内での導入にあたり、まずは複数のシステム会 社を比較して導入システムの選定を行った。医療事 務課をはじめ、事務部門は業務の幅が広く、様々な 場面でRPAの活用を見込んでいたため、誰もがストレスなく操作できるよう「操作性」に重きを置いてシステムを選定した。

このたび当院が導入したシステムを操作した印象として、「直感的に操作ができるため、誰にでも扱いやすい」という点はもちろんのこと、「実務の経験年数を問わず小さな部分から容易に作成が可能」、「一つ一つの作業をプログラミングするため、作業手順の見直し契機になる」という点が非常に好印象であった。

システムの選定後は役職者を中心にシステム会社のWeb研修を受講し、基本的なスキルの習得に至った。

その後、RPAの活用を課内に浸透させるため、ま ずは作業の切り分けを行った。一つの業務を全て自 動化しようとすると作業が複雑になってしまい、完 成までにスタッフの心が折れてしまうと考えられた ため、ひとまず一部の作業工程のみ自動化する方針 でロボット作成に取り組んだ。一連の業務を「ログ イン」「集計」「データ抽出」「データ加工」「コ ピペ」「ファイル保存」「印刷」といったように、 業務手順を細かく分解することで、RPAへの置き換 えが可能な作業の洗い出しを容易に行うことができ た。その上で、まずは「ファイルを開く」といった 簡単な作業からRPAに置き換えるという「草の根運 動」を実施した。この地道な運動によりシステム操 作に不慣れなスタッフでも小さな成功体験や達成感 を得ることができ、一過性の取り組みではなく、継 続的な取り組みに繋がった。

成績

実運用を開始したRPAの業務は全部で16項目に及んだ(図1)。

2023年度上期(=6ヶ月間)という短期間での実績ではあるが、業務時間の削減は一月あたり約22時間に及び、年間にすると約264時間相当の削減が実現できたことになる。

16項目のうちの一部ではあるが、各RPAの評価と、プログラムを構築する上で苦労した点について以下の通りまとめた。

■歯科外来予約患者の受付

〈評価〉受付画面に患者IDを入力して受付票を発行するという単純作業だが、対象患者が1日30~40名

と多く、さらに歯科以外の診療予約についてはマウス操作で選択削除して受付確定をしなければならないという、地味な作業の連続が現場スタッフのストレスとなっていた。RPAに置き換えることで、作業時間の削減効果以上に精神的なストレスの軽減が実感できた。

〈苦労した点〉歯科以外の診療予約を削除するという手順をプログラミングするには、「RPAに全ての診療科の存在を認識」させ、「それらが出てきた時にだけ削除する」という2つのプログラムを記憶させる必要がある。その結果、「もしもこの場合は、これを選択して削除する・・・」というIF関数形式を多用することとなり、完成するまでに1ヵ月程度の時間を要した。

■DPC入力表/診療録監査表出力

〈評価〉前日に入院した患者の帳票を2種類出力する作業だが、CSVリストの加工や専用ファイルの使用など、手順の多い作業であった。朝一番に処理を完了しておく必要があり、毎日1名が早出出勤して処理していたため、時間外労働の一因にもなっていた。RPAへの置き換えと同時に、指定した時刻に自動で処理を開始する「予約機能」を活用することで、業務負荷の軽減に加えて時間外労働削減という結果にも繋がり、RPAの導入効果を最も実感できる模範的な置き換えとなった。

〈苦労した点〉作成自体は1週間程度で完了したが、エクセルのキーボード操作や専用のファイルを開いてデータを読み込ませる待ち時間など、人間であれば特に深く考えることなく処理できる作業を一つ一つ細かく積み上げていく点に苦労した。前述の通り、最も導入効果を実感できた反面、最もトライ&エラーを繰り返したRPAでもある。

■経理報告用資料出力

〈評価〉毎月15日に行う月次作業である。前月の 診療実績を医事システムから出力する単純作業が多 かったため、それらをほぼ全てRPAに置き換えた。 担当者の休憩時間に稼動させることで時間の有効活 用にも繋がり、従来は60~90分ほどの作業時間だっ たが、RPAの導入により30~40分で全ての作業を終 えられるようになった。

〈苦労した点〉一つ一つの作業自体は比較的簡易であったが、出力帳票の種類が多く、それに比例して手順が積み重なっていくため、プログラム数が最も

多いRPAであった。途中で誤作動が起こるとその後のプログラムも止まってしまうため、最後まで処理が走るように神経を尖らせながら作成した。

考 察

RPAの導入により業務の自動化が進み、部署として働き方改革への一歩を踏み出せた。

RPAに業務移行できたものについては、個人の能力や作業時間の確保に左右されることなく、業務精度を一定に保つことが可能となった。しかしその反面、作業が複雑なものについては、プログラミングの完成までに時間を要し、業務の複雑化に比例してエラーの発生が多くなる傾向となり、実運用に至るまでの道のりが長いものとなった。

一時的な業務負担は増加したものの、RPAによる 作業時間の削減により、時間外業務の削減に繋がっ たことも事実である。

自動化への取り組みはまだスタッフ間に温度差がある。今後は部門全体として自動化が活発に推進され、全てのスタッフがロボット作成を主体的に取り組めるような環境を構築することが課題と思われる。

文 献

1) 厚生労働省: 令和6年度診療報酬改定について. https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000188411_00045.html

	类效中穴	☆ # 88	稼動	月当たりの	ロボ作業	削減時間	所要時間	l(分·回)
	業務内容	部門	頻度	実行回数	時間 (分·回)	(分・月)	RPA導入前	RPA導入後
1	歯科外来予約患者の受付入力	外来	日次	22	10	220	10	0
2	DPC入力表/診療録監査表出力	入院	日次	31	15	465	20	5
3	入退院患者日報出力	入院	日次	31	5	155	7	2
4	手術日報発行	入院	日次	31	5	155	5	0
5	厚労省報告データ集計	その他	週次	4	10	40	12	2
6	経理報告	その他	月次	1	30	30	60	30
7	月報作成	その他	月次	1	30	30	60	30
8	診療実績報告	その他	月次	2	15	30	30	15
9	病名登録	外来	月次	2	60	120	120	0
10	レセプト添付資料作成	入院	月次	1	15	15	60	45
11	症状詳記依頼準備	入院	月次	2	15	30	60	45
12	整形外科リスト作成	入院	月次	1	10	10	15	5
13	定期監査リスト発行	入院	月次	1	5	5	5	0
14	出来高レセプト発行	入院	月次	1	5	5	5	0
15	市町村ドック請求書発行	外来	月次	1	5	5	30	25
16	医療券依頼書発行	外来	月次	1	10	10	10	0

(図1) 2023 年度上期 RPA 導入実績

Efforts to reform Work Styles Using RPA

In January 2023, the Medical Affairs Division of this hospital started test operation of RPA (Robotic Process Automation: business automation by software robots), which was fully introduced in March. In preparation for the introduction of RPA, a "grassroots activity" was conducted, starting with simple tasks such as "opening a file" to be replaced by RPA. In order to spread RPA within the department as quickly as possible, we worked on the creation of robots with the policy of automating only some work processes, rather than automating an entire task. After about a year of full-scale introduction, the company succeeded in automating 22 hours of work per month. Since it was necessary to identify work processes when creating the robot, it also led to the development of manuals and a review of processing methods. With the introduction of RPA, the department was able to take a step toward reforming the way it works. However, there is still a gap in the degree of commitment to automation among the staff, and building an environment in which all staff can proactively work on robot creation seems to be an issue for the future.

臨床研究

Super PATH 法を用いた THA 患者の 歩行獲得時期について

藤原陵次1) 宮宗孝敏1) 村上祐介1) 神原 淳2)

要旨 当院整形外科における人工股関節全置換術(以下 THA)は、Super PATH 法を用いた術式が選択されている。Super PATH 法は、直接的な筋に対する侵襲が少なく、機能予後が良好であることが知られている。当院クリニカルパスでは3~4週間の入院期間の設定の中で、多くの症例で実用的な歩行獲得に至っている。しかし、実際に獲得される歩行の自立度および自立時期については検討がなされていない。そこで我々は、当院で施行された Super PATH 法を用いた THA 術後患者の歩行獲得時期について検討したため、報告する。2022 年 4 月~2023 年 3 月の 1 年間に Super PATH 法を用いた THA 術後の患者 15 名を対象に、歩行獲得時期を検討した。対象患者の 93.3%(14/15 名)において、術後 3週間以内で、病前と同程度もしくはそれ以上の歩行レベル獲得に至った。Super PATH 法を用いた THA 術後の患者は、術前レベル以上の歩行が術後早期に獲得でき、入院期間の短縮化が可能となることが示唆された。

Key words: THA、Super PATH 法、歩行

緒言

人工股関節全置換術(Total Hip Arthroplasty,以下THA)において後方アプローチ法による欠点である後方不安定性を補うべく、さまざまな工夫がなされている。代表的な例として、上方アプローチ法のDirect Superior Portal-Assisted Total Hip Approach(以下、Super PATH)がある。Super PATHの手術侵襲を図①に示す。Super PATHは、中殿筋・小殿筋を前方へ、梨状筋・短回旋筋群を後方にレトラクトし、関節包を一文字切開するのみであるためインプラント後の完全なカプセル修復が可能であり、術後の動作制限の必要性が少なく、歩行を含めた離床が早期に可能であるとされている。1)

脳神経センター大田記念病院(以下、当院)整形外科では、以前は後方アプローチ法を選択していたが、2018年11月以降からはSuper PATHを選択し施行している。

Super PATHを用いたTHA症例では、術後早期の

〒 720-0825 広島県福山市沖野上町三丁目 6-28 脳神経センター大田記念病院 急性期リハビリテーション課¹⁾、整形外科²⁾ 機能回復が得られることが報告されている²⁾。また、THA後早期の杖歩行獲得症例群においては、歩行時痛が軽度であったことも報告されている³⁾。しかし、実際に獲得される歩行の自立度および自立時期については我々が渉猟する限り検討がなされていない。本研究の目的は、後方アプローチとSuper PATHを用いたTHA後患者の歩行獲得時期の違いを明らかにすることである。

方 法

対象は当院でTHAを施行した症例のうち、病前が車いすレベルであったものやリハビリテーションに拒否があったもの、術後に骨折を認めたものを除外した18例とした。2017年1月から2018年10月までにTHAを施行した5例を後方アプローチ群、2022年4月から2023年4月までにTHAを施行した13例をSuper PATH群とした。検討項目は、年齢と性別、診断名、術前の歩行能力、歩行訓練開始時期、歩行獲得時期とし、これらのデータをカルテより後方視的に調査した。統計学的処理には、統計ソフトJSTAT for Windowsを用いた。年齢と歩行訓練開始時期には対応のないt検定を、性別と診断名、術前歩

行能力、術後歩行能力にはFisherの直接確立法を用いた。いずれも有意水準は5%とした。

成績

対象者の基本情報は表①・②に示す。年齢や性別、診断名、術前の歩行能力について2群間に有意な差は認めなかった。歩行訓練開始時期は、後方アプローチ群が1.80±0.45日、Super PATH群が1.38±0.65日であった(表③)。術後の歩行能力について、術前と同等の歩行能力まで改善した症例は後方アプローチ群が1/5例(20%)で獲得までの日数は14.0日であった。Super PATH群は13/13例(100%)で獲得までの日数は13.31±5.22日であり、術後の歩行能力において2群間に有意差を認めた(表③)。また、Super PATH群において1本杖歩行レベルは平均16.1±4.6日、独歩レベルは平均8.8日±3.0日での歩行獲得であった。

考察

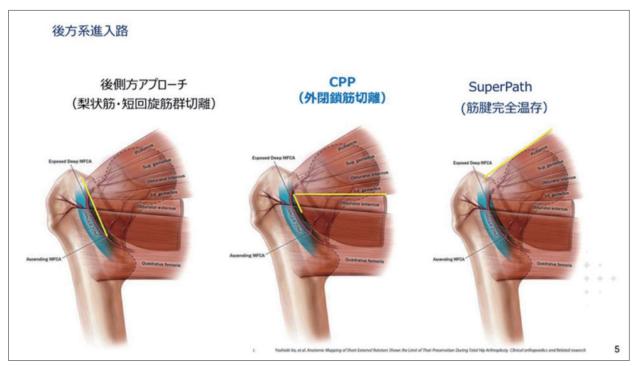
今回、後方アプローチとSuper PATHを用いた THA後患者の歩行獲得時期の違いを検討した。歩 行開始時期については、有意差はないが、Super PATH群が早い傾向を示した。また、術前と同等の 歩行能力まで改善した症例は、Super PATH群の方 が有意に多く、術前の歩行レベルが1本杖歩行レベ ルの症例よりも独歩レベルの症例の方が早期に歩行 獲得に至った。

後方アプローチは、梨状筋・短回旋筋群を切離するのに対して、Super PATHでは、筋腱を温存した筋間アプローチで行うかつ完全な関節包の温存が可能な術式である。そのため、術中の出血量が少なく、起立性低血圧などの全身状態悪化のリスク回避可能で、低侵襲により術後疼痛が低減されている可能性がある。そのため、Super PATHを用いたTHA症例において、より早期に歩行訓練が開始される傾向を示したと考えられた。また、早期に歩行訓練の導入が可能であったことに加えて、股関節の機能回復が早いことや動作制限が必要ないため機能訓練のバリエーションが広がることで、術前と同等の歩行能力まで改善する症例が多い傾向を示したと思われた

本研究の限界として、今回歩行獲得時期の違いを 検討したが、症例数が少ない点や実際の出血量や術 後疼痛のスケール評価、股関節機能などを両群間で 比較できていないことが挙げられる。今後は症例数 を増やしつつ、出血量や疼痛の評価、股関節機能な どについて詳細に検討していきたいと考える。

文 献

- 1) MicroPort Super PATH資料
- 2) 奥田真義ほか:SuperPath®approachを用いた人工 股関節全置換術. 中部日本整形外科災害外科学 会雑誌 61:715-716.2018.
- 3) 溝口靖亮ほか:当院における人工股関節全置 換術(THA)患者での杖歩行獲得時期に影響す る因子ついて. 理学療法学 Supplement Vol.39 Suppl.No.2(第47回日本理学療法学術大会 抄録 集),Ca0241-Ca0241,2012



(図1)

表1 基本情報

	疾患	術式	年齢	性別	術前歩行能力	術後歩行能力
症例1	両側性原発性股関節症	後方ap	68	女	杖	杖
症例2	右原発性股関節症	後方ap	76	女	杖	杖
症例3	右変形性股関節症	後方ap	75	男	独歩	杖
症例4	右原発性股関節症	後方ap	66	女	独歩	杖
症例5	右外傷性大腿骨頭壊死	後方ap	66	男	独歩	杖
症例6	両側性原発性股関節症	SuperPATH	57	女	独歩	独歩
症例7	右原発性股関節症	SuperPATH	80	女	杖	杖
症例8	両側性原発性変形性股関節症	SuperPATH	67	女	杖	独歩
症例9	両側性原発性股関節症	SuperPATH	55	男	独歩	独歩
症例10	両側性続発性股関節症	SuperPATH	66	女	独歩	独歩
症例11	左特発性大腿骨頭壊死	SuperPATH	71	男	杖	杖
症例12	左原発性変形性股関節症	SuperPATH	82	女	杖	杖
症例13	右原発性変形性股関節症	SuperPATH	70	女	独歩	独歩
症例14	右原発性変形性股関節症	SuperPATH	72	女	杖	独歩
症例15	左原発性変形性股関節症	SuperPATH	79	女	杖	杖
症例16	右原発性変形性股関節症	SuperPATH	78	女	独歩	独歩
症例17	両側性原発性変形性股関節症	SuperPATH	53	女	杖	杖
症例18	左原発性変形性股関節症	SuperPATH	58	女	独歩	独歩

表2 基本情報

	後方	super PATH	p 値	
年齢	70.2 ± 4.9	68.3 ± 10.0	n.s	※t検定
性別	男:2 女:3	男:2 女:11	n.s	※Fisherの直接確立法
診断名	原発性股関節症:4 外傷性大腿骨頭壊死:1	原発性股関節症:11 続発性股関節症:1	読発性股関節症:1 n.s ※Fisher <i>o</i>	
	71-100 II 7 (1) E 19 25 (3) 70 - 1	特発性大腿骨頭壞死:1		
術前歩行能力	T字杖:2 独歩:3	T字杖:7 独歩:6	n.s	※Fisherの直接確立法

表3 2群の比較

	後方	super PATH	p値	
歩行訓練開始	1.80 ± 0.45	1.38 ± 0.65	n.s	※t検定
術後歩行能力	術前未満:4 術前と同等:1	術前未満:0 術前と同等:13	< 0.05	※Fisherの直接確立法

Regarding the timing of gait acquisition in THA patients using the Super PATH method

In our orthopedic department the SuperPATH technique is the procedure of choice for total hip arthroplasty (hereafter THA). The SuperPATH technique is known to be less directly invasive to the muscles and to have a better functional prognosis. Many patients on our clinical pathway have achieved practical gait acquisition within the setting of a 3- to 4-week hospital stay. However, the degree and timing of walking independence actually acquired has not been investigated. We report here on a study of the time of gait acquisition in post-THA patients undergoing THA using the SuperPATH technique at our hospital, which included 15 post-THA patients undergoing THA using the Super PATH technique during a one-year period from April 2022 to March 2023. In 93.3% (14/15) of the patients, the same or better gait level as presurgery was achieved within 3 weeks post-operatively, suggesting that post-operative THA patients using the Super PATH technique can achieve gait at or above the pre-surgery level earlier postoperatively and thus reduce the length of hospital stay.

臨床研究

福山市における日本紅斑熱の検討

城本佳菜 沖邉圭子 井上 梢 藤井弘恵 鯖江佳子森みのり 新山美沙 濱口彩花 田村玲奈 山岡恭子 金高利枝 二部野肇 田中知徳

要旨 日本紅斑熱は、Rickettsia japonica を保有するマダニに刺咬されておこるダニ媒介感染症である。感染症法上、四類感染症に指定されており、診断した医師は直ちに保健所に届出なければならない。本症は2~8日の潜伏期を経て、発熱、発疹、刺し口をもって急激に発症する。福山市保健所管内では、2018年~2022年の5年間に83例の届け出があり、うち3例の死亡例が発生した。今回、これらの発生状況を分析し感染防止への取組について検討した。結果、届け出時期は3月から12月で、特にその約半数は9月と10月に届けられていた。年齢は60歳代から80歳代が90%であり、症状はほぼ全例で発疹と発熱がみられた。感染場所は農作業など野外作業中が多く、刺し口が確認できた約半数が下半身を刺されていた。以上より、日本紅斑熱への対策には次のことが推奨される。まず、肌の露出を少なくする等ダニ類に刺されないよう留意すること、次に、有症状時には早期受診すること、そして、医療機関への情報提供などによる連携強化を通じて、早期診断・早期治療に結びつけることである。

Key words: 日本紅斑熱、マダニ、感染症

緒言

日本紅斑熱は、Rickettsia japonicaを保有するマダニ(図1)に刺咬されておこるダニ媒介感染症であり、感染症法上、四類感染症に指定されており、診断した医師は直ちに保健所に届け出なければならない。全てのダニがこの細菌を持っているわけではない。人から人への感染はない。

症状の3徴候は、発熱、発疹、刺し口(図2)である。症状の経過は、寒気を伴う38~40度の高熱出現後、やや遅れて、体幹や四肢に米粒大から小豆大の発疹が出現する。発疹に痛みや痒みを感じないのも特徴である。

血液検査所見の特徴として、白血球減少、血小板 減少、肝酵素上昇、CRP上昇がある。

日本紅斑熱は適切な抗菌薬を用いた治療を実施できなければ、DICを起こすなど重症化し、時には死に至る場合もあるため、早期診断と適切な治療が重要であ

〒 720-8512 福山市三吉町南二丁目 11 番 22 号 福山市保健所 保健予防課



図1 日本紅斑熱を媒介するダニの一種(ヤマアラシチマダニ成虫)



図2 日本紅斑熱の刺し口

る。治療にはテトラサイクリン系の抗菌薬が第1選択薬である。1日の最高体温が39度以上の場合は、直ちにテトラサイクリン系とニューキノロン系の抗菌薬の併用療法を行うことが推奨されている1)。

日本紅斑熱は、1984年に徳島県で馬原らにより初めて報告された感染症である。1999年4月の感染症法により第4類全数把握感染症に指定され届け出義務が生じた。

近年の発生状況では、広島県内で1999年に初めて 患者報告がされて以降、毎年発生しており、図3は 2018年から2023年までの全国、広島県、本市の発生 状況を示している。広島県内は2022年に89例の届け 出があり、感染地域は主に県の南部と県東部の沿岸 部での報告が多い。福山市内では2018年~2022年 の5年間に83例の日本紅斑熱の届け出があった。ま た、2019年に2例、2022年に1例、2023年に2例の 死亡例が発生している。

	2018	2019	2020	2021	2022	2023年 (暫定)
福山市	10	17	26	13	17	37
広島県	41	67	94	89	89	104
全国	305	318	422	490	457	501

図3 2018 年~ 2023 年の福山市・広島県・全国の日本紅斑熱発生状況

今回、本市の2018年~2022年の5年間の日本紅斑 熱の発生状況を把握するとともに、感染防止への取 り組みについて検討した。

方 法

対象は、2018年~2022年の5年間に福山市保健 所管内で日本紅斑熱の届け出があった患者83例であ る。それをもとに、届け出時期、患者年齢、推定感 染地域、推定感染行動、患者の症状、刺し口、血液 所見について検討を行った。

成績

月別の届け出は、3月から12月にわたり、10月に 届出数のピークを認めた。(図4)性別は、男性43 人、女性40人とほぼ同等であった。

年齢は、中央値75歳(25-92歳)で、90%が60歳から80歳代であった。(図5)

推定感染地域は、山地に近い地域が多く、推定感 染行動は農作業が最も多かった。(図6、図7)

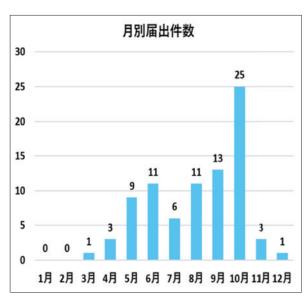


図4 2018 年~ 2022 年の発生状況 福山市保健所管内の月別届出件数

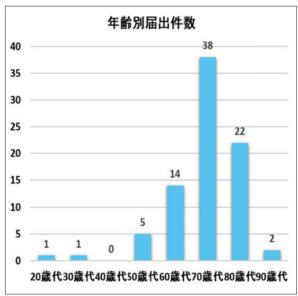


図5 2018 年~ 2022 年の発生状況 福山市保健所管内の年齢別届出件数

症状は、ほぼ全例で発疹と発熱が出現していた。 83人中55人に、刺し口が確認でき、部位別では下肢 に最も多く認められた。下肢に多く刺し口を確認し たが、ほとんどの患者が長ズボンを着用し作業して おり、半ズボンでの作業はほとんどなかった。(図 8、図9)

血液検査所見では、ほぼ全例でCRPの上昇が認められ、続いて、肝酵素(AST, ALT)の上昇、血小板の減少が多く認められた。(図10)DIC所見を3人に認めた。

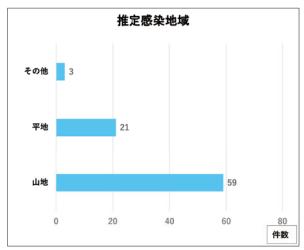


図6 2018 年~ 2022 年の発生状況 福山市保健所管内の推定感染地域

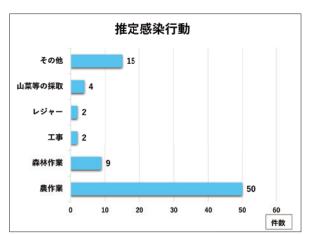


図7 2018 年~ 2022 年の発生状況 福山市保健所管内の推定感染行動

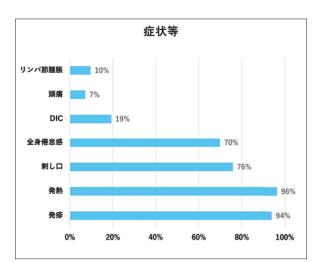


図8 2018 年~ 2022 年の発生状況 福山市保健所管内の患者の症状

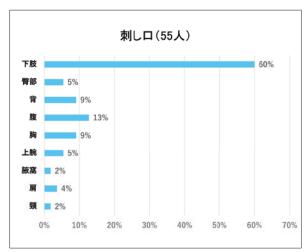


図9 2018年~2022年の発生状況福山市保健所管内の患者の症状(刺し口)

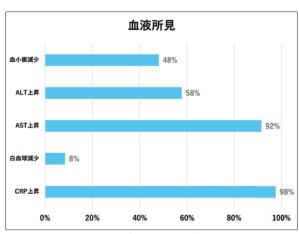


図 10 2018 年~2022 年発生状況 福山市保健所管内の患者の症状 (血液所見)

考察

今回、福山市内の2018年~2022年の5年間の日本 紅斑熱83例の集計を行った結果から、気候が温かく なる3月から届出が増え始め、10月に届け出のピー クがあることが分かった。

10月に発生件数が多い理由として、明確な理由は不明だが、患者聴き取り調査より、農作業時にマダニに咬まれていることが多かった。また、ヒト側の要因として、最近の猛暑により7月~9月中旬までの農作業や草刈り、墓掃除などは避けられ、暑さのピークが過ぎた9月中旬から野外作業を行い、野山に立ち入る機会が季節柄増えることと、マダニの活動が活発化するのは春~夏に多いイメージだが、孵化後の秋にも活動が活発化することが10月に発生が

多い理由として推測される。

下肢に刺し口が多く認められた理由として、マダニが皮膚の柔らかい箇所を好み、皮膚に付着後、刺す箇所を探していると考えられる。このことから、作業後にシャワーや入浴を行うことで、マダニを除去し感染を減らせる可能性がある。

今回の研究を終え、保健所のマダニ媒介感染症対 策への取り組みについてまとめた。

市民への平常時からの啓発として、まず、農作業、草刈り、除草などの作業時は、腕、足、首等、肌の露出を極力少なくする等、ダニ類に刺されないよう留意すること、ダニ類に刺された場合はマダニを無理に取り除かず、皮膚科等の医療機関で適切な処置を受けること、ダニ類に刺され、症状が出現した場合は可能な限り早期に受診し、受診時には、ダニ類に刺されたかもしれないということを医師に必ず伝えるよう周知する。また、感染者が増加する春から秋にかけて、市の広報やホームページ、SNS等を通じて注意喚起を行っていく必要がある。

そして、発生時調査の聞き取り時には、刺し口の 有無、血液検査、臨床症状等を正確に把握するこ と、さらに、医療機関への情報提供などによる連携 強化を通じて、早期診断・早期治療に結びつけてい く必要がある。これらの点に留意しながら、引き続 き、感染症対策に取り組んでいきたい。

参考文献

- 1) 馬原文彦:日本紅斑熱の治療—重症例、死亡例 の検討と併用療法の有用性;病原微生物検出情 報2006;27(2):37-38,2006
- 2) 広島県立総合技術研究所保健環境センター: 広島県内のダニ類媒介感染症 ツツガムシ病、日本紅斑熱、重症熱性血小板減少症候群 (リーフレット)
- 国立感染症研究所:マダニ対策,今できること (リーフレット)

A Study of Japanese Spotted Fever in Fukuyama City

Japanese spotted fever (JSF) is a tick-borne rickettsiosis caused by Rickettsia japonica. JSF is designated as a category IV infectious disease under the Infectious Disease Control Law. A medical doctor who diagnoses JSF needs to immediately notify a local public health center. The disease develops with, high fever, rash and eschar approximately 2 - 8 days after being bitten by a tick carrying the pathogen. In Fukuyama city, 83 cases were reported in 2018 - 2022, including 3 deaths. We examined those cases to reveal the infection trends and prevention measures of the disease. Among all cases, disease-notification was submitted to the public health center during March -December, especially in half of the cases in September and October. A total 90% of patients were 60 to 80 years old. Almost all cases had fever and rash. Most of the reported cases indicated that the infection occurred during outdoor activities such as farming, of which half of the cases had eschar in the lower parts of the body. Consequently, it is highly recommended as follows, first, reducing skin exposure while working on the farm to avoid being bitten by ticks, second, receiving medical treatment at the earliest possible opportunity as well as awareness of the signs and the symptoms, third, enhancing cooperation by medical facilities with exchanging information, which leads to patient's early consultation and treatment.

臨床研究

当院における筋萎縮性側索硬化症に対する多職種連携による チーム医療

佐藤恒太1) 佐藤達哉1) 寺澤由佳1)

要旨 多職種連携による筋萎縮性側索硬化症 (ALS) 診療の変化について明らかにするため、当院での神経難病に対する多職種専門チーム結成前 (2017年1月~2019年12月) と結成後 (2020年1月~2022年12月) での ALS の診療状況の変化について後方視的に検討した。対象患者は前半が 37名、後半は 32名であった。後半では発症から2年以上経過した症例の割合が多く (p=0.088)、また市外居住者が明らかに増加した (p=0.041)。診療としては胃ろうの増設や非侵襲的陽圧換気療法 (NIV) 導入率は差がなかったが、NIV 導入までの日数の短縮 (p=0.043) が認められた。また予定入院の割合が増加する一方 (p=0.009)、14日間以下の入院の割合も増加した (p=0.022)。死亡または気管切開下人工呼吸導入までの生存率に有意な差は認めなかった。コロナ禍での発症から時間が経過した ALS の割合が増えた一方、多職種専門チームの取り組みによって、多忙な救急病院でも診療の質を担保しつつ効率的な難病診療の提供が可能である。

Key words: 多職種連携、筋萎縮性側索硬化症 (ALS)、コロナ禍

緒言

筋萎縮性側索硬化症(以下ALSと略す)は進行性 の運動ニューロン変性疾患であり、平均して発症3-4年で換気補助が必要な呼吸不全に至る致死的な疾患 である[1]。ALSには根治療法がないため対症療法が中 心となるが、呼吸不全に対しては早期には非侵襲的陽 圧換気療法(以下NIVと略す)が広く用いられ、また 嚥下障害による体重減少に対しては経皮的胃瘻造設術 (以下PEGと略す)が有効とされる[1]。 当院は199床の 民間病院であり、特に地域においては脳卒中の急性期 医療を担当する一次脳卒中センターである一方で、広 島県における神経・筋分野の難病拠点病院でもあるた め、常時30名程度のALS患者の入院・外来診療を行っ ている。またALSに限らず近年の高齢化社会の進行 に伴う神経難病患者の増加に対応するため、当院では 2019年12月より医師・看護師・療法士・社会福祉士・ 薬剤師・栄養士・臨床工学技士・ケアマネジャー等多 職種による多職種専門チームを結成し、2022年10月か

〒 720-0825 広島県福山市沖野上町 3-6-28 脳神経センター大田記念病院 脳神経内科¹⁾ らは神経難病センターと呼称をし、コロナ禍において も持続可能な、地域ぐるみでの難病診療連携の構築を 目指している。

近年ALS診療においては、多職種による包括的ケアが生命予後の延長に有用であるとされているが、本邦での研究はまだ十分ではない[2]。そこで当院のALS診療における多職種連携による専門チームの結成前後の診療の変化について明らかにするために後方視的な検討を行った。また当院での多職種連携開始時期に一致して新型コロナウイルス感染症の流行もあったため、コロナ禍の影響も含めてALS診療への影響について検討することを目的とした。

方 法

2017年1月から2022年12月までの間の初診ALS 患者(改定El Escorial分類でProbable以上のALS)のうち、初診時発症から5年以上経過した症例と、診断から1年以上経過して初診となっていた2例を除いた計68名(男性42名)について、2023年8月31日までの診療記録を元にした後ろ向きコホート研究を行った(図1)。コロナ禍と多職種チーム結成前後の診療の変化を明らかにするため、多職種チーム結

成前の2017年1月から2019年12月を前半、2020年1月から2022年12月までを後半とし2群間の比較検討を行った。統計手法としてはIBM SPSS Statistics version 22)を用い、分類尺度については χ 2乗検定、間隔尺度についてはMann-Whitney U検定を用いて統計を行った。生存分析についてはlog-rank検定による検定を行った。

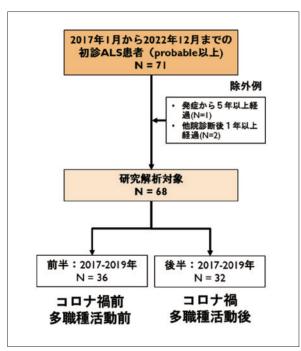


図1 解析集団について

成績

対象期間中(2018年1月から2022年10月)のALS 患者は52名(男性31名)で、多職種チーム結成前の 患者は26名、結成後の患者は26名であった。2群間 の患者背景を比較すると(表1)、初診時年齢、発 症から初診までの期間に差はなかった。一方で前半 では初診時点で発症2年以内の症例は35名(97.2%) であったのに対し、後半では26名 (81.3%) と発症 から時間の経過した症例の割合が有意に増加してい た (p=0.031)。また居住地について、前半は福山市 内が30名 (83.3%) であったのに対し、後半では20 名 (62.5%) と福山市外の患者が有意に増加してい た (p=0.047) 。治療内容としてはPEGの増設やNIV 導入の頻度は差がなかったが、NIV導入までの日数 が後半のほうが有意に短縮していた (p=0.024)。死 亡または気管切開下人工呼吸(TIV)導入をPrimary end pointとしたときの生存曲線では両群間では有意 差は認められなかった(図2)。

入院診療の内容としては前後半を比較すると(表 2)、予定入院の割合が増加し(p=0.009)、入院日 数は後半のほうが14日以内の入院の割合が有意に増 加していた(p=0.022)。

表1 対象患者背景と治療内容の比較

	前半 2017/1/1~2019/12/31	後半 2020/1/1~2022/12/31	Р
N (Male %)	36 (23, 63.8%)	32 (19, 59.4%)	0.702
初診時年齢 (y)	71.5 (67.0 - 75.0)	69.5 (61.0-76.0)	0.138
発症~初診までの期間(d)	211.0 (138.0-381.5)	195.5 (133.0-447.5)	0.550
発症2年以内の初診 (%)	35 (97.2%)	26 (81.3%)	0.031
居住地(市内%)	30 (83.3%)	20 (62.5%)	0.047
胃瘻造設(PEG)(%)	16 (44.4%)	11 (34.4%)	0.401
初診~PEGまでの期間(d)	298.0 (190.0-399.0)	225.0 (134.0-395.5)	0.443
非侵襲的陽圧換気(NIV) (%)	10 (27.8%)	12 (37.5%)	0.420
初診~NIVまでの期間(d)	199.0 (118.0-391.0)	82.5 (11.0-126.0)	0.024
気管切開下人工呼吸(TIV) (%)	7 (19.4%)	2 (6.25%)	0.099

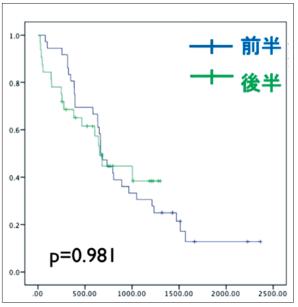


図2 死亡または気管切開下人工呼吸療法導入を Primary end point としたときの Kaplan-Meier 生存曲線

表 2 入院診療の比較

	前半 2017/1/1~2019/12/31	後半 2020/1/1~2022/12/31	Р
全入院	84	113	
予定入院 (%)	53 (63.1%)	91 (80.5%)	0.009
入院期間 (d)	10.5 (6.0-25.0)	10.0 (7.0-14.0)	0.170
4日間以下の入院 (%)	51 (60.7%)	85 (75.2%)	0.022

考 察

当院では2019年12月以降、神経・筋疾患分野の難病拠点病院として院内外の多職種連携を強化するため、研修会の実施や診療内容の見直しを繰り返してきた。今回の研究では、2021年1月以降、多職種専門チームをおいた後半期においては、コロナ禍であることによる医療機関受診控えのためか、発症から時間の経過したALS患者が増えている一方で、地域連携強化による市外からのALSの患者が増加していた。これはコロナ禍で医療機関への受診控えがある一方で、日頃の院外診療連携の成果がみられた可能性がある。

また今回後半の期間においては、新型コロナウイルス感染症の院内クラスターによる診療制限を余儀なくされた期間も含まれていたが、ALS診療においては、短期間での予定入院の数を増えていた。また多職種による包括的な医療を提供することでNIV導入までの日数短縮が見られた。さらに遠隔地の患者割合が増えていたが、生命予後の悪化傾向は認めていない。これらはコロナ禍での発症から時間が経過したALSの割合が増えた一方、多職種専門チームの取り組みによって、診療の質を担保しつつ効率的な診療を提供できていた可能性がある。

研究の限界として、2023年8月31日までの臨床 調査のため、2群間は初診からのフォローアップ期 間が異なり、前半の症例が長い期間フォローアップ できているため、後半の症例についてはより初期の 症例が含まれている可能性がある。しかしながら期 間を区切って解析しても(例えば発症1,500日以内や 2,000日以内の解析を行っても)、生命予後の差は見 られておらず同様の傾向がみられていた。また後半 において遠方からの来院患者が増えたことについて は、特に遠方まで受診できる症例のみが当院に受診 している可能性もあるが、一般的にALSの予後不良 と考えられている進行速度(発症から初診までの運 動症状の低下速度) については2群間では差がみら れず (図示なし)、患者の背景は2群間で大きな違 いはないと判断した。また診療連携という点では遠 隔地(市外)のほうが一般的には難しいと考えられる が、そのような点を加味しても、遠隔地との診療連 携が適切になされていると推察された。

難病に対する医療については、日進月歩であり、 最先端かつ適切な医療を提供するためにも、ALS に限らずパーキンソン病などでも多職種連携が非常に重要となっている[3]。またALSについてはTIV導入の有無によって生命予後が大きく変わってくるため、初期の頃からの本人や介護者の意思決定支援、生命倫理面に配慮した多職種連携が必須となっている。またNIV、TIVを使用した症例においては地域ぐるみでの災害対策の準備も必要である。当院は備後地区の難病拠点病院として今後ますます多職種連携・地域連携に取り組んでいきつつ、本研究をはじめとした臨床研究の継続が必要であると考えている。

文 献

- 1. 日本神経学会(監修). 「筋萎縮性側索硬化症ガイドライン」作成委員会(編). 筋萎縮性側索硬化症 (ALS) 診療ガイドライン 2023. 南江堂, 2023.
- 2. ALS Association. Booklet: Including the Multidisciplinary Team Approach in Your Care. hppts://www.als.org/navigating-als/resources/including-multidisciplinary-team-approach-yourcare-booklet (最終アクセス2023年3月).
- Bastiaan RB, Michael SO, Christine K. Parkinson's disease. Lancet 2021; 397: p2284-2303.

The effect of multidisciplinary collaboration on amyotrophic lateral sclerosis practice

To clarify the changes in the management of amyotrophic lateral sclerosis (ALS) through multidisciplinary collaboration, we retrospectively examined the changes in ALS management before (January 2017 - December 2019) and after (January 2020 - December 2022) the establishment of a multidisciplinary specialized team for neurological intractable diseases at our hospital.

In this study, 37 patients in the first half and 32 in the second half. In the second half, there was a higher proportion of cases that had progressed more than two years from onset (p=0.088), and a significant increase in the number of patients residing outside Fukuyama city (p=0.041). While there was no difference in the rates of gastrostomy or non-invasive positive pressure ventilation (NIV) initiation, the time to NIV initiation was shortened (p=0.043). Additionally, the proportion of scheduled hospitalizations increased (p=0.009), as did the proportion of hospitalizations lasting 14 days or less (p=0.022). There was no significant difference in survival rates.

Despite the increase in the proportion of ALS cases that had progressed over time during the COVID-19 pandemic, the efforts of the multidisciplinary specialized team enabled the provision of efficient intractable disease management while ensuring the quality of care in a busy emergency hospital.

症例報告

薬剤リンパ球刺激試験が有用であったアナストロゾールによる 薬剤性肺障害の1例

藤井清香

要旨 症例は56歳女性。左乳癌に対し乳房温存療法を施行。放射線治療終了後よりアナストロゾール内服を開始。3か月後に咳嗽・呼吸困難感・37.8℃の発熱が出現。胸部 X 線検査で左中肺野を中心に浸潤影を認めた。市中肺炎を疑い、抗菌薬を投与したが症状は改善せず、肺病理組織学的検査は器質化肺炎の組織像であった。放射線治療に伴う特発性器質化肺炎(cryptogenic organizing pneumonia: COP)様肺臓炎を考え、プレドニゾロンを投与すると、9日後には異常陰影は消失した。アナストロゾール再開2か月後にCOP 様肺臓炎が再燃。薬剤リンパ球刺激試験(drug lymphocyte stimulation test; DLST)は陽性であり、アナストロゾールによる薬剤性肺障害と考えた。DLST 陰性であったエキセメスタン内服では COP 様肺臓炎は再燃しなかった。COP 様肺臓炎治療後の内分泌療法薬の選択において、使用予定薬の DLST の有用性が示唆された。

Key words: 薬剤性肺障害、アナストロゾール、薬剤リンパ球刺激試験

緒言

乳癌治療における間質性肺炎には、薬剤性肺障害としての間質性肺炎、放射線照射後に照射野に一致した病変を示す放射線肺炎、浸潤影が照射野外にも及ぶ特発性器質化肺炎(cryptogenic organizing pneumonia: COP)様肺臓炎が知られており、間質性肺炎の病態は多様である。

COPは、以前はBOOP(bronchiolitis obliterans organizing pneumonia)と呼ばれていた間質性肺炎で、組織診断は器質化肺炎(organizing pneumonia: OP)である。画像所見はconsolidationを主体とし、一般細菌の感染による肺炎が鑑別に挙がる。薬剤性肺障害としての間質性肺炎はCOPパターンを呈することがあるため、COPとして報告されている症例の中には薬剤性肺障害も含まれていると考えられている¹)。

今回、薬剤リンパ球刺激試験(drug lymphocyte stimulation test; DLST)が薬剤性肺障害の診断と、その後の内分泌療法薬の選択においてが有用であった1例を経験したので報告する。

〒 721-0927 広島県福山市大門町津之下 1844 番地 日本鋼管福山病院 乳腺外科

症 例

患者:56歳、女性

主訴:咳嗽・呼吸困難感・発熱.

既往歴・家族歴:特記すべきことなし

喫煙歴:なし

現病歴:針生検にて乳癌を疑うが確定診断に至らなかった病変に対し、左乳房部分切除を行い、浸潤性乳管癌、浸潤径5×4mm、grade1、ER(100%)、PgR(50%)、HER2 score2(FISH法にて増幅なし)、Ki-67 index 5%との病理診断を得た。センチネルリンパ節生検を行っていないため、術後腋窩level I・IIを含めたHigh Tangent照射野に設定し、温存乳房に42.56Gyの放射線照射と腫瘍床に7.98Gyのブースト照射を行った。照射終了後より、アナストロゾール1mg/日の内服を開始した。内服開始3か月後より咽頭の違和感が2週間持続し、咳嗽・呼吸困難感・発熱を伴うため、当科を受診した。

受診時現症: 身長153cm、体重53kg、体温37.8℃、 脈拍数103回/分、血圧132/95mmHg、動脈酸素飽和 度Room airで95-98%であった。

受診時検査所見: WBC 7,750/µL (Neut 87.0%、Lymph 8.1%, Mono 2.9%, Eos 1.8%, Baso 0.2%)、CRP 7.99mg/dL と肺炎を疑った。

胸部レントゲン検査(図 1 A): 左中肺野を中心に 浸潤影を認めた。

胸部CT検査(図1G): 左上葉を中心にconsolidation およびその周辺にスリガラス陰影が広がっていた。 また、air bronchogramや類円形の異常陰影を認め た。

肺炎と診断し、内科に紹介。同日よりアナストロ ゾール内服は中止とした。内科では市中肺炎を疑 い、抗菌薬を投与するも症状は改善しなかった。細菌・真菌・結核感染を調べたが、どれも否定的であったため、気管支鏡検査を行った。

肺病理組織学的検査(図2):軽度の線維化と軽度 のリンパ球浸潤を伴う器質化肺炎の組織像であった。

放射線治療に伴うCOP様肺臓炎を考え、プレドニ ゾロンを20mgより投与を開始。投与開始9日後に異 常陰影は消失した(図1B)。

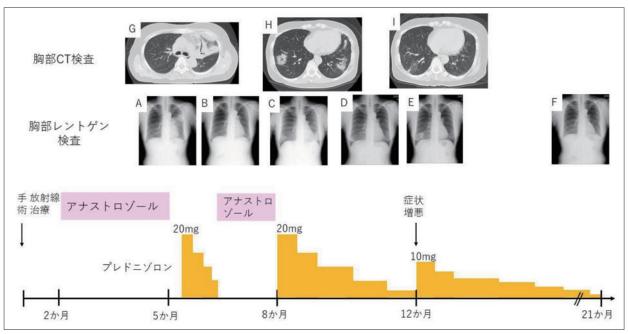


図1 治療経過

A,G 症状出現時:レントゲン検査で左中肺野を中心に浸潤影を認め、CT 検査では air bronchogram を伴う consolidation を認めた

B ステロイド投与9日後: 異常陰影は消失した

C.H 症状再出現時:アナストロゾール内服再開2か月後、両肺野に浸潤影を認めた

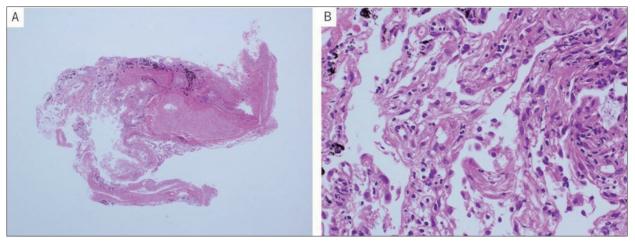


図2 肺病理組織学的検査(H.E.染色)

肺胞部分に軽度の線維化と軽度のリンパ球浸潤を認めた(A;×40、B;×400)

プレドニゾロンを漸減し中止となったところで、本人よりアナストロゾールの再開希望があった。 COP様肺臓炎が再燃する可能性を十分に説明し、同意を得た上でアナストロゾールを投与した。

アナストロゾール再開2か月後、呼吸困難が再出現し、COP様肺臓炎が再燃した(図1C)。この時点でアナストロゾールとの関連を強く疑い、DLSTを行ったところ陽性であった。

アナストロゾール内服を中止し、プレドニゾロン 内服を再開すると、症状は改善。プレドニゾロン減 量中に一度増悪を認めたため、慎重に漸減し、再燃 より13か月後にプレドニゾロンは中止した。

本人より内分泌療法再開希望があり、DLST陰性であったエキセメスタン内服を行った。内服開始72か月を経過した現在、COP様肺臓炎の再燃は認めていない。

考察

薬剤性肺障害とは、薬剤を投与中に起きた呼吸器 系の障害のなかで、薬剤と関連があるものと定義さ れる2)。薬剤性肺障害の発症を疑った場合には、原 因となる薬剤の摂取歴、薬剤に起因する臨床病型の 報告、他の原因疾患の否定、薬剤の中止による病態 の改善、再投与による増悪などの薬剤性肺障害の診 断基準に従って診断する3)。再投与試験による再 発は診断の基本であるが、重症化や死亡の危険性を 引き起こす可能性がある。そのため、診断と病態の 理解に補助的な役割を果たす検査としてDLSTがあ る。これは、薬剤性アレルギーが疑われる患者の感 作されたリンパ球と被疑薬(抗原)を混合し、リン パ球から分裂・増殖する率を3H-thymidineの取り込み 量として測定する検査方法である。薬剤性肺障害と 診断された症例におけるDLST陽性率は55~70%と低 く、偽陽性や偽陰性の問題も指摘されている³⁾。

乳癌患者における放射線照射後のCOP様肺臓炎は、1995年にBayleら⁴⁾により報告されて以降、さまざまな報告がみられる。臨床的特徴としては、①放射線療法後12カ月以内に発症、②2週間以上の全身および呼吸器症状の持続、③照射部位と一致しない肺浸潤影、④他に特徴的な原因を有さない、ことである⁵⁾。Katayamaら⁶⁾は、COP様肺臓炎のリスク因子は年齢(50歳以上)と、内分泌療法薬の放射線療法同時併用と報告している。堀内ら¹⁾は、37例

のCOP様肺臓炎を集計し、この病態は内分泌療法薬 による薬剤性肺障害も含まれている可能性を指摘し ている。

自験例は56歳女性で、放射線療法終了後3ヵ月での発症、陰影は照射野に一致せず、感染による肺炎は否定的で、COP様肺臓炎の特徴として矛盾しなかった。市中肺炎が否定的となった時点で、鑑別診断として放射線照射後のCOP様肺臓炎と薬剤性肺障害を挙げた。2023年9月改定の添付文書ではアナストロゾールによる間質性肺炎の頻度は1%と記載されているが、自験例の発症当時の添付文書では0.1%未満となっていたため、薬剤性肺炎を疑う基準である「薬剤に起因する臨床病型の報告」を満たさないと判断し、当初は放射線後のCOP様肺臓炎を考えた。しかし、アナストロゾールの再投与により症状が再燃したため、薬剤性肺障害を疑った。

事実、アナストロゾールに対するDLSTは陽性であり、本人希望による内服再開が結果的に被疑薬の再投与試験となったことより、薬剤性肺障害の診断基準と矛盾しなかった。自験例はアナストロゾールによる薬剤性肺障害が強く示唆された。

薬剤性肺障害の発症機序は少数の薬剤を除いてほとんど不詳であるが、基本的には、1. 細胞障害性薬剤によるⅡ型肺胞上皮細胞、気道上皮細胞あるいは血管内皮細胞に対する直接毒性、2. 免疫系細胞の活性化の2つの機序が考えられている。これらの機序は遺伝性素因、個体の年齢的背景、肺における先行病態、併用薬剤との相互作用など、多様な宿主因子と環境因子で修飾される2)。

Roberts 6⁷⁾ は、放射線治療後の乳癌症例の気管 支肺胞洗浄液を検討し、照射側だけでなく非照射側 においてもリンパ球の上昇を認めたことから、放射 線照射により、リンパ球の活性化や炎症性サイトカインなどの免疫学的な機序を引き起こす可能性があることを述べている。

上記をふまえ自験例の発症機序を考察すると、術後の接線照射によりリンパ球を介する過剰な免疫反応が起こり、そこに遺伝性素因や年齢背景などが加わり、アナストロゾールに対してアレルギー反応が生じたと思われる。アナストロゾールのDLSTが陽性であったこともこの推察に矛盾しない。

以上より、乳癌術後の放射線治療後に発症した COP様肺臓炎では、内分泌療法薬を使用している 場合はDLSTを行い、薬剤性肺障害の可能性を検討することが望ましいと考える。内分泌療法を再開するにあたり、自験例はDLST陰性のエキセメスタンを投与した。結果、現在までCOP様肺臓炎の再燃を認めていない。DLSTの特異度は薬剤によって異なり、偽陰性の問題があるが、投与薬の選定にDLSTは有用である可能性が示唆された。今後、症例の集積が必要である。

文 献

- 1) 堀内喜代美ほか: リンパ球刺激試験で内分泌療法薬に陽性を示した乳癌温存手術後のbronchiolitis obliterans organizing pneumonia (BOOP) の2例. 日臨外会誌72:613-618,2011
- 2) 日本呼吸器学会薬剤性肺障害の診断・治療の手引き第2版作成委員会編:薬剤性肺障害の基礎知識、薬剤性肺障害の診断・治療の手引き第2版2018、メディカルレビュー社、p1-11、2018
- 3) 日本呼吸器学会薬剤性肺障害の診断・治療の手引き第2版作成委員会編:薬剤性肺障害の診断・鑑別診断、薬剤性肺障害の診断・治療の手引き第2版2018. メディカルレビュー社, p12-46, 2018
- 4) Bayle JY et al: Migratory organizing pneumonitis "primed" by radiation therapy. Eur Respir J 8: 322-326, 1995
- 5) Crestani B et al: Bronchiolitis obliterans organizing pneumonia syndrome primed by radiation therapy to the breast. Am J Respir Crit Care Med. 158: 1929-1935, 1998
- 6) Katayama N et al: Analysis of factors associated with radiation-induced bronchiolitis obliterans organizing pneumonia syndrome after breastconserving therapy. Int J Radiation Oncology Bio Phys 73: 1049-1054, 2009
- Roberts CM et al: Radiation pneumonitis; a possible lymphocyte-mediated hypersensitivity reaction. Ann Intern Med 118: 696-700, 1993

A case of drug-induced lung injury due to anastrozole in which drug lymphocyte stimulation test was useful

A 56-year-old woman with a cough, dyspnea and fever had been taking anastrozole for 3 months after radiation therapy. Chest radiography showed an infiltrative shadow centered on the middle field of the left lung. The chest infiltration was not improved with antibiotics. Suspected radiation-related cryptogenic organizing pneumonia (COP), steroid treatment resulted in clinical and radiographic improvement. Two months after resuming anastrozole, COP-like pneumonitis recurred. The drug-induced lymphocyte stimulation test (DLST) for anastrozole was positive. The case was diagnosed as drug-induced pneumonia due to anastrozole. The exemestane with negative DLST did not cause COP-like pneumonitis. This suggests that DLST of the drug to be used is useful when selecting endocrine therapy after treatment of COP-like pneumonitis.

症例報告

新たな人道支援としての遠隔リハビリの可能性

俵 紘志¹⁾ 平 俊浩²⁾ 山名圭哉³⁾ 藤井俊宏¹⁾

要旨 【緒言】COVID-19 パンデミックにより、遠隔リハビリの利用が世界中 で拡大した。我が国でも、対面リハビリを補完・代替する手段として遠隔リハ ビリが導入されつつあるが、世界には、リハビリが必要であっても社会情勢の 問題で提供されていない地域がある。今回、紛争地に対して遠隔リハビリを行っ た経験を共有する。【症例】症例は、X 年 12 月に被弾して脊髄損傷 (Th5,ASIA Impairment Scale:B) を呈した、アフガニスタン在住の 20 歳代男性。X+1 年 10月から、月1回の頻度で遠隔リハビリを開始し、運動療法のモニタリン グやセルフケア・身体活動のアドバイス、心身状態の評価・フォローアップ を行った。介入効果を評価するため、遠隔リハビリ開始時と X+2 年 9 月時点 の機能的自立度評価表 (Functional Independence Measure:FIM)、Life space assessment (LSA)、うつ病自己評価尺度 (The Center for Epidemiologic Studies Depression Scale;CES-D)、主観的健康管理能力尺度(修正版 Perceived Health Competence Scale; PHCS)、自己効力感 (General Self-Efficacy Scale;GSES)、Rosenberg 自 尊 感 情 尺 度 (Rosenberg Self-Esteem Scale;RSES)、健康関連 QOL 効用値 (EuroQol 5 dimensions 5-level;EQ-5D-5L)、視覚尺度 (visual analogue scale;EQ-VAS) を比較した。その結果、すべて の評価項目で良好な傾向がみられ、身体活動機会や離床機会の増加、精神面や ADL、QOL の改善が示唆された。【考察】遠隔リハビリは、新たな人道支援の アプローチとなり得る可能性があるが、課題も多い。

Key words: 1. 遠隔リハビリ 2. 人道支援 3. 脊髄損傷

緒言

情報通信技術(Information Communication Technology:以下、ICT)の目覚ましい発展は、我々の生活を大きく変化させ、医療においてもその在り方を変容させるものとなっている。

海外では遠隔医療(Telemedicine)の運用が進み、遠隔技術を用いたリハビリテーション(以下、遠隔リハ)は、遠隔リハビリテーション(Tele-rehabilitation)または遠隔理学療法(Telephysiotherapy)と呼ばれ、スマートフォンやタブレット、パーソナルコンピューターなどの情報機器とICTを用い、通院が難しい患者にとっての一つの選択肢として、リハビリテーション従事者と患者が物理的に離れている環境で互いに接触することなくリハビリテーションを行う手段¹⁾となっている。また、遠隔リハの内容に関しても、ビデオ通話での健

〒 721-8511 広島県福山市蔵王町 5-23-1 福山市民病院

リハビリテーション科 $^{1)}$ 、精神科 $^{2)}$ 、整形外科 $^{3)}$

康相談だけでなく、様々なデジタルデバイスを介して評価、リハビリを行うことができる質の高いものへと発展を遂げている。

遠隔リハは、遠隔地や過疎地など病院やクリニックへのアクセスが困難な患者を対象にして世界中での導入が検討 2 (3) 4 (5)され、効果判定の試みも始まっているが、本邦での取り組みは未だ乏しい状況である。

2019年に始まったCOVID-19のパンデミックでは、感染拡大予防のための厳しい行動制限、人流抑制といった生活様式の急激な変化によって、遠隔リハの利用が世界中でさらに拡大した。我が国でも、対面でのリハビリを補完・代替する手段として遠隔リハビリが導入されつつあったが、新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行してからは、元の医療・リハビリに戻っている印象を受ける。

一方、昨今の世界情勢に目を向けてみると、遠隔 地や過疎地、被災地だけでなく、リハビリが必要で あっても社会情勢の問題で提供されていない地域も 少なくない。

今回、筆頭著者がボランティア活動として行って いる遠隔リハビリの経験を共有する。

症 例

ある日、筆頭著者の元へアフガニスタン在住の脊 髄損傷の方から、「Help me (助けて欲しい)」、

「I need physio (理学療法が必要だ)」というSNS を介したメッセージとMRI画像、診断書が届いた (図1)。何度かメッセージでやりとりをしてい くなか (図2) で、医療資源の乏しいアフガニス タンのリハビリの現状を知り、筆頭著者個人のボラ ンティア活動として、月1回、Messengerのビデオ 通話を使用したオンラインでの遠隔リハを開始した (図3)。尚、遠隔リハを実施し本報告をまとめる にあたり、当院整形外科医師、精神科医師をはじ め、多方面からアドバイスをいただいた。





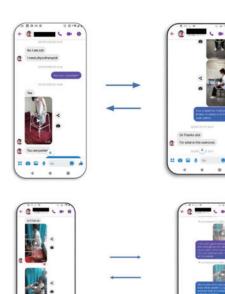


図2





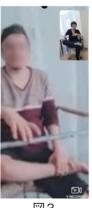




図3

症例は、X年12月に被弾して脊髄損傷を呈した、 アフガニスタン在住の20歳代男性。T5損傷でASIA Impairment ScaleはB相当であった。移動手段は車い すだが、外出することはほとんどなく、自室のベッ ド上で過ごしていた。

X+1年10月から、月1回の頻度で遠隔リハを開始 し、運動療法のモニタリングやセルフケア・身体活 動に関するアドバイス、心身状態の評価・フォロー アップを行った。

遠隔リハの効果を評価するため、遠隔リハ開始時 とX+2年9月時点の機能的自立度評価表(Functional Independence Measure; FIM) , Life space assessment (LSA)、うつ病自己評価尺度 (The Center for Epidemiologic Studies Depression Scale; CES-D) 主観的健康管理能力尺度(修正版Perceived Health Competence Scale; PHCS)、自己効力感(General Self-Efficacy Scale;GSES)、Rosenberg自尊感情尺 度(Rosenberg Self-Esteem Scale; RSES)、健康関連 QOL効用値(EuroQol 5 dimensions 5-level;EQ-5D-5L)、視覚尺度(visual analogue scale;EQ-VAS)の評 価バッテリーを使用した。尚、評価方法に関して、 症例は英語によるコミュニケーションが可能であっ たため、英語の問診票をメッセージで送信し、回答 を得た。身体機能面の評価に関しては、ビデオ通話 のみでは困難であったため、今回は非実施とした。

尚、倫理的配慮として、筆頭著者が、対象者本人と家族に対し、本報告をまとめることについての目的と趣旨を口頭・書面で説明し、同意をいただいた。

開始時とX+2年9月時点での評価は、FIM: 79→82、LSA: 2→3、CES-D: 36→29、PHCS: 23→28、GSES: 64→70、RSES: 24→26、EQ-5D-5L: 0.3577→0.4228、EQ-VAS: 30→50であった(図4)。今回、シングルケースでの報告であり、各項目の解析は実施できていないが、すべての評価項目で良好な傾向がみられ、身体活動機会や離床機会が増加し、精神面や日常生活動作(ADL)、生活の質(QOL)の改善が示唆された。

	開始時	X+2年9月		
Functional Independence Measure (FIM)	79	82		
Life Space Assessment (LSA)	2	3		
Center for Epidemiologic Studies Depression Scale (CES-D)	36	29		
Perceived Health Competence Scale (PHCS)	23	28		
General Self-Efficacy Scale(GSCS)	64	70		
Rosenberg Self Esteem Scale (RSES)	24	26		
EuroQol 5-dimensions 5-levels (EQ-5D-5L)	0.3577	0.4228		
EQ-VAS	30	50		

図4

考察

在宅リハビリテーションにおけるテレビ電話の有用性⁶⁾とICTを用いたリハビリ介入によって身体活動時間増加⁷⁾は以前から報告されており、エビデンスは不十分だが、脊髄損傷治療と管理の介入として、遠隔リハは患者に利益がある可能性がある⁸⁾とされている。

今回は、30分の遠隔リハを月1回の頻度で実施し、その有用性を精神面で評価したに過ぎないが、全ての評価で良好な結果が得られたことから、遠隔リハが身体活動時間増加の一助になったと推察され、先行研究を支持する結果が得られたと考える。

また、遠隔リハは健康格差を改善し、リハビリテーションサービスへのアクセスを向上させる⁹⁾とされているが、普及の為に遠隔リハ導入のハードルを下げることの必要性¹⁰⁾も報告されている。近年、遠隔リハに使用する各種デジタル機器の発展は目覚ましく、それらを活用した遠隔リハを行うためには、療法士も患者も高いデジタルリテラシーが必要と言われている。今回、アフガニスタンという社会情勢の問題で十分な医療が提供されていない地域において遠隔リハを実施したが、スマートフォンやタブレット端末を利用した遠隔リハはあらゆる年代

と疾患の患者間で急速に普及し受け入れられている ^{11) 12) 13)} こともあり、ビデオ通話というシンプルな 遠隔リハの手法であったが、一定の健康増進効果が 得られたと考える。

一方、遠隔リハには欠点もあり、その最たるものは、患者に直接会えないことであり、徒手を用いた評価・治療でなく、モニターを介しての関りのみでは、十分な評価・治療が行なえない。理学療法では、徒手による患者との接触が、より患者と治療者間の信頼や敬意を醸成する可能性がある¹⁴⁾と言われており、遠隔リハには限界があるのも事実である。

しかしながら、遠隔リハは、医療が提供されてい ない地域への新たな人道支援のアプローチとなり得 る可能性があると筆者は期待している。今回の症例 に関しては、英語でのコミュニケーションが可能で 通信機器が使用可能な生活環境であったーという条 件に恵まれたために実施できた稀なケースであり、 本報告のみで、遠隔リハの可能性を論じるべきでは ない一という指摘も頂いたが、遠隔リハ開始時は ベッド上での生活がほとんどであった症例が、車椅 子で外出している様子や自宅で自主練習を実施して いる様子を知らせてくれる際の姿や表情をみている と、遠隔リハの可能性を信じずにはいられない(図 5)。国をまたいで遠隔リハを行う上では、イン ターネットライセンスの問題やインターネット料金 の問題、通信環境や言語、宗教、医療制度など法規 制の課題も多く、慎重な対応が必要であり難渋する ことも少なくないが、本症例に対する遠隔リハは現 在も継続中である。今後も、持続可能な人道支援の 一助としての遠隔リハビリの可能性を模索してきた いと考える。





図5

謝辞

今回の遠隔リハ実施にあたり、サポートいただいた福山市MICE推進ディレクター菅優子様、TEFLコンサルタントRichard Stokes氏、赤十字国際委員会 (ICRC) Physical Rehabilitation Project Manager Najmuddin Helal氏、福山市民病院リハビリテーション科スタッフに感謝申し上げます。

文 献

- 1) Brennan DM et al:A blueprint for telerehabilitation guidelines-October 2010. Telemed J E Health 17:662-665, 2011.
- Davis P et al:An evaluation of telehealth in the provision of rheumatologic consult to a remote area.JRheumatol 28:1910-1913, 2001.
- 3) Dew A et al:Addressing the barriers to accessing therapy services in rural and remote areas. Disabil Rehabil 35:1564-1570, 2013.
- 4) American Physical Therapy Association(APTA):Telehealth in practice. https://www.apta.org/your-practice/practicemodels-and-settings/telehealth-practice (Nov 4th.2021)
- 5) Physiotherapy board of New Zealand:Telehealth standard. https://www.physioboard.org.nz/standards/physiotherapy-standards/telehealth-standard (Nov 4th.2021)
- 6) 小山浩永ほか:遠隔医療におけるテレビ電話の活用-特に在宅リハビリテーションにおいて.臨床リハ6:726-728,1997.
- 7) Kwan RYC et al: The effect of e-health interventions promoting physical activity in older people: a systematic review and metaanalysis. European Review of Aging and Physical Activity 17: 7, 2020.
- 8) Rosie M Solomon et al: Telerehabilitation for individuals with spinal code injury in low-and middle-income countries:a systematic review of the literature. Spinal Cord. 60(5):395-403, 2022 May.
- 9) Jana C:A PILOT TELEREHABILITATION PROGRAM: DELIVERRING EARLY INTERVENTION SERVICES TO RURAL

- FANILIES.INTERNATIONAL JOURNAL TELEREHABILITATION. Vol.1 No.1:29-37, 2009.
- 10) Michael P,Linda R:TELEREHABILITATION TECHNOLOGIES:ACCESSIBILITY AND USABILITY.INTERNATIONAL JOURNAL TELEREHABILITATION.Vol.1 No.1:85-97, 2009.
- 11) Doiron-Cadrin P et al: Feasibility and preliminary effects of a tele-prehabilitation program and an in- person prehabilitation program compared to usual care for total hip or knee arthroplasty candidates: a pilot randomized controlled trial. Disabil Rehabil 42: 989-998, 2020.
- 12) Chen JJ et al: Tele-exercise as a promising tool to promote exercise in children with cystic fibrosis. Front Public Health 6:269,2018.
- 13) Hong J et al: Effects of home-based teleexercise on sarcopenia among community-dwelling elderly adults: body composition and functional fitness. Exp Gerontol 87: 33-39,2017.
- 14) Bjorbækmo WS, Mengshoel AM: "A touch of physiotherapy" -the significance and meaning of touch in the practice of physiotherapy. Physiother Theory Pract 32: 10-19,2016.

The possibility of tele-rehabilitation as a new humanitarian aid.

[Introduction] The COVID-19 pandemic has increased the use of tele-rehab around the world.

Although tele-rehab is being used as a tool to complement and provide an alternative to face-to-face rehab in our country, there are areas of the world where rehab is needed but not provided due to unfavourable social situations.

This report will share the experience of providing tele-rehab to conflict areas.

[Case] The case is a male in his 20s living in Afghanistan who presented with a spinal cord injury (Th5, ASIA Impairment Scale: B) after being injured by a gunshot wound in December 20XX.

Starting in October 20XX+1, tele-rehab was provided once a month, with exercise therapy monitoring, advice on self-care and physical activity, and assessment and follow-up of his physical and mental condition.

To assess the effectiveness of the intervention, the Functional Independence Measure (FIM), Life space assessment (LSA) and The Center for Epidemiologic Studies at the start of tele-rehab and in September 20XX+2 Depression Scale (CES-D), Perceived Health Competence Scale (PHCS), General Self-Efficacy Scale (GSES), Rosenberg Self-Esteem Scale (RSES), EuroQol 5 dimensions 5-level (EQ-5D-5L) and visual analogue scale (EQ-VAS) were evaluated. Every evaluation showed improvement, suggesting an increase in physical activity and opportunities to leave the bed, as well as improvements in mental and ADL and QOL.

[Conclusion] Tele-rehab has the possibility to become a new approach to humanitarian aid, but there are many issues to be addressed.

症例報告

血糖管理が出来なかった患者への行動変容の 動機付けを促す指導

平岡美来

要旨 看護師が行う療養支援は患者を理解する事から始まる。患者は若くして 糖尿病を発症し自己流の療養生活を送ってきたが、血糖不良もあり、足趾切断 や臀部潰瘍悪化で入院を繰り返していた。患者に対し、行動変容ステージモデ ルへあてはめ、自己管理意識を高める事を目標とした。患者と対話を重ね傾聴 し、患者の行動を承認しながら、段階を踏んで指導を行った。その結果、血糖 値と創部の関係を理解し、退院後も血糖管理の維持ができていた。自己行動変 容を促す際に、不足している知識を伝えるだけが指導ではない。患者の全体像 を捉え、段階を踏み、継続できる指導方法を一緒に考え提供する事。できてい る事を承認、支援していく事で意欲向上や維持に繋がり、変化のステージを逆 戻りする事なく一つ一つ進む事ができたと考える。

Key words: 糖尿病、血糖管理、行動変容ステージ、自己行動変容

緒言

糖尿病患者において、自己管理がルーズな患者を 多く経験する。画一的な指導は本人の行動変容に結 びつかない事が多い。看護師が行う療養支援は患者 を理解する事から始まると考える。今回、健康行動 理論に基づいた看護介入を行い、自己行動変容を導 く事ができた症例を経験したので報告する。

利益相反の開示

本研究発表に関連し、開示すべき COI 関係にある 企業等はありません。

症 例

患者概要・現病歴

50代男性、独居(キーパーソン叔父)

X年8月、自宅室内でふらついて転倒した際に左 臀部に扇風機が当たり打撲したが、徐々に腫脹、熱 感、疼痛が増強したため受診した。左臀部皮膚壊 死、蜂窩織炎の診断で入院加療となった。糖尿病に

〒 721-0927 広島県福山市大門町津之下 1844 日本鋼管福山病院 看護部 ついては初回診断は20歳代であり、X-29年から当院外来で加療され、インスリン治療が導入されていた。X-1年に左第4,5趾壊疽に対し当院にて中足骨切断がなされており、良好に創治癒が得られているが、その際には約10週間の入院加療を要していた。局所所見は長径約8~cmの境界不明瞭な皮膚壊死と皮下の広範な膿瘍あり(図1~a)。

身長:177cm, 体重:88kg, 血液検査ではCRP:26.13 mg/d1, WBC:26400/μl,

eGFR: 7.8ml/min, HbA1C:10.9%, Alb:2.0 g/d1であった。

治療経過

1. 入院から4日目 介入開始し1日目 (無関心期)

患者からは、「高血糖がダメって言うのは知っている」「足は気にして見ていたが、お尻は治ると思っていた」「朝はブラックコーヒーのみ、昼は配食サービスの弁当、夕は牛丼やラーメンの外食だった」などの発言あり。糖尿病との長い付き合いによって自己流の療養生活を送っていたようである。しかし、入院後「糖尿病を甘く考えすぎていたな」と反省する言葉も聞かれた。そこで、患者の生活背景や血糖コントロールについての思いを傾聴しながら少しずつ理解し納得できる指導を行っていく事が

大切と考えた。まず、自身の血糖値を知ってもらうために、血糖値チェック表(表1)を作成し、自身で記入してもらう事にした。局所の創は連日のデブライドと閉鎖陰圧療法の導入を行い(図1b,c)、経時的血糖測定にリブレ Pro^{\otimes} (Abbott Medical Japan LLC. Tokyo. Japan)(以下リブレと略す)を装着しインスリン施注行う。









図1

a	b
c	d

図1創部の経過

a:入院時の創部

b:デブライト時の創部

c: 閉鎖陰圧療法中の創部

d:ワセリン塗布へ変更し退院前の創部

表1 血糖値チェック表

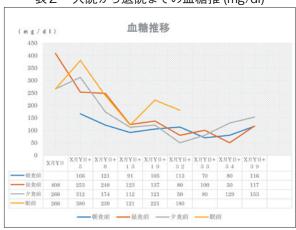
	(月))	(*)	(*)	(*)	(金)	(±)	(В)
朝									t									H		
昼						T			T											
9			Г			T			T			Г						T		
BR.						T			T						Г					
前																				

2. 介入開始し2日目~5日間(関心期・準備期) 血糖値チェック表記入とともに、高血糖である事 は易感染状態である事を説明し理解あり。患者は、 「これなら自分で血糖値を書いて表の管理は出来そう」と血糖値に関心あり。血糖値チェック表を活用する事で、血糖値を把握し患者も治療へ参加する事が出来る環境を作り、血糖管理の必要性を感じた上で達成したいと思える事が血糖管理の維持に繋がると考えた。その為に、実際に創部と血糖値の状態を照らし合わせた。創部の状態は写真に撮って供覧する事にした。また、血糖値の改善、インスリンの単位数の経過、創部の改善の経過を自分で確認してもらう。

3. 介入開始し5日目~11日間(行動期)

血糖値チェック表の活用が出来ている事を称賛する。また、数日間、数週間の変動を患者と共に確認した(表2)。

表2 入院から退院までの血糖推 (mg/dl)



患者は、「入院の最初に比べて血糖がだいぶいい感じだな。自分の事だし自分で血糖値を把握しないといけないね」と前向きな発言がみられた。また、「周りに糖尿病の人が沢山いるし、足を怪我しても痛みがなくてずっと気付かず過ごしていた人もいて、その人は自分みたいになるんじゃろうか」「足の指を落としたのを思い出した。もうあんな経験はしたくない」と周囲の人と自分の状況を当てはめ、X-1年に左第4、5趾切断時の入院生活や、退院後の生活で苦労した事を思い出し、臀部の創が出来た際に受診をしなかった事を後悔する言葉も聞かれた。入院前の生活や状況を振り返り退院後の生活に繋げる事で、血糖管理への動機付けになっていると考えた。

4. 介入開始し16日目~(維持期)

血糖値の振り返りを続ける事で患者からは、「血

糖が落ち着いたのは病院食、リハビリの影響が大きいよね」「自転車は職場に持っていって時間を決めてしようと思う」「食事は、配食サービスに頼んだ方がいいと思った」と退院後を見据えた発言が増え、自身の生活に合わせた食事療法、運動療法を併せて考える事ができた。多職種から退院後の指導をしてもらい、リブレを装着し退院された。退院後の生活に合わせた資料(図2)を作成。

糖尿病治療についてのポイント!。

血糖測定について(血糖測定を行う時は)。

起床時 眠前 運動前 シャワー浴前 運転前。 ※50ライン以下の場合は血糖測定を行う。

★低血糖症状★。

冷汗、夜間起きて寝付けない、倦怠感、動悸、眠気など。 ★摂取するもの★。

ブドウ糖10g、ジュース 200ml、ラムネ、チョコレート。 ※自己判断でインスリン量を調節しないようにして下さい。

食事について

- ①毎食ご飯 200g(茶碗 1 杯分) 野菜は多めで。
- ②汁物は1週間に1杯! (塩分1gまで)
- ★外食は禁止です!。

運動について

- ①食後1~2時間後、1日30分の運動が目安です。
- ★食事前や体調不良の際は無理せず休んで下さい。

自宅での注意点。

- お風呂で全身の観察をしましょう 特に足、腕、お尻。
- ・熱感・発赤・腫れ・疼痛・発熱 など普段と違う事があ れば受診して下さい。
- ※分からない事があった際はいつでも病院へ連絡してくださいね。

図2 指導資料

患者は積極的に質問が出来ていた。夜間低血糖症 状が出現した際の対応についても理解良好であっ た。指導内容が実行に移せて成功体験へと繋がって いる。退院に向けてインスリン自己注射開始とな る。退院前の創部は肉芽が盛り閉鎖陰圧療法からワ セリン軟膏へ変更(図1d)となり退院となった。 退院後の外来通院時に話を伺った。血糖値チェック 表を持参され、管理も良好であった。食事療法、運 動療法も継続出来ていた。患者は「何かあれば受診 します」と受診の必要性を理解し受診への抵抗はな くなっていた。

考察

糖尿病患者において、自己管理に対する意識の低 い患者を多く経験する。本症例は、20歳代から糖 尿病を患っており、自己流の食事療法と食事内容に 応じたインスリン量の自己調節をしていた。今回、 約1週間の経過で臀部の打撲血種が重症感染を起こ し入院加療に至ったが、その際のHbA1C:10.9%と 高値であった事から、感染発症前のコントロールも 不良であったと考えられた。また、前回糖尿病性壊 疽から足趾を失う経験をしているにもかかわらず創 部を放置していた事から、疾患に対する知識不足や 誤った解釈が入院を繰り返す原因の一つと考え、危 機意識も低くなっていたものと考えた。我々は、今 回のイベントを契機に糖尿病に対する自己管理意識 を高める事、継続した血糖管理へ繋げる事を目標に 多職種がチームで関わった。松本1)は「行動変容 ステージモデルでは人の行動を変える場合は『無関 心期』→『関心期』→『準備期』→『行動期』→ 『維持期』の5つのステージを通ると考えます。行 動変容のステージをひとつでも先に進むには、その 人が今どのステージにいるか把握し、それぞれのス テージに合わせた働きかけが必要になります | と述 べている。経時的に患者の言動を傾聴し、今はどの ステージに居るのかを把握するように努めた。中尾 ら2)は「適切なセルフケア行動が行われるかどう かは、患者の考え方や感情、ストレス、糖尿病合併 症、医療者や家族の援助や学校/職場、地域や医療 制度などから大きい影響を受ける。したがって、よ い血糖コントロールを達成するためには、患者の身 体的問題とともに、心理・社会的問題を把握して いく必要がある」と述べている。また、Williamsら 3) は「医師(を含む医療者)の態度がセルフケア行動 に影響する。治療の進め方や目標設定に関して『医 療者が自律的な態度を尊重してくれる』と患者が認 識するほど、食事や運動への自己動機づけが強くな り、満足度も高く、良好な血糖コントロールが持続 する」と述べている。自覚症状と採血・血糖値の データ、創の状態などが日を追って改善していく様 を自身で日々確認できる事によって自身が治療に参 加しているという動機づけが効果的に得られた。そ の結果、変化のステージを逆戻りする事なく一つ一 つ進む事ができた。そして、退院から1年半経過し た現在はHbA1C:6.7%と血糖値は改善し、足部の小 さい傷も軽視せず医療者に相談されていた。今回の 入院前よりも少ないインスリン量で良好な血糖値が 維持されており、本症例への関りは有効な自己行動 変容を導く事ができたと考えられた。

文 献

- 1) 松本千明: やる気を引き出す保健指導・患者指導〜健康行動理論に基づいて〜. 日本保健医療行動科学会雑誌 31(2): 40-45, 2016.
- 2) 中尾一和,石井均監訳:糖尿病治療のための臨 床心理ガイド.メジカルビュー社.東京,1997.
- 3) Williams GC et al: Supporting autonomy to motivate patients with diabetes for glucose control. Diabetes Care 21(10): 1644-1651, 1998.

Guidance to motivate patients who have not been able to control their blood glucose to change their behavior.

The recuperation support provided by nurses begins with understanding the patient. The patient had developed diabetes at a young age, and had been living a self-care lifestyle, but due in part to poor blood glucose, he had repeatedly been hospitalized for amputation of his toes and aggravation of a buttock ulcer. We applied the behavior change stage model to the patient and aimed to increase his awareness of self-management. The patient was guided step-by-step through a series of dialogues, listening and approving his behavior. As a result, the patient understood the relationship between blood glucose levels and wounds, and was able to maintain blood glucose control after discharge. When encouraging selfbehavioral change, teaching is not just about conveying the missing knowledge. We need to grasp the patient's holistically, take steps, and work together to provide guidance that can be continued. By recognizing and supporting what the patient is able to do, we believe that the patient was able to improve and maintain his motivation, and was able to progress through the stages of change one by one without going backwards.

症例報告

緊急透析導入となった不安が強い患者へのシャント管理に向けた介入 ~フィンクの危機モデルを用いて~

森本芽衣

要旨 患者は、慢性腎不全増悪による尿毒症を発症し、緊急透析導入となったことにより治療の受け入れが出来ず不安が強い状況であった。そのため治療の受け入れが出来た上での自己管理指導を行う必要があると考え看護介入を行った。そして患者との関わりについてフィンクの危機モデルを用いて振り返りを行った。透析導入直後は治療に対して否定的な発言が多く、衝撃の段階にあった患者への寄り添う関わりにより患者の不安軽減、安心感へ繋がり適応の段階へ移行した。そして、その段階で透析導入期の指導を開始出来たことで円滑に知識の獲得が出来たと考える。

Key words: 緊急透析導入、不安、傾聴、フィンクの危機モデル、指導

緒 言

緊急透析導入は予定導入と比較し、尿毒症症状や 身体的苦痛などストレスが大きい。それにより透析 治療に対して否定的な感情を抱くことが多く、受け 入れに時間を要す場合がある。患者の思いに寄り添 う関わりにより治療の受け入れを促し、適切な段階 で指導開始したことで円滑な知識獲得につなげるこ とができた症例を経験したので報告する。

研究目的

予期せぬ緊急透析導入により危機状態にある患者 が看護師の関わりにより危機を乗り越え、退院後の 自己管理を可能にさせる看護について、フィンクの 危機モデルを用いて分析し明らかにする。

利益相反の開示

本研究発表に関連し、開示すべき COI 関係にある 企業等はありません。

倫理的配慮

〒 721-0927 広島県福山市大門町津之下 1844 日本鋼管福山病院 看護部 個人が特定されないように配慮し、患者家族へ個 人情報保護について口頭にて説明し同意を得た。

症 例

患者は70歳代女性。60代から腎機能低下あり腎硬化症と診断され加療中であった。徐々に腎機能悪化あり透析導入を見据えて他院にてシャント造設がなされていたが、その約1週間後に尿毒症所見あり当院を受診した。同日ブラッドアクセスを挿入し緊急透析導入となった。

治療経過

1. 入院日~1週間

ブラッドアクセス挿入し週3回の維持透析導入となる。「健康に過ごしている人もいるのにこんなことになってびっくりしています。」と話し緊急透析導入に至ってしまった事にショックを受けていた。透析導入に伴う不均衡症状も現れており透析に対する否定的な感情が増していた。「透析が終わった後に気分が悪くなることや身体がだるくなることって他の人でも同じ症状を訴えることはありますか。私みたいにシャントを作って首にも管を入れて透析をしている人もいますか。」などと症状や治療に関して看護師へ質問あり。シャントに関しては「自分の

身体じゃないみたいで触るのも怖い。」との発言あり、患者は危機のプロセスにおける衝撃の段階にあると考えられた。疑問や不安の表出はできており、まずは患者の思いを傾聴して治療を理解し受け入れられるように関わる必要があると考え日々患者の思いを聞き、否定せず受け止める関わりを行った。

2. 入院後1週間~2週間

不均衡症状は次第に消失した。それにより不安も少しずつ軽減し「ちょっと(シャントの)音を聞かせてもらってもいいかな」との発言が聞かれ、シャントへの興味・関心を持ち始めていた。患者の思いを傾聴する関わりを継続した。「生涯透析って言われてショックだけどちょっとずつ受け入れていきたい。パンフレットはまだ怖くて見ることが出来てないですけど、看護師さんみんな優しくて心強い。」と前向きな発言が聞かれるようになった。

入院時にはしんどさが強く出来ていなかったシャントの発達を促すためのボール握り運動も少しずつ行えていた。治療の受け入れが徐々に出来ており、危機のプロセスにおける適応の段階に移行していると思われ、必要な資源を提供して成長を促していく関わりが必要であると考えた。透析室とも連携し、まずシャント管理に絞って指導を開始する事にした。

3. 入院後2週間~退院

患者はシャントへの恐怖心を抱いていたため、ま ず検温時に看護師と共にシャント音の確認を行うこ とにした。シャントに触れたりシャント音を聴取す ることに少しずつ慣れ、次第に恐怖心が無くなり自 らシャント音の確認ができるようになった。初回 シャント穿刺も問題なく行われ、「シャントが使え てほっとしました。最初は泣いてばっかりだった けど受け入れなきゃって気持ちになりました」との 発言あり。透析導入患者用のパンフレットを使用 して抜針後の止血方法などを含めたシャント管理に ついての指導を実施した。一度にたくさんの説明は せず、透析室の看護師と連携して指導内容を統一し ながら段階的に範囲を絞って指導を行った。入院 中、看護師が促してシャントの観察をしていること もあれば、自らシャント音を確認していることもあ り回数やタイミングはばらつきが見られた。退院後 もシャントの観察が継続できるように、患者と相談 して朝と夕食後にシャント音を確認する事にした。

さらに、具体的に退院後の生活がイメージできるよう、退院の前に他の透析患者との面談の場を設けた。面談後には「経験者の方と話す機会なんて無かったから家に帰る前に聞けてよかったです。」と発言あり。不安や悩みを共有し、実際の生活について話が聞けたことで更なる不安軽減に繋がった。

考察

フィンクの危機モデルは元々、外傷性脊髄損傷患者の障害受容という適応の過程をモデル化したものであり、その応用として身体的障害を負った患者自身のみを対象として活用できると言われている。 又、患者のみならず家族へ当てはめた報告もあるが、対象選択の留意点としては、身体的障害を有している患者でかつ危機がショック性である疾患を有する患者自身以外は、このモデルを活用する研究対象にならないとも言われている¹⁾。

フィンクは危機を「個々人が出来事に対して持っている通常の対処する能力が、その状況を処理するのには不十分であるとみなした混乱した状態」とみなし、危機となる出来事の後に続く適応までのプロセスを①「衝撃の段階」、②「防御的退行の段階」、③「承認の段階」、④「適応の段階」の4つの段階で表している。(表1)

衝撃の段階について小島2)は「自己イメージあ るいは自己の存在が脅かされた時に感じる心理的衝 撃であり、その結果強烈なパニックや不安、無力状 態を示す」と述べている。透析導入当初の患者は、 緊急透析に至ってしまった事で心理的ショックを受 けていたと予測され看護師へ多弁に不安を表出して いたことからパニック状態にあり、衝撃の段階で あったと考えられる。衝撃の段階で患者は混乱状態 にあり、思いやりのある態度で寄り添うことが必要 とされている。日々思いを傾聴したことで、患者が 看護師を自分の事を理解してくれる存在であると認 識でき、安心に繋がったのではないかと考える。ま た安心を感じられたことで自分自身と向き合うこ とができ防御的退行、承認の段階へと進むことが出 来たのではないかと考える。不安の軽減に伴い、治 療やシャント管理に対して前向きな姿勢が見られる ようになった。この時点で患者は適応の段階へ移行 していたと考える。適応の段階について黒田3)は 「建設的な方法で積極的に状況に対処する時期であ

り、現在の能力や資源で満足のいく経験が増え、次 第に不安が減少していく。また、現在の資源と将来 の可能性の観点から計画や思考がなされ、視野は将 来の方向へ広がる」と述べている。はじめはシャン トへの恐怖心が強く触れることも困難であったが、 繰り返し看護師と共に観察を行うことで自身での観 察が行えるようになっていった。またシャントへ関 心を向けることができるようになったことで、ボー ル握り運動も自主的に行えるようになった。それに よりシャントの発達が促進され初回穿刺も問題なく 施行された。今まで出来なかったことが出来るよう になることで自信となり不安は軽減し、現実と向き 合い受け入れる姿勢に繋がったと考える。治療の受 け入れが出来たことで、今後の生活に向けて学習す る準備を整えることが出来たと考える。適応の段階 にある患者に指導を行った事は、円滑な知識獲得に 繋がったと考えられる。指導においては口頭のみで は忘れてしまう可能性が考えられたためパンフレッ トを使用した。退院後もパンフレットで知識の復習 を行うことが出来るため知識の定着に繋がると考え た。また同一のパンフレットを用いて透析室と指導 内容を統一したことで、わかりやすく正確な指導が 行えて有効であった。シャント管理については観察 のタイミングや回数にはばらつきがあり、退院時に も確実な観察に至ってなかったことから早期から時間を固定し関わる必要があったと考える。退院後の 生活のイメージが出来ず不安を感じていた患者に とって透析患者との情報共有の場を設けたことは不 安の軽減に繋がったと考える。

結 語

緊急透析が導入され危機的状況に陥った患者に対して、フィンクの危機モデルのタイミングを捉えた 看護介入を行ったことにより、適応に至る有効なプロセスを得ることができた。

文 献

- 1) 田中周平: 救急看護におけるフィンクの危機モデルに関する研究―穿孔研究分析から抽出した臨床応用への留意点―,山口県立大学看護学部紀要 9:97,2005.
- 2) 小島操子: 看護における危機理論・危機介入 フィンク/コーン/アグィレラ/ムース/家族の危機モデルから学 ぶ(4),株式会社金芳堂. p50-57, 2018.
- 3) 黒田裕子: 理論を生かした看護ケア-知的な看護 介入を目指して, 照林社. p56-59, 1997.

(表1)

段階	患者の状況	看護介入						
①衝撃	ショックを受け、強い不安を感じ、混乱 した行動をとる。	あらゆる危険から患者を保護して安全を 守る。思いやりを持って患者に寄り添い、 静かに暖かく見守る。						
②防御的退行	現実逃避、怒りや非難、権威の誇示等で 自己を守る時期、不安は減少し、急性身 体症状も回復する。	患者に脅威の現実に目を向けさせるよう な積極的な働きかけではなく、ありのま まの患者を受け入れ、安全・安楽を保証 する。						
③承認	逃避しきれず現実に直面する時期。不安 や焦燥感が現れる。	現実の再認識と残存機能の活用ができる よう、安全を保証し励ましを続け、患者 自ら問題解決に取り組めるよう支援する。						
④適応	残存機能の発揮により自己のアイデン ティティを再確認し、価値観を構築する 時期。	新たな可能性への挑戦に向け、必要な資源を提供し、満足感が得られる経験や成果をフィードバックして、徐々に成長を促す。						

Intervention for shunt management in highly anxious patients undergoing emergency dialysis

-Using Fink's crisis model-

The patients developed uremia due to worsening chronic renal failure and were started on emergency dialysis.

As a result, they were unable to accept treatment and were very anxious. For this reason, we thought it was necessary to provide self-management guidance once they were able to accept treatment, so nursing intervention was carried out. We then reflected on our interactions with the patients using Fink's crisis model. Immediately after starting dialysis, the patients made many negative comments about the treatment and were in a stage of shock. Our daily supportive interactions reduced the patient's anxiety, leading to a sense of security and a transition to the adaptation stage. We believe that being able to start guidance on the initiation of dialysis at this stage enabled them to smoothly acquire knowledge.

当院における血縁者間同種骨髄移植

增成太郎 加耒倭文磨 石川立則 黒井大雅 岡本幸代 瀬崎伸夫 牧田雅典

要旨 当院における血縁者間同種骨髄移植について報告する。25歳から55歳の計6例(急性骨髄性白血病5例、重症再生不良性貧血1例)に移植を実施した。ドナーは全例がABO血液型一致血縁者で、5例はHLA適合同胞、1例はA座GVHD方向1抗原不一致の娘であった。移植前処置は4例で大量シクロホスファミドと全身放射線照射、2例で強度減弱前処置を用い、全身麻酔下にドナーから採取した骨髄液を移植した。HLA不適合移植、WT1mRNA高値、移植前治療抵抗性で感染症・心腎不全を合併した症例は不幸な転帰となったが、急性骨髄性白血病5例中3例(いずれも大量シクロホスファミドと全身放射線照射の前処置)は移植後10年以上無再発生存・根治した。血球貪食症候群による生着不全に対して単純幹細胞輸注(末梢血幹細胞)を実施した1例では肺慢性GVHDに対してステロイド投与を要したが、他の2例では慢性GVHDは軽微であった。

Key words: 造血幹細胞移植、同種骨髄移植、血縁者間移植、血縁ドナー、骨髄採取

緒言

広島県東部における造血幹細胞移植は、当院にお いて1996年に宮田らが立ち上げた悪性リンパ腫に 対する自家末梢血幹細胞移植 (auto peripheral blood stem cell transplantation.以下autoPBSCTと略す)を 嚆矢とする1)。2006年に本稿著者が赴任し、2007 年に県東部初の日本骨髄バンク移植調整医に就任、 骨髄バンクの非血縁ドナーの移植調整活動を開始し た。2009年より検査技師による自施設での末梢血幹 細胞の調整・保存に着手し、2010年には県東部初の 同種臓器移植となる血縁者間同種末梢血幹細胞移植 (以下alloPBSCTと略す) を始動した。2013年に 本稿に述べる血縁者間同種骨髄移植(bone marrow transplantation.以下BMTと略す)の実施に踏み出 し、2022年には造血幹細胞移植実施数累計200件を達 成し²⁾、移植後長期フォローアップ外来 (long term follow up:LTFU) を開設した。四半世紀以上にわ たり、当院は県東部唯一の造血幹細胞移植実施施設 として良質な移植医療体制の構築を目指してきた。

〒 720-0001 広島県福山市御幸町上岩成 148-13 中国中央病院 血液内科・感染症内科 本稿執筆時点では、当院は日本造血・免疫細胞療法学会の定める非血縁者間造血幹細胞移植を施行する診療科(いわゆる日本骨髄バンク及び日本臍帯血バンク認定診療科)ではないため、実施できる造血幹細胞移植の種類はautoPBSCTと血縁者移植(BMT及びPBSCT)に限られている。BMTは移植ドナーに全身麻酔下の骨髄採取手術を要することもあり、中国四国地方において、当院のように非血縁者間移植認定診療科でないにもかかわらずBMTに取り組んでいる施設は非常に少なく、成人血液内科ではわずか数施設に少数の血縁者間BMT実施例があるのみである²⁾。

BMTは、移植後の患者の生活の質を大きく低下させる合併症である慢性移植片対宿主病(graft versus host disease.以下GVHDと略す)が有意に少なく、後方視的解析ではあるが生存率も有意に優れるとの報告3)4)もある有望な移植法である。2013年の立ち上げ以後、当院にてBMTを実施した6症例について報告する。

症例 1:移植時40代女性

【診断】治療関連急性骨髄性白血病(acute myelogenous leukemia.以下AMLと略す) 【既往歴】

悪性リンパ腫(ろ胞性リンパ腫)にて化学療法 (R-CHOP療法) 歴あり【生活歴・家族歴】特記 事項なし【臨床経過】悪性リンパ腫化学療法後の 経過観察中に汎血球減少を指摘され、骨髄検査に て骨髄異形成症候群と診断。正常核型であった。 経過観察中にAMLに移行したことが確認されたた め、CAG療法 (cytarabine, aclarubicin, G-CSF) を実施し寛解を達成した。治療関連AMLは予後不 良であり⁵⁾、弟がHLA適合、ABO血液型一致と判 明したため、CAG療法2コース後の第一寛解期に BMTを実施した。大量シクロホスファミドと全身 放射線照射12Gy (high-dose cyclophosphamide and total-body irradiation.以下CY/TBIと略す)による移 植前処置、シクロスポリン+短期メソトレキセート 法 (cyclosporine plus short-term methotrexate.以下 CvA+sMTXと略す) によるGVHD予防法を用いて、 全身麻酔下に血縁ドナーから採取した3.63×108/kg の有核細胞数の骨髄液を輸注した。重篤な感染症や 急性GVHDは認めず、移植16日後に好中球生着、23 日後に血小板生着を達成した。慢性GVHDは軽度の ドライアイと唾液分泌低下のみで、移植後10年以上 無再発生存され、根治したものと考えられる。

症例2:移植時50代男性

【診断】 AML(FAB分類:芽球増加を伴う不応 性貧血) 【既往歴】特記事項なし【生活歴】喫煙10 本/日×30年、ビール500ml/日【家族歴】父:糖尿 病【臨床経過】汎血球減少を発症しAMLと診断。 複雑核型であった。ダウノルビシン+シタラビン 療法にて寛解を達成したが、地固め療法のCA療法 (cytarabine, aclarubicin) 実施後に早期再発。再度 のダウノルビシン+シタラビン療法にて再寛解を達 成した。第一寛解後の早期再発であり予後不良が予 想されたため⁵⁾、ミトキサントロン+シタラビン 療法による地固め療法後に、移植を実施する方針と したが、非血縁者間移植のコーディネートを実施す る時間的余裕がないと考えられたため、HLA: A座 GVHD方向1座不適合、ABO血液型一致の娘をド ナーとしてBMTを実施した。強度減弱前処置の中 でもAML制御効果を期待してフルダラビン+ブス ルファン+大量シタラビン+G-CSFによる前処置、 HLA不適合移植のため、よりGVHD制御効果が高い と考えられるタクロリムス+短期メソトレキセート

によるGVHD予防法を用いて、2.29×10⁸/kgの有核 細胞数の骨髄液を輸注した。しかし、HLA不適合 移植であったため移植後の血栓性微小血管症を発症 し、溶血性貧血、難治性血小板減少、肝腎障害を生 じ、ステロイド投与や各種の支持療法も奏効せず、 移植約8ヶ月後に不幸な転帰となった。

症例3:移植時20代男性

【診断】急性骨髄単球性白血病AML(M4 with eosinophilia.以下M4Eoと略す) 【既往歴・生活歴・家 族歴】特記事項なし【臨床経過】CBFβ遺伝子を有 するAML(M4Eo)と診断、ダウノルビシン+シタラ ビン療法2コースで寛解達成後、大量シタラビン療 法による地固め療法3コースを実施した。CBFβ遺 伝子を有するAML(M4Eo)は予後良好群であり第一 寛解期の移植適応はないとされる5) ため経過観察し ていたが、地固め療法終了7か月後に再発。MEC療 法 (mitoxantrone, etoposide, cytarabine) による再寛 解導入療法にて再寛解を達成した。姉がHLA適合、 ABO血液型一致と判明したため、MEC療法2コー ス後の第二寛解期に、BMTを実施した。CY/TBIの 前処置、CyA+sMTXのGVHD予防法を用いて、2.31 ×108/kgの有核細胞数の骨髄液を輸注した。しか し、BKウイルスによる難治性の出血性膀胱炎を生 じ、重篤な血尿・血塊による尿道閉塞により頻回・ 長期の膀胱還流・膀胱洗浄を要するようになり、ウ イルス感染症をきっかけに血球貪食症候群を発症さ れ生着不全に陥った。再移植のための前処置の化学 療法をおこなうこと自体が危険と判断し、BMTから 4ヶ月後に同一ドナーからのPBSCを移植前処置な しで単純幹細胞輸注したところ生着し、出血性膀胱 炎は消退した。その後、肺の慢性GVHDを発症され ステロイド吸入・内服を必要としたが、呼吸不全に 至ることはなく、移植後10年以上無再発生存され、 根治したものと考えられる。

症例 4:移植時40代男性

【診断】AML(M2)【既往歴】特記事項なし【生活歴】喫煙20本/日×24年【家族歴】父:心疾患【臨床経過】汎血球減少にてAML(M2)と診断。正常核型であった。ダウノルビシン+シタラビン療法にて寛解を達成した。標準リスク群のAMLは第一寛解期にHLA適合同胞からの同種移植が推奨されている5)

ため、ミトキサントロン+シタラビン療法による地固め療法後に、HLA適合、ABO血液型一致の妹よりBMTを実施した。CY/TBIの前処置、CyA+sMTXのGVHD予防法を用いて、3.07×10⁸/kgの有核細胞数の骨髄液を輸注した。重篤な合併症なく生着し、腸管grade 1、皮膚grade 2の急性GVHDに対してステロイド投与を要したものの、慢性GVHDは認めず、移植後10年以上無再発生存され、根治したものと考えられる。

症例5:移植時20代男性

【診断】AML(M5a) 【既往歴・生活歴・家族歴】特 記事項なし【臨床経過】汎血球減少にて発症し、 FLT3-ITD変異を有するAMLと診断。正常核型で あった。イダルビシン+シタラビンによる寛解導入 療法1コースにて寛解を達成した。FLT3-ITD 変異 を有する正常核型のAMLは予後不良群であり第一寛 解期での同種移植の適応と考えられるため6)、ミト キサントロン+シタラビン療法による地固め療法後 の第一寛解期に、HLA適合、ABO血液型一致の兄よ りBMTを実施した。CY/TBIの前処置、CyA+sMTX のGVHD予防法を用いて、2.77×108/kgの有核細胞 数の骨髄液を輸注した。しかし、移植後わずか2カ 月で早期再発し、この際のWT1mRNA値は240,000 コピー/μg RNAと極めて高値であったことから、移 植時のAML病勢が抑えられていなかった又は病勢が 極めて速いAMLと考えられた。救援化学療法後を実 施したがWT1mRNA高値のままで、再発から2カ月 後にHLA適合の妹よりalloPBSCTによる再移植を実 施したが、真菌感染などの合併症にて不幸な転帰と なった。

症例6:移植時40代女性

【診断】重症型再生不良性貧血【既往歴・生活歴・家族歴】特記事項なし【臨床経過】再生不良性貧血と診断し、抗胸腺細胞グロブリン(anti-thymocyte globulin.以下ATGと略す)とCyAによる免疫抑制療法を実施し8カ月が経過したが無効であった。免疫抑制療法無効の40歳以上の再生不良性貧血では、大量CYを用いた移植成績は不良であるためフルダラビン+減量CYを基本前処置薬とした強度減弱前処置によるHLA適合同胞からのBMTが推奨される7)。HLA適合、ABO血液型一致の弟より、フルダラビン+減

量CY+ATGによる強度減弱前処置とCyA+sMTXによるGVHD予防を用いて3.46×10⁸/kgの有核細胞数の骨髄液を輸注し、BMTを実施した。しかし、汎血球減少が遷延したリスクの高い状態で前処置を開始せざるをえず、前処置開始後より感染症と心腎不全を合併され、それらの増悪により移植後生着前の早期に不幸な転帰となった。

考察

造血幹細胞移植には大きく分けて自家移植と同種移植があり、移植細胞ソースに骨髄を用いるBMTと末梢血幹細胞を用いるPBSCTがある。非血縁者間移植では加えて臍帯血も移植ソースの選択肢となる。現代では自家骨髄移植が行われることは稀であり、自家移植のほとんどはPBSCTで行われる。

BMTとPBSCTの違いとして、BMTでは、①ドナーに全身麻酔下の手術を必要とすること、②術前にドナーの自己血貯血が必要な場合が多いこと、③原則として骨髄液の凍結保存ができず移植の日程調整が難しいこと、④ABO血液型不一致がある場合、血球除去や血漿除去といった骨髄液の処理が必要であること、⑤移植後の患者の造血回復がPBSCTと比較し有意に遅いこと、などデメリットも多い。当院では本稿執筆時点ではABO血液型不一致の骨髄液の処理ができないため、BMTはABO血液型一致ドナーから実施せざるをえない。

こうしたBMTのデメリットが本邦での血縁者間移植におけるPBSCTの増加の原因と考えられる。本邦の血縁者間移植の幹細胞ソースにおけるPBSCTの割合は、2005年には65.6%であったものが2023年には87.1%と増加の一途であり、BMTは減少傾向である²⁾。

しかし、BMTのメリットとして、ドナーに骨痛などの有害事象を生じさせうるG-CSFを投与する必要がないこと、後方視的解析ではあるが、本邦のAMLに対する骨髄破壊的前処置を用いたHLA適合同胞間移植において慢性GVHDが有意に少なく、生存率も有意に優れていたとの報告もあること^{3) 4)}があげられる。

当院でBMTを実施したAML 5 例中 3 例が10年以上無再発生存し根治したと考えられるが、いずれもCY/TBIの骨髄破壊的前処置を用いた移植であった。また、生着不全に対する単純幹細胞輸注を

PBSCTで実施した1例を除き、長期生存症例の慢性GVHDは軽微であった。移植後の患者の生活の質を大きく低下させる合併症である慢性GVHDが少なく生存率も優れているとすれば、骨髄破壊的前処置を用いたHLA適合血縁者間移植におけるBMTは有望な選択肢となりえる。

一方、当院のBMT症例のうち、HLA不適合移植、WT1mRNA高値で病勢が急速な状態での移植例、移植前治療抵抗性で感染症・臓器不全を合併した症例は不幸な転帰となっており、移植前に適応・病勢・臓器不全を慎重に検討・コントロールする必要があると考えられる。

なお、今後のHLA適合同種造血幹細胞移植に関す る展望として、新しいGVHD予防法である移植後シ クロホスファミド (post-transplant cyclophosphamide. 以下PTCyと略す)がある。PTCyは血縁者間HLA半 合致移植(以下ハプロ移植と略す)における有効性 が確立し、本邦でも急速に増加しているが、ハプロ 移植以外の移植においても再発率を上昇させること なくGVHDを抑制する効果が期待されている。本邦 でもHLA 適合または 1-2 アリル不適合ドナーから のPBSCTにおけるPTCyの臨床研究が実施されその 有効性が報告された8)。これはBMTとの比較試験 ではないものの、慢性GVHDが多いというPBSCTの デメリットがPTCvにより覆される可能性があり、 2025年2月には本邦でも臍帯血移植以外のすべての 造血幹細胞移植においてPTCyが使用可能となった ため、BMTの重要性は更に低下するかもしれない。 しかし、PTCvを用いたハプロBMTとハプロPBSCT の比較において、II-IV度の急性GVHDおよび慢性 GVHDがPBSCTで有意に増加し⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾、非再発死 亡率・無白血病生存期間・全生存率もPBSCTで有意 に不良であるとの報告もある10)。PTCy時代ともい える現在の同種造血幹細胞移植においても、BMTの 重要性の議論は終わっていない。

本稿の要旨は、第27回福山医学祭(福山)、第63 回日本血液学会中国四国地方会(岡山)、第16回中 国中央病院学術大会(福山)において発表した。

文 献

1) 片岡到ほか: 当院における末梢血幹細胞移 植 悪性リンパ腫症例を中心に. 福山医学8:6571.1998.

- 2) 日本造血細胞移植データセンター/日本造血・ 免疫細胞療法学:日本における造血細胞移植/ 細胞治療. 2023年度 全国調査報告書.p14. p81. 2024
- 3) 日本造血細胞移植データセンター/日本造血・免疫細胞療法学:日本における造血細胞移植/細胞治療. 2023年度 全国調査報告書別冊.p24.2024
- 4) Nagafuji K et al: Peripheral blood stem cell versus bone marrow transplantation from HLA-identical sibling donors in patients with leukemia: a propensity score-based comparison from the Japan Society for Hematopoietic Stem Cell Transplantation registry. Int J Hematol 91: 855-864, 2010
- 5) 日本造血細胞移植学会:造血細胞移植ガイドライン ―急性骨髄性白血病(成人)第1版,2009
- 6) 日本造血細胞移植学会:造血細胞移植ガイドライン ―急性骨髄性白血病(成人)第2版,2014
- 7) 日本造血細胞移植学会:造血細胞移植ガイドライン —再生不良性貧血(成人)第1版, 2010
- 8) Sugita J et al: Posttransplant cyclophosphamide in unrelated and related peripheral blood stem cell transplantation from HLA-matched and 1 allele mismatched donor. Bone Marrow Transplantation 59, 344-349. 2024
- 9) Bashey A et al: Mobilized Peripheral Blood Stem Cells Versus Unstimulated Bone Marrow As a Graft Source for T-Cell-Replete Haploidentical Donor Transplantation Using Post-Transplant Cyclophosphamide. J. Clin. Oncol. 35(26):3002-3009.2017
- 10) Nagler A et al: Bone marrow versus mobilized peripheral blood stem cell graft in T-cellreplete haploidentical transplantation in acute lymphoblastic leukemia. Leukemia. 34(10): 2766-2775.2020
- 11) Lacan C et al: Bone marrow graft versus peripheral blood graft in haploidentical hematopoietic stem cells transplantation: a retrospective analysis in 1344 patients of SFGM-TC registry. 17: 2.J Hematol Oncol. 2024

Allogeneic bone marrow transplantation from related donor at our hospital

We report on allogeneic bone marrow transplantation from related donor at our hospital. Transplants were performed in a total of six patients aged 25 to 55 years (5 cases of acute myelogenous leukemia and 1 case of severe aplastic anemia). All donors were ABO blood type matched blood relatives, including 5 HLA-matched siblings and 1 daughter with locus A GVHD direction 1 antigen mismatch. Pre-transplantation conditioning regimen consisted of high-dose cyclophosphamide and total-body irradiation in 4 patients, and reduced-intensity conditioning regimen in 2. Bone marrow fluid collected from donor under general anesthesia was transplanted. HLA-mismatched transplant, high WT1 mRNA levels or pretreatment-resistant patient complicated by infection and cardiorenal failure had unfavorable outcomes, while 3 of 5 acute myelogenous leukemia patients (all pretreated with high-dose cyclophosphamide and total-body irradiation) survived and were cured relapse-free for more than 10 years after transplantation. One patient who underwent second stem cell infusion (peripheral blood stem cells) for graft failure due to hemophagocytic syndrome required steroid administration for chronic pulmonary GVHD, while the other two patients had minor chronic GVHD.

第27回福山医学祭抄録

一般演題・口述発表の部

O-1. 便性(ブリストル)・便量スケール導入による排便アセスメントの変化について

いそだ病院 看護部 1)、外科 2)

世良 春奈 ¹⁾、岩川 和秀 ²⁾、山口 泉 ¹⁾、 有木眞由美 ¹⁾、馬屋原由紀 ¹⁾、磯田 健太 ²⁾

適切な排便ケアを行うためには医療者間で共通認識のもとにアセスメントを行う必要がある。これまで個人の主観に依存していた便性や便量の記載を統一するためブリストル便性スケールと当院独自の便量スケールを導入し、その効果を検証したので報告する。

排便に関わる全スタッフを対象に、導入1か月と 3年時に便性と便量スケールに関するアンケート調 査を行いその変化を評価した。

導入以前は排便の有無のみで便性・便量の記載は 約半分しかできていなかったが、導入後は全例で記 載するようになった。便性・便量の記載はいずれも 1か月時は約25%しか「表現伝達しやすくなった」 と回答なかったが、3年時は約80%となった。ま た3年時には約90%が「排便状態の把握や共有に 役立っている」と回答があった。

統一した便性・便量スケールを導入することにより医療者間で情報が共有でき、正確に排便状態を把握できるようになり、排便ケアの向上につながった。

O-2. 血糖管理ができていなかった患者への行動変 容の動機付けを促す指導

日本鋼管福山病院 看護部

平岡 美来

看護師が行う療養支援は患者を理解する事から始 まる。

50代のA氏は20代で糖尿病を発症し自分なりの療養生活を送ってきたが、血糖不良による壊疽での足趾切断や臀部潰瘍悪化で入院を繰り返していた。「なんで同じ事を繰り返してしまったんだろう」と創部を放置していた事を後悔し、糖尿病と向き合おうとしているA氏に対し、自己行動変容に向けて関わった。

疾患に対する知識不足や誤った解釈があったA

氏と対話を重ね、A 氏の行動を承認しながら理解度 に合わせ段階を踏んで指導を行った。

その結果、血糖値表から血糖値と創部の関係を理解し、低血糖時にはブドウ糖を摂取する事ができ、 退院後も血糖管理の維持ができていた。

自己変容行動を促す際に、不足している知識を伝えるだけが指導ではない。患者の全体像を捉え段階を踏み、継続できる指導方法を一緒に考え提供する事。できている事を承認、支援していく事で意欲向上や、維持に繋がったと考える。

O-3. 左乳房全切除術、腋窩リンパ節郭清を行った 患者へのリンパ浮腫予防に関する退院指導に ついて

日本鋼管福山病院 看護部 松岡 美帆

家庭・職場での役割を担う壮年期が好発年齢と重なる乳癌患者は、患者の周囲への影響や心理的負担が大きい。50代のA氏は独居で家族や周囲に頼ることなく今後も日常生活を送りたいという思いが強く、リンパ浮腫発症への不安表出があった。A氏の価値観を尊重し、合併症の予防行動をとりながら日常生活が送れるよう退院後の生活に重点を置いた指導を行った過程を報告する。

A氏の生活に沿ったパンフレットを作成し段階的に指導した。A氏は退院後も予防行動をとりながら生活でき外来受診時にもリンパ浮腫の症状はみられなかった。

今回、患者背景を考慮したうえで退院後を見据えた個別性のある指導を早期に行うことが必要であると学んだ。リンパ浮腫は長期的にセルフケアが必要だが、急性期の短い入院期間においても知識の提供を行うことには意味があり重要であると改めて認識した。今後は継続看護の視点と、患者だけでなく家族を含めた看護を実践していきたい。

O-4. 足関節骨折術後の創感染により退院が遅延した高齢患者と家族の関わり

~スキンケアを継続するための退院指導から 学んだこと~

日本鋼管福山病院 看護部 塚尾 真由

自宅で転倒し右足関節外果骨折で観血的整復固定 術を施行した80歳代男性。術後より歩行練習を行っ ていたが、創感染により退院が遅延した。

入院期間が延びた事で、家族に会えない寂しさや 孤独感を感じ、ストレスを抱いていた為、精神的な 関わりが必要と考えた。また、創が未完治で退院と なる為自宅でスキンケアを継続できるように退院指 導が必要であった。

精神的な関わりでは、処置時の痛み、食欲低下、 創治癒遅延の不安、退院延期のストレスの4つの状態に合わせて関わり、精神的苦痛と身体的苦痛を取り除けた。また、退院後もスキンケアが継続できる ようパンフレットを用いて指導し手技を獲得できた。

治療過程によりストレスや不安を抱き、精神的苦痛が生じる際には患者の身体的苦痛だけではなく精神的苦痛を和らげる為の寄り添った看護が必要と考える。また、自宅用パンフレットを用いた退院指導は、高齢のA氏に対して理解しやすい方法であったと考える。

O-5. 緩和ケア病棟における退院支援

~**退院支援チェックシートを活用して**~ 前原病院 緩和ケア内科 ¹⁾、内科 ²⁾、看護部 ³⁾ 川上あゆみ ³⁾、塩飽 良枝 ³⁾、古口 契児 ¹⁾、 前原 弘江 ¹⁾、前原 敬悟 ²⁾

「人生の最終段階における医療に関する意識調査」では、国民の半数以上が自宅で療養することを希望し、7割以上が最期は自宅で迎えたいと希望している。その為、緩和ケア病棟は、看取りをするだけの場所ではなく、在宅療養への移行を円滑に支援する役割も担う。退院していく予定の患者と家族には、退院後の生活に必要な支援を検討し、入院中から段階を踏んで多職種で退院支援を行う。

当院では、在宅療養へ移行する際、既存のチェックシートでは、退院支援の内容が不明瞭であり、多職種間で円滑に情報共有できない事例もあった。2022年、退院支援チェックシートの改訂と、患者・家族への指導パンフレットを作成し、9例に使用した。シートを活用して、患者の病状や状態により、退院後も継続する必要がある医療的な処置や管理が

可視化され、患者と家族への指導の進捗状況も明確 になった。多職種間での情報の共有が容易になり、 円滑な退院支援へ繋がったと考える。

O-6. 特定保健指導健診当日の初回面接分割実施に おける実績評価と今後の課題

中国労働衛生協会 福山本部 石田 紗綾、佐名木美智子、小林 祐子、 中本 由里、西口 茉李、川久保彩花、 大野裕佳梨、森近 俊彦、宮田 明

当協会は、福山市に本部を置き、尾道市、鳥取市、 津山市、米子市に検診所を配し、特定保健指導を実施している。令和3年度までの特定保健指導は、健 診後別日に初回面接を実施していたが、令和4年度 から受診者の利便性に配慮し、健診当日の特定保健 指導(分割実施)を本格的に実施した。その結果、 令和3年度の特定保健指導の実績が1,042人であっ たのに対し、令和4年度は1,996人と954人(83.8%) の増となった。

しかし、健診当日の特定保健指導は、当日に検査結果が揃わないため、初回面接を2回に分割(1回目は面談、2回目は電話支援)して実施しており、健診当日以降の連絡が出来ないケースも発生している。

健診当日の特定保健指導は多くの対象者に初回面 接ができ、メタボ改善につながるが、一方で、最後 まで支援できないケースがある。令和4年度の実績 を解析し、今後の課題を抽出・検討する。

O-7. 在宅管理が難しそうな筋萎縮性側索硬化症 (ALS) 患者の在宅移行支援を経験して

小畠病院 地域連携室 1)、診療部 2)

松本 美喜¹⁾、佐藤 千秋¹⁾、小畠敬太郎²⁾ 在宅管理が難しそうな ALS 患者の在宅移行支援 にあたり、意思決定支援の難しさや制度の複雑さを 経験したのでその振り返りを行う。

50 代男性、妻子と3人暮らし。在宅療養中に呼吸不全で当院へ入院、気管切開及び人工呼吸器装着状態となった。本人・妻は在宅療養の意向があったが、支援の課題に①医療依存度が高い②医療行為を行う家族の介護力不足が抽出された。更に制度上「気管切開部の喀痰吸引」を家族・看護師以外の介護職員等が行えるようになるには月日を要することが分かった。カンファレンス等を重ね、訪問看護師の特

別な打開策でなんとか退院となった。現在も各事業 所の支援やレスパイト入院を利用し在宅療養を継続 できている。

この度、医療ソーシャルワーカーとして常に制度 の知識を最新にしておく重要性や、病院側から在宅 側へ渡すバトンに不安と責任の重さを学んだ。今後 も本人・家族、在宅を支える各事業所のつなぎ役と して退院支援を行っていきたい。

O-8. 左小脳出血後に生じた前方突進様の歩行障害 が残存した症例への介入報告

福山記念病院 リハビリテーション科¹⁾、 県立広島大学 保健福祉学部²⁾

竹光 一登¹⁾、坂本 隆徳¹⁾、島谷 康司²⁾ 今回、左小脳出血後に歩行障害が残存した症例を 経験したため報告する。

左小脳出血後 20 病日で当院へ入棟した 70 歳代 男性。主に運動失調 (SARA:14 点) とバランス障害 (BBS:19 点) 及び約 10m で前方突進様の歩行障害 を呈していた。54 病日で1本杖歩行が可能となり、歩行速度は 0.29m/s、Timed Up and Go test(以下、TUG) は 21 秒であったが、約 30m で歩行に介助を要した。この頃よりバランス練習に加えて、1 日につき計8分(4分×2)の体重免荷式トレッドミルトレーニング(以下、BWSTT)を週に3回、約9週間実施した。

9 週の BWSTT 後には、SARA が 6.5 点、BBS が 48 点、T 字杖歩行速度が 0.67m/s、TUG が 15 秒に改善したが、約 80m で前方突進様の歩行障害が残存した。

前方突進様の歩行障害が残存した背景には、身体 機能に加えて高次脳機能障害が強く関与していた可 能性があり、一定の効果は得られたものの十分では なかった。

O-9. 記憶障害および注意機能障害を呈した患者の 更衣動作に着目し手順表と電子機器のリマイ ンダー機能を活用して介助量が軽減した1例 福山リハビリテーション病院

リハビリテーション部1)、看護部2)

堀 智成 ¹⁾、黒瀬 陽向 ¹⁾、吉原 妃南 ¹⁾、 岡本 淳志 ¹⁾、野田 浩美 ²⁾、矢形茉里奈 ²⁾ 今回、左視床前核の梗塞による高次脳機能障害を 呈した60代女性を担当した。本症例において更衣動作に着目し、手順表や電子機器のリマインダー機能を活用した結果、介助量が軽減したため報告する。

入院時に記憶障害、注意機能障害、保続、自発性 の低下を認めていた。更衣動作場面では、動作を促 すと拒否する場面や、脱衣をせずに着衣を行う場面 があった。また、上衣から下衣の順に更衣を行った 際、脱衣をせず着衣を行う場面が多かった。そこで、 動作の開始前に下衣から上衣の順で更衣を行う様、 手順表を本人へ提示した。また、リマインダー機能 を用いアラームが鳴るとともに更衣動作へ切り替え る学習を行なった。

最終的に、更衣の着脱時にエラーが減少し、更衣動作の誘導も行いやすくなった。本症例では、更衣時の行動パターンを把握し、手順を下衣から上衣の順に統一したことやリマインダー機能を用いて学習したことで、介助量が軽減したと考える。

O-10. 疼痛及び異常感覚に対し認知課題と随意運動 介助型電気刺激を併用したアプローチ

寺岡整形外科病院 リハビリテーション科 合田 典史

今回、腓骨神経麻痺患者の疼痛及び異常感覚がある患者に対して視覚と体性感覚情報の一致を意図した認知課題と、体性感覚入力と麻痺肢の随意運動促通の両方が相乗効果をもつIVES(随意運動介助型電気刺激)を用い疼痛及び異常感覚改善を認めたため報告する。尚、本症例は腓骨神経麻痺領域に沿った異常感覚「自分の足ではない感覚」NRS(疼痛評価スケール):6/10 位置感覚1/5であった。

患者は閉眼状態で健足を他動的に動かし位置を記憶。閉眼のまま患足を他動的に動かし健側と照合させる。その後 IVES(外部トリガーモード)を総腓骨神経・前脛骨筋部へ実施。

治療1週間:NRS5 位置感覚2/5 異常感覚「重いが楽、まだ自分の足でない感じ」

治療 2 週間: NRS3 位置感覚 4/5 異常感覚「痺れはあるが軽く楽になった」

IVESと認知課題を併用し足関節の深部感覚の認識が可能となり実際に得られる体性感覚情報との誤差修正が行えるようになり疼痛及び異常感覚軽減に至ったと考える。

O-11. くも膜下出血後の正常圧水頭症により間欠性 歩行障害を認めた症例に対し、体重免荷式ト レッドミルトレーニング(BWSTT)を行い、 改善を認めた症例

福山記念病院 リハビリテーション科¹⁾、 県立広島大学 保健福祉学部²⁾ 坂本 隆徳¹⁾、島谷 康司²⁾

特発性正常圧水頭症の軽症例では歩行距離の延長に伴い歩行障害が顕在化する間欠性歩行障害を示す症例が存在する。今回、くも膜下出血後に間欠性歩行障害を認めた症例に対して BWSTT を行い、改善を認めたため報告する。症例には書面にて同意を得た。

著明な運動麻痺のない70歳代女性。発症より158 病日で回復期病棟へ入棟。 Trail Making Test part B(以下:TMT-B)は354秒で注意障害を認め、Stop Walking When Talking(以下:SWWT)は陽性を示した。歩行速度は0.6m/sで支持物なく歩行可能であったが、6分間歩行は167mと低値で、歩行距離延長に伴い前方突進様の歩行障害が出現した。

BWSTT を 1 日 1 回、 1 回につき 10 分、 2 週間 実施した。

TMT-B は 91 秒、SWWT は陰性を示した。 6 分間歩行では前方突進様の歩行障害は消失し、歩行速度は 0.87m/s に改善した。

くも膜下出血後の間欠性歩行障害に対して BWSTT は改善に寄与する可能性が示唆された。

O-12. クロムメッキ液曝露にて両前足部への荷重困 難であったがオルソウェッジ靴を工夫することで歩行獲得に至った症例

福山リハビリテーション病院 リハビリテーション部

佐藤 芙美

クロムメッキ液曝露にて両足趾節関節以遠の骨萎縮を呈し両前足部の荷重禁止に加え、両足関節背屈制限も著明であり歩行獲得は難しいと考えられたがオルソウェッジ靴を加工することで歩行獲得に至ったため報告する。

入院時、両下腿熱傷術後潰瘍にて足関節背屈-10°/-30°、両下肢下垂にて疼痛出現(Numerical Rating Scale 以下 NRS9)。足関節底屈位に加え、前足部の荷重禁止のため立位困難であった。足関節

可動域練習に加えてオルソウェッジ靴を足関節底屈 位でも使用できるように装具士と検討を重ね加工 し、立位・歩行練習に移行した。

結果、足関節背屈 10°/-20°、疼痛は右 NRS0、 左 NRS2 まで改善を認め、オルソウェッジ靴にて 屋内独歩自立、屋外 T 字杖歩行自立となった。

本症例が立位・歩行を獲得するためには可動域拡大と疼痛軽減、オルソウェッジ靴の装着が必要と考えた。上記に対し、可動域練習だけでは難しく、オルソウェッジ靴を補高し立位練習を可能にできたことも歩行獲得に繋がった要因と考える。

O-13. 転倒リスク測定会参加者のリハビリ特化型短時間デイケアへの興味・関心

福山記念病院 通所リハビリテーション科¹⁾、 リハビリテーション科²⁾、

横浜国立大学大学院 環境情報研究院 ³⁾、 県立広島大学 保健福祉学部理学療法学コース ⁴⁾

猪原 千晶 ¹⁾、胃甲 章喜 ¹⁾、片山 千鶴 ¹⁾、 時田 由紀 ¹⁾、深川 由美 ¹⁾、奥森友里恵 ¹⁾、 藤井 孝枝 ¹⁾、鵜久森佑汰 ¹⁾、藤井 功 ¹⁾、 瀬戸口由梨 ²⁾、島 圭介 ³⁾、島谷 康司 ²⁾ ⁴⁾

今回、当院外来にて「転倒リスク測定会」を開催 し、参加者のリハビリ特化型短時間デイケアへの興 味・関心について調査した。

当院外来通院されている患者とその家族のうち測定希望された32名を対象に、立位機能評価装置ステイブルによる「立位年齢」の測定、健康相談、当院デイケア紹介などを実施し、測定会の満足度や運動意欲などのアンケート調査を行った。

測定会について対象者の94%が「満足」と回答した。また、「今後運動したいか」の問いに対して対象者の100%が「思う」と回答した。さらに、介護保険認定者の67%が当院デイケアのリハビリテーション内容に興味を示した。

参加者の心身機能向上へのニーズは高く、活動量の向上や行動変容を図り自立支援を促す役割のあるリハビリ特化型短時間デイケアは今後更に重要になる。地域住民の複雑化・複合化した支援ニーズに対応する質の高い、暮楽思力(くらしりょく)を高めるサービスを提供したい。

O-14. 訪問リハビリ効果判定基準の見直しと短期集 中加算算定への取り組みについて

島谷病院 リハビリテーション科 宮崎 勇太

訪問リハビリテーション料の加算である短期集中加算は、基本動作等に改善が見込める利用者に限り算定されるものであり、効果判定基準をもとに改善の見込みを示し算定していく必要がある。当院の訪問リハビリテーションでは利用者の効果判定基準を行う場合決まった書式はなく短期集中加算を算定すること、より質の高いリハビリテーションを行うために効果判定基準の見直しを行った。対象は要介護1の1症例であり、3か月期間とし毎月評価指標である「E-SAS (Elderly Status Assessment Set)」「効果の見える生活期リハビリテーション評価表」を用いて在宅での問題点の抽出、プログラム立案、治療効果判定を行い、短期集中加算の継続算定の可否及び治療効果についてもモニタリングを行った。

結果、短期集中加算は継続的に算定できており、 両評価ともに毎月の治療効果判定も3割程度の改善 傾向を示した。今回使用した2つの評価表について 特異性や使用感について考察を含めここに報告する こととした。

O-15. Super PATH 法を用いた THA 患者の歩行獲 得時期について

脳神経センター大田記念病院

急性期リハビリテーション課¹⁾、整形外科²⁾ 藤原 陵次¹⁾、宮宗 孝敏¹⁾、村上 祐介¹⁾、 神原 淳²⁾

当院整形外科における人工股関節置換術(以下THA)は、Super PATH法を用いた術式が選択される。Super PATH法は、直接的な筋に対する侵襲が少なく、機能予後が良好であることが知られている。当院クリニカルパスでは3~4週間の入院期間の設定の中で、多くの症例で実用的な歩行獲得に至っている。しかし、実際に獲得される歩行の自立度および自立時期については検討がなされていない。そこで我々は、当院で施行されたSuper PATH法を用いたTHA 術後患者の歩行獲得時期について検討したため、報告する。

2022 年 4 月 ~ 2023 年 3 月 の 1 年間に Super PATH 法を用いた THA 術後の患者 15 名を対象に、

歩行獲得時期を検討した。

対象患者の 93.3% (14/15 名) において、術後 3 週間以内で、病前と同程度もしくはそれ以上の歩行 レベル獲得に至った。

Super PATH 法を用いた THA 術後の患者は、病前レベル以上の歩行が術後早期に獲得でき、入院期間の短縮化が可能となることが示唆された。

O-16. 新たな人道支援としての遠隔リハビリの可能性 福山市民病院 リハビリテーション科 俵 紘志

COVID-19 パンデミックにより、遠隔リハビリの利用が世界中で拡大した。我が国でも、対面リハビリを補完・代替する手段として遠隔リハビリが導入されつつあるが、世界には、リハビリが必要であっても社会情勢の問題で提供されていない地域がある。今回、紛争地に対して遠隔リハビリを行った経験を共有する。

症例は、X 年 12 月に被弾して脊髄損傷 (Th5,ASIA Impairment Scale: B) を呈した、アフガニスタン在住の20歳代男性。X+1年10月から、月1回の頻度で遠隔リハビリを開始し、運動療法のモニタリングやセルフケア・身体活動のアドバイス、心身状態の評価・フォローアップを行った。介入効果を評価するため、遠隔リハビリ開始時と X+2年9月時点の FIM、LSA、CES-D、PHCS、GSCS、RSES、EQ-5D-5L、EQ-VAS を比較した。

すべての評価項目で良好な傾向がみられ、身体活動機会や離床機会の増加、精神面や ADL、QOL の改善が示唆された。

遠隔リハビリは、新たな人道支援のアプローチとなり得る可能性があるが、課題も多い。

O-17. split belt 機能付き体重免荷式トレッドミルトレーニング機器の実際

福山記念病院 リハビリテーション科¹⁾、 県立広島大学 保健福祉学部²⁾

久保田素生¹⁾、坂本 隆徳¹⁾、島谷 康司²⁾ 脳卒中片麻痺患者に対する KAFO(knee-anklefoot-orthosis) 装着下でのトレッドミル歩行は、周 期的な下肢筋活動を誘発できる。当院では、約1年前にダブルベルト内蔵トレッドミルを導入し、レール走行式免荷リフトと組み合わせ、体重免荷式ト

レッドミルトレーニング(以下:BWSTT)を行なっている。本報告では実際の適応疾患や使用目的等を紹介する。

当院のBWSTT適応は、脳卒中片麻痺症例、小脳性運動失調症例、人工股関節全置換術後症例等である。多くが非対称性の改善、歩行量増大を目的とし、荷重時痛軽減や部分荷重を目的とする場合もある。

重度片麻痺の場合、複数名の介助で歩行練習が必要となることもあるが、ハーネスの装着により転倒危険性が軽減され、患者と療法士の双方が安心して歩行練習を行うことができる事から、BWSTT 導入後は1名介助でも可能となった。

今後は、BWSTT 導入が患者の機能改善にどの ように寄与しているのか、検証を進めたい。

O-18. 短期集中予防通所サービス利用者の「立位機能の見える化」によって生じた生活場面の変化の一考察

ビーブルかんなベ リハビリテーション科 ¹⁾、 県立広島大学 保健福祉学部理学療法学コース ²⁾、福山記念病院 リハビリテーション部 ³⁾、 横浜国立大学大学院 環境情報研究院 ⁴⁾

高橋 玄 1)、島谷 康司 2) 3)、小野 達哉 1)、 梶村 智哉 1)、島 圭介 4)

当施設では2022年4月より短期集中予防通所サービスを実施している。生活不活発を伴う利用者の生活機能維持を図るためには、運動習慣の定着が重要である。今回、新たに立位機能検査装置ステイブルを導入して「立位機能を見える化」し、当事者の生活場面に与える影響について考察した。

対象者は高齢男性2名であった。ステイブルを用いた立位機能検査を実施し、算出された立位年齢と 実年齢との比較を行わせることで、身体機能や生活 場面にどのような変化が生じたかを評価した。

身体機能は維持・改善傾向にあり、「運動せんといけんな」、「頑張らんといけん」と自主練習の維持・増加、外出頻度増加といった生活場面での変化も認められた

利用者自身が理解しやすい「立位年齢」を提示することで、自身の身体機能を客観視でき、モチベーション向上によって、運動頻度の増加、外出機会の増加といった生活場面の変化が生じたものと考える。

O-19. 理学療法士・作業療法士学校養成施設指定規 則改正に伴う卒後教育の変化について

水永リハビリテーション病院 リハビリテーション部 ¹⁾、岡山医療専門職大学 健康科学 部 作業療法学科 ²⁾

古澤 潤-1)、宮内後栄次1)、安倍 昂司1)、中田 昌希1)、渡部 悠司2)

理学療法士(以下 PT)・作業療法士(以下 OT) 学校養成施設指定規則が 2017 年度に改正され、養 成教育課程での臨床実習のあり方などが変更され た。この改正で臨床実習は症例基盤型実習から診療 参加型実習に形態が変わり、臨床実習指導者となる ための新たな要件も追加された。

症例基盤型実習は卒後に即戦力となるPT・OTの育成を目的の一つにし、学生が担当する症例を決め評価から治療に至る経過を経験させた。一方、診療参加型実習は臨床実習指導者が担当する症例の臨床の一場面を見学し模倣することで、症例基盤型実習に比べ学生はより多くの臨床経験を積むことができる。しかし、学生は症例の一連の経過を担当する経験に乏しくなり、従来の卒後教育では学校教育とのつながりが不十分なものとなるため、卒後教育にも変更が必要となった。

当院では卒業教育を変更し、診療参加型実習から 連続性を持たせたことで、学校教育から臨床へス ムーズに移行することができた。

O-20. 脳卒中地域連携パスのよりよい運用を目指し た備後脳卒中ネットワークでの取り組み

脳神経センター大田記念病院 回復期リハビ リテーション課 $^{1)}$ 、リハビリテーション科 $^{2)}$ 、理事長 $^{3)}$ 、福山記念病院 リハビリテーション部 $^{4)}$ 、地域連携室 $^{5)}$ 、理事長 $^{6)}$

柳生 英子¹⁾、松浦 大輔²⁾、瀬戸口由梨⁴⁾、 大土井文恵⁵⁾、藤井 功⁶⁾、大田 泰正³⁾

NPO 法人備後脳卒中ネットワークでは、2021 年に 10 病院が参加し『備後脳卒中地域連携を考える会』を発足。これまでの取り組みを踏まえ今後の展望について報告する。

3カ月に1度幹事会を行い、脳卒中地域連携パス (以下連携パス)の運用や、地域連携における課題 を抽出した。急性期・回復期・生活期のリレー形式 での症例発表を行い、事例を通じて備後地域全体で の連携のあり方について議論した。

会の活動の中で、職種間での専門性の壁や、急性期・回復期と生活期の情報交換に課題があることが明らかになった。連携パスの運用の見直しや、NPO法人のホームページを利用した情報発信を、参加病院で協力して実施した。

連携パスというツールの活用を通して、地域的なコンセンサスを得ながら、よりよい情報交換について議論を進めることができた。脳卒中患者が地域社会において安心して生活できることを目標に、今後も活発な意見交換や、より実践的な活動を継続したい。

O-21. RPA を活用した働き方改革への取り組み

脳神経センター大田記念病院 医療事務課¹⁾、 医局秘書課²⁾

柳川みゆき $^{1)}$ 、藤岡 愛華 $^{1)}$ 、松岡 弘晃 $^{1)}$ 、 黒石 有里 $^{2)}$

当院では 2023 年 1 月より RPA (ロボット・プロセス・オートメイション: ソフトウェアロボットによる業務自動化)のテスト運用を行い、3 月より本格的な導入を開始した。今回は RPA の本格導入に向けた取り組みと、導入後の効果、今後の課題を報告する。

RPAの本格導入へ向け、まずは身近な作業からロボットに置き換えてみるという「草の根活動」を実施した。また、より早く部署内にRPAを広めるため、一つの作業を全て自動化するのではなく、一部の作業工程のみを自動化する方針でロボット作成に取り組んだ。

導入から3ヵ月で月16時間相当の作業を自動化することに成功した。また、ロボット作成時に作業工程を洗い出す必要があるため、マニュアルの整備や処理方法の見直しに繋がった。

RPAの導入により業務の自動化が進み、部署として働き方改革への一歩を踏み出せた。しかし自動化への取り組みはまだスタッフ間に温度差があるため、全てのスタッフがロボット作成を主体的に取り組めるような環境を構築することが今後の課題と思われる。

O-22. 中小病院での診療支援室立ち上げから今を振 り返る

~医師事務作業補助者定着に結びついた体制 づくり~

小畠病院 診療支援室 1)、診療部 2)

高田 綾子¹⁾、佐藤 千秋¹⁾、原 睦展²⁾ 2015年の電子カルテ導入を機に医師事務作業補助者(以下 MA)を配置した。当初は医事課配属だったが、徐々に業務拡大を行い 2019年6月診療支援室の立ち上げに至った。今年5年目を迎えるにあたって、これまでの振り返りを行う。

当室立ち上げ後、まずはキャリア・ラダーや課業一覧の作成を行い、教育指導体制の確立を目指した。さらに、MAによる代行入力のあり方の整理にも取り組んだ。これによりMA業務が安定するようになり、現在まで離職者はいない。結果、2022年度診療報酬改定で「3年以上の勤務経験者5割以上配置」が要件となった医師事務作業補助体制加算1で20対1補助体制加算を現在も維持できている。

こういった体制を確立したことは、MA個々が成長に向かう動機付けとなり、またスタッフの心理的安全性の向上にもつながったと考え、人材定着にも結び付いたと考える。

MA定着の体制ができた今、今後は一病院事務職 として、他の医療事務系の技能の修得などを考えて いきたい。

O-23. がんゲノム医療連携病院としての活動と実績 の報告

福山医療センター 乳腺・内分泌外科¹⁾、 消化器外科²⁾、治験管理室³⁾、臨床検査科⁴⁾、 薬剤部⁵⁾、看護部⁶⁾、企画課⁷⁾

三好 和也¹⁾、宮宗 秀明²⁾、髙橋 寛敏¹⁾、 山路 直美³⁾、中野 佳代³⁾、福田由美子⁴⁾、 中山やちよ⁵⁾、藤原 礼子⁶⁾、峯松 佑典⁷⁾、 虫明 里奈⁷⁾、井上 志織⁷⁾、藤田 聖典⁷⁾

当院は、2021年4月に、岡山大学病院のがんゲノム医療連携病院として指定を受けた。2021年7月から2023年6月までに、41症例に、がん遺伝子パネル検査を出検した。出検がん種は、乳がん13例、卵巣・子宮がん11例、肝内胆管がん8例、膵がん2例、大腸がん2例、泌尿器がん2例、肉腫3例。出検科は、乳腺外科13例、婦人科11例、肝胆膵外科4例、消化器内科4例、消化器外科3例、泌尿器科3例、肝臓内科2例、耳鼻科1例。

エキスパートパネルで提示された治療薬を投与できたのは 5 例(12%)で、内容は、保険診療薬 4 例、phase II 治験薬 1 例。一方、期待できる治療薬が提示されても患者の状態で投与できなかったのが 2 例(病状悪化 1 例、転院 1 例)あり、出検のタイミングが問題であった。がん遺伝子パネル検査の意義があった、FGFR2-CTNNA3 融合遺伝子を認めた胆管細胞がんと CDK4 遺伝子増幅を認めた乳がんの 2 症例について、臨床経過を報告する。

O-24. 当院での母体血胎児染色体検査(NIPT)の 現状

福山市民病院 産婦人科 早田 桂、組橋 佳純、兼森 美帆、 髙原 悦子、青江 尚志

母体血胎児染色体検査 (NIPT) は、母体血中の 胎児由来 DNA を利用した非確定的検査であり、対 象疾患は染色体数的異常(21.18.および13トリ ソミー) に限定される。陽性的中率は高いが、例え ば 35 歳で約 80% であるように確定検査ではないた め、陽性例の確定診断のためには羊水検査による侵 襲的検査が必要になる。陰性的中率は対象疾患に関 わらず99.9%と極めて高く、検査陰性例は侵襲的 検査を回避できると考えられるが、必ずしも異常の ない妊娠を保証するものではない。当院では2023 年4月より出生前遺伝カウンセリング外来を開設 し、4ヶ月間に32件がNIPT 受検し、陰性31件 (97%)、陽性1件(3.1%)だが、陽性1件は羊水検 査を施行せず妊娠継続中である。受検者の多くは高 年妊婦(75%)だが、なかには年齢に関わらず不 安が解消されないための受検者(22%)も見受けら れ、NIPT へ誘導にならない形で適切な遺伝カウン セリングのもとで選択される必要がある。

O-25. 腹腔鏡下鼠径ヘルニア修復術時にメッケル憩 室を認めた2例

福山医療センター 小児外科 阪 龍太、井深 奏司、塚田 遼、 岩崎 駿

腹腔鏡下鼠径ヘルニア修復術は小児でも一般的となっており LPEC 法が広く行われている。当科では 2020 年 10 月より外鼠径ヘルニア・陰嚢 /Nuck 管水腫の全例を適応としており年 60-80 件程度施

行している。このうち2例にメッケル憩室を認め切除を行ったため報告する。

症例1は幼児(男児)。右精索水腫を認め紹介となった。消化器症状は認めず。気腹を行うと臍から細い索状物が小腸に向けて伸びていた。LPEC法施行後、小開腹下に小腸を検索、メッケル憩室を認め楔状切除を行った。症例2は乳児(男児)。右外鼠径ヘルニアを認め紹介となった。消化器症状は認めず。気腹を行うと臍から索状物、それに続くメッケル憩室を認めた。回腸付着部が太く小腸部分切除を行った。

メッケル憩室は捻転・内へルニア・出血を引き起こすため切除が推奨される。腹腔鏡手術時には他疾 患の併存がないか注意を払う必要がある。

O-26. ストーマ専門外来を開設して3年が経過しました

いそだ病院 外科 1)、看護部 2)

岩川 和秀¹⁾、佐藤加代子²⁾、大隈 祐香²⁾、 馬屋原由紀²⁾、有木眞由美²⁾、磯田 健太¹⁾

ストーマ造設者及び家族は、退院後や定期通院が 終了した後も様々な問題や不安を抱えている。一方 医療者側は専門性やマンパワーの問題もあり急性期 病院だけでは対応しきれず、相談窓口は極めて限ら れているのが現状である。今回我々は、新たにストー マ専門外来を開設し3年が経過したのでその成果に ついて報告する。我々のストーマ外来コンセプトは ストーマ造設した施設に関係なく、なんでも気軽に 相談できる窓口となり、地域に密着しながら「ストー マ難民」の下支えをしていくことである。3年間で 計 48 名のストーマ造設者が受診し、のべ 194 回の ストーマ外来診察を行った。ストーマ造設施設も 10 施設にわたっており、紹介元施設も8施設であっ た。受診動機は皮膚トラブル、装具交換方法の指導、 晩期合併症の対応、入所施設スタッフからの相談な どさまざまであった。今後は訪問看護ステーション や地域患者会と密接に連携をとっていくことを計画 している。

O-27. 妊娠 30 週で腹腔鏡下胆嚢摘出術を施行した 有症状胆嚢結石症

福山医療センター 外科 ¹⁾、産婦人科 ²⁾ 北田 浩二 ¹⁾、藤田 志保 ²⁾、柚木 宏介 ¹⁾、

 櫻井
 湧哉 1)、岡林
 弘樹 1)、内海
 方嗣 1)、

 濱野
 亮輔 1)、徳永
 尚之 1)、宮宗
 秀明 1)、

 常光
 洋輔 1)、大塚
 眞哉 1)、山本
 暖 2)、

 稲垣
 優 1)

30 代前半初産婦。妊娠 28 週から強い心窩部痛を 自覚するようになり、妊娠 30 週 0 日、当院へ紹介 となった。

WBC 10900、CRP 0.05の上昇は軽微だった。超音波検査上、胆嚢は委縮していたが壁は肥厚し多数の結石を認め、Murphy's sign 陽性であった。MRIでも胆嚢壁肥厚と濃縮胆汁を指摘されたが、浮腫状の変化は明らかではなかった。上部消化管内視鏡検査で心窩部痛の原因となる病変を認めず、軽症急性胆嚢炎と診断した。

短期間に強い症状を繰り返しており、出産予定までの2か月間待機するのは困難と判断し、同日、腹腔鏡下胆嚢摘出術を施行した。超音波検査で子宮底の位置を確認し、心窩部 open 法で 12mm ポートを留置した後、気腹し5 mm ポートを3 か所追加して胆嚢を切除した。病理組織学的には好中球の集簇はないものの、厚い線維化と粘膜面の出血を認め慢性胆嚢炎と診断された。

術後経過は良好で、第5病日に退院となった。以後、腹部症状は軽快し、妊娠41週4日、健常な女児を経膣分娩した。

O-28. 腹壁瘢痕ヘルニアに対する機能的腹壁再建 福山市民病院 外科

 黒瀬
 洋平、石川
 亘、三浦奈緒子、

 藤井
 広、早間
 洋平、桑田
 起雄、

 近藤
 祐平、香川
 哲也、岩崎
 寿光、

門田 一晃、日置 勝義、淺海 信也、

貞森 裕、高倉 範尚

【はじめに】近年ヘルニアの術式はメッシュの敷設部位が腹壁内へと移行しつつあり、Rives-stoppa + Transversus abdominis muscle release 法 (RS-TAR法)などの白線を再建しつつ腹直筋背側へメッシュを敷設する術式が主流となりつつある。

【方法】当院でのRS-TAR法の治療成績および CT 画像での各腹壁筋群の術前後の面積比を比較した。

【成績】2019年から2022年までに7例のRS+ TAR 法を付加した。現在までに再発を認めず。 【症例】40代女性 BMI47 8×10 cm のヘルニ ア門を認め RS + TAR 法を施行。両側腹横筋を切離することで白線の再建が可能であった。術後 19 か月目の腹壁筋群面積比は約 1.3 倍と筋の増大を認めた。

【考察】白線再建により筋群が元の解剖学的位置 に修復され、筋の使用が促されるため委縮が改善し た可能性がある。

【結語】白線再建は機能的な再建に重要である。

O-29. 直腸脱に対する Suture rectopexy の工夫と 治療成績

福山市民病院 外科

藤井 広、黒瀬 洋平

当院では直腸脱に対し、腹腔鏡下に直腸を剥離し仙骨前面に直腸前壁を固定する Suture rectopexy (以下 SR)を行っており、手技の工夫と治療成績を提示する。

基本的に全例に SR を施行。術後は排便コントロールの重要性を指導している。亀背合併症例は鉗子操作や骨盤内視野確保が困難な症例が多く、本人参加の術前体位シミュレーションを行っている。

2016 年から 2022 年まで 46 症例に対し SR を施行した。男性 8 例、女性が 38 例。平均年齢 70 歳 (18-87)。Performance status ≥ 3 が 8 例。 高度亀背症例を 3 例認めた。 平均手術時間は 137 分 (71-270)、平均出血量は 10ml(0-100)。術後在院日数中央値は 7 日 (4-28)。 1 例に高度癒着で開腹移行を要した。 Clavien-dindo 分類 Grade3 以上の合併症は 1 例で、術後の腸間膜出血を認め再手術を要した。 現在までに 2 例の再発を認めいずれも不完全直腸脱だった。

SRの安全な実施には直腸癌に対する腹腔鏡手術 および特有の体型変化を伴う高齢者に対する腹腔鏡 手術の経験が重要である。

O-30. 肺癌脳転移患者のガンマナイフ治療後の延び る生存期間

~ nivolumab 適応前後の評価~ 脳神経センター大田記念病院 脳神経外科

肺癌の薬物治療は進歩している。nivolumab 薬価 収載前後でのガンマナイフ治療(GKS)後の肺癌

中崎 清之

脳転移患者の生存期間 (OS) の変化に着目する。

2009-2020 年に当院にて、肺癌脳転移の 451 例に対し GKS を実施した。薬物治療以外の初回治療を単回の GKS のみで全病変治療し得た 386 例が対象。非小細胞肺癌に対し nivolumab の薬価収載の 2015年前後(2015年以前 194 例、2016年以後 192 例)で分け、OS を評価した。

全例で年齢中央値 71 歳、男女比 69.9: 30.1、腺癌が 64.5%、頭蓋外転移無しが 15.8%、Karnofsky performance status 中央値が 90%。脳転移個数 3 個、総体積 1.6ml(中央値)であった。OS 中央値は 10.9 ヵ月。74.6%で薬物治療実施、47.9%が脳病変への薬物外の追加治療を要した。OS 中央値は 2016 年以後が 12.6 ヵ月対 9.4 ヵ月で有意に長かった(P値 0.008)。頭蓋外転移無しに限定すると、2016 年群の 5 年生存率は 47.6% であった。

nivolumab 認可後に GKS 後の OS が明らかに延長した。肺癌脳転移の長期生存が増え、線量選択性の高い GKS の役割が高まったと考える。

O-31. 中国中央病院における骨髄移植について 中国中央病院 血液内科 感染症内科 増成 太郎

当院は、1996年に自家末梢血幹細胞移植(auto PBSCT)を、2010年に同種末梢血幹細胞移植(allo PBSCT)を立ち上げ、2022年までに総計 200 例以上の造血幹細胞移植を実施した広島県東部唯一の移植施設である。そのうち 2013年から開始した血縁者間同種骨髄移植(BMT)について報告する。

計6例(急性骨髄性白血病5例、再生不良性貧血1例)に対してBMTを実施し、うち3例は9年以上無再発生存・根治し、二次生着不全に対する末梢血幹細胞輸注を要した1例を除き、2例は免疫抑制剤を中止可能で、慢性GVHD(移植片対宿主病)も軽微であった。

BMT は、健常ドナーに全身麻酔手術の負担を強いるものの、allo PBSCT と比較し慢性 GVHD が少なく、生存率も優れるとの報告もある。移植前の疾患の状態を慎重にコントロールすれば、骨髄破壊的前処置の HLA 一致血縁者間移植において BMT は有益な治療法である。

O-32. アクセス閉塞に対する治療戦略

~適切な治療、血栓閉塞させない取り組み~山陽病院外科 1)山陽腎クリニック 2)毛利教生 1)、橋本 慎二 1)、渡辺 浩志 1)、池辺宗三人 2)

アクセスの閉塞は透析患者さんの生命を揺るがす 問題と言える。ウロキナーゼによる血栓溶解が不可 能になった今、今までとは異なる治療方針を検討す る必要があると考えた。

2020-2023 の新施設での治療成績

2022 年度 総数 510 件 内シャント閉塞 101 件 2021 年度 総数 482 件 内シャント閉塞 121 件 2020 年度 総数 460 件 内シャント閉塞 98 件 治療成績では、再建+カテーテル留置となった症例が2022 年:29/101 例 2021 年:28/121 例 2020 年:21 例であった。

これらは、現行のアクセスの温存が困難となった 症例であり、さらに、再建も困難で、カテーテル留 置となった症例は、2022 年:6/101 例 2021 年: 9/121 例 2020 年:4/98 例であった。

血栓閉塞治療のスキルアップはもちろん必要だが、まず、血栓閉塞を未然に防ぐ取り組みをする必要があると考えた。クリニックへの往診、紹介患者様定期的フォローの推進を勧める。紹介医の先生とも連携して、患者様の閉塞が1例でも減らせればと考える。

O-33. 福山医療センター小児科における「こども出 前講座」の取り組み

福山医療センター 小児科 ¹⁾、同看護部 ²⁾、 同薬剤部 ³⁾、同事務部 ⁴⁾

藤原 倫昌 ¹⁾、木村 崇 ¹⁾、大平 純也 ¹⁾、 坂根 朋子 ¹⁾、小川 朋美 ²⁾、奥野小百合 ²⁾、 正木 幸 ²⁾、土肥 政美 ²⁾、辻 和美 ³⁾、 奥﨑 湖波 ⁴⁾、木梨 貴博 ⁴⁾、河野 薫 ²⁾、 荒木 徹 ¹⁾

2022年4月より当院の小児科医師・看護師・薬剤師が、保育・学校施設に直接出向いて、窒息・熱性痙攣・アナフィラキシー等に対する情報提供や適切なケアの助言を行う「こども出前講座」を開設した。出前講座開始後1年間の活動を振り返り、現状について報告する。

2022年4月から2023年3月までの1年間にこ

ども出前講座に参加した施設の職員を対象に、講座 終了後に無記名式アンケート調査を実施した。

合計 33 施設、延べ 45 回(現地開催 31 回・Web14 回)こども出前講座を実施した。参加者は延べ 596 名であった。参加者の 90%以上が「内容に満足」、「講義がわかりやすい」、「また利用したい」、「質問しやすい」と回答した。

こども出前講座による地域貢献活動は、多くの参加者から肯定的な評価を得た。今後もこどもの命を守るために地域と医療の架け橋となれるよう、更に活動の幅を広げていきたい。

O-34. 経皮的左心耳閉鎖術の初期成績

福山循環器病院 生理検査課 ¹⁾、循環器内科 ²⁾ 下垣内花奈 ¹⁾、山戸 智美 ¹⁾、佐藤 克政 ²⁾、 三浦 勝也 ²⁾、平松 茂樹 ²⁾

日本における心原性脳梗塞のうち約90%は左心耳血栓が原因である。そのため心房細動に対して抗凝固療法を行うが、服薬中に脳梗塞を起こす患者や、出血リスクが高い患者に対して、WATCHMAN®というデバイスによる経皮的左心耳閉鎖術(LAAC)を当院でも開始した。

2021 年 8 月 \sim 2023 年 6 月ま \circ の間 当 院 \circ LAAC を施行した 12 例を検討。使用したデバイスは WATCHMAN \circ が 2 例、WATCHMAN \circ FLX \circ が 10 例である。

すべての手技中に心タンポナーデやデバイス塞栓などの重篤な合併症は発生していない。12 例中1 例は左心耳の形態が合わず留置断念しているが、それ以外の症例では適切にデバイス留置された。なお、WATCHMAN®を検討した患者の中に左心耳が大きいためデバイスサイズが適さない症例が3 例あった。

術後外来で経過観察しているが脳梗塞が起こった 症例はなく、LAACの初期成績は良好であると推測 する。

O-35. 福山市における日本紅斑熱の検討

福山市保健所保健予防課

城本 佳菜、沖邉 圭子、井上 梢、藤井 弘恵、鯖江 佳子、森 みのり、 新山 美沙、濱口 彩花、田村 玲奈、 山岡 恭子、金高 利枝、二部野 肇、 田中 知徳 日本紅斑熱は、Rickettsia japonica を保有するマダニに刺咬されておこるダニ媒介感染症であり、4類感染症に指定されている。本症は2~10日の潜伏期を経て、頭痛、発熱、全身倦怠感をもって急激に発症する。高熱、発疹、刺し口が3徴候である。

福山市保健所管内では、2018年~2022年の5年間に83例の届け出があり、2019年に2例、2022年に1例の死亡例が発生した。今回、5年間の発生状況と感染防止・重症化予防への取組について検討した。

感染場所は農作業など野外作業中が多く、刺し口が確認できた約半数が下半身を刺されていた。また、 受診や治療が遅れ重篤化したケースもみられた。

以上より、①市民に対し、ダニに刺された後の有症状時には早期受診し、受診時の訴えのポイントを啓発する、②医療機関への情報提供などによる連携強化を通じて、早期診断・早期治療に結びつけることが重要である。これらに留意して感染症対策に取り組んでいく。

O-36. 膝関節撮像における Simultaneous Multi Slice を併用した TSE の検討について

福山市民病院 医療技術部 放射線科 山根 茉莉、永井 能規、石井 俊也、 瀬戸 裕行

今回、MAGNETOM Skyra®の ver.up に伴い、 撮像時間短縮ができる Simultaneous Multi Slice (SMS)をTSEに併用することが可能になった。 高分解能撮像が求められる膝関節において SMS を 併用した撮像条件構築のため検討を行った。

硫酸ニッケル銅ファントムを使用し、SMS を併用した TSE のパラレルイメージング (PI) の倍速とスライス方向 (SMS) の倍速の組合せによる各 SNR を算出し、検討を行った。得られた条件から SMS を併用した TSE と従来の TSE を比較し、SNR を算出した。また、ボランティア 1 名の撮像を行い、視覚評価・CNR を算出した。なお今回の研究において院内倫理委員会の許可を得た。

SMS の組合せは PI: 2、SMS: 2 が最適条件となった。SMS を併用した TSE と従来の TSE で得られた SNR と CNR は、ほぼ同等であった。

受信コイルの性能によって、アーチファクトが目立つことがあり、また、SAR 上昇も見られるので

条件設定の際は、注意が必要である。

膝関節撮像において SMS を併用することは、有用であることが示唆された。

O-37. 胸部 X 線画像に対する肺結節影検出支援 AI の導入報告

山陽病院 放射線科 1)

砂田 明俊 ¹⁾、柳根 英明 ¹⁾、鴨川 英治 ¹⁾、仁枝 正範 ¹⁾、藤原 則一 ¹⁾、中山 雅文 ¹⁾

2023年5月より当院では「NOBORI PAL AIサービス®」の一つにある「EIRL X-Ray Lung nodule® (以下 EIRL)」を導入した。EIRL は胸部 X 線画像をクラウドに読み込み、AI 技術によって肺結節影・心胸郭比・空気含有面積などを該当領域にマークを表示し支援することを目的とするソフトである。今回はこの EIRL を用いて当院の胸部 X 線画像データと CT 画像データを使用し、肺結節影の検出に対して感度と特異度について算出し検討する。

まず CT 検査の外部読影レポート結果(ドクターネット社)より肺結節の所見を検索する。そして肺結節影の基準を日本 CT 検診学会の推奨値の最大径 6 mm以上として CT 画像データの結節影と EIRL で処理した胸部 X 線画像データの結節影を比較し性能について報告する。

EIRLは「専門分野以外の医師の心理的な負担軽減」・「AIと医師によるダブルチェック」・など画像診断の分野で当院に寄与すると考えられる。

O-38. 半導体 SPECT 装置で心アミロイドーシスは 診断できるのか?

福山循環器病院 放射線課 ¹⁾、循環器内科 ²⁾ 笠原 光 ¹⁾、川上 真司 ¹⁾、上岡 亮 ¹⁾、 後藤 賢治 ²⁾

心アミロイドーシスでは 99mTc ピロリン酸が心筋に集積する性質がある。このため、従来から使用されているアンガー型 SPECT 装置では、全身を撮像するプラナー画像収集が可能であり、定量的評価および視覚的評価を組み合わせることにより、心アミロイドーシスの診断が可能である。一方、当院で使用している最新鋭の半導体 SPECT 装置では、鮮明な画像収集が可能な利点があるが、心臓周囲のみの撮像に限られるため、同様の手法で心アミロイドーシスを診断することが不可能である。

そこで、²⁰¹TICIと ^{99m}Tc ピロリン酸の 2 核種を 投与して SPECT 撮像を行い、得られた SPECT 画像で視覚的評価を行っている。

体軸断面での再構成画像を提示することにより、心筋や肋骨への集積を確認することができた。

これにより、SPECT 画像で視覚的評価が可能であり、半導体 SPECT 装置で心アミロイドーシスを診断することが可能となった。

O-39. 乳がん検診後の受診勧奨の効果と今後の工夫 について

乳がんの罹患数は増加の一途をたどっている。当協会では職域、地域住民を対象にマンモグラフィによる乳がん検診を積極的に行っている。2013年より要精密検査(以下精検)であるにも拘らず精検未受診のままの方に対して受診勧奨を行っているが、この度、その結果を検討したので報告する。

2020 ~ 2022 年の間の要精検の総数は 315 例であり、そのうち、精検未受診 116 例を対象に追跡調査を行った。

受診勧奨の方法は検査日から3か月後、6か月後、9か月後に封書を郵送した。1回目の受診勧奨により、うち34%が精検を受け、2回目の受診勧奨によりさらに6%が受診した。しかし、残りの60%は未受診のままで終わっている。

勧奨方法として、これまでは結果報告書と専門施設の案内を郵送していたが、精検の重要性が未受診者に伝わっていなかったと考えられる。今後は、勧奨時に精検の重要性をアピールしたリーフレット等を同封することで、より有効性を高めたい。

O-40. 当院の CT 解析を用いた TAVI 支援画像について

福山循環器病院 放射線課 ¹⁾、循環器内科 ²⁾、心臓血管外科 ³⁾

田邉 雪萌¹⁾、徳永 泰弘¹⁾、佐藤 克政²⁾、 向井 省吾³⁾

当院に経カテーテル大動脈弁置換術 (TAVI) が導

入され、CT解析の重要性が増した。TAVIの術前 CT解析では冠動脈評価及び大動脈弁輪周囲の詳細 な検討が必要である。弁輪サイズ、弁尖石灰化の程 度、冠動脈入口部と自己弁との距離、膜性中隔の距 離を正確に測定することでTAVI治療の際に想定 される合併症の危険性を予知する事ができる。

当院の特徴として phyZiodynamics4D 解析がある。弁尖の石灰化などを視覚的に評価し、人工弁留置後の合併症を予測している。また心臓周期における弁輪面積の変化率表示は人工弁サイズ選択に非常に有益となっている。

術後の人工弁拡張程度や、冠動脈との位置関係を解析することも重要となっている。今後再治療が必要となる症例ではより詳細な検討も必要であろう。

支援画像を提示することは TAVI 治療をより正確で安全に行う事につながる。一方解析に時間を要する点や、解析習得のラーニングカーブがあり技師の養成に時間を要する事が現状の課題である。

O-41. CT 装置から出力される Dose Report と実測値の精度検証および経年変化について

福山市民病院 放射線科 太田 俊晃、三好 孝昌、三村 尚輝、 瀬戸 裕行

CT 装置の線量評価には CTDI w および CTDI free air が用いられ、受入試験時の± 20%または 1 mGy のいずれか大きい方を超えないこととされている。また、医療被ばくの線量管理に Dose Reportが用いられており精度検証は重要となる。対象装置 は Canon 社製 Aquilion ONE Genesis・Aquilion ONE GS とした。各管電圧の CTDI wを Radcal 社製の線量計(Accu Gold +)を用いて計測し精度検証を行った。また、6ヵ月を超えない範囲または定期点検や故障修理後に全 CT 装置の線量測定を実施しており経年変化も検討した。

2機種の CTDI w は -15.7% ~ 14.6%で、1 mGy を超えることはなく適正な範囲だった。Dose report との誤差は CTDI wの誤差のみではなく患者体型の 要因も含まれるため SSDE などの指標と共に評価 が必要である。経年的な CTDI w は各装置間で傾向 が異なる。特に、X 線管の交換が少ない装置や、交換後は出力系の変動が大きく実測の必要性がある。安全性の確保と画像診断能を維持するために日常点

検や定期点検を実施することが重要である。

O-42. 下部内視鏡検査の説明の工夫と効果

楠本病院 看護部

中山 久美、住吉 倫世

下部内視鏡検査(以下検査)は、検査前の食事制限や休薬、下剤の服用など、患者の理解に基づいた協力が必要である。従来のクリニカルパス(以下パス)で、時系列に個々の看護師が口頭で患者に検査説明し、自宅で再度確認してもらうように説明していた。しかし、自宅で確認すると文字が多く、普通に食事したり下剤の飲み忘れや中止薬がわからなくなるなど、検査前の準備が十分にできていないケースが一部みられた。また、患者から検査の必要性の説明が不十分であるなどの意見が聞かれた。

そこで、現在使用しているパスの問題点を明らかにし、検査を受ける外来患者に独自のアンケート調査を行なった。結果を基に、口頭での説明を文章化してイラストや写真を挿入する工夫や、患者が事前準備を簡単に確認できるパンフレットに変更した。変更後のアンケート結果から患者は検査が分かりやすくなり、安心して検査を受けることが出来るようになったのでここに報告する。

O-43. 間歇スキャン式持続血糖測定器 (isCGM) を活用してセルフケア行動が変化した 1 例 日本鋼管福山病院 看護部外来

岡崎眞由美

糖尿病歴 10 年の 70 歳代男性。自分なりの食事療養を行い 1 日 6 時間以上歩いていたが HbA1c が 11%となり近医より紹介された。血糖の確認のため間歇スキャン式持続血糖測定器(以下 isCGM)を装着してゾルトファイ 30 ドーズが開始となった。isCGM で可視化できる血糖変動を看護師と振り返り、「サンドイッチは上がりにくい」「食後に足踏みをすると急激に血糖は上がらない」など結果を活用しながら本人が日常生活を工夫し、注射の量も自己調節した。

現在は $HbA1c11\% \rightarrow 6.2\%$ 、体重 $73kg \rightarrow 64kg$ 、 ゾルトファイ $30 \rightarrow 13$ ドーズ、isCGM の TIR(目標範囲内の血糖値)は 95%である。

受診のたびに工夫点を楽しそうに医療者に話して くれる。isCGM の結果が気づきをもたらし、セル フケア行動を変化させ、コントロールも改善した。 isCGM の活用は糖尿病を持つ人の生活の質を上げる一助になるとの示唆を得た。

O-44. 当院造血幹細胞移植後長期フォローアップ (LTFU) 外来の現況

中国中央病院 看護部 1 、医局 2 (血液内科) 植村 佳奈 1 、蕗谷 和音 1 、長田 佳子 1 、 西明寺久美子 1 、石川 立則 2 、杉浦 弘幸 2 、 黒井 大雅 2 、岡本 幸代 2 、野村 奈穂 2 、 増成 太郎 2 、瀬崎 伸夫 2

当院の血液内科病棟では、悪性リンパ腫や白血病などの血液疾患患者に対し、化学療法、輸血療法、同種造血幹細胞移植など様々な治療を行っている。その中で、同種造血幹細胞移植を受けた患者が移植後も安心して過ごすことができるよう、2022年4月移植後患者の長期フォローアップ(long term follow up:以下LTFU)外来を開設したため、運用の実際と看護介入を報告する。

日本造血幹細胞移植学会で研修を受けた看護師が、全身状態や日常生活の活動状況、移植片対宿主病 (graft versus host disease:以下 GVHD)の有無などを問診し、医師の診察へ繋げ、移植後の経過期間に応じて、GVHD の対処方法、感染予防などの生活指導、社会復帰へのサポート等を行っている。今後、全国的にも LTFU 外来機能は標準化され質の向上が求められる。看護師の育成とスキルアップのための継続教育が必要と考える。

O-45. 当院独自の排便カレンダーの導入と活用について

いそだ病院 看護部 1 、外科 2 有木眞由美 1 、岩川 和秀 2 、世良 春菜 1 、山口 泉 1 、磯田 健太 2

自身の排便状態を記録していく排便日誌は自己管理としてだけでなく、患者と医療者側で情報を共有できる有用なツールとされ、各社よりいろいろな排便日誌が出されているが「煩雑である」、「習慣がない」などの理由で継続できていないのが現状である。当院では排便障害を有する外来患者に対して当院独自の排便カレンダーを作成し、親しみやすく続けやすいと高評価を得ているので報告する。当院排便カレンダーの工夫①便性、および便量はスコアで

簡略表記する。②季節の花やイメージのイラストを掲載する。③標語を毎月1題掲載する。④裏面に排便豆知識を掲載する。以上の工夫により患者側より排便の話題が始まり、医療者と共に客観的な評価が可能となり、一緒に治療について考えていけるようになっている。当カレンダーはほぼ全例で継続できており、毎月40~50部配布し、ホームページからも印刷できる。これらの取り組みと成果について報告する。

O-46. 大腿骨骨幹部骨折をした小児の安静期から松 葉杖歩行可能となるまでの関わり ~プレパレーションを行った結果~

日本鋼管福山病院 看護部

八杉 梨央

左大腿骨骨幹部骨折で入院となり、鋼線牽引が開始となった幼少時期の女児。交通事故による受傷、入院により不安や恐怖があった。牽引により長期間のベッド上安静を強いられていた。又、退院後も松葉杖が必要となるが、集中力も長く続かない為リハビリ中には注意散漫となることもあった。

そこで、頻回に訪室し児の好きな塗絵等の遊びを一緒に行った。両下肢ギプス固定に変更になるにあたり、人形を用いた指導(以下プレパレーションと称す)を行い処置の不安軽減に努めた。又、松葉杖の手技が獲得できるようリハビリチェック表を作成した。児の好きなキャラクターを取り入れ目標回数達成出来たら色塗りができるようにした。

結果、A氏が苦痛なく安静が守れ、プレパレーション行った事で不安なく処置を行えた。又リハビリ意欲に繋がり、松葉杖の手技を獲得する事ができた。

小児の発達段階を知り成長発達を促す関わりは治療を円滑に進める事に繋がったと考える。

O-47. コロナ禍の看取りについて

島谷病院 看護部

大平 りか、小川 千尋

2020年新型コロナウイルスの感染拡大により面会制限が始まり、その中で亡くなる患者もいた。この状況が長期化していくことを考慮し、コロナ禍の看取りをどのように行っていけば良いのか模索することで、より良い看取りを行えるのではないかと考えたため、報告する。

コロナ禍での看取りに満足感を感じているスタッフは7%と少なく、スタッフ間で「コロナ禍での看取りについて」ディスカッションを行った。面会基準を確認し「コロナ禍での看取りの取組み」を資料にまとめ、病棟スタッフへ周知した。

取り組み後にアンケートを実施した。結果、取り組む内容が明確化し、100%の看護師が「コロナ禍での看取りの取り組み」を実施できたと回答。看取りに対する看護師の満足度は81%に上昇した。

今回の結果から看護師が日々の関わりの中でささ やかな変化を察し、患者家族が有意義な最期の一時 を過ごせるよう模索し、看護を提供していく事が重 要であると学んだ。

O-48. 脳血栓回収術に関わる看護職員の不安軽減に 向けた取り組み

寺岡記念病院 手術室¹⁾、外来²⁾

重政 歩 ¹⁾、原田加代子 ¹⁾、古林 順子 ¹⁾、 高橋 恵子 ²⁾、楠 奈美 ²⁾、藤井 郁子 ²⁾

急性期脳梗塞患者に対して、発症からできるだけ 早期に経静脈的血栓溶解術や、経皮的脳血栓回収術 を行い、再開通を得ることが患者の転帰改善に最も 重要である。

当院は地域密着型の二次救急を担う病院である。 2016年12月から経皮的脳血栓回収術を開始した。 実施医の不在により対応していない期間があった。 2022年8月より経皮的脳血栓回収術を再開することになり、看護職員より迅速な対応ができるか不安 の声が上がった。どのスタッフが対応しても同様の 動きが出来るようプロトコールを作成し、多職種(医師、看護師、検査技師、薬剤師、診療放射線技師、 医療事務など)と連携し勉強会やシミュレーション を繰り返し実施して修正を重ねた。看護職員の不安 に対しアンケートによる評価を行った結果、各自の 自信につながり、不安が軽減したとの示唆を得たの で発表する。

O-49. 認知機能の低下・倦怠感がある患者へのセルフケア支援

日本鋼管福山病院 看護部

田邉 華蓮

高齢化に伴い認知症患者の割合は増えている。認 知症は「今のところ」は、医学的に治す方法はなく 認知症患者との付き合い方や周りの環境を変える事が重要とされている。80代のA氏は褥瘡加療・リハビリテーション目的で当院へ転院となった。入院後、尿路感染による発熱や倦怠感が出現し、ケアやリハビリテーションに対する拒否が強くなった。A氏に対して、休息を挟んだ無理のないケアプランを立案し、拒否がある際は再度時間をあけて訪室するようにした。また、短文でゆっくり話しかけ、声のトーンを低くすることを意識し関わった。そうすることで、徐々に拒否や苦痛なくケアを受けられるようになり、声かけにて自ら車椅子へ移乗する等の行動変容が見られた。

認知機能の低下がある患者に対し、声かけの方法 や関わり方を工夫することで拒否や苦痛なくケアを 受けられるようになったA氏との関わりを報告する。

O-50. 80 代男性のⅢ度熱傷が治癒に至った成果と 訪問看護の社会的考察

いずみ訪問看護ステーション 看護部 ¹⁾、リ ハビリテーション部 ²⁾

衞藤真由子¹⁾、林 真寸美¹⁾、坂下 光彦²⁾、 金谷 亜紀¹⁾、甲斐 寛子¹⁾、小澤 史絵¹⁾

症例は80代男性、要支援1で週に2回DS(デイサービス)を利用、家族と暮らしている。2023年2月に自宅で入浴後に転倒、ストーブで背部から腰部の熱傷をおった。2日後に痛み強くなり受診、熱傷と診断された。本人の希望で入院せず受診翌日より訪問看護開始となった。2月は熱傷に対する特指示(特別看護指示書)で14日/月と介護保険内での訪問看護となり自己負担額が大きかった。3月からは区分変更し要介護1となり介護保険で訪問できる回数は増加、5月からは熱傷の改善により週3回の訪問とDS週2回となり、現在は熱傷の治癒、ADLは回復し費用負担も軽減できている。

症例は在宅を支えるスタッフが共同し在宅で、熱傷を治癒させ ADL の改善も図ることが出来た。高齢社会の世の中で在宅の可能性を広げるためにも創傷での区分なく褥瘡と同じように特指示で介入できるようになることを願いたい。

O-51. 日常生活動作困難な状態で退院が決定した患者への自立に向けた関わり

~患者の思いを知り目的を共有した結果~

日本鋼管福山病院 看護部 柿本 唯

左膝化膿性関節炎にて持続洗浄の治療を受けた 70歳代男性。疼痛や長期安静に伴うADL低下が 見られた。伸展装具装着での自宅退院が決定した際 も、A氏は患部の安静を第一優先とし、自分で出来 る事も看護師に依存的であった。更に離床意欲も低 く歩行練習も進まなかった。

そこで安全な自宅生活の為、セルフケアと歩行能力の向上への介入を行った。まずA氏の家族の思い、住環境や介護力の情報を得た後、A氏と共に更衣・シャワー浴・排泄の自立、歩行状態の目標を設定した。多職種カンファレンスではケアの介入方法や歩行練習方法を共有した。

その結果、日中は自身で私服に着替えたり、下肢伸展状態でのシャワー浴の獲得、オムツ中心からトイレ排泄の回数が増した。更に伸展装具を装着しT杖で60m歩行可能となった。

依存的で介入の受入れが困難な患者であったが、 情報を元に目標の設定と共有を繰り返す事で信頼関 係が構築され、介入の受入れと自立に繋がった。

O-52. コロナ禍における看護師の役割変化について 〜回復期リハビリテーション病棟での業務変 化と多職種協働〜

水永リハビリテーション病院 看護部 中川 悠

当院は全床回復期リハビリテーション病棟であり、在宅復帰を叶える為に身体機能の回復だけでなく、患者・家族の精神面へのサポートも重要となる。コロナ禍において、家族カンファレンスや試験外泊、自宅訪問等に制限が生じ、以前と同様の支援を展開することは困難を極めた。多職種それぞれが「今出来ること」を検討・修正を繰り返した結果、看護の役割に変化が見られた為ここに報告する。

様々な制限がある中で、家族との関係性構築に重点を置き、多職種での取り組みを開始した。家族との連絡窓口は看護師で一本化し、担当者の意見を取り纏めた。

退院支援を看護師がファシリテートすることで、 担当者は責任感を持ち、積極的に行動し、多職種と の自発的な意見交換も増加した。

今後は退院支援に関するアンケート調査を実施

し、数的評価を根拠として、スタッフへの振り返り が課題であり、これはより質の高い関りの実践と当 院の役割達成へ繋がるものと考える。

O-53. 褥瘡ケアカンファレンス実施による病棟看護 師の意識変化

~ 創傷治癒過程の理解とアセスメントの重要 さを認識して~

セントラル病院 病棟看護師

近藤 那奈、山本 洋江、川﨑 忍

当院の褥瘡対策の目標の一つに「褥瘡発生時は適切なケアに取り組み、悪化させない。DESIGN-R®評価、ガイドラインを用いて正しいケア選択ができる」がある。しかし、この評価が個人の判断により正しいケア選択に結びついていないのではと感じる事があり、本研究に取り組んだ。

病棟看護師 34 名に DESIGN-R[®] 評価に関する質問紙での聞き取り調査を行う。抽出された問題に対して解決策をたて行動する事とした。再度、病棟看護師 34 名に質問紙での聞き取り調査を行い、質的に分析した。

これまで褥瘡回診時は、不定の当日担当看護師1 名が回診医の補助、DESIGN-R[®]評価を行っており、 単独での評価に不安意識も存在していた。

今回、縟瘡回診時に回診医とレベル別看護師2名で DESIGN-R[®] 評価を行いながらケアカンファレンスを行う方法をとる事で統一化と意識変化につながったのではないかと考える。

今後、この取り組みが褥瘡悪化防止になっている かをデータ化するには更なる研究が必要となり、課 題である。

O-54. 地域包括ケア病棟から在宅支援に向けた取り 組み

寺岡整形外科病院 看護部 1 、診療部 2 赤木 利江 $^{1)}$ 、鍵平奈緒美 $^{1)}$ 、宇田 汐里 $^{1)}$ 、船橋 鮎美 $^{1)}$ 、落合のり子 $^{1)}$ 、山下 文子 $^{1)}$ 、寺岡 俊人 $^{2)}$

当院の地域包括ケア病棟に入院される患者は、整 形外科疾患に伴うリハビリ目的が殆どである。安静 治療等による ADL 低下のリスクが高く、家族の意 向や患者の在宅環境を考えると在宅復帰が困難にな りやすい患者が多いことが特徴である。 入院患者の中には、高齢で認知症を伴う方が多く、 入院による環境の変化により不安を抱いて過ごしている患者も多い。また骨折による痛みが強くリハビリの介入が進まないこともある。地域包括ケア病棟の入院期間は60日間という中で当病棟に入院した患者の在宅支援に向けた取り組みを検討した。

患者との関わりの中で、コミュニケーションの重要性を再認識した。どのような思いを抱いているのかを理解し、思いや希望を受け止め、患者それぞれの治癒過程に合わせた支援を行うことが大切である。また、退院支援を通して多職種との連携の他に、家族の意向に沿った支援も必要であり、チームでの取り組みが重要である。

O-55. 当院における筋萎縮性側索硬化症に対する多 職種連携によるチーム医療

脳神経センター大田記念病院 脳神経内科 佐藤 恒太、佐藤 達哉、寺澤 由佳

筋萎縮性側索硬化症(ALS)における多職種連携による診療の変化について明らかにする。

神経難病に対する多職種専門チーム結成前(2017年1月~2019年12月)と結成後(2020年1月~2022年12月)における ALS の診療状況の変化について後方視的に検討した。

対象の ALS 患者は前半が 37 名、後半は 32 名であった。後半では発症から 2 年以上経過した症例の割合が多く(p=0.088)、また市外居住者が明らかに増加した(p=0.041)。診療としては胃ろうの増設や非侵襲的陽圧換気療法 (NIV) 導入率は差がなかったが、NIV 導入までの日数の短縮(p=0.043)が認められた。また予定入院が増加する一方(p=0.009)、14 日間以下の入院の割合も増加した(p=0.022)。死亡または気管切開下人工呼吸導入までの生存率に有意な差は認めなかった。

コロナ禍での発症から時間が経過した ALS の割合が増えた一方、多職種専門チームの取り組みによって、多忙な救急病院でも診療の質を担保しつつ効率的な難病診療の提供が可能である。

O-56. マンモグラフィと乳房超音波併用検診の必要性

中国労働衛生協会

折坂智恵子、長原 郁美、田中百合愛、 長島 和子、白川 静、三浦 彩加、 三好 奈苗、山本 春奈、森近 俊彦、 椎木 滋雄、宮田 明

マンモグラフィガイドラインでは「極めて高濃度」 の病変検出率低下が指摘されている。当協会の「極 めて高濃度」の現状把握を行い併用検診について考 察した。

2021年10月からの1年間に、当協会の乳がん検診を受診した6,142人を対象として、年齢階級別乳房構成、乳房構成別要精検率、乳房構成別・カテゴリー別陽性的中率等を算出した。

「極めて高濃度」受診者は、年齢階級別人数で 40~50 代が多く、その占める割合は 66.5 % だった。乳房構成別要精検率は、脂肪性 1.3 %、乳腺散在 3.1 %、不均一高濃度 4.0 %、極めて高濃度 1.3 % だった。「極めて高濃度」から乳がんは発見されなかった。

「極めて高濃度」の要精検率は「乳腺散在」「不均一高濃度」に比し低く、がんも発見されていないことから病変検出率低下の可能性がある。40~50代の比率が高く40代から罹患率が急増することを鑑みると、「極めて高濃度」受診者への併用検診勧奨が必要と考えられる。

O-57. 当院における「胎児スクリーニング超音波検査」の運用について

福山市民病院 診療部 産婦人科 ¹⁾、診療部 小児科 ²⁾、医療技術部 臨床検査科 生理検 查室 ³⁾、岡山大学大学院 医歯薬学総合研究 科 産科・婦人科学教室 ⁴⁾

片山沙予子³、渡辺 杏子³、浜本莉沙子³、 小森 翠³、小畠 大造³、大平安希子⁴、 衛藤英理子⁴、高原 悦子¹⁾、早田 桂¹⁾、 河津由紀子²⁾、安井 雅人²⁾、青江 尚志¹⁾

近年、超音波検査機器の画像技術の進歩に伴い、 出生後直ちに治療が必要な胎児の形態異常を指摘す ることも可能となった。形態異常の有無の確認を目 的に、「胎児スクリーニング超音波検査」が実施さ れている。

当院では、2022年6月より開始した。見落としのない検査を行うために、妊娠中期は産婦人科医師、後期は超音波検査士が行い、ダブルチェック体制をとっている。小児科医師は心臓の形態異常が指摘された際の精査を担当している。

運用開始から1年間で約130人の妊婦に検査を施行した。検査前に検査内容を説明し同意が得られた方のみに実施している。

検査を受けた妊婦に対し検査満足度アンケート調査を行った。約91%の妊婦が「検査を受けて良かった」と回答した。

2023年7月から技師間でのダブルチェック体制 を確立し、医師が行う中期の検査もすべて技師が担 当する予定である。専門性を活かした業務分担をす ることで医師の業務負担軽減効果が期待できる。

O-58. 防水・パッチ電極型体外式心電図レコーダー eMEMO®の臨床的有用性についての検討

岡山大学大学院保健学研究科検査技術科学分野¹⁾、谷口ハートクリニック²⁾、岡山大学学術研究院保健学域検査技術科学分野³⁾中山日菜子¹⁾、渡辺 修久²⁾、塚本 光咲²⁾、森 実優²⁾、中久保瑛梨²⁾、渡辺 彰吾³⁾、谷口 学²⁾

ホルター心電図は一般的に 24 時間の心電図を連続記録し、不整脈の検出に有用であるが、突発的な不整脈イベントを検出できない場合がある。イベントループレコーダーは長期間における不整脈の検出に優れている。今回我々は防水機能を持ったパッチ電極型の体外式イベントループレコーダー(eMEMO®: フクダ電子)の有用性について検討した。

対象は 2021 年 4 月から 2022 年 9 月までに動悸を主訴に来院した 294 症例について、24 時間以内と 24 時間以降での不整脈検出率、入浴時の不整脈イベントの調査を行った。

24 時間以降での記録により初めて検出された不整脈は170 例(約21.3%)に認めた。特に心室頻拍や上室性頻拍はそれぞれ約半数以上が24 時間以降に検出されていた。入浴時においてもノイズの混入は少なく、不整脈の出現も効率よく検出可能であった。

防水機能を持つ eMEMO[®] は、入浴などの制約がなく連続記録が可能であり、動悸症状を有する患者の安定した不整脈検出に有用であった。

O-59. がん化学療法調製部門における Protocol Based Pharmacotherapy Management (PBPM) 導入による薬剤師の業務効率化お

よび医師の業務負担軽減の取り組み

福山市民病院 医療技術部 薬剤科 野村 瑞、寺岡美智子、尾髙登美枝、 岩村 高弘、水馬 佑輔、森光 保武、 藤井 秀一

当院薬剤科がん化学療法調製部門では、薬剤師の業務効率化および医師の業務負担軽減を目的に、2022年1月より「B型肝炎 PBPM」を、2022年11月より「入院外来オーダー部門切替 PBPM」を導入した。今回、PBPM 導入前後での業務負担の変化を検証したので報告する。

PBPM 導入前後 3ヵ月(B型肝炎 PBPM については 1年後も含む)の PBPM による薬剤師介入率をそれぞれ比較した。また、PBPM 導入による業務負担に関する薬剤師アンケートを行った。

B型肝炎 PBPM での薬剤師介入率は、導入後3か月で27.9%、導入1年で40.4%と上昇した。入院外来オーダー部門切替 PBPM については、導入後、薬剤師代行入力率が87.2%となった。薬剤師アンケートでは5名中5名が業務負担が軽減したと回答した。

PBPM の導入により、薬剤師の業務効率化と医師の負担軽減に繋がったと示唆された。今後も、引き続き新たな PBPM の導入の検討を行い、効率の良いタスクシフトを推進していきたい。

O-60. 慢性維持透析患者の貧血管理への取り組み

寺岡記念病院 医療機器管理室 檜垣雄太郎、佐藤 博基、吉村 隆寛、 細川 由香、郷丸裕見子

貧血管理は慢性維持透析患者にとって、予後に関する重要な因子である。当院は医師の負担軽減の為、臨床工学技士(以下 CE)がパスを使用し管理を行っている。当院の前年度の貧血管理の現状を明らかにする

維持透析患者 135 名を対象とした。目標 Hb 値は 10.0g/dl 以上 12.0g/dl 未満とし、目標を外れた際には独自で作成したアルゴリズムに従いエリスロポエチン製剤(以下 ESA 製剤)の投与量を調整した。平均 Hb 値と 2015 年版日本透析医学会 慢性腎臓病患者における腎性貧血治療ガイドライン(以下ガイドライン)の達成率を検討する。

平均 Hb 値は 10.0 後半~ 11.0g/dl 前半で推移し、

全国のガイドライン達成率 62.8%に対し年間平均達成率 77.4%であった。

CE がパスを使用し、アルゴリズムに従って ESA 製剤を調整することで、医師の負担軽減になり、ガイドライン達成率も全国平均を上回ることが出来た。

O-61. 統一した口腔ケアによる口腔内環境改善を目指して

楠本病院 看護部

髙夘 莉奈

現在我が国の65歳以上の高齢人口は3617万人と過去最多であり、総人口に占める割合は28.7%と過去最高となっている。A病院も入院患者の多くは高齢者であり、身体の障害により日常生活動作を全介助する方が多い。清潔援助の中でも口腔ケアは全身の健康維持に繋がり必要不可欠なケアである。

しかし、口腔ケアの援助をする際ケア内容が省略、 簡素化されてしまう傾向にあることや、普段実施し ている口腔ケアでは看護師一人一人のケアが統一で きていない事が A 病棟看護師に行なったアンケー トで分かった。

そこで、Eilers Oral Assessment Guide(以下OAGとする)を用いて口腔内評価と、独自の口腔ケアプロトコール例を用いてケアする事で3週間後スコアを減らすことができた。

OAG評価を行う事で口腔内環境が明らかとなり、 A病棟独自のプロトコールを用いることで、状態に 合う統一した口腔ケアを実施継続することができ た。また、口腔内環境の改善が出来たのでここに報 告する。

O-62. 口腔健康管理を行った 1 症例 ~看護師と歯科衛生士の連携~

いそだ病院 $^{1)}$ 、福山医療センター 歯科衛生 室 $^{2)}$ 、なないろ訪問看護ステーション $^{3)}$ 重政 清子 $^{1)}$ 、藤原 千尋 $^{1)2)}$ 、山脇 真衣 $^{1)2)}$ 、

| 大前 | 綾子 ¹⁾³⁾、山口 | 泉 ¹⁾、磯田 | 健太 ¹⁾

近年、口腔健康管理の重要性は広く周知され看護職、歯科専門職など多職種がチームとなって携わっている。当院は、呼吸器感染予防および安全な経口摂取ができるよう、摂食嚥下観察記録表などを使用し口腔ケアや摂食機能療法を実施している。このようなツールを用いて非常勤である歯科衛生士(以下、

DH) や摂食嚥下障害看護認定看護師(以下、認定 Ns) と情報を共有し指導を得ている。多職種の連 携により口から食べることを目標に取り組んだ1症 例を報告する。

70歳代、男性。多発脳梗塞後 2023年3月X病院より転院。入院翌日DH、認定NSの評価、指導にて口腔ケア+間接訓練を実施。2週間後には1日1回のゼリー10割摂取が可能となり口腔衛生状態の維持を続けることができた。

我々看護師と専門職である DH と認定 Ns が密に連携し早期に評価、介入したことで口腔環境が改善し、食支援にも取り組めた。口腔健康管理を実施するためには多職種連携が必要である。

O-63. 口腔内情報の共有による窒息・誤飲予防の取 り組み

脳神経センター大田記念病院 歯科診療課¹⁾、 歯科²⁾

吉田 泰子¹⁾、佐能 紗希¹⁾、中瀉加奈子¹⁾、 佐々木和希¹⁾、大島 營子¹⁾、坪井 綾香²⁾、 松永 一幸¹⁾²⁾

当院では、2021年2~5月の期間で、窒息・誤飲関連の報告のうち、アクシデントに相当するレベル3bの報告が3件あった。今回、窒息・誤飲予防に向けて、多職種間で口腔内情報を共有する取り組みを実施し、その効果を検討した。

窒息・誤飲予防に向けて、従来の口頭での情報共有に加えて、2021年6月から、掲示物による注意喚起や、フローチャートによる手順の明確化を行い、情報共有体制を整備した。体制整備による効果を検証するため、整備前、整備直後、定着後の各4ヶ月間において、情報共有件数、レベル3b以上の報告件数を調査した。

情報共有件数は、整備直後で増加し、定着後で減少した。レベル 3b 以上の報告は、整備前で3件だったが、整備直後で1件、定着後で0件と減少した。 窒息・誤飲予防に向けて多職種間で口腔内情報を共有することで、窒息・誤飲件数は減少することが示唆された。

O-64. リハビリ特化型短時間デイケアを担当する介 護職の実践教育システムの構築

福山記念病院 通所リハビリテーション科 1)、

リハビリテーション科²⁾、

県立広島大学 保健福祉学部理学療法学コース³⁾

鵜久森佑汰 1 、猪原 千晶 1 、竹本しおり 1 、胃甲 章喜 1 、時田 由紀 1 、深川 由美 1 、渡辺佐智子 1 、金安 高弘 1 、室 陽子 1 、奥森友里恵 1 、國岡 由香 1 、藤井 孝枝 1 、瀬戸口由梨 2 、島谷 康司 23

当院は2023年4月よりリハビリ特化型短時間デイケアを開設している。今回、当デイケア独自に介護職の教育システムを構築したので、その実践報告をする。

(1) コンセプトの共有(2) 到達目標の設定(3) 指導・デモンストレーション(4) 介護職同士の模 擬演習(5) プログラム介入の実践(6) 定期的な 進行度の確認等を行い、課題や不安点を協議し、解 決可能な課題をチーム全体で段階的に取り組む方法 をとった。

短時間デイケアを始動し2ヵ月で78%の介護職はプログラム介入・定量評価が可能となった。

リハビリ特化型短時間デイケアにおける介護職の 利用者に対する心身機能改善への役割は大きく、今 後は更に重要となる。現在、我々は段階的実践教育 システムを可視化し、介護職の能力発揮への満足度 向上に努めている。利用者の活動量の向上や行動変 容を図り自立を支援するための質の高い、暮楽思力 (くらしりょく)を高めるサービスの提供をしたい。

O-65. 看護補助者による技能実習生教育への取り組み

脳神経センター大田記念病院 介護課 ¹⁾、看 護部 ²⁾

市川千佳子 1 、仁児 弘子 1 、岩田 雅子 1 、 山本 公江 1 、栗原 真帆 1 、鈴木加奈子 2 、 長谷川理香 2

当院では、2019年より技能実習生(以下実習生)を受入、現在9名が在籍、看護補助者業務を行っている。実習生が医療現場で看護補助者業務を習得するためには教育が重要であり、当初は現場内教育(以下 OJT) 方法を中心に教育を行っていたが、2023年4月より指導方法を変更しその取り組みについて報告する。

1. 看護補助者手順書と技術チェックリストの見直し、OJT 方法と介護技術チェックを基に評価し

た。2. 実習生が日誌を毎日記載後、指導者と振り返る。

実習生は、技術習得までOJT方法で指導を行った結果、確実に技術習得ができるようになった。理解できない内容を指導者に直接確認することができ、コミュニケーションが円滑となった。振り返り日誌の活用は、技能実習生と指導者がお互いを振り返る機会となり看護補助者業務を共有することができた。

指導方法を変更した取り組みは指導方法が統一へと繋がり、実習生の働きやすい職場へと繋がっているのではないかと考える。

O-66. 手術室の安全確保

~マーキング実施率 100%を目指して~

脳神経センター大田記念病院 看護部¹⁾、医 療安全推進室²⁾

野地本一志 ¹⁾、井上 奈未 ¹⁾、高橋 林子 ¹⁾、 柞磨 宏美 ¹⁾、岡東 知香 ¹⁾、錦織 葵 ¹⁾、 前田 圭介 ¹⁾、阿藻 咲奈 ¹⁾、甲斐 華帆 ¹⁾、 寺山 朋美 ¹⁾、栗原 真帆 ¹⁾、北川千奈津 ²⁾

日本医療機能評価機構によると、左右取り違え事故の約40%が脳外科手術であったとの報告がある。 入室前の誤認手術防止対策のマーキングは未導入であったが、2022年より手術における安全性を確保するため、入室前までにマーキングを必須とした。 手術入室前のマーキング導入の取り組みについて報告する。

2022 年 10 月から 2023 年 5 月の期間、マーキング導入後から対象症例 492 例のマーキングの有無、実施状況を調査した。

マーキングの実施状況は科別、医師別に集計、月毎に比較し、手術室運営委員会で報告した。導入1ヶ月目はマーキングが必要な症例でも7例が未実施だったが、2ヶ月目以降は100%実施となった。正しい位置にマーキングできているかに関しては、医師によって成績が異なり、月別で改善もみられなかった。

マーキングを実施することは定着しているが、実 施の位置に関してはマニュアルを再検討し、統一を 行う必要がある。

O-67. 身体的拘束に対応するスタッフのストレスについての意識調査

福山友愛病院 看護部

佐山 肇、岩崎 志穂、大野 修右

当院 B 病棟は精神一般病棟かつ閉鎖病棟である。 不穏、興奮や暴力のおそれのある患者に対しては、 やむを得ず身体的拘束を余儀なくされる患者も少な くない。しかし病状悪化から身体的暴力、暴言、治 療行為への抵抗がみられスタッフのストレスも強い と思われる。そこで今回アンケートによる意識調査 を行い、その結果を報告する。

2023年4月~5月に病棟スタッフにアンケート (設問2~7は5段階の評価とその内容、設問8は 自由意見)調査を実施し、分析した。

回収率は88%、設問2ではスタッフの80%のスタッフが身体的拘束の施行時にストレスを感じている。設問3ではスタッフの88%が暴言を受けている。設問7ではスタッフの62%がジレンマや葛藤を抱いている結果が出た。

アンケート調査の結果から、今後は医療者間での 情報共有とともにスタッフ間で相談しやすい雰囲気 をつくる事でバーンアウトを防ぐ体制を作ることが 必要であると考える。

O-68. 手術安全チェックリスト使用による効果 楠本病院 看護部

野村 翔

A病院の手術室では、執刀前にタイムアウト、閉 創前にガーゼカウントを実施していたが、明確に書 式化されたものではなかった。そのため、より安全 な手術看護を行うことを目的とした手術安全チェッ クリストを導入しようと考えた。チェックリスト作 成と使用による効果を手術業務にあたるスタッフの アンケート結果とともに考察し報告する。

A 病院にて手術に携わる医師・看護師7名に対し、 手術安全チェックリストの使用前後でアンケートを 行い、比較した。

チェックリストの導入は安全確認の行動をさらに 印象づけ、安全意識の向上に繋がったが、チェック リスト使用に順応できず、研究期間内では確実な チェックリストの使用とはいかなかった。

今後、チェックリストを使用することが手術の過程として浸透し、定着すれば、確実な安全確認が行

えるとともに、実際の使用状況からチェックがされていない面への介入を行うことでより安全な手術につながると考える。

O-69. 緊急透析導入となった不安が強い患者への シャント管理に向けた介入 〜フィンクの危機モデルを用いて〜 日本鋼管福山病院 看護部 森本 芽衣

緊急透析導入は予定導入と比較し、尿毒症症状や 身体的苦痛などストレスが大きい。それにより透析 治療に対して否定的な感情を抱くことが多く、受け 入れに時間を要す場合がある。様々なストレスを軽 減していくためには看護師の役割が要となる。

I氏は腎硬化症による慢性腎不全が進行し緊急透 析導入となった。尿毒症症状や今後の生活に対する 不安など様々なストレスを抱えていたI氏への関わ りについて、フィンクの危機モデルを用いて振り返 りを行った。

透析導入直後は治療に対して否定的な発言が多く、衝撃の段階にあったI氏への寄り添う関わりにより適応の段階へ移行した。そして、その段階で指導開始出来たことで円滑な指導を行えた。

患者の思いに寄り添い傾聴する関わりが、患者の ストレスを軽減し受容を促した。また指導時は危機 のプロセスにおいてどの段階にあるのか理解し関わ る必要があると示唆された。

O-70. 退院後の生活を見据えた患者への指導 〜患者の行動変容を促す関わり〜 日本鋼管福山病院 看護部 末広 祐大

糖尿病は血糖コントロールが適切に行われないと 合併症を併発する。その中でも末梢神経障害により 下肢の切断に至るケースは多く、下肢切断した患者 数名と関わる中でなぜ管理ができないのかと疑問に 思った。

今回受け持った患者は両下肢に末梢神経障害が進行しており、受傷部位に痛みを感じず傷を放置しており、右外果壊死となっていた。

入院当初は創部を自ら見ることはしなかったが、 足の観察を行うように早期から継続して声掛けを行 い、足浴や処置時に創部の状態を説明し一緒に観察 を行った。

退院時には、自身の携帯で創部の状態を撮影し受 傷当時と今の状態の比較をすることができ、患部に ついて質問をする等自身の体に関心を持てるように なった。

退院後に一度下肢に傷ができたが、すぐに自ら受 診し主治医に傷ができた経緯の説明が行えていた。

患者自身が足を守ることの重要性を理解したこと で行動変容へと繋がることができたと考えここに報 告する。

福山市医師会関係医療機関の学術業績(2020年1月~2023年12月)

論 文

・胸部外科 75巻12号 2022.11 心膜悪性中皮腫の 1 例

(井上病院)

西川 敏雄、高橋 正彦、森 雅信 上川 康明、井上 文之

A 67-year-old woman was referred to our hospital for cough and fever. Chest computed tomography (CT) showed some masses showing slightly enhanced effect in the pericardium. FDG-PET showed the accumulation of FDG in the masses. Thoracoscopic surgical biopsy was performed to establish the diagnosis. The histological study showed proliferation of short spindle-shaped cells surrounded by lymphocyte, and the spindle cells were immunohistochemically positive for cytokeratin AE1/AE3, WT-1, D2-40, CAM5.2, intelectin-1 and negative for CEA, TTF-1, napsin A, claudin-4, calretinin, MUC4, PAX8, CD30. These findings were compatible with epithelial pericardial malignant mesothelioma.

· 胸部外科 76巻2号 2023.2

上縦隔に発生した類上皮性血管内皮種の1例

(井上病院)

西川 敏雄、高橋 正彦、森 雅信 岡林 孝弘、上川 康明、井上 文之

A 81-year-old woman was referred to our hospital for neck discomfort. Chest computed tomography (CT) showed a tumor in the upper mediastinum. Fluorodeoxyglucose-positron emission tomography (FDG-PET) showed the mild accumulation in the tumor. Percutaneous biopsy was performed and epithelioid hemangioendothelioma was suspected, and the surgical treatment was performed. The histological study showed polygonal and irregular cells with nuclear atypia in myxoma-like substrate compatible with epithelioid hemangioendothelioma.

· Brain Pathology 2021.11

Axonal injury following mild traumatic brain injury

is exacerbated by repetitive insult and is linked to the delayed attenuation of NeuN expression without concomitant neuronal death in the mouse

(住吉ふじい病院)

荻野 泰明

Abstract

Mild traumatic brain injury (mTBI) affects brain structure and function and can lead to persistent abnormalities. Repetitive mTBI exacerbates the acute phase response to injury. Nonetheless, its long-term implications remain poorly understood, particularly in the context of traumatic axonal injury (TAI), a player in TBI morbidity via axonal disconnection, synaptic loss and retrograde neuronal perturbation. In contrast to the examination of these processes in the acute phase of injury, the chronic-phase burden of TAI and/or its implications for retrograde neuronal perturbation or death have received little consideration. To critically assess this issue, murine neocortical tissue was investigated at acute (24-h postinjury, 24hpi) and chronic time points (28-days postinjury, 28dpi) after singular or repetitive mTBI induced by central fluid percussion injury (cFPI). Neurons were immunofluorescently labeled for NeuroTrace and NeuN (all neurons), p-c- Jun (axotomized neurons) and DRAQ5 (cell nuclei), imaged in 3D and quantified in automated manner. Single mTBI produced axotomy in 10% of neurons at 24hpi and the percentage increased after repetitive injury. The fraction of p-c- Jun+ neurons decreased at 28dpi but without neuronal loss (NeuroTrace), suggesting their reorganization and/or repair following TAI. In contrast, NeuN+ neurons decreased with repetitive injury at 24hpi while the corresponding fraction of NeuroTrace+ neurons decreased over 28dpi. Attenuated NeuN expression was linked exclusively to non-axotomized neurons at 24hpi which extended to the axotomized at 28dpi, revealing a delayed response of the axotomized neurons. Collectively, we demonstrate an increased burden of TAI after repetitive mTBI, which is most

striking in the acute phase response to the injury. · 広島臨床検査 2020 Our finding of widespread axotomy in large fields of intact neurons contradicts the notion that repetitive mTBI elicits progressive neuronal death, rather, emphasizing the importance of axotomy-mediated change.

Keywords :axonal injury, mild traumatic brain injury, NeuN, neuronal death, p-c-Jun, repetitive traumatic brain injury

・広島臨床検査 2020

成人男性に発症したStreptococcus agalactiaeによる感染性心内膜炎の一例

(中国中央病院 臨床検査科)

宇根 千尋、松田 浩明、廣井 綾子 田中 浩美、三浦 香苗、貞谷 啓太 門田 有紗、松田 綾香、羽原 利幸 瀬崎 伸夫

(中国中央病院 循環器内科)

中野 学

(中国中央病院 血液内科)

瀬崎 伸夫

【はじめに】Streptococcus agalactiae (S. agalactiae) は女性生殖器に常在するグラム陽性菌であり、新生児 の髄膜炎の原因菌として知られている。しかし、成人に おける感染性心内膜炎 (IE) は非常に稀である。今回 は、急速に進行した成人男性のS. agalactiaeによるIEの 一例を報告する。**【症例】**70代男性が頚部痛と発熱を 主訴に来院した。17年前に不整脈と心肥大を指摘され ていたが放置していた。某年1月、起床時に後頚部痛 と発熱があり他院を受診したが、原因不明とされ対症 療法を受けた。翌日、症状が悪化したため当院へ紹介 された。【検査と診断】来院時の検査で明らかな異常 は認められなかったが、血液検査で白血球と好中球の 増加が見られた。入院時の血液培養でS. agalactiaeが 検出され、心エコー検査で僧帽弁に20mmの疣腫と高 度の僧帽弁逆流が確認されたため、S. agalactiaeによ るIEと診断された。【治療と経過】患者は他院で僧帽 弁置換術と左心耳切除術を受け、感染は制御された。

【考察】急性IEは通常Staphylococcus aureusが原因だ が、今回の症例はS. agalactiaeによる稀なものであっ た。成人での感染は稀で、感染経路は不明であること が多い。本症例も急性の経過をたどり、慎重な評価が 必要であった。【まとめ】成人におけるS. agalactiaeに よる稀な感染性心内膜炎の一例を報告した。

右脚ブロックを呈した不安定狭心症の一例

(中国中央病院 臨床検査科)

松田 浩明、廣井 綾子、宇根 千尋 田中 浩美、三浦 香苗、貞谷 啓太 門田 有紗、松田 綾香、羽原 利幸 瀬崎 伸夫

(中国中央病院 循環器内科)

中野 学

> (中国中央病院 血液内科)

瀬崎 伸夫

【症例】70代女性が胸部圧迫感と腕のだるさを主訴 に来院した。既往歴には高血圧症、脂質異常症、骨粗 鬆症があった。 症状は某年8月から現れ、 歩行時や重 い荷物を持った際に悪化。近医で血液検査とホルター 心電図を受けたが、明らかな異常は認められなかっ た。翌年2月に症状が改善しないため、当院内科を受 診した。**【来院時現症と検査結果**】来院時の血圧は 146/81mmHg、脈拍102bpm、SpO2は98%であり、心音 に整脈が認められたが、Levine II/VIの収縮期雑音が聴 取された。血液検査および胸部X線検査、CT検査でも 明らかな異常は確認されなかったが、心電図検査では 洞調律と右脚ブロック(RBBB)が認められた。心臓超 音波検査では左室前壁中隔中部から心尖部にかけて壁 運動の低下が確認され、不安定狭心症と診断された。

【治療と経過】患者は他院へ転院し、カテーテル検査 で左前下行枝(LAD)に高度な狭窄が認められ、ステ ント留置が行われた。治療後、心電図でRBBBは消失 した。【考察】右脚ブロック (RBBB) は心筋虚血に 対して感度が低いが、特に新規のRBBBは急性冠症候 群(ACS)におけるLAD近位部閉塞の兆候として重要 である。本症例では、初診時に重大な異常が見られな かったが、新規RBBBが唯一の異常所見であった。この ことから、新たにRBBBが出現した場合は、ACSの可能 性を考慮し、追加の検査や注意深い観察が必要である と考えられた。

· 日呼外会誌 35巻 5号 2021.7

肺癌を合併し退縮した巨大肺嚢胞の1例

(中国中央病院 呼吸器外科)

荒木 恒太、平野 豊、鷲尾 一浩 (中国中央病院 呼吸器内科)

松本 千晶、八杉 昌幸、池田 元洋 尾形 佳子、玄馬 顕一

(中国中央病院 病理 診断科)

戸田 博子

−背景.肺嚢胞壁は肺癌の発生母地となるこ とが知られており、巨大肺嚢胞でも同様とされる。巨大 肺嚢胞の臨床経過は多様であるが増大もしくは不変の ことが多く、退縮した報告は稀でありその機序も不明 である。今回われわれは巨大肺嚢胞に肺癌を合併し、 肺嚢胞の退縮を認めた症例を経験した。症例. 72歳男 性。主訴は左背部の違和感。胸部CT検査で左肺尖部 に壁側胸膜浸潤を疑う4cm大の腫瘤影を認めた。10年 前の胸部CT検査では左上葉に11cm大の巨大肺嚢胞が 存在したが、その巨大肺嚢胞の大部分は腫瘤に置換さ れ、3cm大の肺嚢胞が残存するのみとなっていた。壁 側胸膜合併を伴う左上葉切除+ND2a-2を施行し、病 理診断で嚢胞壁と連続性のある腺癌と診断された。CT 検査所見の経時的変化・病理所見からは、巨大肺嚢胞 の嚢胞壁もしくはその近部に発生した肺癌が巨大肺嚢 胞への空気の流入を阻害することで嚢胞が退縮したと 考えられた。結論. CT検査の経時的変化と病理所見よ り、肺癌を合併した巨大肺嚢胞退縮の機序が示唆され た1例を経験したので、考察を加えて報告する。

· 日呼外会誌 35巻 5号 2021.7

肺癌術後に発症した重症Clostridioidesdifficile infection の 1 例 (中国中央病院 呼吸器外科)

> 荒木 恒太、鳥越英次郎、平野 豊 鷲尾 一浩

要旨 肺癌術後に重症Clostridioides difficile infection (CDI)を発症した症例を経験した。71歳女性の肺腺癌に対し左肺S1+2区域切除を行った。肺瘻遷延による胸腔ドレーン留置に伴って術後7日目まで抗菌薬投与を行った。術後8日目に退院したが術後13日目に遷延性・遅発性気漏と胸膜炎が疑われ抗菌薬を再開した。術後19日目に嘔吐下痢が出現しCDトキシン陽性であったことからCDIと診断した。重症CDIであったがvancomycin, metronidazoleと集中治療が奏功し治癒が得られた。高齢や担癌の免疫低下状態ではCDI発症リスクが高いとされる。消化器外科や整形外科と比較し呼吸器外科での術後CDI発症の報告は稀であったが、基礎疾患を有する高齢者肺癌手術の増加や術式の多様化もあり、今後は呼吸器外科術後においても抗菌薬の適正使用と周術期管理に一層の注意が必要と考えられる。

Blood Coagulation and Fibrinolysis 32:312–316 2021.
 No correlation between mean platelet volume and carotid artery thickness in patients with diabetes at

intermediate or high risk for cardiovascular diseases

(aDepartment of Clinical Laboratory, bDepartment of Hematology, Chugoku Central Hospital, Fukuyama and cDepartment of Hematology, Okayama University Medical School)

Keita Sadatania Kenji Niiyac Ichiyo Miyamotoa Mari Nakanoa

Toshiyuki Habaraa and Nobuo Sezakia,b The number of patients with diabetes with a risk of cardiovascular diseases (CVDs) is increasing worldwide, leading to a higher demand for evaluating atherosclerosis. Recently, the mean platelet volume (MPV) available from complete blood count is gaining attention as a marker of underlying atheroscleroticlesions. In the current study, we examined whether MPV can predict carotid atherosclerosis in patients with diabetes at an intermediate or high risk for CVD. A total of 224 patients with diabetes aged 36-85 years who underwent carotid ultrasound examination were assessed. The risk of CVD was evaluated using the Suita score. The greatest carotid intima-media thickness (IMT) in each common carotid artery (CCA Max-IMT), carotid bulb, internal carotid artery, or external carotid artery (Total Max-IMT) was measured. Subsequently, the relationship between MPV and IMT was analyzed. Patients were divided into three groups according to their MPV values (10.2 fl, tertile 3). A correlation was observed between MPV and platelet count (P<0.001), platelet distribution width (P<0.001), and glycated hemoglobin (P=0.04); however, multivariate logistic regression

· 臨床血液 2022

視力障害を契機に診断された慢性骨髄性白血病

(中国中央病院 血液内科)

野村 奈穂、平谷信太郎、黒井 大雅 岡本 幸代、

(中国中央病院 眼科)

的場 亮

(ひがき眼科)

桧垣 卓夫

20歳の外国人男性が短期就労のため来日中に両眼の視力低下を自覚し、眼科を受診した。検査では、右眼と左眼ともに矯正視力が0.5に低下しており、眼底検

香で両眼に網膜出血(Roth斑)や網膜静脈の拡張・蛇 ・ 医事業務 Vol.28 No.597 P25-27 2021 2020 行が認められた。OCT検査では、網膜出血に相当する 高反射病変が確認されたため、白血病性網膜症が疑わ れ血液検査を実施。その結果、2系統の血球増多と貧 血、白血球数の異常増加、幼若顆粒球の出現が確認さ れたため、精査加療を目的に当院に紹介された。診察お であった。治療として、白血球数のコントロール目的で ヒドロキシカルバミドが開始され、後に慢性骨髄性白血 病、慢性期と診断されダサチニブの内服治療が行われ た。治療の結果、血球増多は改善し、治療開始7週間後 には矯正視力が右1.5、左1.5まで回復した。また、初診 ・レジデントノート Vol.24 No.2 P293-305 2022 2021 時に見られた眼底およびOCTの異常所見も消失した。 白血病に伴う眼病変は網膜に現れることが多く、本症例 はその一例である。慢性骨髄性白血病における眼病変 は少ないが、過去の症例検討から白血球増多が過粘稠 の発症に寄与している可能性が示唆されている。本症 ・月刊薬事 Vol.64 No.3 P.602-608 2022 2021 例は眼症状から疾患が発見された貴重な事例である。

治療に導くエンドの秘訣 P150-153 ヒョーロン・パブリッシャーズ 2020 マイクロスコープと超音波装置を用いた根管内破折 ファイル片の除去症例

> (日本鋼管福山病院 医師) 永原 隆吉

· Dental Magazine Vol.175 P14-17 2020 2020 歯内療法におけるCBCTの活用・有用性

> (日本鋼管福山病院 医師) 永原 隆吉

・医療検査と自動化 Vol.46 Supple.1 P10-11 2021 2020 合成抗菌剤・免疫抑制剤ジアフェニルスルホンの副作用 によるHbA1c低値事例

> (日本鋼管福山病院 医療従事者) 井上 悦子

- ・医療検査と自動化 Vol.46 Supple.1 P12-13 2021 2020 HbA1cが異常低値を示した東南アジア系外国人2症例 · 日本歯科保存学雑誌 Vol.64 No.4 P285-295 2021 2021 (日本鋼管福山病院 医療従事者) 井上 悦子
- ・地域連携 入退院と在宅支援 Vol.13 No.4 P77-81 2020 2020 効果的な協働のための退院支援業務・体制の改善 (日本鋼管福山病院 医療従事者) 小林 朋子

退院支援の効率化

~どこからでもアクセス可能なタイムスケジュール表の作成~ (日本鋼管福山病院 医療従事者) 岡﨑真由美

よび画像検査では脾腫が認められ、骨髄穿刺はdry tap ・漢方と最新治療 Vol.30 No.4 P.269-275 2021 2021 慢性維持透析患者に合併する諸症状に対する漢方治療 (日本鋼管福山病院 医師) 和田健太朗

> 急性腎障害(AKI)・急性腎不全に対する薬の使い方 (日本鋼管福山病院 医師) 和田健太朗

> 救急/急性期・病棟での漢方製剤の使い方 第4章 患者背景に合わせた漢方製剤の使い方 1 高齢者 (日本鋼管福山病院 医師)

> > 和田健太朗

· 日本臨床外科学会雑誌 Vol.82 No.4 P723-731 2021 2021 CA19-9産生胃癌・直腸癌の同時性重複癌の1例 (日本鋼管福山病院 医師) 満吉 将大

· Orthopaedics Vol.35 No.1 P.53-60 2022 2021 靭帯 (1):内側側副靭帯損傷の診断と治療 (日本鋼管福山病院 医師) 髙原 康弘

・膝周囲骨切り術のすべて P.232-237 メジカルビュー社 2021 骨片間の転位

> (日本鋼管福山病院 医師) 髙原 康弘

遅延型自家歯牙移植術と複数の歯周外科治療が奏功した 広汎型慢性歯周炎(Stage Ⅲ Grade A)の1症例

(日本鋼管福山病院 医師)

永原 隆吉

• The International Journal of Periodontics & Restorative Dentistry Vol.41 No.5 e205-212 2021 2021 Endodontic Approach and Periodontal Regenerative Therapy for a Mandibular Right Cetral Incisor びまん性大細胞型B細胞リンパ腫の1例 Affected by a Perforation and Cemental Tear

> (日本鋼管福山病院 医師) 永原 隆吉

・医療検査と自動化 Vol.46 No.5 P586-593 2021 2021 HbA1c測定装置HLC-723G11 Variant モードの性能評価

(日本鋼管福山病院 医療従事者)

井上 悦子

・臨床透析 Vol.38 No.6 P597-605 2022 2022.6 透析患者に対する漢方薬

> (日本鋼管福山病院 医師) 和田健太朗

・漢方と最新治療 Vol.31 No.4 P247-252 2022 2022.8 血液維持透析患者の出血関連合併症に対する治打撲一方 ・日本歯内療法学会雑誌第44巻第2号令和5年5月 2023 の効果について

> (日本鋼管福山病院 医師) 和田健太朗

· Tradional & Kampo Medicine 2022 9 P125-127 2022 Significance of Kampo medicine in chronickidney disease(CKD)and hypertension "1st international Symposium on Kampo Medicine"

> (日本鋼管福山病院 医師) 和田健太朗

· 日本歯科保存学会雑誌 Vol.65 No.5 P294-304 2022 2022 歯内・歯周疾患について-成因の異なる3症例 (日本鋼管福山病院 医師)

永原 隆吉

· 医事業務 Vol.29 No.632 P16-18 2022 2022 あなたの時間を守ります

~待ち時間の有効活用の取り組み~

(日本鋼管福山病院 医療従事者) 立木真愉美

・日本透析医会雑誌 VOL.38 NO.3 DECEMBER.2023 2023 透析患者における漢方薬治療の実際

> (日本鋼管福山病院 医師) 和田健太朗

• Gastroenterolongical Endoscopy(0387-1207)65巻12号Page24001-2406(2023.12) 2023 節外病変として胃十二指腸に小白色扁平隆起を伴った

(日本鋼管福山病院 医師)

田口 健一

・癌と化学療法 VOL.50 (2023) 2023

四次治療でのCapeOX療法にて臨床的CRとなった CA19-9産生胃癌のリンパ節転移再発の1例

(日本鋼管福山病院 医師)

土井 雄喜

· Archives of Orthopaedic and Trauma Surgery (2023) 2023 Mid-term results of medial open-wedge high tibial osteotomy based on radiological grading of osteoarthritis

(日本鋼管福山病院 医師)

髙原 康弘

歯内-歯周疾患|型の2症例-感染根管治療症例と意図的 再植術症例-

(日本鋼管福山病院 医師)

永原 降吉

· [Clinical Case Reports] Clin Case Rep.2023.Jul5;11(7):e7547 2023 Rare root canal morphology of maxillary second molars:A report three case

(日本鋼管福山病院 医師)

永原 隆吉

· Journal of Neuroendovascular Therapy 14 2020 Efficacy of the insertion-support guiding catheter in approaching intracranial or craniocervical lesions in patients with the difficulty of extracranial trans-arterial access

(大田記念病院)

Himeno T

Ota S

Ohtonari T

Kanbara M

Takemaru M

Nomura E

Kohriyama T

· Journal of Neuro-Oncology 147(1) 2020 Salvage gamma knife radiosurgery for active brain metastases from small-cell lung cancer after whole-brain radiation therapy: a retrospective multi-institutional study (JLGK1701)

(大田記念病院)

Nakazaki K

Yomo S

Kondoh T

Serizawa T

Kenai H

Kawagishi J

Sato S

Nagano O

Aiyama H

Kawai H

Hasegawa T

Iwai Y

Nagatomo Y

Kida Y

Nishigaki M

· Journal of Thrombosis and Thrombolysis 50(3) 2020

minor ischemic stroke patients with atrial fibrillation

(大田記念病院)

Nomura E

Himeno T

Kono R

Ota S

Takemaru M

Fukushima T

Clinical features and efficacy of reperfusion therapy in

Ota T Nishihara N

· Journal of Clinical Neuroscience 73 2020

Evaluation of radiological recurrence patterns following gamma knife radiosurgery for solitary meningioma previously treated via cranial surgery

(大田記念病院)

Nakazaki K

Hara K

Nishigaki M

Uno M

Journal of Neurological Sciences 412 2020
 Initial deterioration and intravenous methylprednisolone therapy in patients with myasthenia gravis

(大田記念病院)

Sugimoto T

Ochi K

Ishikawa R

Tazuma T

Hayashi M

Mine N

Naito H

Nomura E

Kohrivama T

Yamawaki T

· World Neurosurgery 137 2020

Facet joint- and nuchal ligament-sparing laminectomy is not inferior to conventional open-door laminoplasty from clinical and radiologic perspectives

(大田記念病院)

Ohtonari T

Kitagawa T

Ota T

Nishihara N

 Journal of Neurosurgery: Spine 34(3) 2020
 Neurosurgical versus endovascular treatment of spinal dural arteriovenous fistulas: a multicenter study of 195 patients

(大田記念病院)

Takai K

Endo T

Yasuhara T

Seki T

Watanabe K

Tanaka Y

Kurokawa R

Kanaya H

Honda F

Itabashi T

Ishikawa O

Murata H

Neurologia Medico-Chirurgica (Tokyo) 60(8) 2020
 Preliminary results on radiological hypermobility at upper adjacent disc level in posterior lumbar interbody fusion compared to advanced dynamic stabilization

(大田記念病院)

Ohtonari T

Kitagawa T

Tanaka T Nishimura Y Eguchi K Takami T Watanabe Y Nishida T Hiramatsu M Ohtonari T Yamaguchi S Mitsuhara T Matsui S Taniguchi M

Takamatsu K Nishiyama K Kario K Yagita Y Mizoguchi T Fujita K Ando D Kumamoto M Miwa K Arihiro S

Toyoda K; for the SAMURAI Study Investigators

- Uchikado H Hattori G Yamahata H
- · Cerebrovascular Diseases 49(6) 2020

Left atrial size and ischemic events after ischemic stroke or transient ischemic attack in patients with nonvalvular atrial fibrillation

(大田記念病院)

Tokunaga K Koga M Yoshimura S Okada Y Yamagami H Todo K Itabashi R Kimura K Sato S Terasaki T Inoue M Shiokawa Y Takagi M Kamiyama K Tanaka K Takizawa S Shiozawa M Okuda S Kameda T Nagakane Y

Hasegawa Y

Shibuya S Ito Y

Matsuoka H

· Journal of Neurosurgery: Spine 33(3) 2020 Microsurgical versus endovascular treatment of spinal epidural arteriovenous fistulas with intradural venous drainage: a multicenter study of 81 patients

(大田記念病院)

Takai K Endo T Yasuhara T Seki T Watanabe K Tanaka Y Kurokawa R Kanaya H Honda F Itabashi T Ishikawa O Murata H Tanaka T Nishimura Y Eguchi K Takami T Watanabe Y Nishida T Hiramatsu M Ohtonari T Yamaguchi S Mitsuhara T Matsui S Uchikado H Hattori G Horie N Yamahata H

Taniguchi M

· Breast Cancer Research and Treatment 184(1) 2020 · World Neurosurgery 148 2021 Impact of breast cancer subtype on clinical outcomes after gamma knife radiosurgery for brain metastases from breast cancer: a multiinstitutional retrospective study (JLGK1702)

(大田記念病院)

Aoyagi K Higuchi Y Matsunaga S Serizawa T Yomo S Aiyama H Nagano O Kondoh T Kenai H Shuto T Kawagishi J Jokura H Sato S Nakazaki K Nakaya K Hasegawa T Kawashima M Kawai H Yamanaka K Nagatomo Y

· 脊髄外科 34(3) 2020

腰椎後方椎体間固定術と比較した発展型動的制動術 の55歳以上における隣接椎間障害抑制効果

-Preliminary results-

(大田記念病院)

Yamamoto M

Sato Y

Aovagi T Matsutani T

Iwadate Y

大隣 辰哉、北川 雄大、西原 伸治 大田 泰正、小山 素麿

・電気学会論文誌 C (電子・情報・システム部門誌) 140(2) 2020 マハラノビスタグチ法を用いた心音異常の検出

(大田記念病院)

田頭 瑞萌、中川 隆文

Acute-phase intraoperative findings of traumatic spinal cerebrospinal fluid leakage

(大田記念病院)

Ohtonari T Noguchi S Nishihara N

· Endocrine Journal 68(1) 2021

Longest survival by the combination of radiationtherapy and resection in patient with metastatic spinal paragangliomas from primary-neck lesion with succinate dehydrogenase subunit B (SDHB) mutation

(大田記念病院)

Kitagawa T Ohtonari T Yamamoto J Nishihara N Nishigaki M Takekoshi K

· Human Genome Variation 8(1) 2021

A novel COL4A1 variant associated with recurrent epistaxis and glioblastoma

(大田記念病院)

Muto K Miyamoto R Terasawa Y Shimatani Y Hara K Kakimoto T Fukumoto T Osaki Y Fujita K Harada M Uehara H Takagi Y Izumi Y

· Odontology 109(1) 2021

Microbiome composition comparison in oral and atherosclerotic plaque from patients with and without periodontitis

(大田記念病院)

Isoshima D

Yamashiro K Matsunaga K Taniguchi M Matsubara T Tomida S Ota S Sato M Shimoe Y Kohrivama T Arias Z Omori K Yamamoto T Takashiba S

Yamamoto M Sato Y Serizawa T Kawagishi J Shuto T Yomo S Akabane A Aoyagi K Kawabe T Kikuchi Y Nakasaki K Gondo M Higuchi Y Takebayashi T

· European Journal of Neurology 28(5) 2021 weighted imaging hyperintensities in acute intracerebral hemorrhage

(大田記念病院)

Shiga Y Aoki S Hosomi N Nomura R Nakamori M Nezu T Tachiyama K Kamimura T Kinoshita N Shimomura R Hayashi Y Matsushima H Imamura E Ueno H Wakabayashi S

cnm-Positive Streptococcus mutans and diffusion- Journal of Stroke and Cerebrovascular Diseases 30(3) 2021 Clinical trial of the new stent retriever tron FX for both proximal and distal intracranial large vessel occlusions

(大田記念病院)

Imamura H Sakai N Yamagami H Satow T Matsumoto Y Imai K Ota S Horie N Kondo R Enomoto Y Yoshimura S Hirohata M Shibata M Matsumaru Y Ohara N Sakai C

· 脳血管内治療 6(4) 2021

· Clinical and Translational Radiation Oncology 32 2021 Stereotactic radiosurgery results for brain metastasis patients with renal cancer: a validity study of Renal Graded Prognostic Assessment and proposal of a new grading index (JLGK2101 Study)

(大田記念病院)

Okuno-Ito R

Nakano K

Kohriyama T

Maruyama H

横-S 状静脈洞部硬膜動静脈瘻に対する経動脈的塞 栓中に後天的吻合を通じて脳梗塞を来した 1 例

; T-01 trial Investigators

(大田記念病院)

姫野 隆洋、大隣 辰哉、鳥越佳香里 田中 朗雄、中道 淳仁、佐藤 恒太 健史、大田 慎三 宮嵜

·Neurosonology:神経超音波医学 34(1) 2021

左心耳閉鎖術後に脳梗塞を発症した3例

(大田記念病院)

桂藤 亜衣、寺澤 由佳、宮本 欣倫 中道 淳仁、姫野 隆洋、篠塚 修三 郡山 達男

· 脊髄外科 35(2) 2021

Myelopathyで発症したS状静脈洞硬膜動静脈瘻の2症例 · Neurology and Clinical Neuroscience 10 2022 (大田記念病院) A case of retinal vasculopathy with cerebral leukoencephalo

北川 雄大、大隣 辰哉、藤 圭太 山本 淳考

· 生体医工学 59(1) 2021

透析シャント音の音響分析による血管狭窄の判別方法

(大田記念病院)

田頭 瑞萌、中川 隆文

·神経治療学 38(4) 2021

重症筋無力症における有害事象を考慮したステロイド (経口,パルス療法)の使用

(大田記念病院)

杉本 太路、山脇 健盛、越智 一秀 郡山 達男

· Internal Medicine 61(17) 2022

Features of cerebral infarction due to left ventricular thrombus

(大田記念病院)

Terasawa Y Miyamoto Y Kohriyama T

· Internal Medicine 61(6) 2022

Association between the Suita score and stroke recurrence in patients with first-ever ischemic stroke: a prospective cohort study

(大田記念病院)

Miyamoto Y

Itava T

Terasawa Y

Kohriyama T

Journal of Stroke and Cerebrovascular Diseases 31(1) 2022
 Temporal validation of an assessment tool that predicts a possibility of home discharge for patients with acute stroke

(大田記念病院)

Itava T

Murakami Y

Ota A

Shimomura R

Fukushima T

Nishigaki M

Neurology and Clinical Neuroscience 10 2022

A case of retinal vasculopathy with cerebral leukoencephalopathy and systemic manifestations: long-term treatment with repeated courses of immunotherapy

(大田記念病院)

Muguruma K

Sugimoto T

Terada Y

Yuan J

Nomura E

Takashima H

Yamawaki T

Kohriyama T

Maruyama H

· Scientific Reports 12(1) 2022

Antimicrobial prescription practices for outpatients with uncomplicated cystitis in Japan

(大田記念病院)

Takahashi M

Hagiva H

Higashionna T

Nakano Y

Sato K

Haruki Y

Haruki M

Honda H

Ogawa H

Ueda K

Otsuka F

Archives of Physical Medicine and Rehabilitation 103(5) 2022
 Rehabilitation in acute COVID-19 patients: a Japanese retrospective, observational, multi-institutional survey

(大田記念病院)

Yamada Y

Kawakami M

Tashiro S
Omori M
Matsuura D
Abe R
Osada M
Tashima H
Shimomura T
Mori N
Wada A
Ishikawa A
Tsuji T

· Clinical Case Reports 10(4) 2022
Analysis of subgingival microbiota in monozygotic twins with different severity and progression risk of periodontitis

(大田記念病院)

Yamamoto T
Taniguchi M
Matsunaga K
Kawata Y
Kawamura M
Okubo K
Yamashiro K
Omori K
Takashiba S

Internal and Emergency Medicine 17(4) 2022
 Various effects of nutritional status on clinical outcomes after intracerebral hemorrhage

(大田記念病院)

Shiga Y Nezu T

Shimomura R

Sato K Himeno T Terasawa Y Aoki S Hosomi N Kohriyama T Maruyama H Journal of Stroke and Cerebrovascular Diseases 31(10) 2022
 Difficulty of the subtasks comprising bedwheelchair transfer in patients with subacute strokes: A cohort study

(大田記念病院)
Kitamura S
Otaka Y
Murayama Y
Ushizawa K
Narita Y
Nakatsukasa N
Matsuura D
Kondo K
Sakata S

· Journal of Neurosurgery 11 2022

Gamma knife radiosurgery for metastatic brain tumors from ovarian cancer: histopathological analysis of survival and local control. A Japanese multiinstitutional cooperative and retrospective cohort study

(大田記念病院)

Matsunaga S
Shuto T
Serizawa T
Aoyagi K
Hasegawa T
Kawagishi J
Yomo S
Kenai H
Nakazaki K
Moriki A
Iwai Y

Yamamoto T

 $\cdot \ Internal \ Medicine \ 61(6) \quad 2022$

Characteristics of ischemic versus hemorrhagic stroke in patients receiving oral anticoagulants: results of the PASTA study

(大田記念病院)

Suda S Abe A Iguchi Y Yagita Y Kanzawa T Okubo S Ohara N Mizunari T Yamazaki M Nakajima N

Kondo K Fujimoto S Inoue T Iwanaga T Terasawa Y Shibazaki K Kono Y Nakajima M Nakajima M Mishina M Adachi K Imafuku I Nomura K Nagao T Yaguchi H Okamoto S Osaki M Kimura K

Kato T

Kawashima M Shinya Y Kenai H Kawabe T Sato M Serizawa T Nagano O

Serizawa I Nagano O Aoyagi K Kondoh T Yamamoto M Onoue S

Nakazaki K Iwai Y Yamanaka K Hasegawa S

Hasegawa S Kashiwabara K

Saito N

; JLGK 1802 Study Group

Health & Social Care in the Community 30(2) 2022
 Association between participation in hospital-led community activities and sense of security in continued community living among older adults in a rural district of Japan: A cross-sectional study

(大田記念病院)

Anezaki S Sakka M

Noguchi-Watanabe M

Igarashi A Inagaki A

Sumikawa Tsuno Y

Omori J Ota A

Yamamoto-Mitani N

· Journal of Stroke 24(2) 2022

A practical grading scale for predicting outcomes of radiosurgery for dural arteriovenous fistulas: JLGK 1802 study

(大田記念病院)

Hasegawa H Shin M Kawagishi J Jokura H Hasegawa T · Journal of Neurological Sciences 434 2022

Prior direct oral anticoagulant dosage and outcomes in patients with acute ischemic stroke and non-valvular atrial fibrillation: A sub-analysis of PASTA registry study

(大田記念病院)

Mashiko T
Fujimoto S
Suda S
Abe A
Iguchi Y
Yagita Y
Kanzawa T
Okubo S
Todo K
Yamazaki M
Nakajima N
Kondo K

Nakajima N Kondo K Inoue T Iwanaga T Terasawa Y

Shibazaki K Kimura K

; PASTA Investigators

Neurosonology:神経超音波医学 35 (1) 2022経食道心臓超音波検査におけるバルサルバ負荷とコントラスト静注のタイミングに関する検討

(大田記念病院)

寺澤 由佳、坂井健一郎、荒井あゆみ 小松 鉄平、三村 秀毅、井口 保之

· 日本歯周病学会会誌 64(4) 2022

糖尿病教育入院患者を対象とした歯周炎症表面積 PISAによる歯周病重症度と動脈硬化との関連

(大田記念病院)

杉 典子、畑中 加珠、吉田 綾香 高柴 正悟

· 臨床神経学 62(12) 2022

発症5年以上の全身型重症筋無力症患者の重症筋無力症-日常生活動作スコアに関連する因子の検討:難治性の診断のために

(大田記念病院)

杉本 太路、山脇 健盛、内藤 裕之 大野 成美、儀賀麻由実、河野 智之 越智 一秀、郡山 達男、野村 栄一 丸山 博文

· Neurosurgical Review 46(1) 2023年

Short-term clinical and radiographic outcomes of chemonucleolysis with condoliase for painful lumbar disc herniation and analysis regarding intradiscal injection area

(大田記念病院)

Ohtonari T Torii R Noguchi S Kitagawa T Nishihara N

· Journal of Clinical Neuroscience 107 2023

The efficacy and safety of alteplase treatment in patients with acute ischemic stroke with unknown time of onset: -Real world data

(大田記念病院)

Terasawa Y Shimomura R Sato K Himeno T Inoue T Kohriyama T

· World Neurosurgery 171 2023

Gamma Knife Radiosurgery for Metastatic Brain Tumors from Uterine Cervical and Endometrial Carcinomas: Histopathological Analysis of Survival and Local Control. A Japanese Multi-Institutional Cooperative and Retrospective Cohort Study

(大田記念病院)

Matsunaga S
Shuto T
Serizawa T
Aoyagi K
Hasegawa T
Kawagishi J
Yomo S
Kenai H
Nakazaki K
Moriki A
Iwai Y
Yamanaka K
Yamamoto T

· European Journal of Neurology 30(7) 2023

Novel partial deletions, frameshift and missense mutations of CSF1R in patents with CSF1Rrelated leukoencephalopathy

(大田記念病院)

Ishiguro T
Konno T
Hara N
Zhu B
Okada S
Shibata M
Saika R
Kitano T
Toko M
Nezu T
Hama Y
Kawazoe T

Takahashi-Iwata I

Yabe I Sato K Takeda H Toda S Nishimiya J Teduka T Nozaki H Kasuga K Miyashita A Onodera O Ikeuchi T

Journal of Neurosurgery: Case Lessons 5(26) 2023
 Multifocal primary central nervous system angiosarcoma: illustrative case

(大田記念病院)

Hirai S Tao Y Nishimura H Nakazaki K Uno M

Journal of NeuroInterventional Surgery. jnis-2023-020670 2023
 Endovascular therapy for acute intracranial large vessel occlusion due to atherothrombosis: Multicenter historical registry

(大田記念病院)

Uchida K Yamagami H Sakai N Shirakawa M Верри М Toyoda K Matsumaru Y Matsumoto Y Todo K Hayakawa M Shindo S Ota S Morimoto M Takeuchi M Imamura H Ikeda H Tanaka K

Nomura T Sakakibara F Yoshimura S

JMIR Research Protocols 12 2023

Suda S

Detection of Atrial Fibrillation Using Insertable Cardiac Monitors in Patients With Cryptogenic Stroke in Japan (the LOOK Study): Protocol for a Prospective Multicenter Observational Study

(大田記念病院)

Katano T Kitagawa K Iguchi Y Fujimoto S Ono K Kano O Takekawa H Koga M Ihara M Morimoto M Yamagami H Terasaki T Yamaguchi K Okubo S Ueno Y Ohara N Kamiya Y Takeuchi M Yazawa Y Terasawa Y Doijiri R Tsuboi Y Sonoda K Nomura K Shimoyama T

Journal of Stroke and Cerebrovascular Diseases 32(4) 2023
 Differences in the difficulty of subtasks comprising the toileting task among patients with subacute stroke: A cohort study

(大田記念病院)

Kitamura S

Kutsuna A

Kimura K

Ishihara H

Kakita H

Sano T

Araki H

Otaka Y

Murayama Y

Ushizawa K

Narita Y

Nakatsukasa N

Matsuura D

Kondo K

Sakata S

· 老年歯科医学 38(2) 2023

脳梗塞を発症した高齢患者に対して入院早期から口腔管理 を実施した症例

(大田記念病院)

松永 一幸、古屋 純一

· SAGE Open Medical Case Reports 2020.6

A case report of fibroadenoma of the breast with characteristic cystic change on a cut surface

(Department of Breast Surgery, National Hospital Organization, Fukuyama Medical

Center, Hiroshima, Japan)

Kazuya Miyoshi

Hirotoshi Takahashi

(Department of Surgery, National Hospital

Organization, Fukuyama Medical Center,

Hiroshima, Japan)

Masaru Inagaki

(Department of Laboratory of Pathology,

National Hospital Organization, Fukuyama

Medical Center, Hiroshima, Japan)

Jiro Watanabe

Sohsuke Yamada

(Department of Pathology and Laboratory

Medicine, Kanazawa Medical University,

Ishikawa, Japan)

Sohsuke Yamada

Kenichi Mizutani

Abstract

Fibroadenoma with remarkable cystic change is very unusual. Opinions differ as to the interpretation of this lesion. Furthermore, there have been few reports focusing on its macroscopic view. We herein report a case of fibroadenoma in a 43-year-old woman. The patient presented herself to a medical doctor's office due to a rapidly growing breast tumor. Based on a

core needle biopsy, a benign lesion was suspected, and the tumor was surgically resected. On a macroscopic study, the cut surface of the tumor revealed a remarkably cystic and well-circumscribed lesion with an intracystic polypoid component. Microscopically, a variety of findings of epithelial and stromal proliferation were observed. This is an interesting case not only because a fibroadenoma with prominent cystic change is unusual but also because the breast tumor showed a characteristically cystic appearance on its macroscopic view.

Keywords: Fibroadenoma, cystic, macroscopic view, cystic fibroadenoma, intraductal fibroadenoma, intraductal fibroadenomatosis

· 泌尿器科紀要 66:251-257 2020.8

術者の立ち位置を交互に変換した腹腔鏡下前立腺全摘除術 の手術成績

(福山医療センター 泌尿器科)

長谷川泰久、松崎 信治、上野 剛志

岩根 亨輔

(広島市立安佐市民病院 泌尿器科)

村田 大城、三田 耕司

(小畠病院泌尿器科)

宮本 克利

(板橋中央総合病院 泌尿器科)

久留 優子

(たかの橋中央病院 泌尿器科)

金岡 隆平

(岡山大学病院 病理診断科)

柳井 広之

(山陽病院 泌尿器科)

水谷 雅巳

The clinical outcome of laparoscopic radical prostatectomy (LRP) was retrospectively investigated taking into consideration the surgeon's position during the procedure. The study cohort included 184 consecutive patients who had undergone LRP performed by a single surgeon from February 2013 to July 2018. During the study period, the surgeon stood alternately on either the left or right side of the patient. The D' Amico risk classification was low, intermediate and high in 26 (14.1%), 45 (24.5%) and 113 (61.4%) patients, respectively. Mean surgical duration was 203.5 minutes and mean estimated

blood loss was 437.6 ml. Nerve sparing (NS) was implemented in 82 (44.6%) patients. The mean period of having an indwelling urethral catheter was 5.0 days. Perioperative Clavien-Dindo degree ≥IIIa complications occurred in three (1.6%) patients. Except for cases with presurgical hormonal treatment, surgical margins were positive in 41 (22.3%) patients, among whom 23 (17.4%) had pT2 disease. The 5-year biochemical recurrence-free survival rate was 81.4%, and 84.8% of patients regained urinary continence at 12 months after surgery. Where the surgeon stood during LRP was not associated with significant differences in any parameter. However, the margin positive rate was higher on the side away from where the surgeon stood than the side closer to the surgeon (70.7% vs 29.3%). In conclusion, the position of the surgeon during LRP does not influence the outcome.

(Hinyokika Kiyo 66 : 251-257,2020 DOI : 10.14989/ ActaUrolJap_66_8_251)

Key words: Laparoscopic prostatectomy, Surgeon's standing position

· GASTROINTESTINAL ENDOSCOPY Volume 93, No.4:2021 2020.11

A rare finding from a colonoscopy and laparoscopy of a patient with mesenteric panniculitis mimicking cancerous peritonitis

> (福山医療センター) Masahiro Sakata Tatsuya Toyokawa Ryosuke Hamano Shinya Otsuka Masaru Inagaki

Commentary

There are several key learning points to be gleaned from this case. First, Mirizzi syndrome can, and does, sometimes mimic malignant biliary obstruction. Having encountered more than a few cases of Mirizzi syndrome myself, I can attest to the fact that it can confound surgeons, radiologists, and gastroenterologists alike.

Many patients with Mirizzi syndrome have significant peribiliary inflammation that can cloud the generation and interpretation of imaging studies. During a cholecystectomy, more than a few expert surgeons I know have failed to correctly diagnose Mirizzi syndrome because of the loss of normal tissue planes and inflammation mimicking neoplastic tissue. A solid awareness and understanding of the different forms of Mirizzi syndrome is key to accurate diagnosis and treatment.

The second key lesson of this case is that, in some cases, a change of patient position during ERCP (or a change in the position of the C-arm of the fluoroscopy unit, if so equipped) can dramatically change your ability to interpret a cholangiogram. In this case, a change in the patient's position allowed for correct interpretation of the images and treatment of the patient, emphasizing the value of all of this information.

Douglas G. Adler, MD, FASGE
GIE Senior Associate Editor
University of Utah School of Medicine
Salt Lake City, Utah
Mohamed O. Othman, MD
Associate Editor for Focal Points

・小児の脳神経 2020.11

小児期脳脊髄液漏出症診療の現況

(福山医療センター 脳神経外科) 守山 英二 (姫路赤十字病院 麻酔科) 石川 慎一 (福山医療センター 小児科) 藤原 倫昌

Abstract: Objectives: To describe the clinical and radiographic manifestations of spinal cerebral spinal fluid (CSF) leak in children.

Subjects and methods: This study included patients 15 years of age or younger diagnosed as spinal CSF leak, between December 2015 and April 2019, at Fukuyama Medical Center. We evaluated 38 children (18 boys and 20 girls) with spinal CSF leak (age at onset of symptoms: 10-15 years, mean 13.4 years).

Results: All patients presented with headaches with postural nature, but only one of them presented with a typical orthostatic headache. Unlike adult patients, lightheadedness upon standing was a common symptom, found in 27 patients (71.1%). Among these patients, 18 had been diagnosed as orthostatic

dysregulation (OD), and 2 as postural tachycardia syndrome (POTS) before their visit to Fukuyama Medical Center. Sleep arousal disorder was also a common symptom, found in 13 patients (34.2%). Spinal fat-saturated T2-weighted magnetic resonance imaging (MRI) showed abnormal epidural high intensity in all patients. Fringed epidural space sign (FESS) at the thoracic spine was the universal findings. Three patients were cured with bed rest and/ or continuous epidural fluid infusion. Thirty-five patients underwent epidural blood patch (EBP) treatment (1-6 times, mean 2.5) Overall, outcome was excellent in 17 patients, good in 14, fair in 6, and poor in 1. Mild to moderate pain around the injection site for several days was common, but no significant complications were observed.

Conclusions: Spinal CSF leak in childhood may not be so rare as previously considered. Lightheadedness upon standing (including OD, and POTS), and sleep arousal disorder seems to be characteristic to pediatric patients with spinal CSF leak. Most patients can be treated effectively and safely with EBP treatments.

Key words: spinal cerebral spinal fluid leak, epidural blood patch, fringed epidural space sign, orthostatic dysregulation, postural tachycardia syndrome

・癌と化学療法 2020.12

腫瘍の局在や発育形式による胃GISTに対する術式 の検討

> (福山医療センター 消化器外科) 大塚 真哉、濱野 亮輔、常光 洋輔 稲垣 優 (福山医療センター 消化器内科)

(福山医療センター 消化器内科) 堀井城一朗

【要旨】胃GISTに対する胃局所切除術は部位、発育形式などで術式や難易度が異なる。2005年1月~2020年1月までの胃GIST手術症例52例を対象に検討を行った。男性26例、女性26例、平均年齢は67歳であった。局在部位はU32例、M16例、L4例、発育形式は内腔発育型21例、壁外発育型14例、壁内型17例であった。開腹手術26例、腹腔鏡下手術26例であった。開腹手術の内訳は局所切除22例、胃切除4例であった。腹腔鏡下手術の適応は5cm以下とし局所切除24例で、うちlaparoscopy

and endoscopy cooperative surgery (LECS) は7 例であった。出血量、腫瘍径、術後在院日数は有意に腹腔鏡下手術のほうが低かった。内腔発育型および壁内型は18例に認め、うち2例は漿膜を切開しエンドループにて絞り込む、いわゆる反転法にて単孔式手術を施行した。LECS症例7例のうち4例はinverted LECS法にて、2例はNEWS法、1例は反転法にて行った。腹腔鏡下手術は腫瘍の発育形式にかかわらず有用であった。

Surgical Case Reports 2021.1

Prenatally diagnosed congenital pyloric atresia in consecutive three siblings: a case report

(福山医療センター)

Ryuta Saka
Seika Kuroda
Souji Ibuka
Tasuku Kodama
Toshimichi Hasegawa
Dan Yamamoto
Toshimichi Hasegawa

Abstract

Background: Congenital pyloric atresia (CPA) is a rare gastrointestinal anomaly frequently associated with epidermolysis bullosa (EB). Although the complications of familial isolated CPA are minor, delays in diagnosis can increase the chances of morbidity.

Case presentation: Three female infants born to a Japanese mother presented with CPA at birth. There was no consanguinity between the parents, and the spacing between pregnancies was 2 years in each case. All 3 siblings had a prenatal diagnosis of CPA owing to polyhydramnios and a dilated stomach, without dilatation of the rest of the gastrointestinal tract. All patients underwent reconstructive surgeries for establishing bowel continuity (Case 1, pyloromyotomy; Case 2, gastroduodenostomy in a diamond fashion; and Case 3, gastroduodenostomy in a side-to-side fashion) soon after birth. Their postoperative courses were uneventful, and they grew up healthily, without any complications.

Conclusion: Fetal ultrasonography is useful for diagnosing CPA prenatally. Successful prenatal diagnosis can lead to timely intervention after birth. **Keywords:** Congenital pyloric atresia, Prenatal diagnosis, Familial

· Journal of Radiation Research 2021.1

A multi-institutional survey of the quality of life after treatment for uterine cervical cancer: a comparison between radical radiotherapy and surgery in Japan

> (Department of Radiation Oncology, National Hospital Organization Fukuyama Medical Center, Hiroshima, Japan)

Yuko Kaneyasu

Tomio Nakagawa

(Department of Radiation Oncology, Graduate School of Biomedical Sciences, Hiroshima University, Hiroshima, Japan)

Yuko Kaneyasu

(Department of Obstetrics and Gynecology, Chugoku Rosai Hospital, Hiroshima, Japan)

Hisaya Fujiwara

(Department of Obstetrics and Gynecology, Graduate School of Biomedical Sciences, Hiroshima University, Hiroshima, Japan)

Hisaya Fujiwara

(Radiation and Proton Therapy Center, Shizuoka Cancer Center, Shizuoka, Japan)

Tetsuo Nishimura

(Department of Radiation Oncology, University of Tsukuba, Ibaraki, Japan) Hideyuki Sakurai

Ayako Ohkawa

(Department of Radiation Oncology, Fukaya Red Cross Hospital, Saitama, Japan)

Tomoko Kazumoto

(Department of Radiation Oncology, Saitama Cancer Center, Saitama, Japan)

Tomoko Kazumoto

Hiroki Ushijima

(Department of Therapeutic Radiology, Tokushima University Graduate School, Tokushima, Japan) Hitoshi Ikushima

(Department of Diagnostic Radiology and Radiation Oncology, Chiba University Graduate School of Medicine, Chiba, Japan)

Takashi Uno

(Hyogo Ion Beam Medical Center, Hyogo, Japan)

Sunao Tokumaru

(Department of Radiology, Saga University, Saga, Japan)

Sunao Tokumaru

(Department of Radiology, Kansai Medical University, Osaka, Japan)

Yoko Harima

(Radiation Oncology Center, St.Marianna University School of Medicine Hospital, Kanagawa, Japan)

Hiromichi Gomi

(Radiation Therapy Center, Okinawa Chubu Hospital, Okinawa, Japan)

Takafumi Toita

(Department of Radiology, Graduate School of Medical Science, University of the Ryukyus, Okinawa, Japan)

Takafumi Toita

(Department of Radiology, TokyoMetropolitan Tama Medical Center, Tokyo, Japan)

Midori Kita

(Department of Radiation Oncology, Saitama Medical University International Medical Center, Saitama, Japan)

Shin-ei Noda

Shingo Kato

(Department of Radiation Oncology, Gunma University Graduate School of Medicine, Gunma, Japan)

Shin-ei Noda

Tatsuya Ohno

(Department of Radiation Oncology, Saitama Medical University SaitamaMedical Center, Saitama, Japan)

Takeo Takahashi

(Department of Radiation Oncology, National Hospital Organization Mito Medical Center, Ibaraki, Japan)

Ayako Ohkawa

(Department of Gynecology, St.Marianna University School of Medicine, Toyoko Hospital, Tokyo, Japan)

Akiko Tozawa-Ono

(Department of Obstetrics and Gynecology, Mitsui Memorial Hospital, Tokyo, Japan)

Yoko Hasumi

(Department of Gynecology, Saitama Cancer Center, Saitama, Japan)

Yoko Hasumi

(Division of Gynecology, Shizuoka Cancer Center, Shizuoka, Japan)

Yasuyuki Hirashima

(Department of Public Health, Kurume University School of Medtioicine, Fukuoka, Japan)

Yuzuru Niibe

(Department of Epidemiology, Infectious Disease Control and Prevention, Graduate school of Biomedical and Health Sciences, Hiroshima University, Hiroshima, Japan) Tomoyuki Akita Junko Tanaka

ABSTRACT

This study aimed to research the post-treatment quality of life (QOL) between radiotherapy (RT)and operation (OP)-treated early cervical cancer survivors, using separate questionnaires for physicians and patients. We administered an observational questionnaire to patients aged 20-70 years old with Stages IB1-IIB cervical cancer who had undergone RT or OP and without recurrence as outpatients for ≥6months after treatmen. We divided 100 registered patients equally into two treatment groups (n = 50 each). The average age was 53 and 44 years in the RT and OP groups, respectively. The RT group included 34 and 66% Stage I and II patients, respectively, whereas the OP group included 66 and 34% Stage I and II patients, respectively. The OP group included 58% of patients with postoperative RT. Combination chemotherapy was performed in 84 and 48% of patients in the RT and OP groups, respectively. On the physicians' questionnaire, we observed significant differences in bone marrow suppression (RT) and leg edema (OP). On the patients' questionnaire, significantly more patients had dysuria and leg edema in the OP group than in the RT group, and severe (Score 4–5) leg edema was significantly higher in the post-operative RT group than in the OP only group. The frequency of sexual intercourse decreased after treatment in both groups. On the patients' questionnaire, there were no significant differences between the two groups regarding sexual activity. These findings are useful to patients and physicians for shared decision-making in treatment choices. The guidance of everyday life and health information including sexual life after treatment is important.

Keywords: uterine cervical cancer; radiotherapy;

Keywords: uterine cervical cancer; radiotherapy; surgery; quality of life; questionnaire; sexuality

· Anticancer Res 41: 2147-2155 (2021) 2021.4 Comparison of Inflammation-based Prognostic

Comparison of Inflammation-based Prognostic Scores in Patients With Biliary Tract Cancer After Surgical Resection

(Department of Surgery, National Hospital Organization Fukuyama Medical Center, Hiroshima, Japan)

MASASHI UTSUMI KOJI KITADA

NAOYUKI TOKUNAGA

YUSUKE YOSHIDA

TORU NARUSAKA

RYOSUKE HAMANO

HIDEAKI MIYASOU

YOUSUKE TSUNEMITSU

SHINYA OTSUKA

MASARU INAGAKI

Abstract. Background/Aim: Inflammation-based prognostic scores are proven prognostic biomarkers in various cancers. This study aimed to identify a useful prognostic score for patients with biliary tract cancer (BTC) after surgical resection. Patients and Methods: This retrospective study recruited 115 patients with BTC during 2010-2020. The relationship between clinicopathological variables, including various prognostic scores and overall survival (OS), was investigated using univariate and multivariate analyses. Results: BTC included 58 cholangiocarcinoma, 29 gallbladder

carcinoma, 16 ampullary carcinoma, and 12 perihilar cholangiocarcinoma cases. A significant difference was detected in OS of patients with a Japanese modified Glasgow prognostic score (JmGPS) 0 (n=62) and JmGPS 1 or 2 (high JmGPS) (n=53). In the multivariate analysis, tumour differentiation (p=0.014) and a high JmGPS (p=0.047) were independent prognostic factors. Conclusion: The high JmGPS was an independent prognostic predictor after surgical resection and was superior to other prognostic scores.

·日本呼吸器外科学会 2022.3

Trapped lungを呈し肺剥皮術を要した検診発見の 慢性自然気胸の1例

(福山医療センター 呼吸器外科)

二萬 英斗、吉近 諒、高橋 健司 Trapped lung とは遠隔期の炎症に起因する線維性被膜 で臓側胸膜が覆われ肺拡張が制限された状態である。 患者は23歳、男性。検診で左気胸を指摘され当院外来 を受診した。胸部X線写真、CTでは左肺は完全に虚脱 していたが、自覚症状が無いため気胸の発症時期は不 明であった。前年の検診時の胸部X線写真で気胸はな く、左肺尖にブラを認めた。胸腔ドレナージ後のCT で は肺の拡張は不十分であり、臓側胸膜の肥厚を認め た。肺拡張が得られず空気漏れも停止しないため手術 を施行した。左肺上葉に破綻したブラを認めブラ切除を 行った。左肺は白色調の厚く硬い被膜で覆われ拡張不 良であり、trapped lungと診断した。肺剥皮術を行い肺 拡張の改善が得られた。術後、肺の拡張は徐々に改善 し、術後6ヵ月の胸部X線写真でほぼ完全に拡張した。 極めて稀な症例と思われ、文献的考察を加え報告する。

・耳鼻咽喉科 1 (4): 456-464 2022 2022.4 **唾液腺手術**

(福山医療センター 耳鼻咽喉・頭頸部外科) 中谷 宏章

【はじめに】手術時の出血を減らすためには、術野の解剖を熟知した上で個々の操作でどのようにすれば出血を起こさないで済むか、術前にその対応法を身につけておくことが必要であるが、唾液腺手術においては肉眼的な観察が難しい手術もあるため、手術を行いやすいセッティングや詳細な観察ができる準備をしておくことも大切である。本稿ではそのような点も考慮して唾液腺手術における術中出血を減らす工夫について述べるが、悪性腫瘍の手術ではその進行程度によりさまざまなバリ

エーションが生じるので、症例ごとにあまり差異の出ない良性疾患の代表的な手術について述べる。

Annals of Surgical Treatment and Research 2022.8
 Preoperative lymphocyte-to-C-reactive protein ratio predicts hepatocellular carcinoma recurrence after surgery

(Department of Surgery, National Hospital Organization Fukuyama Medical Center, Fukuyama, Japan)

Masashi Utsumi

Masaru Inagaki

Koji Kitada

Naoyuki Tokunaga

Midori Kondo

Yuya Sakurai

Kosuke Yunoki

Rvosuke Hamano

Hideaki Miyasou

Yousuke Tsunemitsu

Shinya Otsuka

Purpose: This study was performed to determine the prognostic value of lymphocyte-to-CRP ratio after curative resection for hepatocellular carcinoma.

Methods: Between July 2010 and October 2021, 173 consecutive patients (144 male, 29 female) who underwent surgical resection for pathologically confirmed hepatocellular carcinoma were included in this retrospective study. Cox regression analysis was used to evaluate the relationship between clinicopathological characteristics and recurrence-free survival (RFS) and overall survival (OS). A P-value of <0.05 was considered statistically significant.

Results: The patients (mean age, 71 years) were stratified into high (\geq 9,500, n = 108) and low (\leq 9,500, n = 65) lymphocyteto- CRP ratio groups. The low lymphocyte-to-CRP ratio group had significantly worse RFS and OS. Low lymphocyte-to- CRP ratio (hazard ratio [HR], 1.865; 95% confidence interval [CI], 1.176–2.960; P = 0.008), multiple tumors (HR, 3.333; 95% CI, 2.042–5.343; P < 0.001), and microvascular invasion (HR, 1.934; 95% CI, 1.178–3.184; P = 0.009) were independently associated with RFS, whereas low albumin-to-globulin ratio (HR, 2.270; 95% CI, 1.074–4.868; P = 0.032), α -FP of \geq 25 ng/mL (HR,

2.187; 95% CI, 1.115-4.259; P = 0.023), and poor tumor differentiation (HR, 2.781; 95% CI, 1.041-6.692; P = 0.042) were independently associated with OS. Lymphocyte-to-CRP ratio had a higher area under the curve (0.635) than other inflammation-based markers (0.51-0.63).

Conclusion: Lymphocyte-to-CRP ratio is superior to other inflammation-based markers as a predictor of RFS in patients with surgically resected hepatocellular carcinoma.

[Ann Surg Treat Res 2022;103(2):72-80]

Key Words: Biomarkers, Hepatocellular carcinoma, Prognosis, Regression analysis, Survival

・日臨外会誌 83(8),1527-1532, 2022 2022.8 膵頭部intraductal oncocytic papillary neoplasm の1例 (福山医療センター 肝胆膵外科) 櫻井 湧哉、内海 方嗣、近藤 碧

柚木 宏介、德永 尚之、稲垣 優 (福山医療センター 病理診断科) 表 梨華

膵intraductal oncocytic papillary neoplasm (IOPN) は膵癌取扱い規約(第7版)で IPMN などと同列にあ たる膵癌前病変の一つとして分類された。今回われわ れはIOPNの1切除例を経験したので、疾患分類の変遷 など文献的考察を加えながら報告する。症例は47歳の 女性で、主訴は特になかった。1年前に検診の腹部超 音波検査で膵頭部に膵嚢胞性病変を指摘され、近医で 分枝膵管型IPMN と診断された。翌年に壁在結節の増 大を認め、high risk stigmata に該当し、亜全胃温存膵 頭十二指腸切除術を施行した。病理組織所見では、膵 頭部で嚢胞状に拡張した分岐膵管や類円形の核を有す る腫瘍細胞の乳頭状増殖を認めた。免疫組織化学的染 色を併施し、IOPNと最終診断した。経過は良好で術後 14日目に退院した。

・日本小児アレルギー学会誌 2022.8 乳清たんぱくを含むプロテイン飲料により即時型 反応を呈した牛乳アレルギーの3例 (福山医療センター 小児科)

藤原 倫昌、浦山 建治

・癌と化学療法 2022.12 胃GISTに対する腹腔鏡下手術の検討

(福山医療センター 消化器外科)

大塚 真哉、濱野 亮輔、常光 洋輔 稲垣 優 (福山医療センター 消化器内科) 堀井城一朗

【要旨】胃gastrointestinal stromal tumor (GIST) に 対する標準治療はリンパ節郭清も不要で胃局所切除術 とされ、腹腔鏡下手術のよい適応である。腹腔鏡下手 術を中心に2005年1月~2022年3月までの胃GIST手術 症例60例を対象に検討を行った。局在部位はU38例、 M18例、L4例、発育形式は内腔発育型または壁内(混 合)型42例、壁外発育型18例であった。開腹手術28 例、腹腔鏡下手術32例であった。腹腔鏡下手術の適応 は5cm以下とし、内訳は従来法の楔状部分切除19例、 反転法3例、LECS8例、噴門側胃切除2例であった。 手術時間、出血量、腫瘍径、術後在院日数は有意に腹 腔鏡下手術のほうが低かった。modified-Fletcher分類 による再発リスク分類では超低および低リスク49例、 中リスク6例、高リスク5例であった。再発は腹腔鏡下 手術には認めず、開腹手術の3例にのみ認め、10年生 存率は両群ともに100%、5年無再発生存率は腹腔鏡で 100%、開腹では87%であった。様々な方法による腹腔 鏡下手術は有用な術式と思われた。

· In vivo 37: 887-893 (2023) 2023.3

C-reactive Protein-to-Albumin Ratio Predicts Conversion from Laparoscopic to Open Cholecystectomy in Acute Cholecystitis

> (Department of Surgery, National Hospital Organization Fukuyama Medical Center, Fukuyama, Japan) MASASHI UTSUMI MASARU INAGAKI KOJI KITADA NAOYUKI TOKUNAGA KOSUKE YUNOKI YUYA SAKURAI RYOSUKE HAMANO YOUSUKE TSUNEMITSU HIDEAKI MIYASOU SHINYA OTSUKA

Abstract: Background/Aim: The aim of this study was to identify predictors of conversion from laparoscopic to open cholecystectomy, and to determine whether pre-operative C- reactive proteinto-albumin ratio (CAR) can predict conversion from laparoscopic to open cholecystectomy, in patients with acute cholecystitis diagnosed according to the Tokyo Guidelines 2018. Patients and Methods: We retrospectively analysed 231 patients who underwent laparoscopic cholecystectomy for acute cholecystitis between January 2012 and March 2022. Two hundred and fifteen (93.1%) patients were included in the laparoscopic cholecystectomy group; sixteen (6.9%) patients were included in the conversion from laparoscopic to open cholecystectomy group. Results: In univariate analysis, significant predictors of conversion from laparoscopic to open cholecystectomy included the interval between symptom onset and surgery (>72 h), C-reactive protein (≥15.0 mg/l) and albumin (<3.5 mg/l) levels, pre-operative CAR (≥5.54), gallbladder wall thickness (≥5 mm), pericholecystic fluid collection, and pericholecystic fat hyperdensity. In multivariate analysis, elevated pre-operative CAR (≥5.54) and the interval between symptom onset and surgery (>72 h) were independent predictors of conversion from laparoscopic to open cholecystectomy. Conclusion: Pre- operative CAR as a predictor of conversion from laparoscopic to open cholecystectomy may be useful for pre- operative risk assessment and treatment planning.

Medicine 2023.6

Preoperative C-reactive protein-to-albumin ratio as a prognostic factor in biliary tract cancer A systematic review and meta-analysis

(Department of Surgery, National Hospital Organization Fukuyama Medical Center, Fukuyama, Japan.)

Masashi Utsumi

Masaru Inagaki

Koji Kitada

Naoyuki Tokunaga

Midori Kondo

Kosuke Yunoki

Yuya Sakurai

Ryosuke Hamano

Hideaki Miyasou

Yousuke Tsunemitsu

Shinya Otsuka

(Correspondence: Masashi Utsumi,

Department of Surgery, National Hospital Organization Fukuyama Medical Center)

Masashi Utsumi

Abstract

Background: The preoperative C-reactive protein-to-albumin ratio is a novel inflammation-based prognostic marker in various cancers. However, its prognostic role in biliary tract cancer is unknown. We conducted a systematic review and meta-analysis to evaluate the prognostic value of preoperative C-reactive protein-to-albumin ratio in biliary tract cancer.

Methods: A systematic search of the literature for studies evaluating the prognostic value of C-reactive protein-to-albumin ratio in patients undergoing surgery for biliary tract cancer was conducted, and a random effects meta-analysis of overall survival and recurrence-free survival was performed.

Results: Nine studies with 1292 participants were included. The preoperative C-reactive protein-to-albumin ratio negatively correlated with overall survival (hazard ratio, 2.44 [95% confidence interval: 1.98–2.90]; P < .001) and recurrence-free survival (hazard ratio, 2.73 [95% confidence interval: 2.01–3.70]; P < .001). Subgroup analysis showed that an elevated preoperative C-reactive protein-to-albumin ratio predicted poor overall survival, regardless of the cutoff value, sample size, histological type, and treatment.

Conclusion: An elevated preoperative C-reactive protein-to-albumin ratio is significantly associated with poor prognosis in patients undergoing surgery for biliary tract cancer. The C-reactive protein-to-albumin ratio may be an independent prognostic biomarker for overall survival and recurrence-free survival in patients undergoing surgery for biliary tract cancer.

Abbreviations: BTC = biliary tract cancer, CAR = C-reactive protein-to-albumin ratio, CI = confidence interval, HR = hazard ratio, OS = overall survival, RFS = recurrence-free survival.

Keywords: biliary tract cancer, C-reactive protein-to-albumin ratio, meta-analysis, prognosis

学会発表

当院における排便ケアチーム「フローラ」の取り組み (いそだ病院)

> 有木眞由美、山口 泉、七森 弘美 碳田 健太、岩川 和秀

2020年4月に医師、看護師、管理栄養士、薬剤師、 理学療法士、デイケア看護師、居宅、地域連携室の多 職種による排便ケアチーム『フローラ』を立ち上げた。 今回排便ケアに向けての基盤作りをしてきた2020年4 月から2021年9月までの活動報告をします。統一され た排便ケアを提供するためにはスタッフ間で共通の評 価ツールが必要と判断し、便性状はブリストルスケー ルを導入し、便量は当院オリジナルの便量スケール表 を作成した。作成にあたり、身近にあってイメージし やすく共通の認識が出来るものとして、果物にたとえ たスケール表を作成した。また外来患者用に排便状況 を評価するために上記便性状と便量、下剤服用を記 入するための当院オリジナル排便カレンダーを作成し た。排便カレンダーに興味をもってもらうために、月ご とに挿絵を入れ、病院スタッフ全員から募集した便に 関する標語を月ごとに記載し、便に関する豆知識も掲 載した。症例によっては、排便カレンダーによる排便 記録だけでなく食事内容と食事量も確認できるチェッ ク表が必要と判断し、食事摂取記録も併せて評価する 記入票を作成した。現在排便カレンダーと食事摂取記 入表を基に、患者と十分な情報共有ができ、多職種介 入による評価や指導も行うことで排便ケアの向上につ ながっている。排便チームアローラから4人POOマス ター研修会に参加し、排便に関する知識を深め、排便 ケアに関する勉強会の開催、病院内のトイレ内に排便 姿勢の重要性と便時姿勢をポスターにして掲示した。 病院食では、排便チームで2種類の食物織維の試飲 会を行い、水・お茶・味噌汁等、溶けやすさや飲みや すさを比較し、総合評価の高かった酪酸菌入りのサン ファイバーを便秘食として導入し、味がある汁物等に 混ぜて提供している。チームフローラの理学療法士を 中心に、ADLが低下した患者さんでも簡単に出来るこ とをコンセプトに、座位と臥位で行うオリジナルの排 便体操を考案した。デイケアサービスでは利用者と音 楽に合わせ体操を行い、外来待合室でのビデオ放映、 外来での冊子配布も行っている。病院のホームページ に「排便革新コーナー」を作成し、上排便スケール、

排便カレンダー、豆知識、排便体操、チームフローラ の活動報告を日々更新し啓発活動を行っている。

・日本うんこ文化学会第1回学術集会(石川)2021.11 ・日本うんこ文化学会第2回学術集会(石川)2022.12 食物繊維(PHGG)と便秘体操による排便ケアーの改善効果についての検討 ~介護施設における介入事例をとおして~

【目的】介護施設は慢性便秘症の入所者が多く、

(いそだ病院)

岩川和秀、有木眞由美、山口 泉 七森 弘美、磯田 健太

本人だけでなく介護者にとっても負担となっている。 また便秘症ケアーにプロバイオティクス及び運動療 法は推奨されているものの介護の現場では実践され ていない。今回、我々は介護施設において食物繊維 (PHGG) と便秘体操を行い排便ケアーの向上につな がるか介入研究を行ったので報告する。【研究方法】 介護施設に入所中で、刺激性下剤を定期的に内服し、 コミュニケーション可能な6名の入所者を対象とし た。期間:2021年11月の4週間。方法: 酪酸菌配合 PHGGを1日5g服用し、同時に便秘体操を1日2回 行った。倫理的配慮:施設管理者、介護者、対象入 所者及びその家族に口頭及び文書にて同意を得た。 【結果】排便回数は前値は週平均8.6回であったが、 4週後には週5.6回に収束した。平均ブリストルは前 値5.7であったが、4週後は平均3.6と普通便に近づい た。便秘尺度は6例前例で改善し、前値3.0が4週後 は1.25まで低下した。下剤服用は6例中4例で服用中 止または減量できた。オムツ費用は5例中4例で削減 でき、前値平均週610円から4週後454円に削減でき た。オムツと下剤費用を合わせると5例全例で削減で きた。【結語】介護施設における排便ケアーとして食 物繊維(PHGG)+便秘体操は、排便状態を改善し、コ

・日本うんこ文化学会第3回学術集会(広島)2023.11 段ボールによる排便足台の試作

スト削減につながるだけでなく介護者の業務改善につ

(いそだ病院)

ながる可能性が示唆された。

岩川 和秀、磯田 健太、有木眞由美 世良春菜、山口 泉

【目的】努責しないと出ない、残った感じがある、 類回にトイレに行くなどの症状がある場合は便排出障 害型の便秘であり、通過遅延型(弛緩型)の便秘とも オーバーラップしていることも多く、通常の下剤だけ では改善せず、かえって嵌入便や頻便を誘発するなど

悪化することもある。当院ではこれらのケースにおい て外来では排便姿勢の指導と足台の使用をすすめ、入 院患者では病棟所有の15cmと20cmの排便足台の使用 を試み、有用であった患者さんには退院後も使用をす すめているが、いずれも自身での足代購入までには至 らないケースが多い。そこで簡単に作成できる段ボー ルによる排便足台(通称:スルット君)を試作したの で報告する。【倫理的配慮】個人の特定可能な情報は 取り扱わないこととした。【方法】足台作成のコンセプ トは①軽くて使いやすい②簡単に作成できる③頑丈で ある④安価である⑤廃棄しやすい の5点です。重さ は全体で約500gと軽量で、段ボールの中身は段ボール 端材を渦巻き状に丸めて入れる。上に平均体重の人が 直接乗ってもつぶれることはなく、費用は約200円です み、中身を出して折りたたんで廃棄可能である。作成 した足代を便排出障害型の患者さんに無償でお渡しし (効果なければ廃棄してもらう) 効果のほどを評価し た。【結果】現在のところ使用した約10名の患者さん から好評を得ており、全例で使用を継続されている。 当日の発表では足台制作ビデオも一緒に供覧します。

・日本うんこ文化学会第3回学術集会(広島)2023.11 便性(ブリストル)・便量スケール導入による排便 アセスメントの変化について

(いそだ病院)

世良 春菜、岩川 和秀、山口 泉 有木眞由美、馬屋原由紀、磯田 健太

【目的】適切な排便ケアを行うためには医療者間で 共通認識のもとにアセスメントを行う必要がある。こ れまで個人の主観に依存していた便性や便量の記載 を統一するためブリストル便性スケールと当院独自の 便量スケールを導入し、その効果を検証したので報告 する。【研究方法】排便に関わる全スタッフを対象に、 導入1か月と3年時に便性と便量スケールに関するア ンケート調査を行いその変化を評価した。【結果】導 入以前は排便の有無のみで便性・便量の記載は約半 分しかできていなかったが、導入後は全例で記載す るようになった。便性・便量の記載はいずれも1か月 時は約25%しか「表現伝達しやすくなった」と回答な かったが、3年時は約80%となった。また3年時には 約90%が「排便状態の把握や共有に役立っている」と 回答があった。【考察】当院でスケール導入以前は便 量・便性状を記載する取り決めがなかったため個人の ・日本臨床外科学会(大阪)2020.10 とらえ方により曖昧になっていた。スケールを導入す ることで、排便量・性状を多職種間でも統一して把握

できるようになった。排便アセスメントを行う際、便 量・性状は重要な情報源となる。時系列で排便量・性 状を統一し記載できるようになった為、下剤を使用す る際にアセスメントを行ったうえで選択することが出 来るようになった。統一した便性・便量スケールを導 入することにより医療者間で情報が共有でき、正確に 排便状態を把握できるようになり、排便ケアの向上に つながった。

·日本呼吸器内視鏡学会(北海道) 2020.6 肺非結核性抗酸菌症と同一部位に癌の合併を認めた1例 (井上病院)

> 西川 敏雄、高橋 正彦、森 雅信 岡林 孝弘、上川 康明、井上 文之

今回我々は気管支鏡下での検査では肺感染症と考 えられたが辺縁に癌の合併を認めた1例を経験したの で報告する。症例は73歳、男性。健診でのCT検査に て胸部異常陰影を認め当院受診となった。採血所見で は軽度の白血球及びCEAの上昇を認めた。IGRAは陰 性であった。CT検査では左肺S10に空洞を伴う5cm 大の腫瘤及び右胸水を認めた。PET検査では腫瘤に はFDGの集積を認め肺癌が疑われたが、リンパ節や 他臓器には異常は認めなかった。右胸水は滲出性で 細胞診では悪性所見は認めなかった。左肺腫瘤に関し ては気管支鏡下での細胞組織学的検査にて悪性所見 は認めなかったが、洗浄液の培養にて抗酸菌陽性であ りPCRにてM.intracellulare陽性であった。検査結果 より非結核性抗酸菌症と考えられたが悪性疾患の可 能性は否定できないと考え手術を施行した。術後病理 結果では3cm大の非結核性抗酸菌症と考えられる類 上皮細胞肉芽腫病変を認めた。さらにこの病変辺縁に 1.2cm大の扁平上皮癌を認めstage I A2の肺癌との診 断であった。肺抗酸菌症の肺癌合併率は1~2%ほど とされる。非結核性抗酸菌症と癌の合併症例では両病 変が同側肺に存在する場合が多いとされ、同一部位に 存在する場合も多いとされる。EBUS等気管支鏡技術 の進歩により正確な診断が可能となってきている現状 ではあるが、それに固執することなく他疾患の合併等 を含め総合的に判断してゆくことも重要であると考え られた。

肺腺癌、扁平上皮癌、肋骨軟骨肉腫にて異時性に3度の 胸部手術を施行した1例

(井上病院)

西川 敏雄、高橋 正彦、岡林 孝弘

雅信、上川 康明、井上 文之 症例は62歳、男性。2003年7月に左肺過誤腫にて 肺部分切除、2012年3月にT1aN0M0 stage I Aの肺腺 癌にて左舌区切除、2014年5月に右第5肋骨の軟骨 肉腫(Grade3)にて5肋骨を含む胸壁切除を施行さ れている。2015年1月のCT検査にて右肺S3に5×5 mmの薄壁空洞を伴う腫瘤を認めた。経過観察を行う も2016年3月には腫瘤は17×11mmと増大していた。 FDG-PET検査では腫瘤にはSUV 9.74と高集積を認 めた。T1aN0M0 stage I Aの肺癌との術前診断にて手 術を施行、右上葉切除とリンパ節郭清を施行した。病 理結果では扁平上皮癌との診断でありリンパ節転移は 認めず、T1aN0M0 stage I Aであった。術後4年とな る現在まで特に再発等認めず経過観察中である。高齢 化及び治療の進歩により重複癌症例が散見される。重 複癌は臨床及び剖検例においては0.8%~16%、集団 ベースの癌登録調査においては2.1~6.6%とされる。 肺癌切除例における重複癌の頻度は14.7%で、男性で は胃、大腸、膀胱に多い。また、軟骨肉腫は上腕骨、 大腿骨、骨盤に好発するとされ、肋骨原発軟骨肉腫は 比較的稀である。本症例は両側の肺癌、比較的稀であ

・日本肺癌学会(岡山)2020.11

2度の手術を含む集学的治療を施行中に赤芽球癆を 合併した胸腺腫の1例

る肋骨軟骨肉腫といった異時性の悪性腫瘍にて3度の

胸部手術を要した。今後同時性、異時性を含め重複癌

症例は増加すると考えられ、これを考慮しての診断、

(井上病院)

治療方法の選択が重要になると考えられた。

西川 敏雄、高橋 正彦、森 雅信 岡林 孝弘、上川 康明、井上 文之

今回われわれは集学的治療を施行中に赤芽球療及び骨髄転移を合併した胸腺腫の1例を経験したので報告する。症例は46歳、男性。2011年3月検診にて胸部異常陰影を認めた。CT検査では前縦隔に腫瘤を認め、左胸腔内にも播種を疑う小結節を認めた。FDG-PET検査では腫瘤及び胸腔内の小結節にFDGの集積を認めた。CTガイド下生検にて胸膜播種を伴う正岡IVa期、typeB1の胸腺腫と診断した。シスプラチン、エトポシド、エピルビシンによる化学療法を施行し腫瘍は縮小、また播種巣も縮小もしくは消失したため、同年8月拡大胸腺摘出術を施行、播種巣も可及的に切除

した。術後は術前同様の化学療法を施行した。2012年 3月胸膜播種巣の増大を認めたため、前回同様の化学 療法を施行した。播種巣はほぼ消失したため、同年7 月に左胸膜肺全摘術を施行、術後には放射線照射を 施行した。その後2016年8月に腰椎及び左胸腔に転移 再発、腰椎には放射線照射を施行、カルボプラチン、 パクリタキセルによる化学療法を開始した。2019年9 月には赤芽球癆及び骨髄転移による貧血を認め、輸血 を行いながらレジメンを変更しての化学療法を継続し ている。現在、胸膜播種を伴う正岡IVa期の胸腺腫に 対する治療としては集学的治療が予後を改善させる可 能性があるとされるが、治療方法の組み合わせや施行 時期等については確立されたものはないのが実情であ る。また、胸腺腫に赤芽球癆が合併する頻度は1.4~ 5%ほどで比較的稀であり、さらに骨・骨髄転移など の遠隔転移も稀である。本症例のように赤芽球癆及び 骨髄転移を合併した胸腺腫に対し化学療法を行う場 合には造血機能が障害されていることに加え治療によ る骨髄抑制も考慮する必要があり慎重な治療が必要と 考えられる。文献的考察を加えて報告する。

・日本救急医学学会(岐阜)2020.11 **肺癌化学療法中に発症した薬剤性膵炎の2例** (井上病院)

西川 敏雄、高橋 正彦、森 雅信 岡林 孝弘、上川 康明、井上 文之

【症例1】68歳、男性。StageIVの肺腺癌にて化学療法開始、2nd lineとしてシスプラチン、ペメトレキセド、ベバシツマブによる加療を開始した。抗癌剤投与3日後に上腹部痛が出現した。CT検査では膵頭部の腫大と周囲の炎症所見を認めた。採血ではWBC 28200/ul、CRP1.7ng/mlと炎症反応を認め、アミラーゼが793IU/lと上昇していた。アルコール多飲や胆石等は認めず、抗癌剤による薬剤性膵炎と診断した。

【症例2】70歳、男性。Stage ⅢAの肺腺癌の術後再発にて化学療法を施行していた。ペメトレキセドによる維持療法を施行していたが19コース目施行当日に腹痛が出現した。CT検査では以前より認めていた膵嚢胞内のdensity上昇と膵頭部から十二指腸にかけての腫大を認めた。採血ではWBC 6200/ul、CRP 0.2ng/ml、アミラーゼが1813IU/lであり、抗癌剤による薬剤性膵炎と診断した。【考察】薬剤性膵炎の発症頻度は急性膵炎全体の0.1~2%ほどとされる。その大半は軽症から中等症であるが、時に重症や致死的となることもあり早期の診断及び加療が重要とされる。本症例では

抗癌剤以外に膵炎の発症原因となりうるものはなく抗癌 剤による薬剤性膵炎と診断し加療を行った。【結語】化 学療法中の患者に腹痛を認めた場合には薬剤性膵炎 の可能性も考慮する必要があると考えられた。

・日本医療マネジメント学会(京都)2020.10 歯科が併設されていない病院における周術期口腔機能管理の取り組み (井上病院 呼吸器外科)

高橋 正彦

【緒言】歯科が併設されていない当院において、 福山市歯科医師会と連携して周術期口腔機能管理を 行っている(以下:本取り組み)。全身麻酔下手術が 決定した時点で、かかりつけ歯科もしくは最寄りの登 録歯科医療機関へFAXにて依頼し、入院までに歯科 医療機関にて周術期口腔機能管理を行う。入院中は当 院看護師にて口腔ケアを行い、退院後は再び歯科医 療機関にて継続して口腔機能管理を行う。2014年より 本取り組みを開始し5年以上経過した。その実績につ いて報告する。【対象】2014年1月より2019年12月ま での6年間の全身麻酔下手術590例のうち356例に本 取り組みを行った。肺切除術は217例で、その疾患の 内訳は肺悪性腫瘍193例、肺良性腫瘍14例、炎症性肺 疾患4例などであった。【結果】予定手術では約70% の症例で本取り組みが行われたが、気胸などの緊急・ 準緊急手術では本取り組みは実施できなかった。一歯 科医療機関の症例数は2.6症例(1~12)であった。歯 科医療機関での処置は、歯周病の治療が最も多く、そ の他う歯の治療、義歯の調整、抜歯などであった。本 取り組み開始以後は術後重篤な呼吸器合併症等の発 生はなかった。術後在院日数については有意な短縮は 認められなかった。【考察】口腔内を清潔に保つこと が術後呼吸器合併症の減少に繋がったと考える。術後 ・日本呼吸器内視鏡学会(岐阜)2022.5 在院日数については術後合併症以外の要因が大きい ためと考える。登録歯科医療機関は本取り組み開始時 151であり、歯科医療機関への負担が分散され、本取 り組みが円滑に実施されたと考える。【結語】福山市 歯科医師会と連携することにより円滑に周術期口腔機 能管理が行うことができた。本取り組みにより、重篤 な呼吸器合併症の発生がなかった。

・日本呼吸器外科学会(長崎)2021.5 印環細胞様の形態を伴う肺腺癌とクリプトコッカス症が 併存した1例

(井上病院)

西川 敏雄、高橋 正彦、森 雅信

岡林 孝弘、上川 康明、井上 文之 症例は39歳、男性。2020年8月健診にて胸部異常 異常を指摘された。CT検査では左肺S5に19×18mm の腫瘤を認め、左肺S3にも5×4mmの腫瘤を認め た。FDG-PET検査ではS5の腫瘤にはSUV 4.85と軽 度のFDGの集積を認めたが、S3の腫瘤やリンパ節、 他臓器には異常は認めなかった。細胞組織学的検査 は施行しなかったが、S5の腫瘤を原発とし同一肺葉 内転移を伴うT3N0M0stage II Bの肺癌との術前診断に て左上葉切除とリンパ節郭清を施行した。切除標本で はS3の腫瘤内には膿を認め、培養にてクリプトコッカ スを認めた。病理所見でも異物巨細胞の集簇を認め クリプトコッカス症と考えられる所見であった。S5の 腫瘤は印環細胞様の形態を伴う腺癌との診断であり、 T1aN0M0 stage I A1との診断であった。また、ALK融 合遺伝子の発現を認めた。これらの結果から印環細胞 様の形態を伴う肺腺癌とクリプトコッカス症が併存し たものと診断した。癌細胞が印環細胞様の形態を呈す ることは胃や大腸などの消化管の未分化腺癌において よく知られているが、この形態を伴う肺原発の腺癌は 稀である。印環細胞様の形態を伴う肺腺癌は侵襲的な 臨床経過をとることや非喫煙者に多くみられることな どが知られている。また、ALK融合遺伝子の発現が多 いことも知られており、本症例においては喫煙者では あるがALK融合遺伝子の発現を認めた。肺癌とクリプ トコッカス症の併存に関してはクリプトコッカス症の 血清抗原での陽性率が65%程度とされることもあり、 肺内転移との鑑別が困難であるのが現状である。今後 慎重な経過観察を要する稀な症例と考えられ、文献的 考察を加えて報告する。

縦隔上部に発生した類上皮性血管内皮腫の 1 切除例 (井上病院 呼吸器外科)

> 西川 敏雄、高橋 正彦、森 雅信 岡林 孝弘、上川 康明、井上 文之

今回我々は縦隔上部に発生した類上皮性血管内皮 腫の1切除例を経験したので報告する。症例は81歳、 女性。2年ほど前から頸部の違和感を認めていた。CT 検査にて縦隔上部に腫瘤を認め当院受診となった。 CT検査では縦隔上部に4cm大の腫瘤を認めた。左内 頚静脈及び左腕頭静脈は閉塞していた。PET検査で は腫瘤にはSUV 2.61とFDGの集積を認め軟部腫瘍や 転移リンパ節が疑われる所見であった。下部食道や声 帯にもFDGの集積を認めたが、内視鏡検査や耳鼻科

での検査にて異常は認めず、またこれ以外の他臓器に も異常は認めなかった。鎖骨上からの針生検にて類上 皮性血管内皮腫が疑われたため、左内頚静脈及び左 ・日本呼吸器外科学会(新潟) 2023.7 横隔神経合併切除を伴う腫瘍切除を施行した。術後病 理結果では粘液腫状の基質を背景として核異型を示 す多角形、不整形の細胞が小胞巣状、索状に配列し、 類上皮性血管内皮腫との診断であった。術後9ヵ月の 現在、再発なく経過観察中である。類上皮性血管内皮 腫は血管内皮由来の稀な腫瘍で、血管腫と血管肉腫と の中間の悪性度を有する腫瘍とされている。発生部位 は四肢軟部組織、肝臓、肺などに多く、縦隔発生例は 稀である。治療としては手術が行われることが多く、 完全切除ができれば手術のみ施行、また化学療法など の補助療法は不完全切除例や血管肉腫に類似した組 織像を呈した症例で考慮する必要性があるとする報告 がある。文献的考察を加えて報告する。

·日本呼吸器内視鏡学会(神奈川) 2023.6 悪性疾患による気道狭窄に対する気道ステント留置症例の検討 (井上病院)

> 西川 敏雄、高橋 正彦、森 雅信 岡林 孝弘、上川 康明、井上 文之

【背景】悪性疾患による気道狭窄に対しては気道ス テントの留置が検討される。【対象】2008年から2022 年に悪性疾患による気道狭窄に対して気道ステント 留置が施行された9例を検討した。【結果】年齢中央 値は72歳(48-79歳)であった。疾患は肺癌4例、食 道癌リンパ節再発1例、腺様嚢胞癌再発1例、縦隔神 経内分泌腫瘍1例、甲状腺癌1例、膀胱癌肺転移1 例であった。このうち3例に2度のステント留置が施 行されており、ステントはUltraflexが7例、Aerostent が4例、Dumon Y stentが1例であった。2度の留置を 施行した3例のうち2例は5カ月後、7カ月後に腫瘍 増大による再狭窄、1例は5カ月後に腫瘍増大及び食 道気管支瘻により2度目のステント留置を施行した。 また、Dumon Y stentを留置した1例は加療により腫 瘍の縮小が得られたため5カ月後に抜去を施行した。 全生存期間の中央値は329日 (6-594日) であった。 【考察、結語】2度のステント留置を施行した症例は いずれもステント端での腫瘍の増大を認めていた。腫 ・日本肺癌学会(千葉) 2023.11 瘍中枢側及び末梢側を十分にカバーできるステント長 を選択していると考えているが、留置部位とステント の種類によってはややカバーが不十分であるとも原因 として考えられ、原疾患の悪性度、留置後の加療の是

非や効果予測等も踏まえて、治療方法を検討すること

が重要であると考えられた。

胸腺腫患者に発症した胸骨骨髄炎、縦隔炎に対し大網充填を 施行した1例

(井上病院)

西川 敏雄、高橋 正彦、森 雅信 岡林 孝弘、上川 康明、井上 文之

今回われわれは胸腺腫患者に発症した胸骨骨髄 炎、縦隔炎に対し大網充填を施行した1例を経験した ので報告する。症例は47歳、男性。胸膜播種を伴う正 岡IVa期、typeB1の胸腺腫にて化学療法、拡大胸腺摘 出術や左胸膜肺全摘術、放射線照射を施行されてい た。また、胸腔内病巣に加え多発骨髄転移及び赤芽球 癆を認める状態であった。胸腺腫加療開始から約9年 後に胸骨前面に皮下膿瘍を発症、切開排膿を行うも 根治せず発症4カ月後に胸骨ワイヤー抜去や掻把、洗 浄を施行した。しかし根治には至らず炎症は骨髄及び 縦隔にも波及、6カ月後には掻把、洗浄、8カ月後に も掻把、洗浄、胸骨部分切除に続き陰圧閉鎖療法を施 行するも根治には至らなかった。発症から1年後に掻 把、洗浄、胸骨部分切除、陰圧閉鎖療法に続き早期に 大網充填を施行、その後根治となった。胸骨骨髄炎、 縦隔炎は感染制御に難渋することもある疾患である。 治療には適切なドレナージや抗生剤の使用に加え、陰 圧閉鎖療法や筋弁、大網弁の充填等が施行されてい る。本症例では今回の胸骨骨髄炎、縦隔炎以前にも中 心静脈留置ポート部の感染、以後にも皮下膿瘍を繰り 返し発症していたことから胸腺腫及びその骨髄転移に よる免疫抑制状態であった可能性がある。大網は感染 巣に対して強い抗炎症作用と組織修復能を備えてい るとされており、本症例においては大網充填を行うこ とにより感染制御及び創傷治癒が可能となったと考え られる。感染性疾患に対して外科的治療を行う場合に は治癒を阻害する要因等も十分に考慮すること、また 様々な要因により治癒が困難と考えられる場合の感染 制御、創傷治療においては大網の使用を考慮すること が重要であると考えられた。

縦隔に発生したSMARCA4欠損腫瘍が疑われた1例 (井上病院)

西川 敏雄、高橋 正彦、松浦 求樹 雅信、上川 康明、井上 文之 今回われわれは縦隔に発生したSMARCA4欠損腫

瘍が疑われた1例を経験したので報告する。症例は 46歳、男性。2021年7月胸部違和感にて近医受診、 胸部レントゲン検査にて異常陰影を認め紹介となっ た。CEA、CYFRA等の腫瘍マーカーには異常は認 めなかった。CT検査では右中縦隔に気管、右主気管 支、食道及び胸椎と接する10×6.9cmの腫瘤を認め た。MRI検査では脂肪抑制T1でhigh、T2強調像でlow intensityであり、縦隔型肺癌や悪性縦隔腫瘍を疑う所 見であった。FDG-PET検査では腫瘤にはSUV 11.76 とFDGの集積を認め、第6胸椎への浸潤及び右肺門、 縦隔リンパ節にも転移と考えられる集積を認めた。CT ガイド下生検による組織学的所見では好酸性の細胞 質を持つ比較的N/C比の高い細胞が増生しており、 BRG1は保持されているもののSMARCA4欠損腫瘍を 疑うとの所見であった。放射線照射を開始するも腫瘍 は急激に増大、全身状態も悪化したため6Gyしか施行 できず、カルボプラチン、パクリタキセルによる化学 療法を開始するも病状は急激に進行し、確定診断の11 日後に死亡した。SMARCA4欠損腫瘍は2015年に報 告された疾患である。BRG1蛋白を調節し様々な遺伝 子の発現、複製、分離、修復などに関わるSMARCA4 遺伝子の欠損によるとされ、主に肺気腫を伴う重喫煙 者の男性に見られる進行性の胸部腫瘍で予後も不良 であるとされる。確定診断には生検が重要であり、血 液検査や画像所見では肺門や縦隔に発生する他の悪 性縦隔腫瘍との鑑別が困難であるとされる。完全切除 可能な場合には手術が行われるが、困難な場合には化 学療法などが行われる。本症例ではSMARCA4の免疫 染色が施行できていないが、病状が急激に進行すると いった臨床的特徴はSMARCA4欠損腫瘍と考えられる ものであった。文献的考察を加えて報告する。

·日本臨床外科学会(岡山) 2023.11

右内頚静脈より挿入した中心静脈カテーテル先端が 右鎖骨下静脈に逸脱した1例

(井上病院)

西川 敏雄、高橋 正彦、松浦 求樹 森 雅信、上川 康明、井上 文之

症例は76歳、男性。胸部CT検査にて右肺門に異常 陰影を指摘、検査及び加療での使用目的にて右内頚静 脈より中心静脈カテーテルを挿入、右前胸部に中心静 脈ポートを留置した。ペースメーカー留置後で左腕頭 静脈、上大静脈を経由して右房、右室内にリードが留 置されていたため、中心静脈カテーテル先端は右腕頭 静脈内に留置した。その後の精査にてT4N2M0 stage

ⅢBの肺癌と診断、化学療法を開始し腫瘍は縮小傾向 にあった。ポート留置6カ月後にポートよりの点滴が 困難となり画像検査にてカテーテル先端の右鎖骨下静 脈への逸脱が判明、局所麻酔下にて右前胸部のポート 部からカテーテル先端の位置調節を施行した。中心静 脈カテーテル先端の目的血管以外への逸脱は時に経験 される合併症である。カテーテル先端は立位や上肢挙 上など患者の状態によって容易に移動しうるため、先 端位置に関しては解剖学的位置を目安にすることに加 え、患者の日常生活での位置移動も考慮したうえで、 個々の症例で決定する必要があるとされる。本症例に おいてはペースメーカーのリードの存在によって通常 よりカテーテル先端を浅い位置に留置したことが逸脱 の最大の要因と考えるが、加療により縮小した肺門部 の腫瘍の存在や患者の日常生活の影響も考えられる。 中心静脈カテーテル先端の位置の決定に関してはこれ までの既往や現在の疾患状況など様々な要素を考慮し たうえで決定することが重要であると考えられた。

· 日本救急医学会(東京) 2023.11

人工呼吸器管理下での気胸に対しEWS充填術を施行した1例 (井上病院)

西川 敏雄、高橋 正彦、松浦 求樹森 雅信、上川 康明、井上 文之

【症例】70歳、男性。肺癌術後、急性間質性肺炎 後の慢性呼吸不全にて加療を行っていた。呼吸状 態の増悪によりNPPVを施行していたが心肺停止と なり、蘇生後人工呼吸器管理となった。蘇生翌日の 胸部レントゲンにて蘇生処置によると考えられる左 気胸を認め、2日目に胸腔ドレナージを施行した。 その後も気漏が続いたため、ドレナージ後8日目に Endobronchial Watanabe Spigot (EWS) 充填術を施 行した。気管チューブより軟性気管支鏡を挿入、バ ルーンテストにて明らかな責任気管支は不明であった が、左B1+2a+b、B1+2c及びB3に計5個のspigotを充 填した。施行翌日にはピシバニールによる癒着術を施 行、以後気漏は消失し施行後5日目に胸腔ドレーンを 抜去した。【考察】手術不能の難治性気胸症例に対し 低侵襲であるEWS充填術が有用であるとする報告が ある。本症例は全身状態が不良な手術不能症例であ り人工呼吸器管理下にてEWS充填術を施行した。陽 圧換気下での施行であり、バルーンテストやspigotの 把持、充填が困難であることも想定されたが、通常の EWS充填術施行時と同様に特に問題なくspigotの充 填が可能であった。【結語】人工呼吸器管理下での全 身状態不良な手術不能気胸症例に対しEWS充填術は 低侵襲で有用な方法であると考えられた。

・第71回日本東洋医学会学術総会(Web) 2021.8難治性吃逆(噦)の1症例

(黒木眼科医院)

黒木 悟

(吉備国際大学)

孫 基然

【緒言】種々の治療に反応せず3年間持続した吃逆が漢方にて殆ど治癒したので報告する。【症例】83歳女性、X年3月6日初診。【現病歴】X-3年3月頃より吃逆が出現する。夜間は消失し、昼間は常に連続して起る。夕方寒い時や、体動時、緊張時、頻度が上がる。吃逆の音は力強い。吃逆のため十分食事が摂れない為、体力が低下し、微熱が出現し、内科にて慢性疲労症候群と診断される。漢方治療を希望する。

【既往歴】甲状腺良性嚢胞(横隔神経、吃逆との関 連不明)、漢方エキス剤ほか多数の薬剤にアレルギー 反応あり。【現症】HbAlc6.0%、他の検血結果異常な し。血圧130/80、身長160cm、体重47kg。顔色やや蒼 白、二便正常、微熱あり。冷え性、夏でもクーラーは 嫌い、身体痛、多汗、上半身ののぼせ、疲労倦怠感、 食欲不振、不安感、両眼精疲労、肩こりを自覚する。 脈候 弦細、無力、緩。舌候 体暗紫、苔 下焦に白 膩苔、中上焦に白苔あり。腹候 著変無し。【弁証】 胃中寒冷、胃気上逆、気虚血瘀、肝鬱。【治法】温中 散寒、和胃降逆、補気活血、疏肝解鬱。【経過】初診 時より煎じ薬 柿帝、生姜、丁香を処方し、1箇月後 吃逆は安静時には4割回復し、体動時、緊張時には不 変。陳皮、竹ジョ、人参、大棗、川芎を加えて、X年 7月14日全身症状と共に殆ど完治する。【考察】『霊 枢』に「古い寒気と新しい穀気が胃に入り相乱れ、邪 と気が併せて上逆し噦をなす」とある。本症例は胃中 の寒の実邪を除き、気を補い、流れを調整し治癒させ たと考える。

・第72回日本東洋医学学術総会(札幌)2022.5 胸椎前嚢胞を伴う線維筋痛症の1症例

(黒木限科医院)

黒木 悟、孫 基然

【緒言】漢方治療により全身痛が改善し嚢胞が消失した線維筋痛症の1症例を報告する。【症例】46歳女性、X年3月3日初診。【主訴】背中と全身の痛み。【現病歴】X-13年より、主訴が出現し、前医にて

胸椎前嚢胞を伴う線維筋痛症と診断される。【現症】 検血結果は著変無くCTにて胸椎前嚢胞を認める。 顔色やや蒼白、やや肥満ぎみ。脈両弦細やや遅。舌 微黄膩苔淡紅。腹力中等度 右胸脇苦満、臍下周囲 に抵抗あり。背中の冷えと痛み、腰痛、両膝、両手 指の関節痛、こわばり、筋脱力と痺れ、浮腫を認め る。【弁証】腎陽気虚、痰湿邪、血虚、肝鬱血お、経 絡阻滞。【治法】温腎補気、化痰化湿、補血、疎肝活 血、通絡。【治療経過】X年3月26日より煎じ薬 炮 附子、乾姜、白朮、白芍、当帰、川きゅう、桂皮、茯 苓、沢瀉、桃仁、牛膝、柴胡、黄耆、防已、大棗によ り股関節痛以外の全身症状は軽快する。10年間増大 傾向にあった嚢胞は漢方治療開始後、X+2年2月に は消失する。(放射線技師武田千春氏計測)【考察】 炮附子、牛膝、黄耆により温腎補気を、白朮、茯苓、 沢瀉、乾姜により化痰化湿を、当帰、白芍により補血 を、柴胡により疏肝を、当帰、川きゅう、桃仁、牛膝に より活血を、炮附子、白芍、川きゅう、防已、桂枝によ り通絡を図り全身の疼痛は改善し、又『諸病源候論』 によれば「積聚は胸腹腔内の腫塊であり、臓腑に邪 気が長期に留滞すると形成される」とあり、長期の冷 え、ストレス、甘い物の過食により嚢胞が形成され、 漢方と食養生により消失したと考えた。

・日本東洋医学会主催「第1回簡保医学国際シンポジウム」(Web)2022.8 Six Cases of Diabetic Macular Edema successfully treated with Kampo Medicine

(黒木限科医院)

黒木 悟

Abstract: Medical treatment for diabetic macular edema (DME) includes control of blood glucose, retinal photocoagulation and intravitreous injection of antivascular endothelial growth factor, but no definitive treatment has been established. The last carries a serious risk of infection. The author prescribed Kampo medicine according to oriental treatment patterns for six cases of DME not improved by the above treatments. Patients showed various conditions, such as blood stasis, yang deficiency of the kidney, qi deficiency of the whole body, dampness-heat of the spleen and stomach, dampness-heat of the liver and gallbladder, qi deficiency of the spleen, fire heat and wind of the liver, both yin and yang deficiency of the kidney, and fluid retention. The prescribed drugs and herbs were keppuchikuoto, hochuekkito, goshajinkigan, hoyokangoto, inchingoreisan, keishibukuryogan, boiogito, chotosan, Aatragalus root and Gentiana scalar, and were given as a decoction in 5 cases and an extracted powder in 1 case. Drugs for blood stasis and the Aatragalus root for qi deficiency and fluid retention were both given in 6 cases. Treatment with Kampo medicine was effective for all 6 cases. This report suggests that Kampo therapy, in accordance with oriental treatment patterns, is both safe and effective for DME.

Keywords: DME, Blood Stasis, Astragalus Root

- 14th Neurotrauma Symposium (International Neurotrauma Society) (オーストラリア・メルボルン (オンライン)) 2021.2 Mild traumatic brain injury leads altered NeuN expression with no concomitant neuronal loss in the mouse neocortex

(住吉ふじい病院)

荻野 泰明

Previously, we observed decreased NeuN neuronal expression in neocortical layer V in high vs low intensity injuries, in a study investigating the increased burden of axotomy after repetitive traumatic brain injury (TBI) (Ogino, Y., et al. J Neuropathol Exp Neurol. 2018, 77, 782-792). Since neuronal death was not seen at these levels of injury, we hypothesized that the decrease of NeuN+ cells did not reflect neuronal death but rather reduced expression of NeuN. To further probe this potential alteration in cellular expression, we assessed NeuN expression after mild central fluid percussion injury (cFPI) in neurons, together with the use of the neuronal marker, NeuroTrace (fluorescent Nissl stain) and DRAQ5 (nuclear staining dye), with 3D-imagebased methodologies.

Thirty-two adult mice were subjected to either repetitive cFPI (1.6 atm) at a 3 h interval ("rTBI"), a single cFPI followed by a sham injury ("sTBI"), or dual sham injury ("Sham"), with sacrifice at 24 h or 28 days post-injury (24hpi, 28dpi). Fluorescent images of 40 μ m-thick brain sections (4 per animal) labeled for NeuN and counterstained with NeuroTrace and DRAQ5 were captured with spinning disk confocal microscope and analyzed by MATLAB.

Of those neurons detected by NeuroTrace and DRAQ5, 40-60% were NeuN negative. At 24hpi, sTBI or rTBI animals demonstrated reduced neuronal

populations compared to Sham. The rTBI-28dpi animals showed increased neuronal numbers compared to rTBI-24hpi, irrespective of either NeuroTrace or NeuN labeling. In terms of potential for atrophy, rTBI-24hpi animals revealed the largest nuclear and cellular volumes among all groups. In all groups, NeuN+ neurons revealed a 1.2-fold larger nuclear volume and a 2.2-fold larger cell volume compared to NeuN— neurons, suggesting atrophic change in these NeuN— populations.

These results suggest that decreased NeuN expression is associated with atrophy.

Additionally, because NeuroTrace reactivity requires high protein production rates, any rate change after mild TBI could alter reactivity. Accordingly, the observed decrease in cells positive for NeuroTrace or NeuN most likely does not involve neuronal death but rather altered protein production. These findings call into question the overall utility of NeuN as a widely-accepted method for assessing viable neurons. (NIH grant NS077675)

38th annual National Neurotrauma Society Symposium (National Neurotrauma Society; アメリカ)(アメリカ(オンライン))2021.7

REPETITIVE MILD TRAUMATIC BRAIN INJURY EXACERBATES AXONAL INJURY NOT LEADING TO NEURONAL LOSS IN EITHER THE ACUTE OR CHRONIC PHASE

(住吉ふじい病院) 荻野 泰明

Mild traumatic brain injury (mTBI) affects brain structure and function and can lead to persistent abnormalities. Repetitive mTBI exacerbates the brain's response to injury. Nonetheless, its long-term implications remain poorly understood, particularly in the context of traumatic axonal injury (TAI), a player in TBI morbidity via axonal disconnection, synaptic loss and retrograde neuronal perturbation. In contrast to the examination of these processes in the acute phase of injury, the chronic-phase burden of TAI and/ or its implications for retrograde neuronal perturbation or death have received little consideration. To critically assess this issue, murine neocortical tissue was investigated at acute (24-hours postinjury, 24hpi) and chronic time points (28days postinjury, 28dpi) after singular or repetitive brain injury. Neurons immunofluorescently labeled with multiple markers, Neuro- Trace and NeuN for detecting neurons, p-c-Jun for detecting axotomized neurons and DRAQ5 for detecting nuclei, were quantitatively assessed using automated 3D-image analysis. An increased fraction of p-c-Jun+ neurons and higher p-c-Jun signal intensity were identified at 24hpi, with their exacerbation after repetitive injury, followed by their decrease at 28dpi.

NeuroTrace+ neurons demonstrated no evidence of neuronal loss at either time point. NeuN+ neurons demonstrated decreased number only with repetitive injury at 24hpi, however, its fraction of NeuroTrace+neurons was consistently decreased with injury over 28dpi. This decrease was linked exclusively to nonaxotomized neurons at 24hpi, extending to those axotomized at 28dpi, suggesting their delayed response to the injury. Collectively, we demonstrate an increased burden of TAI after repetitive mTBI, most striking in the acute phase response. The reduced reactivity for p-c-Jun without concomitant neuronal loss at 28dpi most likely reflects consistent neuronal reorganization and/or regeneration. Our finding of widespread axotomy in large fields of intact neurons rejects the premise that repetitive mTBI elicits progressive neuronal death, emphasizing the importance of axotomy-mediated change.

Keywords: neuronal death, regeneration &plasticity, neuropathology,

・50th Annual Meeting (Society for Neuroscience) (アメリカ(オンライン)) 2021.11 Axonal injury following mild traumatic brain injury is exacerbated by repetitive insult and is linked to the delayed loss of NeuN expression without concomitant neuronal death in the mouse

(住吉ふじい病院) 荻野 泰明

Traumatic brain injury (TBI) is a major health care problem worldwide. Mild TBI (mTBI) is the least severe type of TBI but it, even though, affects brain structure and function and can lead to persistent abnormalities. Repetitive mTBI exacerbates the acute phase response to injury but its long-term implications remain poorly understood. We aimed

to elucidate the long-term implications of repetitive mTBI, particularly in the context of the chronic-phase burden of traumatic axonal injury (TAI), a major player in TBI-related morbidity, and its implications for retrograde neuronal perturbation or death.

Murine neocortical tissue was investigated at acute (24-hours postinjury, 24hpi) and chronic time points (28-days postinjury, 28dpi) after singular or repetitive mTBI given by central fluid percussion injury (cFPI). Neurons immunofluorescently labeled with multiple markers, NeuroTrace and NeuN for detecting neurons, p-c-Jun for detecting axotomized neurons and DRAQ5 for detecting nuclei, were quantitatively assessed using automated 3D-image analysis. Single mTBI produced axotomy in 10% of neurons at 24hpi and the percentage increased after repetitive injury. The fraction of p-c-Jun+ neurons decreased at 28dpi but without neuronal loss (NeuroTrace), suggesting their reorganization and/or repair following TAI. In contrast, NeuN+ neurons decreased with repetitive injury at 24hpi while the corresponding fraction of NeuroTrace+ neurons decreased over 28dpi. This observed loss of NeuN expression was linked exclusively to non-axotomized neurons at 24hpi then extended to the axotomized at 28dpi, revealing a delayed response of the axotomized neurons. Collectively, we demonstrate an increased burden of TAI after repetitive mTBI, which is most striking in the acute phase response to the injury. Our finding of widespread axotomy in large fields of intact neurons rejects the premise that repetitive mTBI elicits progressive neuronal death, rather emphasizing the importance of axotomy-mediated change.

第61回日本肺癌学会学術集会(岡山県)2020.11 小型肺がんに対するバーチャル気管支鏡ナビゲーションを 利用した術前気管支鏡下肺マッピング法の検討

(中国中央病院 内科)

八杉 昌幸、池田 元洋、松本 千晶 尾形 佳子、玄馬 顕一 (中国中央病院 呼吸器外科)

平野 豊、荒木 恒太、鷲尾 一浩

【背景】CTの普及により、小型肺がんが数多く 発見され、縮小手術が積極的に行われてきている。 術前マーキングとして気管支鏡下肺マッピング法

(VAL-MAP) の有用性が示され、保険適応となっ ている。我々は、バーチャル気管支鏡ナビゲーショ ン (Virtual Bronchoscopic Navigation: VBN) を用 いて、挿入ルートを同定しマーキングを行った。染 料としてはインジゴカルミンが多く用いられている が、インドシアニングリーン (ICG) を用いることに より、マーキングの精度を向上する可能性があり併 用を行った。【対象と方法】2018年11月から2020年3 月にVAL-MAPを行った27例。CT画像を基に3次元 再構成したVBNをガイドに、手術前日にマーキング を複数個所行い、マッピング後にCTを撮影し、腫瘍 と実際に行ったマッピングとの位置を再構成した3D バーチャルイメージを作成した。翌日、手術の際に、 肺表面を通常視野と赤外光観察下でそれぞれ確認し た。【結果】VBNを用いることで、病変の近傍への マーキングが可能であることが、3Dバーチャルイメー ジで確認できた。偶発症は軽度の気胸が1例のみで、 他は認めなかった。ICGを併用することにより、より 立体的なマッピングが可能であった。全例で十分な切 除マージンが確保できており、追加切除を要した症例 はなかった。【考察】ICG併用VAL-MAPは安全で、 VBNを用いることで、正確なマッピングが可能である と考えられる。

・第43回日本呼吸器内視鏡学会学術集会(誌上開催)2020.6 保存的治療のみで気道狭窄に対処し得た悪性腫瘍気管転移の3例 (中国中央病院 内科)

八杉 昌幸、松本 千晶、池田 元洋 玄馬 顕一、上岡 博

悪性腫瘍の気管転移では気道狭窄のためしばしば 致死的な状態になりうる。ステント留置や手術などの 侵襲的な処置が必要となることも多いが合併症、後遺 症などの問題がある。保存的治療のみで気道狭窄に対 処し得た悪性腫瘍気管転移症例3例について報告す る。症例1:66歳男性。肺扁平上皮癌術後の経過観察 中にCTで気管内腔に腫隆性病変の出現を認めた。気 管支鏡検査を行ったところ、気管内に3か所の隆起性 病変を認めた。生検にて肺扁平上皮癌の再発と診断 した。PD-L1高発現であったのでペムブロリズマブの 投与を行ったが腫瘍は縮小しなかったためシスプラチ ン+ドセタキセル併用化学療法に切り替えたところ腫 瘍は縮小した。症例2:71歳男性。肺小細胞癌治療後 の経過観察中にCTで気管内腔に腫隆性病変の出現を 認めた。気管支鏡検査を行ったところ、気管内に多房 状の隆起性病変を認めた。生検にて肺小細胞癌の再

発と診断した。胸部放射線同時併用化学療法(過分割 照射+シスプラチン+エトポシド)を行ったところ腫 瘍は縮小した。症例3:78歳女性。乳がん術後、甲状 腺がん術後の経過観察中に嗄声、呼吸困難感が出現。 CTで気管内腔に腫隆性病変の出現を認め、気管支鏡 検査を行ったところ、気管内に多房状の隆起性病変を 認めた。生検にて甲状腺乳頭癌の再発と診断した。局 所放射線治療を行ったところ腫瘍は縮小した。3症例 ともその後、治療を必要とするような気道狭窄の出現 は認めていない。

・第43回日本呼吸器内視鏡学会学術集会 (誌上開催) 2020.6 経気管支生検標本のホルマリン固定時間が遺伝子検査の 精度に与える影響について

> (中国中央病院 呼吸器内科) 松本 千晶、玄馬 顕一、八杉 昌幸 池田 元洋、上岡 博

【背景】非小細胞肺癌におけるEpidermal Growth Factor Receptor (EGFR) 遺伝子変異検査は、 EGFRチロシンキナーゼ阻害薬 (EGFR-TKI) 薬剤適 応を調べるために必須の検査である。生検検体を採 取し、ホルマリン固定・パラフィン包埋組織検体を作 成する段階でのホルマリン固定時間は6~48時間が 推奨されており、過固定では検査精度が保たれない 可能性がある。当院の気管支鏡検査は火曜日・金曜 日に施行しており、火曜日に施行された検体の固定時 間は約24時間であるが、金曜日は約72時間と過固定 となっている可能性がある。【目的】ホルマリン固定 時間のEGFR遺伝子変異検査への影響を後方視的に 検討する。 (方法) 2017年4月1日から2019年3月31 日まで当院で得られた経気管支生検検体のうち腺癌組 織85例で、コバスEGFR変異検出キットv2.0を用いて のEGFR遺伝子変異検査の陽性率を火曜日と金曜日で 比較した。【結果】火曜日のEGFR遺伝子変異検査陽 性率は39% (14/36)。金曜日は41% (20/49) で有意 な差は認められなかった。【結論】今回の検討におい ては、少数での比較でもあり過固定によるEGFR遺伝 子変異検査の陽性率に差は認められなかった。今後は Next-Generation Sequencingなどによるパネル検査が 主流となってくるため、サンプルとして腫瘍量に加え DNA、RNAの品質が重要であり、プレアナリシス段階 におけるさらなる精度管理が必要となってくる。

·第28回日本乳癌学会学術総会(web開催)2020.10 乳癌術後補助化学療法中Pegfilgrastim投与後に大動脈炎を 呈した2例

(中国中央病院 外科) 栗山 志帆、大多和泰幸

Pegfilgrastimは化学療法中の発熱性好中球減少症を予 防する目的に使用頻度が増加している。今回我々は術 後補助化学療法中Pegfilgrastim投与後に大動脈炎症 状を呈した2例を経験したので報告する。【症例1】 78歳、女性。右乳癌(浸潤性小葉癌) ER+, PgR+, HER2 -, Ki67=1%に対して右乳房全切除+腋窩郭清を 施行。T2N2aM0, pStageIIIA。術後補助化学療法とし てTC療法 (エンドキサン880mg+ドセタキセル110mg) を開始。day3にPegfilgrastim投与。day10に38.6℃の発 熱を認め外来受診。WBC 32120/μL, CRP 5.00mg/ dLと上昇あり。CT検査では熱源ははっきりせず。倦 怠感強く入院となった。入院後も発熱が続き、day12 にCRP 19.30mg/dLと著増したため再度CT検査を施 行。大動脈弓部に壁肥厚を認め大血管炎を疑った。 day15よりアセトアミノフェンの定期内服を開始したが 発熱は継続。感染症を否定した上で、day17よりプレ ドニゾロン50mg/dayの内服を開始した。以降速やか に解熱しCRPも正常化したため、プレドニゾロンを漸 減し、day40に退院となった。以降の化学療法は希望 されず、レトロゾール内服にて経過観察中であるが、 血管炎の再燃なく経過している。【症例2】70歳、女 性。右乳癌(浸潤性乳管癌, solid type)ER+, PgR+, HER2 2+ (FISH -), Ki67=20.2%に対して右乳房全 切除+センチネルリンパ節生検を施行。T1cN0M0, pStage I。術後補助化学療法としてTC療法 (エンド キサン900mg+ドセタキセル110mg) を開始。day3に Pegfilgrastimを投与。day13より微熱・腰痛・両足先 の痺れが出現。day17に腰部~臀部の痛みが増強し歩 行困難となった。day18に外来受診。CRP 25.96mg/ dLと上昇を認め、造影CTにて胸腹部大動脈~大腿動 脈、右総頸動脈、左鎖骨下動脈などの動脈壁に壁肥 厚を認め、入院となった。入院当月よりプレドニゾロ ン50mg/dayの内服を開始。腰痛・下肢の痺れは数日 で改善傾向を認めた。側頭動脈炎の可能性も考え、 左側頭動脈より生検を施行したが、炎症所見は認め なかった。その後炎症反応も速やかに改善し、プレド ニゾロン漸減しday38に退院となった。化学療法の継 続は希望されず、レトロゾール内服にて経過観察中で あるが、血管炎の再燃は認めていない。【結語】近年 G-CSF製剤の投与により大型血管炎を発症した症例 が報告されている。Pegfilgrastim投与後に大動脈炎を

呈した2例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

【はじめに】長期作用型G-CSF製剤である ・第61回日本肺癌学会学術集会(岡山県)2020.11 fdlgrastimは化学療法中の発熱性好中球減少症を予 早期肺癌に対する胸腔鏡下右S6b+c+S8a+S9a複合区域 する目的に使用頻度が増加している。今回我々は術 切除

(中国中央病院)

平野 豊、荒木 恒太、鷲尾 一浩 【はじめに】画像診断技術の向上等により早期肺癌 に対する縮小手術が増加している。肺癌に対する区域 切除では腫瘍との十分な切除マージンの確保が重要と なる。そのため1区域単独切除では不十分で、複合区 域切除が必要となることが多々ある。今回右下葉の早 期肺癌に対して、4亜区域からなる右S6b+c+S8a+S8b 複合区域切除を完全鏡視下に施行した1例を経験し たため報告する。【症例】69歳、男性。咳嗽を主訴に 近医を受診した。胸部CTで右下葉にすりガラス影を 指摘され、原発性肺癌の疑いで当科紹介となった。 画像上右S8に2.0cmのpart-solid noduleを認め、早 期肺癌が疑われ手術の方針となった。病変は右S8a に位置していたが、S6b、S6c、S9aにもそれぞれ近 接していた。切除マージン確保のために胸腔鏡下右 S6b+c+S8a+S9a複合区域切除とした。4ポートで完 全鏡視下に手術を行った。葉間で肺動脈を露出し、 A6b、A6c、A8a、A9aをそれぞれ切離した。B6b+cは 自動縫合器で切離し、残りのB8a、B9aはそれぞれ結 紮切離した。ICG静注法による区域間面に沿って自動 縫合器で切離し摘出した。手術時間は154分、出血量 は20mlであった。腫瘍からの切除マージンは2.1cmで あった。病理ではadenocarcinoma。腫瘍径は1.4cmでリ ンパ節転移も認めずpT1bN0M0 Stage1A2であった。 経過良好で術後9日目に退院された。【考察】この 症例では腫瘍が肺底区S8に位置していたが隣接する S6、S9も含めた肺切除が必要であり右下葉切除も考 慮された。しかし4亜区域の複合区域切除を行うこと で肺機能が温存でき、かつ十分な腫瘍との切除マージ ンも確保できた。【まとめ】早期肺癌に対して胸腔鏡 下右S6b+c+S8a+S8b複合区域切除を施行した症例を 経験したので、若干の文献も含めて報告する。

・第45回日本超音波検査学会学術集会(web開催) 2020.12 巨細胞性動脈炎における超音波を用いた側頭動脈 マーキングの有用性について

> (中国中央病院 臨床検査科) 松田 浩明、廣井 綾子、宇根 千尋

田中 浩美、三浦 香苗、貞谷 啓太 門田 有紗、松田 綾香、羽原 利幸 瀬﨑 伸夫

(中国中央病院 脳神経外科)

清水 智久

(中国中央病院 病理診断科) (中国中央病院血液内科) 表 梨華、瀬﨑 伸夫

【はじめに】巨細胞性動脈炎 (giant cell arteritis: GCA) は大動脈から中等大の動脈にかけて発生する 多核巨細胞などの浸潤を伴う肉芽腫性動脈炎で、本邦 ではまれな疾患である。確定診断には側頭動脈生検が 必要とされ、これを確実かつ安全に行うためには採取 血管の走行の把握が重要となる。われわれは、2019年 3月より側頭動脈生検前に超音波検査によるマーキン グを施行しており、その内容や効果などについて報告 する。 【対象および方法】対象は、2019年3月~12月 にGCAが疑われた5名(男性1名、女性4名)で、年 齢は62~80歳(平均71歳)であった。検査およびマー キングは医師、検査技師各1名で行い、所要時間は30 ~40分であった。マーキングに超音波装置はCANON 社製Aplio-CUS550CVを使用し、「超音波による頸動 脈病変の標準的評価法」に準じて壁肥厚や閉塞など を有意な所見とした。左右の側頭動脈を超音波で確認 し、有意な所見が存在する場合は病変を十分に含む部 位に対して、明らかな病変を認めない場合には、眉尻 から出来るだけ離れて走行する血管に沿ってマーキン グを行った。【結果】5例中3例で有意な超音波所見 を認め、組織診断でも動脈壁への多核巨細胞の浸潤 や弾性線維の断裂像を示し、GCAと診断された。有 意な超音波所見を認めなかった2例では、組織診断で もGCAを示唆する所見はなかった。【考察】超音波で GCAの確定診断に行われる側頭動脈生検は比較的高 い偽陰性率が問題とされている。超音波を用いた側頭 動脈マーキングは、炎症所見を確認した後、それを反 映した部位にマーキングを行うことが出来るため、適 切な検体採取が可能となり、より精度の高い検査結果 の提供に寄与すると考えられる。また、高度な炎症に 伴い血流が乏しく触診による評価が難しい部位であっ ても、超音波を用いることで正確なマーキングを行う ことが可能となるため、切開範囲の縮小にも繋がると 思われる。

・第22回日本医療マネジメント学会学術総会(誌上開催) 2020.10 **医師事務作業補助者の教育体制の見直し**

(中国中央病院)

中原 規寿

【はじめに】当院は、2008年7月より医師事務作業補 助者(以下、ドクタークラーク)を導入した。当初は3 名配置から開始し、現在では13名が在籍し医師事務作 業補助体制加算1の25対1を取得している。 現在の業 務は、外来診療録の代行入力、診察前のオーダ確認、 診断書作成、診療情報提供書及び返書作成、退院サマ リー作成等、多岐に渡っている。しかし、2016年9月に 採用したドクタークラーク以降、人員が定着せず、現 在勤務しているドクタークラークに負荷がかかってい る。2019年5月に新たに2名採用したことを機に教育 体制の見直しを行ったので報告する。【方法】教育体 制に係る見直しは以下のとおりである。①教育プログ ラムの見直し②新人の理解度に応じた医師配置③新 人教育引き継ぎノート作成④32時間研修を院内で実 施⑤定期的に面談を実施【結果】2019年4月から2020 年1月の退職者はいない。新人のドクタークラークは 理解度に応じて育成が行われ、初級レベルの業務から 難易度の高い業務まで段階的にステップアップしてい くことができた。新人教育の研修内容の充実を図った ことで、新人以外のドクタークラークからは、「32時 間研修の内容を聞いてみたい。」等の意見があった。 【考察】教育体制を見直すことで、ある程度の効果が 得られた。しかし、新人教育プログラムを充実させる ことができたが、新人以外の継続教育体制はまだ構築 できていない。人材育成には、継続的な教育システム の構築が必要である。ドクタークラークの教育体制の 充実を図ることが必要であると改めて認識することが できた。一人一人のスキル向上を図り、多職種と連携 して、医師が診療業務に専念できる環境を整えられる ように取り組む必要がある。今後もドクタークラーク

・第62回日本肺癌学会学術集会 (神奈川県) 2021.11 小型肺癌の中枢側マーキングとしてICG気管支壁局注が 有用であった 1 例

が医療の質向上や病院経営に寄与できるように努めて

いきたい。

(中国中央病院 呼吸器外科) 荒木 恒太、鷲尾 一浩 (中国中央病院 呼吸器内科)

松本 千晶、八杉 昌幸、玄馬 顕一 当院は術中の視触診が難しい小型肺癌を切除する 際のマーキングとしてindocyanine green (ICG) を用 いた気管支鏡下肺マッピングを行っており、indigo carmineに比べてICGは蛍光色素であるため術中の マーキングの視認が容易という利点がある。しかし、これまでに行われている気管支鏡下肺マッピングは主に肺表面に行うものであり、部分切除の際に深さの指標とならないことから、特に深部の病変では部分切除の際に切離断端が近接してしまう危険性があった。これを克服するための工夫として行った病変中枢側の気管支壁への局注ICGは、その蛍光性からある程度の深さがある場合でも視認可能であり、中枢側のマーキングとして機能することが確認できた。その実際の症例を供覧する。

・第62回日本肺癌学会学術集会(神奈川県)2021.11 巨大肺嚢胞の退縮を引き起こした肺腺癌の1例

(中国中央病院 呼吸器外科)

荒木 恒太、平野 豊、鷲尾 一浩 (中国中央病院 呼吸器内科)

松本 千晶、八杉 昌幸、玄馬 顕一

【緒言】巨大肺嚢胞は一般的に不変であるか増大 することが多く、退縮することは稀である。肺嚢胞壁 は肺癌の発生母地となることが知られているが、今回 われわれは肺癌の合併が巨大肺嚢胞の退縮を引き起 こしたと考えられた珍しい症例を経験した。【症例】 72歳男性。左背部の違和感を主訴に前医を受診し、胸 部CT検査で左肺尖部に壁側胸膜浸潤を疑う4cm大の 腫瘤影を認めた。10年前の胸部CT検査では左上葉に 11cm大の巨大肺嚢胞が存在していたが、その巨大肺 嚢胞の大部分は腫瘤に置換されており、巨大肺嚢胞は 3 cm大へと退縮していた。壁側胸膜合併を伴う左上 葉切除+ND2a-2を施行したところ、術後病理では肺 腺癌の診断であり、この癌細胞は嚢胞壁と連続してい た。CT検査の経時的変化を踏まえると、巨大肺嚢胞 の嚢胞壁もしくはその近部に発生した肺癌によって巨 大肺嚢胞への空気の流入が妨げられた結果、肺嚢胞 が退縮したと推測された。【結語】CT検査の経時的 変化と病理所見から巨大肺嚢胞退縮の機序が示唆さ れた肺腺癌の1例を経験した。

・第23回日本医療マネジメント学会学術総会(web開催) 2021.7 施設基準取得による診療収入増の取り組み

(中国中央病院 事務部医事課)

中原 規寿

(中国中央病院 事務部)

鎌田 真治

【はじめに】当院では、令和2年10月に幹部職員を 中心とした適正な病床数を検討するワーキンググルー プ(以下、病床適正化WG)が立ち上がった。併せて 診療収入増に向けた取り組みが必要となった。以前よ り医事課職員と各部署の中堅職員で構成されている施 設基準を管理するワーキンググループ(以下、施設基 準管理WG) が活動を行っていたこともあり、当該WG が中心となり、この度、施設基準取得による増収計画 の作成等を行い、診療収入増に向けた取り組みを行っ たので報告する。【方法】施設基準管理WGが行った 取り組みは次のとおりである。①病床適正化に伴う施 設基準への影響②系列病院と近隣病院の施設基準届 け出状況の取りまとめ③新規届け出項目の検討、増収 見込み額の算出、対応状況(要件の確認や課題)等の 取りまとめ④既届け出項目のうち、算定件数が低いも のに関しては件数増加に向けた検討等を行った。取り まとめた増収計画は施設基準管理WGや病床適正化 WG内で報告を行った。【結果】施設基準管理WGや 病床適正化WG内で報告することで、人材確保並びに 各部署で人員調整等が行われ、医師事務作業補助体 制加算(25対1→20対1)、検体検査管理加算(Ⅱ→ IV)、患者サポート体制充実加算等の届け出に結び付 けることができた。施設基準管理WGメンバーからは 件数増や新規届け出に向けた相談が続いており、更な る収入増に向けた検討も行っている。【結論】新たな 項目やより高位な施設基準を届け出することができ、 診療収入増につながる取り組みとなった。人員活用や 業務効率化を図りながら、施設基準の視点で診療収入 に寄与することができた。地域の基幹病院としての機 能を維持するためには、病院資源を活用しながら検討 し続ける必要があると考える。

・第23回日本医療マネジメント学会学術総会(web開催)2021.7 経営改善を視野に入れた病床適正化ワーキングの取り組みについて

(中国中央病院 事務部) 鎌田 真治、中原 規寿

【目的】当院では令和元年度下半期より、急性期病院を取り巻く医療制度変革や新型コロナウイルス感染拡大と相まって病床利用率が平均70%代前半となり、病院経営への圧迫要因となった。このため、地域包括ケア病床をはじめとする病床機能転換などを含めて様々な角度からの経営改善が急務となり、これを解決するために院内に病床適正化ワーキングを発足させ検討を行うことを目的とした。【方法】検討方法は、まず診療収入上影響の大きい病床適正化を最優先事項とし、病床機能転換、更には増収策など経営改善面計

6つの課題に取り組むこととした。週1回幹部と関係 者からなる病床適正化ワーキングを開催し、各課題別 にカテゴリー分けをし、工程表を作り進捗管理を行う ことにした。ワーキングで決定した方針は現場職員に 運営会議等で出来るだけ迅速に伝達を図るよう心がけ た。【結果】適正な許可病床数については、地域包括 ケア病床などへの病床機能転換のシミュレーションを 行ったが、後方施設の充実やコロナ禍で軽傷者を除 く患者ニーズがより明確な課題となったことから、ま ずは今後約3か年をかけ病床の適正化を行うこととし た。初年度令和2年度は平均利用率の低い病棟34床 の病床削減を行った。適正化後の病床利用について は、当院ががん化学療法を専門分野としていることか ら、外来化学療法室を病棟に移設し、化学療法セン ターとして一層のがん診療の充実を図るべく本年7月 から本格的な稼働を行うこととした。また、増収面で は直近で届出可能な施設基準項目を整備し、令和3 年度からは年間約2500万円増収の見込みをつけた。

【考察】経営改善を目的として幹部および関係職員からなるワーキングを立ち上げ、検討した方針を現場や責任者と共有することで、職員の協力を得つつ、病床の適正化と増収を図った。適正化後の人件費削減は必ずしも計画通りの減額とならず、今後の課題として検討を予定している。

・第30回日本乳癌学会学術総会(神奈川県)2022.6 眼窩転移にて再発が判明した乳癌の1例

(中国中央病院 乳腺外科)

栗山 志帆、大多和泰幸

【はじめに】乳癌の眼窩転移は非常に稀な症例であ る。今回我々は眼窩転移にて再発した1例を経験した ので報告する。【症例】89歳、女性。5年前に乳房腫 瘤を主訴に近医受診し精査目的に当院紹介。初診より 10年以上前より腫瘤を自覚していたが増大傾向ないた め放置していた。初診時左B区域に2cm大の腫瘤を触 知。エコー検査では内部に微細石灰化を伴う18mm大 の境界不明瞭な不整形低エコー腫瘤を認め、針生検に て浸潤性乳管癌ER+ (90%), PgR+ (70%), HER2 (1+), Ki67=1%と診断された。CT・骨シンチにて 明らかな遠隔転移や有意なリンパ節腫大を認めず、 T1cN0M0, Stage I Aと予想された。左乳房部分切除+ センチネルリンパ節生検を施行し、病理結果は20mmの 浸潤性乳管癌 (scirrhous type), f, EIC+であった。 術後、温存乳房への放射線治療を行い、レトロゾール 投与を開始したが5ヶ月で本人希望により内服中止し

た。術後4年目にCEA 5.5ng/mLと微増を認め造影CT 検査を行ったが明らかな再発は認めず。経過観察継 続の方針としたが、以降受診されなかった。術後5年 目に目のかすみを自覚、家族が左眼球運動障害に気づ き眼科受診され、左眼窩腫瘤を指摘。MRIにて左眼内 直筋に15mm大の造影される分葉状腫瘤あり、CTにて 両側胸水・多発骨転移を認め、乳癌再発疑いにて当院 紹介となった。CEA 26.9ng/mL, CA15-364.6U/mLと 上昇。PET-CTでも左眼窩結節・両側肋骨や脊椎・骨 盤へのFDG異常集積あり。乳癌再発と診断し、レトロ ゾール+パルボシクリブ投与を開始した。【結語】乳癌 の眼窩転移は非常に稀であり、乳癌術後再発のうち眼 部転移は0.2%、眼窩転移は0.04%との報告がある。組 織型は浸潤性小葉癌が多い傾向にある。症状としては 眼窩転移では眼球突出、眼球運勤障害、複視、疼痛な どであり、脈絡膜転移では視野障害、視力低下などが ある。眼部転移は予後規定因子とはならないが、発見 された時点で遠隔転移が存在する場合が多く、予後不 良とされている。稀な眼窩転移症例を経験したため、 若干の文献的考察を含め報告する。

・第63回日本肺癌学会学術集会(福岡県)2022.12 ICG静注法、ICG-VAL-MAP、ICG気管支壁局注を併用し 行った右S3a亜区域切除

> (中国中央病院 呼吸器外科) 荒木 恒太、林 直宏、鷲尾 一浩 (中国中央病院 呼吸器内科) 八杉 昌幸、玄馬 顕一

【背景】当科は手術にindocyanine green (ICG) を 積極的に用いており、区域間同定法のICG静注法に 加えて、ICG-Virtual-Assisted Lung Mapping (ICG-VAL-MAP) を併施している。ICG静注法で区域間が 描出不良となった場合でも、術前においたマッピング によって概ね正確な区域が判別できる。また、病変が 区域間に近い場合には隣接区域に切り込む際のメル クマールとしても有用である。本症例ではこれらに加 え、切離予定の気管支壁にICGを局注し術中のメルク マールに用いた。これら複数のアプローチでICGを使 用した右S3a亜区域切除を供覧する。【症例】82歳の 男性。CTで特発性肺線維症を疑う蜂巣肺の中に結節 を認め、肺癌が疑われ当院紹介となった。右肺S3aと S10に結節を認め、2病変に対し手術の方針とした。 S3aの病変はS3a亜区域切除、S10の病変は下葉切除 を行う計画を立てた。手術前日にICG-VAL-MAPを行 い、S3aの区域間に3カ所のマッピング、B3aの気管支

壁にICGを局注した。S3a亜区域切除に関して、まず V3a、A3aを切離し、B3aを露出した。B3aに局注されたICGの蛍光染色を確認した後に切離した。ICG静注法では区域間が不明瞭であったが、肺表面のマッピングを基に区域間を設定し切離した。S10の病変は迅速診断後に右下葉切除+ND2a-1を行った。【考察】ICG静注法でも稀に区域間が不明瞭となる症例を経験する。ICG-VAL-MAPを併施しておけばそのような症例でも区域間が判別しやすい。また気管支壁に局注したICGは気管支同定の際のメルクマールとなった。 【結語】ICGを静注、VAL-MAP、気管支壁局注といった複数のアプローチで用い多面的に確認することで、より安全で確実な区域・亜区域切除が可能である。

・第63回日本肺癌学会学術集会(福岡県)2022.12 ICG-VAL-MAPの蛍光染色持続期間について

(中国中央病院 呼吸器外科) 荒木 恒太、林 直宏、鷲尾 一浩 (中国中央病院 呼吸器内科) 八杉 昌幸、玄馬 顕一

【背景】Virtual-Assisted Lung Mapping (VAL-

MAP) では色素で肺表面に複数箇所のマッピングを おくことができ、マッピングの自由度が高く、部分切 除から区域切除まで応用範囲の広い有用な手法であ る。indocyanine green (ICG) を色素として使用すれ ば原法であるindigo carmine (IC) を使用した場合と 比較し、視認性が向上する。ICG-VAL-MAPの蛍光 色素の持続性については現状知見がなく、当科では 基本的に手術前日にICG-VALMAPを行ってきた。今 回ICG-VAL-MAP後に手術が延期となり、10日後の 手術時にマッピングが確認できた症例を経験した。 【症例】 喫煙歴のない76歳の女性。 交通外傷精査時の CTで両肺のGGNを指摘された。まず右S2区域切除を 行った後、左のGGNに対して部分切除を計画した。手 術前日にICG-VAL-MAPを行い、病変を囲むように3 カ所のマッピングをおいた。翌日に高度の肝障害を認 め手術が延期となったが、ICG-VAL-MAPから10日 後には肝機能が正常化したため手術を行った。ICGの 蛍光染色が消退している可能性を考え、CTガイド下 マーキングを行っておいた。手術の際にICGカメラで 確認したところ、ICGの蛍光性はやや低下している印 象はあったものの、色素の広がりは通常とあまり変わ らず、3カ所のマッピングはいずれも識別可能であっ た。これらのマーキングと触診を併用し病変を楔状切 除した。【考察】ICを用いた場合、VAL-MAPから3 日後には染色が薄くなる傾向があり、視認が不良となりやすい気腫肺などでは手術までの期間が短いことが望ましいとされる。一方で、本症例からはICGの場合には比較的長期に良好な視認性が保たれる可能性が示唆された。【結語】ICG-VAL-MAPでは比較的長期にマッピングの視認性が維持される可能性がある。

・第76回日本口腔外科学会学術集会(福岡県) 2022.4 耳下腺癌におけるCD81の発現とその病態への関与

> (大阪医科薬科大学 医学部 口腔外科学教室) 濱田 涉、小越菜保子、諏訪 吉史 中島世市郎、中野 旬之、真野 隆充 植野 高章

(中国中央病院)

濱田 涉、早瀬 友克、田野 智之 (兵庫医科大学 病理学 病理診断専門) 山根木廉嗣

【緒言】CD81は細胞膜を4回貫通するドメインをも つタンパク質であり、細胞外にはペプチドのループが 2箇所で露出している構造を持つ。その機能は膜組織 化、タンパク質輸送、細胞融合、細胞間相互作用など 様々な細胞プロセスに関与する。このCD81は、乳が んや前立腺がん、骨肉腫において増殖、転移および湿 潤に重要な役割を果たすことが近年明らかになり、そ の過剰発現が不良な予後と関連することが示唆されて いる。これまでに我々は、耳下腺癌においてCD81が 高発現していることを報告している。【目的】耳下腺 癌におけるCD81の発現を評価し、CD81の発現が耳下 腺癌の細胞増殖に及ぼす影響を明らかにすることを目 的とした。【材料および方法】耳下腺癌の手術時摘出 組織を採取し、細胞培養を行うことによって耳下腺癌 由来細胞株を樹立した。耳下腺癌組織および耳下腺癌 由来細胞において、CD81タンパクの発現をウエスタン プロッティング法にて検出し、CD81mRNAの発現をリ アルタイムRT-PCR法で定量した。また組織切片の免 疫組織化学染色を行い、CD81の発現を評価した。耳 下腺癌由来細胞株の中で特にCD81の高発現が認めら れた唾液腺導管癌の由来細胞を用いて、抗CD81抗体 が細胞増殖に及ぼす影響をCell Counting Kit-8で評価 した。さらに唾液腺導管癌由来細胞でのCD81の発現 をsiRNAにより抑制し、抑制下の細胞と非抑制下の細 胞における増殖能を比較検討した。【結果】耳下腺癌 の組織および由来細胞株におけるCD81タンパクおよ び遺伝子の発現が認められた。唾液腺導管癌由来細 胞は抗CD81抗体存在下で細胞増殖が抑制された。ま

たCD81特異的siRNAにより唾液腺導管癌由来細胞の CD81 mRNAの発現を抑制した時に、細胞増殖が抑制 された。【結論】耳下腺癌におけるCD81の発現が細 胞増殖に影響を及ぼす可能性を示し、耳下腺癌の病 態への関与が示唆された。

・第19回日本口腔ケア学会総会・学術大会(大阪府)2022.4 当院における周術期口腔機能管理のこれまでの取り組み (中国中央病院 歯科口腔外科)

> 濱田 涉、下江 麻衣、宮本真紀子 早瀬 友克、田野 智之、宇根 秀則

【緒言】周術期口腔機能管理の目的は、適切な口腔 管理を行うことにより周術期の合併症を予防、または 軽減することである。2012年度の診療報酬改定で周術 期口腔機能管理が保険導入され、当科では2014年よ り周術期口腔機能管理を開始した。その中で、2016年 より呼吸器外科からの院内紹介において周術期口腔機 能管理システム「周術期口腔ケア地域連携パス呼吸器 外科 | を構築し、現在も使用している。今回われわれ は、当院における周術期口腔機能管理のこれまでの取 り組みについて検討を行ったので、本システムの概要 も含めて報告する。 【対象・方法】 2016年度~2021年 度までに呼吸器外科からの院内紹介で周術期口腔機 能管理を行った患者を調査対象とした。呼吸器外科で 全身麻酔手術の日程が決定した後、当科への紹介受診 となり、口腔内精査により感染源や動揺歯の確認を行 う。入院前にかかりつけ歯科での歯科治療や口腔ケア を依頼し、入院後は当科にて術前ケアおよび術後ケア を行うことにより、周術期における口腔管理を行って いる。【結果】呼吸器外科からの院内紹介患者数の調 査をしたところ、2016年度は35件、2017年度は62件、 2018年度は68件、2019年度は69件、2020年度は77件、 2021年度(2022年1月まで)は72件と年々増加傾向に ある。【結論】当院における周術期口腔機能管理の件 数は年々増加傾向にある。本システムは良好に機能し ていると考えられ、今後他科での手術や抗がん剤治 療、放射線治療等においても応用できればと考える。

・第27回日本緩和医療学会学術大会(兵庫県)2022.7 オピオイド依存が疑われた高齢がん患者に対し、緩和ケア チームが介入しオピオイドを中止できた1事例

> (中国中央病院 緩和ケアチーム) 田原 由季、大塚由有子、藤高 浩輝 在間 優衣、田村愛夕美、佐藤 美好 細井 直子、河本 敏貴

(中国中央病院 耳鼻咽喉科) 西田 直樹

【はじめに】治療中の粘膜障害に対し開始したオピ オイドが、粘膜障害改善後も長期的に継続されたこと によりオピオイド依存が疑われたが、症状マネジメン ト、心理社会的ケアによりオピオイドを中止すること ができた症例を経験したため報告する。【症例】70歳 代、男性、外耳道癌に対し、化学療法及び光免疫療法 を施行された。光免疫療法による患部の粘膜障害が 強く、オピオイドが開始された。粘膜障害は改善した が、患者及び家族の強い希望で治療は中止となった。 しかし結果的には、光免疫療法施行にて寛解に至っ ていた。その後、家族ケアについて、緩和ケアチーム へ介入の依頼があった際、オピオイドが全身掻痒に対 し使用され続けていること、オピオイド依存が疑われ ることが判明した。面談を行い、痛みの体験やオピオ イド使用に対する認識、病状や治療に対する受け止め などを聞き、抱えている苦痛や苦悩を把握した。その 結果、病気の捉え方により生きること諦めてしまった 患者及び家族の心理的状態が、オピオイドの使用に繋 がっていたことが明らかになった。主治医、皮膚科医 師と協力し、全身掻痒への対応を行う共に、現在の病 状、今後の見通し、オピオイドの使用について説明し た。同時に心理社会的ケアとして、外来受診時に患者 及び家族への面談を継続した。徐々にオピオイドを減 量し中止することができ、その結果、患者のQOLも改 善し、生きる希望も見出すことができた。**【考察】**オ ピオイド使用の背景にある患者及び家族の心理社会的 側面を明らかにし介入していくことで、オピオイドを スムーズに中止することができたと考える。

・第24回日本医療マネジメント学会学術総会(兵庫県)2022.7 院内がん登録から分かる予後分析

(中国中央病院)

十井有美子

【はじめに】当院は、2013年から肺がんの院内がん登録件数が増加しており、2020年症例で癌種別にみると、肺がん132件、リンパ腫89件、大腸がん61件の順であった。患者の予後情報が蓄積されたため5年生存率の分析を試みた。自施設の分析結果を報告する。【目的】院内がん登録のデータを用いて全国と自施設を比較し、自施設におけるがん診療の実態を把握する。【方法】まず、自施設の5年予後情報を有する2013年-2014年診断症例から症例数の多い非小細胞肺がん204例を年代別にKaplan-Meier法で分析した。次

に「がん診療連携拠点病院等院内がん登録生存率集 計報告書」(以下、「生存率報告書」とする)を用い て自施設と全国の実績値を比較した。そして、抽出さ れた結果をもとに発見経緯や病期に着目した。なお、 追跡期間および集計の対象は生存率報告書に記載さ れている定義を用いた。【結果】自施設の5年生存率 は、60代52.4%、70代45.3%、80代以上28.0%であっ た。全国データと比較すると各年代ともにやや高い結 果であった。特に、80代以上では全国の22.4%に比べ 高い結果が示され、I 期が92.3%を占め、66.6%が鏡 視下手術を施行していた。全年代を発見経緯別にみ ると、自覚症状等があり発見に至った割合は53%で あり、次いで他疾患経過観察中の発見は34.3%であっ た。【考察・結論】生存率報告書と同定義で分析した ことにより、自施設のがん診療の実態を詳細に把握す ることができた。近年では年齢を問わず患者の意思決 定に基づき初回治療を施行している。広島県のデー タと比較しても初回治療の施行割合が高く、「治療な し」の患者は少ない傾向にある。生存率の抽出は、長 期にわたる質の高いデータを蓄積していなければ利活 用することはできない。引き続き院内がん登録の質を 担保し、分析結果を自施設で情報共有したいと考えて いる。

・第15回日本禁煙学会学術総会 (Web) 2021.10 総合労働衛生機関における加熱式タバコ使用状況の実態調査 (第2報)

(中国労働衛生協会)

折坂智恵子、長原 郁美、塚本 聡子 森近 俊彦、宮田 明

【目的】当協会受診者の喫煙者における加熱式タバコ使用割合は3割弱で、ここ3~4年で増加していることが判明した(第一報)。職域においての禁煙対策は紙巻タバコが中心だが、近年の加熱式タバコの増加を念頭におけば加熱式タバコの禁煙対策も必要である。そこで、加熱式タバコの使用状況をさらに詳しく調査し禁煙対策に活用することを目的とした。【対象】令和2年7月14日から令和3年1月29日に職域健診を受診した45,485名(男性29,862名、女性15,623名)。【方法】問診時の喫煙状況は「吸わない」「吸う」「やめた」の3択、「吸う」者は「紙巻タバコのみ」「加熱式タバコのみ」「紙巻タバコ及び加熱式タバコ併用(Dualuse)」の3択とし、男女別、年齢別に使用状況を調査した。【結果】「吸わない」「吸う」「やめた」の喫煙状況は、男性では36.5%、36.5%、27.0%であり、

女性では80.1%、10.8%、9.1%であった。喫煙者が使 用しているタバコの種類について、「紙巻タバコの み」「加熱式タバコのみ」「Dual use」の割合は、男 性では73.7%、20.3%、6.1%であり、女性では72.1%、 22.2%、5.7%であった。 喫煙者が使用しているタバコ の種類を年齢別に調査したところ、加熱式タバコ使用 割合は男性では30代が最も多く、30代前半が30.8%、 30代後半が31.4%、女性は20代が最も多く、20代前半 が40.5%、20代後半が37.6%であった。「加熱式タバ コのみ」の割合は、男性は30~40代で多く、女性は20 ~30代で多かった。「Dual use」の割合は、男女共に 20代が最も多かった。【考察】当協会受診者の喫煙者 における加熱式タバコ使用割合は、男性26.4%、女性 27.9%であった。厚生労働省の調査では男性30.6%、女 性23.6%となっており、女性喫煙者の加熱式タバコ使用 割合は高く、特に20~30代の若い年代に親和性が高い ことが判明した。20代においては喫煙開始年齢と加熱 式タバコが広まった時期が同時期であり、喫煙を取り 巻く環境の変化により紙巻タバコが敬遠されている可 能性が考えられる。一方男性は30~40代に加熱式タバ コ使用割合が高く、環境の変化に加え主に子育て世代 であるため周囲へ配慮して、また禁煙ツールの一つと 考えて使用している可能性が考えられた。【結語】加熱 式タバコが喫煙の入口とならないように、また禁煙ツー ルになるという誤った考えを持たないように、職域にお いても禁煙対策を講じることが重要と考えられる。

・日本総合健診医学会第50回大会(Web) 2022.1 高度高血圧受診者への受診勧奨の取り組み (中国労働衛生協会)

折坂智恵子、森近 俊彦、宮田 明 【目的】当協会において、健診時高血圧を呈した受診者(紹介状送付者)のうち、医療機関より返信された通知書による返信率(以下受診率)は20%台と非常に低く、高血圧放置者が多いと考えられた。そこで血管リスクの高い高度高血圧者の発症リスク低減を目的として、より迅速な受診勧奨を行ったのでその効果を報告する。【対象】2017~2020年度に当協会で職域健診を受診した964,232人のうち、高血圧により受診勧奨した20,830人を対象とした。【方法】2018年度までは、約3週間後に健診結果と共に紹介状を送付し受診を促していた。2019年2月より、高血圧治療ガイドラインに基づいた3度高血圧者に対して健診当日医師により受診勧奨を行い、健診翌日紹介状を送付し受診を促した。2017~2020年度の受診率の推移、2018、

2020年度の受診率の比較と、さらに男女別、年齢別の 受診率の変化を検証した。【結果】2017~2020年度ま での受診率はそれぞれ23.7%、24.0%、27.3%、29.6% と上昇傾向を示した。2018年度に比し2020年度の受 診率は有意に増加しており(p<0.05)、男性に比し女 性の方が高かった。男性では35~49歳の年代において ほとんど変化が見られなかった。【考察】今回、健診 当日の医師による受診勧奨と迅速な紹介状の送付によ り受診率は上昇し、勧奨効果はあったと考えられる。 また、血管リスクの高い3度高血圧者のリスク回避に も寄与すると考える。一方で、比較的若い働き盛りの 男性においては別のアプローチが必要とも考えられ た。【結語】このたびの取り組みにより高血圧者の受 診率は上昇したが未だに低率である。更なる受診率向 上のために、健診時にリーフレットを用いて情報提供 を行い受診を促すなどの方法を検討していきたい。

・第63回日本人間ドック学会学術大会(千葉)2022.9 「健康経営」支援の健康診断結果へ与える影響 〜食習慣・運動習慣への介入の効果〜

(中国労働衛生協会)

川久保彩花、佐名木美智子、中本 由里藤原 和典、折坂智恵子、宮田 明

【目的】当協会では、企業における「健康経営」 の支援事業を2020年度から開始している。今回そ の支援の一つとして2021年度に支援した1社にお いて、健診結果を用いて事業場の健康課題を抽出 し、従業員生活習慣改善への介入を行った。その効 果について報告する。【方法】介入前の2020年度の A事業場男性111名(平均年齢41.9歳)は、健診結 果の解析により40歳未満で肥満 (BMI≥25)、40 歳以上で血圧(SBP≥140mmHgかつ/またはDBP ≥90mmHg)の有所見率が高いことが判明した。そ こで2021年度の支援として従業員全員にInBody測 定とA事業場ジムのトレーニング機器を用いた効果 的な運動を指導し、運動を奨励した。また40歳未 満は肥満改善、40歳以上は高血圧対策をテーマに 食事と運動について健康教育を行った。加えて、体 重が100kg超の者(4名)に対する運動指導(1回 /週)を行った。介入前の2020年度と介入後の2021 年度の健診結果の有所見率を比較した。また、 2020年度と2021年度のいずれも健診を受けた男性 105名の検査項目 (BMI·SBP·DBP·γ-GTP· AST・ALT・HDL-C・LDL-C) につきその数値と 運動習慣を比較した。【成績】有所見率は40歳未満 においてBMI・肝機能・脂質・血糖で、40歳以上においてBMI・血圧・肝機能・脂質・血糖で改善が見られた。また、男性105名の比較ではLDL-Cを除く全ての検査項目で有意な改善が認められ、運動習慣も有意に改善していた。なお2021年度のLDL-C>150mg/dlの人の食習慣は、肉類をよく食べる・油料理を好む・就眠前の摂食などの特徴があった。食習慣は10項目中7項目で改善されたが、LDL-C値改善には至らなかった。【結語】今回は介入期間が短かったこともあり、十分な効果に至らなかった項目もあるが、食事と運動習慣への介入が健診結果の改善につながった。健診結果を把握しつつ支援できることは、総合労働衛生機関の強みでもある。引き続き支援対象と内容を広げ、その効果を検討していきたい。

・第16回日本禁煙学会学術総会(Web・大阪)2022.10 職域における喫煙対策の効果とこれからの課題

(中国労働衛生協会)

折坂智恵子、長原 郁美、石田 紗綾 中本 由里、塚本 聡子、長尾 由紀 森近 俊彦、宮田 明

【目的】当協会は、健診を通じた職域での禁煙推進 を心がけてきたが、依然として喫煙率は高い。今回、 当協会で実施してきた喫煙対策の効果検証を行い、今 後の喫煙対策の一助とするため職業別の喫煙率を調 査した。**【対象・方法】**調査期間は2016年度から2021 年度とし、この期間の受診者の性・年齢別の喫煙率を 算出した。また、2020年度受診者における職業別の喫 煙率を算出した。喫煙対策としては、2019年度より喫 煙受診者全員に禁煙啓発資料の配布を開始した。ま た2020年度より問診で加熱式タバコ使用の有無を確 認し、2021年度には加熱式タバコに特化した禁煙啓 発資料を使用者に追加配布した。**【結果】**男性は、全 年代において喫煙率が年々低下しており、特に20~ 30代の低下率が顕著だった。女性は、20~30代の喫 煙率は年々低下していたが、40代以降は変化を認め なかった。職業別の喫煙率調査では、男女とも「運輸 業」で最も喫煙率が高く(男性48.6%、女性36.5%)、 特に女性においては他職種に比し明らかに高かった。

【考察】20~30代男性では、禁煙啓発資料を配布した翌年(2020年度)の喫煙率低下幅が最も大きく、資料配布に一定の効果があったと推察する。一方、2020年4月に受動喫煙対策が義務化された改正健康増進法が全面施行されたことや、新型コロナウイルス感染症

に伴うWHOの勧告、2018年から始まったタバコ税の 段階的引き上げなど、環境要因も喫煙率の低下に寄与 した可能性も考えられた。対して、20~30代女性では 2019年度までの毎年の喫煙率低下幅に比し、2020年 度以降の低下幅は減少しており、資料配布の効果は少 なかった。「運輸業」において最も喫煙率が高かった が、この結果は田中らの先行研究とほぼ同様の結果で あった。車輛内(公共交通を除く)は改正健康増進法 の規制対象外となるので、職種と労働環境など、それ ぞれの特徴に応じた喫煙対策が必要であると考えられ ・日本総合健診医学会第51回大会(東京)2023.1 た。【結語】男性は若い世代の喫煙率低下が著しく、 若年層に力点を置いた喫煙対策が有効と考えられる。 一方、性差と喫煙行動について述べた先行研究と同様 に40代以降の女性での禁煙推進は困難であることが 判明した。その原因の究明と、特に喫煙率の高かった 「運輸業」に特化した喫煙対策も、今後検討していき たい。

・日本総合健診医学会第51回大会(東京)2023.1 深夜業務のある就労者の睡眠における運動、喫煙状況の検討 (中国労働衛生協会)

山口 孝子、黒沢 洋一、宮田 明 森近 俊彦、椎木 滋雄、大川 智久 高野 友爾、竹内 陽子、渡辺 能久 折坂智恵子、大谷まり子、橋本 友 小林 有紀、瀧口 真美、柿原 由伊

【目的】深夜業務のある就労者は体内時計と実際の 生活時間がずれるため、睡眠障害を生じやすいことが 報告されている。質の良い睡眠のためには睡眠衛生が 大切で、運動習慣や就寝前の喫煙を控える事等も含 まれる。我々は深夜業務の有無と睡眠、運動、喫煙状 況について調査し、深夜業務のある就労者の睡眠への 運動、喫煙の影響について検討した。【対象】対象は 2020年4月1日から2021年3月31日の間に当協会で全 国健康保険協会(協会けんぽ)の生活習慣病予防健 診を受診した40~74歳の男性就労者。【方法】勤務時 間が午後10時から午前5時までの間にかかる者を深夜 業務ありとした。睡眠、運動、喫煙は受診時に行った 特定健診の標準的な質問票及び協会独自のアンケート 結果から集計した。【結果】健診受診者32,822人のう ち、深夜業務ありは4,168人、深夜業務なしは28,654人 であった。「睡眠で休養が十分とれている」と回答し た割合、運動している割合、喫煙している割合は、深 夜業務ありが其々55.3%、24.6%、43.7%、深夜業務な しは66.5%、29.1%、38.2%であった。深夜業務あり、

なしとも「睡眠で休養が十分とれている」と回答した 群では、運動をしている割合が高かった。深夜業務あ り、なしとも運動している人の喫煙率は、運動してい ない人より低かった。【結語】深夜業務は体にとって 大きなストレスであり、体調管理のために睡眠は取分 け重要になる。深夜業務のある就労者質への健康教育 では、質の良い睡眠確保に関連して適度な運動につい ての指導は有用と思われる。

特定保健指導による体重減少率と検査値改善の効果の検討 (中国労働衛生協会)

中本 由里、佐名木美智子、木多 郁香 森近 俊彦、宮田 明

【目的】厚生労働科学研究班によると3~5%程度 の減量で検査値改善の効果が期待できるとされてい る。本研究では、4か月間の特定保健指導で何%の 体重減少が検査値改善に効果があるかを検討する。

【対象】2020年度に当協会で特定保健指導を実施し、 翌年度に健康診断を受診した925人 (男性826、女性 99) のうち体重が1%以上減少した444人 (男性396、 女性48) を対象とした。【方法】特定保健指導該当者 の介入後の体重減少率を表の通り5段階とし、健診結 果9項目を比較した。【結果】表1参照【考察】3%未 満の軽度な減量でも拡張期血圧、HDLコレステロー ル、ALTにおいて有意に改善しており、2~3%の減 量を目標に生活改善に取り組むことで検査値改善の 効果が得られると考えられる。【結語】特定保健指導 の第4期WGではアウトカムでの主要達成目標を「腹 囲2cmかつ体重2kgの減少又は当該年の健診時の 体重の値に0.024を乗じた体重 (kg) 以上かつ同体重 (kg) と同じ値を乗じた腹囲 (cm) 以上減少」として おり、本研究の結果からも同程度の体重減少が検査値 改善に有効である可能性が示された。

表1

体重減少率 (%)	1≤<2 n=130	2 ≤< 3 n=110	3≤<4 n=76	4 ≤< 5 n=39	5≤ n=89
①収縮期血圧	p<0.01	ns	ns	ns	p<0.01
②拡張期血圧	p<0.01	p<0.01	P<0.05	p<0.05	p<0.01
③血糖 (空腹時)	ns	ns	ns	ns	p<0.01
④中性脂肪 (空腹)	p<0.01	ns	ns	ns	p<0.05
⑤HDLコレステロール	p<0.05	p<0.05	P<0.05	ns	p<0.01
⑥LDLコレステロール	ns	ns	ns	ns	p<0.05
⑦AST	ns	ns	p<0.01	ns	p<0.01
®ALT	p<0.05	p<0.05	p<0.01	P<0.01	p<0.01
⊕γ-GTP	ns	p<0.01	p<0.01	P<0.05	p<0.01

・日本総合健診医学会第51回大会(東京)2023.1 COVID-19が健診成績に与えた影響ー職域での検討ー (中国労働衛生協会)

> 長原 郁美、折坂智恵子、森近 俊彦 宮田 明

【背景】COVID-19流行下(以下、コロナ禍)にお いて、受診控えによる受診者数の減少と外出自粛や リモートワーク推進等による身体活動量の減少が、健 診成績に影響することが報告されている。【目的】コ ロナ禍でのがん検診受診状況とその成績、及びコロ ナ禍がメタボリックシンドローム(以下、メタボ)関 連疾患発症へ与える影響を調査した。 【方法】 2019~ 2020年度の当協会職域健診受診者を対象とし、がん 検診(厚労省推奨5大がん)については受診者数、精 検受診率、がん発見数を、メタボ関連疾患(肥満、高 血圧症、糖尿病、脂質異常症) については発症者数 の推移を調査した。【結果】上記がん検診のうち、X 線による胃がん、肺がん検診においてコロナ禍の2020 年度に受診者数の減少を認めた。またX線による肺が ん、大腸がん、子宮頸がん検診において精検受診率が 低下した。内視鏡による胃がん、X線による肺がん、 大腸がん、子宮頸がん検診ではがん発見数の減少を 認めたが、前年度に比し有意差は認めなかった。メタ ボ関連疾患は、肥満と高血圧症、脂質異常症が有意 に増加し(p<0.01)、糖尿病も増加傾向が見られた (p=0.08)。【考察】コロナ禍が職域がん検診の成績に 与える影響は限定的と考えられた。その理由として、 職域で義務付けられている法定健診と同時にがん検診 を実施する機会が多いためと推察された。高血圧症増 加の要因に当協会の判定基準変更の影響も考えられ るが、肥満や脂質異常症の増加はコロナ禍による生活 様式の変化が影響した可能性が考えられた。【結語】 ウィズコロナ時代が続き、今後もメタボ関連疾患の増 加が予測される。それを踏まえて特定保健指導の強化 や受診者のヘルスリテラシー向上等にさらなる介入が 必要と考える。

・第50回日本人工関節学会(福岡)2020.2 人工肩関節置換術後のリハビリテーション

(日本鋼管福山病院 整形外科)

加藤 久佳

(北新病院 整形外科)

末永 直樹

近年、肩関節治療の進化に伴い肩人工関節置換術 も増加し、特にリバース型人工関節が導入されて以 来、その需要は増加し続けている。このセッションで は、肩人工関節置換術後のリハビリについて、1)腱板 が温存されている全人工関節置換術(TSA)後と、2) "腱板・腱板筋"が機能しないリバース型人工関節置 換術 (RTSA) 後に大別して、講演する。1) TSAの 適応は、腱板が温存されている変形性肩関節症であ る。従って術後リハビリのポイントは、可及的早期に 良好な他動可動域を獲得すること、腱板機能を維持す ること、骨頭の良好な取り込みを促して常に求心位を 保ちながら運動を行うことである。まず早期リハビリ が重要で、術後1週までに前方挙上が145度となるよ うリハビリを設定する。その後、抗重力運動を、内旋 以外で術後4週より、内旋抵抗運動は、術後6週以降 に行う。これは手術で、肩甲下筋腱を切離展開し人工 関節挿入後に再縫着を行うためである。2) RTSAの 適応は、腱板断裂性肩関節症(濱田X線分類 Grade 4.5)、腱板広範囲断裂(濱田X線分類 Grade 2. 3)で偽性麻痺を呈する症例、または高齢者の上腕 骨近位端骨折 (3.4 part骨折) などである。RTSAで は、腱板機能による骨頭の安定化機構の期待できない 症例においても短期に良好な挙上が獲得可能で、長 期の積極的な後療法も不要と言われている。従って術 後リハビリのポイントは、良好な他動拳上角度、三角 筋機能の獲得、肩甲骨の可動性・筋力を得ることであ る。TSAと比較して簡便であるが、脱臼などの術後合 併症が多いこともあり、術中に獲得した可動域以上の 可動域訓練はしないことや、三角筋に負荷をかけすぎ ないこと、患者に脱臼危険肢位などの注意を促すこと が必要となる。術後可動域は、TSAでは、腱板機能が 温存されているため、本来肩関節機能が有する可動域 まで改善する可能性がある。一方RTSAは、人工関節 の形状と腱板機能を有していないことから、TSAと比 較し挙上および内旋・外旋角度は有意に低下する。術 後リハビリの可動域設定において、この特徴を患者な らびメディカルスタッフも十分に理解してリハビリを 行う必要がある。

・第50回日本人工関節学会(福岡)2020.2 リバース型人工肩関節置換術における前方および下方 スクリュー長のNavigation systemの有用性について (日本鋼管福山病院)

过村 良賢、加藤 久佳、岩崎 祐一中村 誠、中島 裕貴、井谷 智 内田陽一郎、高原 康弘

【はじめに】リバース型人工肩関節置換術(以

下RSA) においてGutierrezらはベースプレートを inferior tiltをつけて設置した場合、ベースプレート の下方の応力が増大することを報告した。Yangらも 下方スクリューの応力が高いことを報告している。 ベースプレートの固定性を上げるためには適切なスク リュー挿入が必要である。【目的】Navigation system (以下ナビ)を使用した場合、前方および下方スク リューをより長く挿入できることが可能かを検討する こと。【方法】2016年4月から2019年9月における当 院で施行したRSA症例を後ろ向きに比較検討した。 Navigation使用群(以下ナビ群)はEquinoxe(イグザ クテック社)を用いた14肩、Navigation非使用群(以 下非ナビ群) はComprehensive (ジンマーバイオメット 社)を用いた16肩でスクリュー長さを比較検討した。 【結果】ナビ群の前方スクリュー長は29±5.2 (mm)、 下方スクリュー長は32±3.6 (mm) であった。一方、非 ナビ群の前方スクリュー長は16.5±3.0 (mm)、下方ス クリュー長は28.8±5.4 (mm) であった。ナビ群の方が 前方スクリュー (p<0.01)、下方スクリュー (p=0.04) ともに有意に長いスクリューを挿入することができ た。【考察】上方スクリューは肩甲棘への長いスク リュー挿入の有用性が報告されているが下方スク リューにおいて比較検討はない。下方および前方スク リューの挿入は解剖学的な特徴やベースプレートの設 置位置の関係で困難となることが多い。術前計画通り にベースプレートを設置できるナビは固定性を上げる 長いスクリューを挿入するために有用と考えられた。 【結語】最も応力がかかる前方スクリューと下方スク リューにおいてナビを用いることで長いスクリューを 挿入できると思われる。

・日本歯科保存学会2020年度春季学術大会(第152回)(誌上開催)2020.6 **歯牙移植術および複数の歯周外科手術が奏功した限局型 重度慢性歯周炎の一症例**

(日本鋼管福山病院 歯科)

永原 隆吉

(広島大学大学院 医系科学研究科歯髄生物学研究室) 武田 克浩、白輪地聡美、柴 秀樹 (広島大学大学院 医系科学研究科歯周病態学研究室) 岩田 倫幸

【症例】患者:65歳女性。初診:2013年4月。主訴:歯が揺れだした。現病歴:初診半年前から複数の歯の動揺を自覚するようになるも放置していた。動揺が増大したため、不安になり、専門的な治療を求めて受診した。全身既往歴:定期的な健康診断では低体重

(BMI=16.7) を指摘された。入院や継続的な投薬治療 が必要な治療歴、喫煙歴、飲酒習慣はない。【口腔内 および検査所見』14: 舌側傾斜、12と22: 矮小歯、25 と35:欠損、17と27:唇側傾斜、14と24:捻転、45: 舌側転位、36、38および46:近心傾斜、31と41:翼状 捻転、17と47、16と46、24と34、および27と38:早期 接触と咬頭干渉を認めた。臼歯部を中心に深いPPD が存在し、36舌側にⅡ度の根分岐部病変が認められ た。動揺度Ⅲ度の37と47からは排膿があった。4-5 mmのPPDは18.5%, 6mm以上のPPDは18.5%, BOP は24.1%、PCRは33.3%であった。X線所見では、37と 47は根尖までに広がる混合型骨吸収、16と17に水平 性骨吸収、27遠心と36近心には垂直性骨吸収を認め た。CBCT画像は、27遠心の3壁性骨欠損および36の 近心(2壁性骨欠損)から舌側根分岐部に及ぶ骨吸 収像を示した。全顎の唇頰側に骨隆起、および頰側 骨板の肥厚が認められた。【診断】限局型重度慢性歯 周炎、咬合性外傷【治療方針・経過】1)歯周基本治 療:TBI、スケーリング・ルートプレーニング、う蝕処 置(44)、抜歯(37、47)、咬合調整(16と46、24と 34)。2)歯牙移植術: 咬頭干渉のある38を移植歯とす る遅延型歯牙移植術(37抜歯;歯根破折しており周囲 に多量の炎症性肉芽組織を認めた。抜歯5週後に38を 37抜歯部位に移植した。受容部位の頬側付着歯肉・角 化歯肉幅を増大するために、舌側寄りの歯槽頂に切開 をした後、全層・部分層弁を作製し38を移植。)。3) 再評価。4)歯周外科:36にBone swaging法を併用し たGTR法と遊離歯肉移植術 (FGG)、27にGTR法、 16と17に歯肉剥離掻爬術。5)再評価。6)口腔機能回 復治療。7)再評価。8)SPT。【考察】歯牙移植術は 即時型(受容部の歯を抜歯し、同時に移植)、遅延型 (受容部の歯を抜歯し、1~2ヶ月後に移植)、異時 (受容部の歯を抜歯し、約6ヶ月以上経過した後に移 植) に分類1) され、即時型と比べ遅延型は有意差がな いものの移植歯の生存率が低いという報告1)がある。 しかしながら、抜歯適応歯の状況や歯周組織環境の理 由から遅延型を選択せざるを得ない場合がある。本症 例のように歯根破折による強い炎症の除去や付着歯 肉・角化歯肉幅の増大術を伴う遅延型歯牙移植術は、 高齢者においても咬合再建と歯周組織改善に有効な オプションといえる。特に咬頭干渉の原因であった38 を移植歯として利用できたことは効果的であった。骨 隆起や頬側骨板の肥厚から咬合力が強いことが推測 され、特定の歯にかかる外傷性咬合を軽減させるため にも咬合調整の必要な症例であった。咬合性外傷は歯

列不正、特に歯の位置異常に起因していたため、早期接触と咬頭干渉に対する咬合調整を実施した。深い歯周ポケットを有する垂直性骨欠損に対してはアタッチメントゲインを目的とした歯周組織再生療法が適応されるが、2~3壁性垂直性骨欠損およびⅡ度の根分岐部病変が適応症であるGTR法を27と36に実施した。36には2壁性で舌側分岐部に及ぶ大きい非内側性骨欠損が存在していたことから、Bone swaging法を併用したGTR法^{2,3)}を行った。術後、36周囲の付着歯肉/角化歯肉の幅の不足を認めたため、FGGによって口腔環境を改善し、口腔衛生管理を容易にした。【まとめ】歯周基本治療、歯牙移植術、歯周組織再生療法およびFGGによって、限局型重度慢性歯周炎に罹患した歯周組織を改善することができた。

- 1) 阿部結奈 他:北海道歯誌, 2016. 2) Kodama T et al:Int J Periodontics Restorative Dent. 2013.
- 3) 児玉利朗:日歯周雑誌, 2019.
- ・第41回日本歯内療法学会学術大会 (誌上開催) 2020.6 セメント質剥離に罹患した下顎右側中切歯に対して骨縁下穿孔封鎖 および歯周組織再生療法が奏功した一症例

(日本鋼管福山病院 歯科) 永原 隆吉

・第63回春季日本歯周病学会学術大会【優秀ポスター賞受賞】(Web) 2020.7 経口抗菌療法を併用した歯周基本治療が奏功した広汎型 侵襲性歯周炎の7年経過症例

> (日本鋼管福山病院) 永原 隆吉、徳丸 操 (ともデンタルクリニック) 川井千恵子

・第14回日本CAOS研究会 第26回日本最小侵襲整形外科学会 (Web) 2020.9外側半月板前節部のhypermobile meniscus に対して縫合術を施行した1例

(日本鋼管福山病院) 中島 裕貴

・第47回日本肩関節学会(北海道)2020.10

TSA後肩関節不安定症を生じた症例

加藤 久佳

68歳 男性・女性【治療経過(外傷・疾患の経過、 治療内容など)】2013年1月に車がシャッターの柱 を押し倒し、それが右肩に当たって受傷。その後疼

(日本鋼管福山病院)

痛悪化し、2014年3月変形性肩関節症(Walch Type B-2)の診断で、同年12月に他院でTSA施行。その後リハビリ継続するも、疼痛と可動域制限あるため、2015年3月当院受診。受診時、自動屈曲20度、他動屈曲150度、外旋25度、内旋臀部で、肩不安定性を認めた。CTで、上腕骨骨切り不十分なため、上腕骨頭は上方に位置し、グレノイドコンポーネントは、関節窩後方の骨欠損をセメントでかさ上げして設置されていた。また上腕骨頭は、後方に亜脱臼していた。【考察・検討事項(今後の治療の選択肢など)】関節窩後方骨欠損(Walch Type B-2)に対するTSAと、術後不十分な上腕骨骨切とグレノイドコンポーネントの設置不良(上腕骨頭とグレノイドのミスマッチ)による肩関節不安定症に対する今後の治療についての検討

・第47回日本肩関節学会(北海道)2020.10一次修復不能な腱板断裂に対する肩甲下筋腱部分移行術の治療成績

(日本鋼管福山病院 整形外科)

岩崎 祐一、加藤 久佳、中島 裕貴 【目的】当院では一次修復不能な肩腱大・広範囲断 裂に対し肩甲下筋腱部分移行術(Cofield法)を行って いる。今回Suture-Bridge法(以下SB法)単独群と棘 上筋腱の引き込み具合を調整できるSurface-holding法 (以下SF法)を併用した群での再断裂と臨床成績に ついて検討したので報告する。【方法】2018年2月か ら2019年10月までに施行した、一次修復不能な肩腱板 大・広範囲断裂症例のうち、術後6か月以上経過観察 可能であった44肩(男24肩、女20肩)を対象とした。 SB法のみで修復した群(1群:24肩)とSB法とSH法 を併用して修復した群(2群:20肩)に分け、再断裂 率とJOAスコアを比較検討した。また断裂腱板の脂肪 変性をGoutallier分類(以下G)で評価し、再断裂との 関連を調べた。Cuff integrityは術後半年のMRIで評 価し、菅谷分類(以下S) Type 4, 5を再断裂とした。

【成績】再断裂は1群:4肩 (17%) 2群:2肩 (10%) 認めた。術前JOAスコアは1群:61.85 (男60.6、女64.8) 2群:55.75 (男67.8女49.2)、術後JOAスコアは1群:83.04 (男83.3、女82.3) 2群:80.63 (男82.8女78.4)と優位に改善し、両群とのスコアに差は認めなかった。棘上筋脂肪変性別の再断裂はG1:1肩 (20%)、G2:1肩(4%)、G3:0肩、G4:3肩(50%)、棘下筋脂肪変性別の再断裂はG1:0肩、G2:2肩(8%)、G3:0肩、G4:3肩(50%)だった。棘上筋と棘下筋のどちらかに高度脂肪変性(G4)を認める症例(全4

肩)では再断裂は0%だったが、ともにG4の症例は4 肩中3肩(75%)で再断裂を認めた。【結論】腱板大・ 広範囲断裂では、棘上筋腱の退縮が著明なことが多 い。SH法は腱板の初期固定力が強いこと、腱内応力 が少ないこと、medializationを行うことで応力集中を 分散させることが可能である。今回退縮の著明な棘上 筋腱にSH法を併用する手術方法は、SB法単独より再 断裂が減少したことから有用な術式と考えられた。し かし従来の報告通り、棘上筋、棘下筋の脂肪変性が高 度な症例では再断裂は多いため注意を要する場合があ る。

・第28回日本乳癌学会学術総会 (Web) 2020.10 紡錘細胞癌と浸潤性乳管癌への分化を示した乳癌の1例

> (日本鋼管福山病院 乳腺外科) 藤井 清香、椎木 滋雄 (川崎医科大学 病理学) 森谷 卓也

乳癌の発生・増殖・進展にはさまざまな説が考えら れている。今回、上皮性腫瘍成分が、ホルモン感受性 のある浸潤性乳管癌成分とホルモン感受性のない紡 錘細胞癌成分という二つの異なる分化を示し、乳癌 の増殖・進展形式を考えさせられる症例を経験した ので報告する。【症例】53歳、女性。13年前に左A区 域の乳癌 (DCIS) に対し、Bp、放射線治療、ホルモ ン療法を受けている。7年前より当科で、経過観察中 であった。本人の自覚症状はなく、定期のマンモグラ フィ検査で左乳房に微細鋸歯状の腫瘤を認めた。超 音波検査では、左1時方向に11×10×7mm大の境界 明瞭粗ぞうな腫瘤を認めた。針生検を行い、紡錘細胞 を伴う浸潤性乳管癌の病理診断を得たため、Bt+Ax (Ⅱ)を行った。腫瘍は、13×10mmの浸潤癌で、浸潤 性乳管癌(充実型)が80%を占めていたが、残り20% は紡錘細胞癌成分であった。浸潤性乳管癌の部位で は、組織学的グレードⅡ、ER60%、PR0%、HER2 score 0、Ki-67 21.0%であった。対して、紡錘細胞の 部位は、組織学的グレードⅢ、ERO%、PRO%、HER 2 score 0のトリプルネガティブ乳癌であり、Ki-67は 30.6%であった。AE1/AE3はごく少量が陽性、CK14 およびp63は陽性で、desminとS-100は陰性で上皮様 の性格を有していた。2種類の腫瘍成分は複雑に混在 しており、二つの腫瘍が衝突した可能性より、一つの 腫瘍が異なる分化を示したと考えられた。また、腋窩 リンパ節に転移は認めなかった。術後補助療法として は、EC療法、毎週パクリタキセルを行った後、ホルモ ン療法を行っている。【まとめ】今回、性格の異なる 2種類の成分があり、別々の分化を示していると考え られる乳癌を経験した。紡錘細胞の占める面積が小さ く、紡錘細胞癌の診断にならなかったが、紡錘細胞癌 を念頭とした治療を行っている。紡錘細胞癌への化学 療法の有効性に対して一定の見解はなく、HER1過剰 発現と分子標的剤の有効性や、骨軟部肉腫に準じる化 学療法(イソファミド、ドキソルビシン)が有効であっ たとの報告がある。また、上皮性癌細胞と肉腫様の紡 錘細胞との割合によって化学療法の反応性や予後が 異なる可能性が推測されている。自験例では、患者本 人の希望を入れ、アントラサイクリン系とタキサン系 の両方を使用した治療を選択した。

・第82回日本臨床外科学会総会(Web)2020.10 HER2陰性が陽性に変化し大胸筋内再発をきたした 再発乳癌の1例

> (日本鋼管福山病院 乳腺外科) 藤井 清香

【はじめに】乳癌の骨格筋再発・転移はまれであ る。今回、大胸筋内再発をきたしたHER2陽性乳癌 を経験したので、報告する。【症例】初発時47歳、女 性。右乳癌に対し、右乳房切除術+腋窩リンパ節郭清 を施行。浸潤性乳管癌、浸潤径59mm,s,ly2,v0,n(7 /15) ,ER90%, PgR100%, HER 2 score 0, Ki-67 35% であった。大胸筋膜への浸潤は認めていない。化学療 法、放射線治療、内分泌療法予定とし、EC療法を開 始するも、2サイクルで本人が治療を拒否。他の化学 療法および放射線治療の同意を得られず、本人希望 によりタモキシフェンのみで経過観察を行っていた。 術後24か月目に右胸部腫瘤を自覚。CT・USにて右 大胸筋内に広範囲に転移を疑う像を認めた。CNBを 行い、乳癌再発、ER90%、PgR70%、HER2 score 2 (FISH4.4, 増幅あり) でHER2陽性乳癌となってい た。遠隔転移は認めなかったため、局所切除も考慮し たが、切除範囲は広くなり術後のQOLは低下するこ と、全身転移の一部としての再発の可能性が否定でき ないことより、全身治療を行うことにした。パクリタ キセル+トラスツズマブ+ペルツズマブを開始したとこ ろ、cCRとなった。胸筋内再発の形式としては、血行 性転移もしくは胸筋内の微小リンパ管網に存在してい た微小癌巣が増大した場合が考えられている。そのた め、大胸筋内再発を疑った場合は、自験例のごとく生 検を行い、バイオマーカーを確認した後に、まずは全 身療法を行うべきと考える。

・第82回日本臨床外科学会総会(Web)2020.10 CA19-9産生胃癌、直腸癌の同時性重複癌の一例

(日本鋼管福山病院 外科) 満吉 将大、土井 雄喜、神原

健

渡邉 哲也、森木 康之、浜田 史洋 症例は72歳男性、心窩部痛を主訴に来院。上部消 化管内視鏡検査を施行したところ、胃前庭部に全周 性の2型病変を認め、生検にて腺癌と診断された。ま た、下部消化管内視鏡検査にて直腸に全周性の2型 病変を認め、こちらも生検にて腺癌と診断された。血 清CA19-9は5525U/mlと高値を認め、胃癌と直腸癌の それぞれの生検組織の免疫組織学染色にて、いずれ もCA19-9の陽性所見を認めた。胃癌と直腸癌の重複 癌に対して、開腹幽門側胃切除術+直腸低位前方切除 術を施行した。術後1ヶ月のCA19-9は488U/mlと低 下したが、術後2ヶ月のCA19-9は7993U/mlと再上昇 を認め、CTで播種結節の出現を認めた。病期は胃癌 pStageⅢC、直腸癌pStageⅡb、摘出病変でのCA19-9 の免疫染色では胃癌で陽性、直腸癌で弱陽性であっ たことから、生命予後因子は胃癌と判断し、全身化 学療法として1st line:TS-1+CDDPを施行した。しか し、CA19-9の上昇と、CTでは腹腔内リンパ節腫大を 認めたため、2nd line:PTX+RAMへ移行した。2nd line にて、CA19-9は一時的に低下傾向を示すも再上昇、 CTでは腹腔内リンパ節腫大の増悪を認めたため、3rd line:ニボルマブへ移行した。術後9ヶ月のCA19-9は 1123101U/mlと著明に上昇、CTでは再発所見の増悪 を認め、術後10ヶ月で永眠された。今回、CA19-9産生 胃癌と直腸癌の重複癌の一例を経験したので、若干の 文献的考察を加え報告する。

・第17回日本肩の運動機能研究会(北海道)2020.10 総頚動脈への圧迫ストレッチにより肩甲骨内転が改善 された1例

> (日本鋼管福山病院 リハビリテーション科) 神尾 昌利、宇野 公裕、蔵内 啓 三鼓 善久

(日本鋼管福山病院 整形外科) 加藤 久佳

【はじめに】肩機能評価において肩甲骨の役割は上腕骨との関係だけでなく、頸部・体幹など隣接部位との運動連鎖を考慮し行う必要がある。運動連鎖については、筋・筋膜を介した筋連結(アナトミートレイン)として説明されることが多いが、血管が連鎖に関与している可能性はある。今回、我々は肩腱板縫合術術後

に肩甲骨内転困難であった症例に対し、総頚動脈へ の圧迫ストレッチを施行し良好な結果を得たので報告 する。【症例紹介】年齢;64歳、性別;男性、職業;営業 職(デスクワーク)、術前主訴:左肩可動域制限による 衣服の着脱困難、夜間痛、画像所見;MRI)棘上筋関 節包面不全断裂、経過;2020/3/23 左肩腱板縫合術 (PASTA repair)、術後3.5W経過時点での仰臥位姿 勢は肩関節軽度屈曲位であり肘伸展してベッド面に前 腕を置くと痛みがある状態であった。夜間痛+。座位 では肩甲骨内転が困難であった。【方法】総頚動脈を 指尖で圧迫しながら軽いストレッチを加えた。圧迫ス トレッチを繰り返しながら1分程度行った後、座位で 肩甲骨内転時の左右肩甲骨距離、肩関節他動可動域、 仰臥位姿勢の変化を操作前後で比較した。【結果】 肩甲骨内縁間距離9.8cm→5.4cm、肩関節仰臥位屈曲 角度90→105、肩関節仰臥位屈曲時のVAS3/10→1 /10、仰臥位での姿勢では肩痛は消失し肩関節屈曲伸 展0°が取れるようになり肘伸展してベッド面に置く ことが可能となった。夜間痛は軽減するも消失には至 らなかった。【考察】山元ら(2009)は、中高齢者に おいて柔軟性と血管脈波伝搬速度との間には、負の相 関関係があり、血管と身体柔軟性との関係を報告して いる。また、横山ら (2019) は血管に刺激を加えNOの 作用による血管の拡張を報告している。すなわち、上 記2件の報告を信頼し総合的に判断すると血管にNO を産生させるストレッチを加えると可動域が拡大する と考えられる。先行する研究として、小倉ら(2019) は頚部血管刺激を行い血流への影響を示すと共に肩 関節可動域の改善を報告している。今回の症例では総 頚動脈への圧迫ストレッチにより肩甲骨内転可動域、 肩関節他動可動域、仰臥位姿勢の改善に至り、小倉ら の報告を支持するものであった。

・第17回日本肩の運動機能研究会(北海道)2020.10 リバース型人工肩関節置換術後1年の屈曲可動域と 筋力の関連性

(日本鋼管福山病院)

三鼓 善久、神尾 昌利、宇野 公裕 蔵内 啓

(日本鋼管福山病院 整形外科)

加藤 久佳

【はじめに】ADLで必要な肩関節可動域はNamdariによると、肩関節自動屈曲125°と報告している。また、肩関節屈曲可動域の獲得には、筋力も重要となる。リバース型人工肩関節置換術(以下、RTSA)の

良好な可動域を得るには三角筋や肩甲骨周囲の筋力 が必要で、特に肩関節屈曲には僧帽筋上部線維と三角 筋、前鋸筋が働くと報告されている。今回、我々は術 後1年のRTSAが肩関節自動屈曲125°以上獲得症例 に対しての筋力について調査した。【対象】2017年12 月から2019年3月までにRTSAを行い、術後1年以上 経過観察が可能であった、25名25肩(男性13名、女性 12名、術前平均年齢75.4±4.5歳)を対象とした。術後 1年の肩関節屈曲可動域をADLで必要とされている 肩関節屈曲125°を基準とし、屈曲125°以上(以下、 良好群)と125°未満(以下、不良群)の2群に分け た。良好群は18名 (男性9名、女性9名)、不良群は 7名 (男性4名、女性3名) であった。 【方法】1)肩甲 骨面拳上45°(以下、肩屈曲)、2)肩外転90°·肩内 外旋中間位·肘屈曲90°(以下、肩外転·肘屈曲)、 3) 肩外転90°·肩内外旋中間位·肘伸展(以下、肩外 転・肘伸展)、4)肩下垂位外旋(以下、外旋)の4項 目で、筋力を測定した。筋力測定には日本メディック ス社製MicroFET2を使用し、筋力を体重で除した体 重比筋力値を求め、術後1年で、良好群と不良群の 2群間をt検定を用いて検討した。【結果】術後1年 の1)肩屈曲の筋力は良好群0.7±0.21Nm/kg、不良群 0.39±0.15Nm/kgと良好群が有意に差を認めた2)肩 外転・肘屈曲で良好群1.18±0.35Nm/kg、不良群0.64 ±0.18Nm/kgと良好群が有意に差を認めた。3)肩外 転・肘伸展で良好群0.64±0.24Nm/kg、不良群0.38± 0.15Nm/kgと有意に差を認めた。4)外旋においては有 意差を認められなかったが、良好群0.71±0.27Nm/kg と不良群0.43±0.2Nm/kgに比べ筋力値は大きかった。 【考察】RTSA術後1年で、肩屈曲良好群の三角筋の

筋力は不良群に対して良好であった。外旋筋力は2群 間で有意差はなく、RTSA術後の外旋筋力は肩関節屈 曲への影響は少ないと考えられる。また、肩関節屈曲 には、僧帽筋上部や前鋸筋の協調運動が必要と報告が あり、肩関節屈曲125°以上を得るには、肩甲骨周囲の 筋出力を得るリハビリテーションも必要と考える。

・第17回日本肩の運動機能研究会(北海道) 2020.10 TSA、RTSAの術後6・12か月における自動内旋可動域 の比較

> (日本鋼管福山病院 リハビリテーション科) 蔵内 啓、神尾 昌利、宇野 公裕 三鼓 善久 (日本鋼管福山病院 整形外科)

加藤 久佳

【はじめに】リバース型人工関節置換術(以下 RTSA) の術後に内旋制限が出現するという報告が散 見される。内旋制限の原因として、三角筋の筋力低下 や、インプラントの違い、肩甲骨の代償などの可能性 が考えられる。またRTSAは内旋・伸展位で脱臼の危 険性が高くなるため、内旋方向への積極的な可動域 訓練をしていないことも多い。我々はRTSAの術後可 動域改善には関節内運動はもとより、肩甲骨の可動性 が重要となると考え、早期から肩甲骨の可動性の獲得 を中心にリハビリを進めており、結帯動作が可能とな る症例は多い。そこで我々は解剖学的な人工関節であ るTSAと、RTSAの術後6か月と12か月の自動内旋可 動域において、両術式間で差があるか比較検討した。 【対象】本研究ではTSAとRTSAの術後12か月経過 した症例のうち、術後6ヶ月と12か月で自動内旋可動 域が確認出来た59肩を対象とした。内訳はTSA21肩 (男性5名、女性16名、手術時年齢平均76±8.2歳)、 RTSA38肩(男性18名、女性20名、手術時年齢76.3± 5.4歳) であった。 【方法】 術後6ヶ月と12か月の自動 内旋可動域を測定し、第12胸椎から高位レベルを0、 第1腰椎レベルを1、第2腰椎レベルを2、第3胸椎 レベルを3、第4胸椎レベルを4、第5胸椎レベルを 5、仙骨レベルを6、臀部以下を7として数値化し、 TSA群とRTSA群の2群に分けその平均値を比較し た。2群の自動内旋可動域はMann-WhitneyのU検定 を用いて統計学的に検討した。【結果】術後6か月時 の自動内旋の平均可動域は、TSA群でL2、RTSA群 でL3となり、12か月時の平均可動域は、TSA群でL 1、RTSA群でL3であった。両群間において術後6 か月の平均可動域に有意差はなかったが、12か月で の平均可動域には有意差がみられた。【考察】TSA、 RTSA群の間で術後6か月時の可動域に差はみられな かった。12か月時はTSAは改善したが、RTSAでは変 化がなかった。最終可動域はRTSAでは、TSAと比べ 制限を認めるが、術後早期に肩甲骨や肩甲帯周囲への 積極的なアプローチにより、早期に内旋可動域が獲得 できたと考える。また当院では術後6か月でRTSAの

・第69回日本医学検査学会(Web) 2020.10 院内QCサークル活動に若手技師を登用した試み (日本鋼管福山病院) 井上 英昭

通院リハビリが終了となる症例が多いが、自主訓練な

どの患者教育を行うことで、通院リハビリが終了して

も可動域が維持できた事が示唆された。

【はじめに】当院は1985年から生産会社の製造部 門中心に始められたQCサークル活動(小集団改善活 動)を、職場改善の手法として取り入れている。年間 を通して各職場サークルが活動し、年に1回程度の QC活動発表大会を開催しており、2019年度で53回目 の開催となった。【経過】検査室も2年に1度程度の 活動及び発表を行ってきたが、職場技師の固定化、活 動開始当時のQCメンバーのベテラン化により発表大 会の義務をこなすのみの活動となりつつあった。そこ で2011年以降、若手技師の採用が継続して見込まれ る状況であったため、QC活動のリーダー、3から4人 のメンバー全てを入職4年目程度までの技師で活動す ることにした。メンバーの最年長者をリーダーとし、 発表大会終了後チームを卒業することとした。【活動 テーマ・内容】2011年: 試薬納品作業にかかる時間 を短縮しよう(部門別、保管温度別の納品の工夫)。 2013年:分かりやすい輸血業務を目指して(看護師・ 技師向けの手順書作成)。2015年:血液培養陽性時対 応を全員でできるようにしよう (夜間休日の発育ボト ルの培養・染色報告)。2017年: みんなができる!物 品管理体制を整えよう(SPD納品体制の有効利用)。 2019年:外注検査問い合わせ時間を短縮しよう(特 殊検査・特殊容器の理解、説明文書作成)。【効果】 活動テーマ選定から若手チームの自主性に任せ、メン バー全員が積極的に活動する姿が認められた。院内で の評価も上がり、2017年の活動では優秀賞となり全国 大会等外部発表も行った。特に入職数年のメンバーを まとめ発表まで行ったリーダー経験者は、その後の臨 床検査業務においても課題を認識し解決する手段を 習得している。【まとめ】QC活動の活性化の手段とし て若手技師のみのグループ活動を進めた。活動により 業務内容の改善も認めたが、若手技師の自主性や業務 調整の能力も高められた。

・日本医療検査科学会第52回大会(Web)2020.10 HbA1c測定装置HLC-723G11 Variantモードの性能評価 (日本鋼管福山病院 臨床病理科)

井上 悦子、井上 英昭

【目的】このたびHbA1c分析装置の更新にあたり東ソー社のHLC-723G11 2台を導入し、1台は新規開発された変異Hbに対応可能なVariantモード(以下Vモード)に設定した。Vモードの基礎的検討を中心に報告する。【方法と結果】対象は当院の患者および健診者残余検体、専用管理試料を使用。従来機との相関にはHLC-723G8(東ソー社)を使用した。

G11 Standardモードを以下Sモードとする。1.併行 精度:2濃度の管理試料と患者検体を20回測定。 CV 0.25~0.66%。2.日内変動:8濃度の検体を1時 間毎に11回測定。CV 0.30~1.00%。3.日差再現性: 6濃度の検体を10日間測定。CV 0.46~0.99%。4.希 釈直線性:2濃度の患者検体で希釈系列を作り測 定。HbA1c2.7~15.0%、HbF0.4~13.2%まで確認で きた。5.G11 Sモード、従来機との相関: 患者検体 50検体を測定。Sモードy=0.99x+0.08r=0.9990従来機 y=0.97x+0.08r=0.9986。6.正確性の確認: HbA1c測定 用実試料一次標準物質JCCRM411-4の5濃度を201 倍希釈し測定。認証値との差は0.01~0.06%で各濃度 の不確かさの許容範囲内であった。7.共存物質の影 響:ビリルビンF (18.5mg/dL) ビリルビンC (20.8mg/ dL) 乳び (1640FTU) の影響がないことを確認し た。8.不安定型HbA1c,修飾Hbの影響:グルコース 1000mg/dL,シアン酸ナトリウム25mg/dLまで影響は なかった。アセトアルデヒド25mg/dL添加で0.3%の低 下を認めた。9.変異Hb検体の測定:2例のHbEが疑 われる検体があり1例はHbE成分を除去することで報 告可能であった。もう1例は溶出時間が通常と異なっ ておりHbEEが疑われ報告不可であった。【考察】基 本性能は良好であった。検討ではHbF13.2%までクロ マトグラムが6分画されたがHbF補正を行う際にはク ロマトグラムの確認が必要であると思われる。当院は 企業健診における外国人特有の変異Hbに苦慮してい たがHLC-723G11Vモードにより対応可能となり健診 業務においても有用であると思われる。

Keywords: HbA1c, Variantモード, 基礎的検討

・第22回日本医療マネジメント学会学術総会(京都)2020.10 BIツールを活用した紹介・逆紹介データの分析

(日本鋼管福山病院 医療情報部)

亀井 純子

(川崎医療福祉大学 大学院)

亀井 純子、阿南 誠

(川崎医療福祉大学 医療福祉マネジメント学部 医療情報学科)

虫明 昌一、阿南 誠

【目的】地域の医療機関との連携は地域完結型の 医療を提供するために重要であり、近年の病院経営 において、紹介・逆紹介の実態を把握することは必須 となってきている。しかし、当院の地域連携部門シス テムに蓄積された紹介・逆紹介データは活用されてい ない状況であった。今回、経営企画部門による実態把 握の開始に際し、サポート的に地域連携部門システム 蓄積データの可視化と分析を試みたので報告する。 【方法】地域連携部門システムから抽出し匿名化され た2018年9月~2019年8月の1年間の紹介データお よび逆紹介データについて、BIツール「Tableau」を 用いてグラフ化した。加工IDを主キーに両データテー ブルをリレーションし、紹介元別逆紹介件数、診療 科別紹介逆紹介実績、診療科別医師別紹介逆紹介実 績を可視化。地区別医療機関別紹介件数、紹介元別 検査項目別紹介件数、紹介医別診療科別紹介件数等 についても調査した。【結果】紹介4,208件、逆紹介 2.907件、紹介元医療機関数487、紹介先医療機関数 411で、紹介患者を逆紹介していないケースが2,918件 (69.3%) あり、逆紹介のみは1,676件であった。特定 の内科診療所へは紹介患者の過半数が逆紹介されて いたが、整形外科では紹介されたままの患者が79.4% と多かった。また、紹介を受けた医師と逆紹介した医 師が別であるケースも散見された。【考察】診療科や 医師により逆紹介の状況に差があることは、傷病の特 徴や病床機能、医師個人の意向等が関係しているの ではないかと推察された。逆紹介すべきであるのに出 来ていない症例を特定、改善していく介入が必要と考 えられた。【結論】BIツールを用いたことで、容易に データが可視化され、様々な角度から実態を把握する きっかけとなった。今後は、傷病名データを用いた分 析を地域連携部門と協働で進めていく。

・第22回日本医療マネジメント学会学術総会(京都)2020.10 ペーパーレス化に向けた長期署名システム導入の検討 ~アンケートによる導入実態調査~

> (日本鋼管福山病院 医療情報部) 亀井 純子 (川崎医療福祉大学 大学院) 亀井 純子、阿南 誠 (川崎医療福祉大学 医療福祉マネジメント学部 医療情報学科) 虫明 昌一、阿南 誠

【目的】当院の中期経営計画において、院内のスペース有効活用のための保管文書ペーパーレス化が掲げられた。そこで、診療記録の電子化保存について、長期署名システム(電子署名+タイムスタンプ)の導入手順や留意点等の示唆を得ることを目的として調査を行ったので報告する。【方法】他院における導入状況の実態、導入後の課題等を把握するため、アンケート調査を実施した。調査項目は未導入理由、導入システムとコスト、スキャン体制、スキャン対象外文書の有無、スキャン後文書保管年数、導入してよかった

点、導入後の課題点、その他意見等とした。なお、ア ンケート形式は無記名で主に選択方式とし、Eメール 等で公募、インターネットのGoogleフォームを利用し た。【結果】アンケートで回答を得た25件のうち、7 件が導入済であった。未導入病院18件の未導入理由 は、コスト面が14件で最も多く、次に運用面で6件で あった。導入病院の電子化保存対象は全て新規発生 分のみであった。診療情報管理部門単独でのスキャン 実施は1件のみ。記載漏れチェックおよびスキャン後 チェック実施者は診療情報管理士が3件、未実施は 1件。スキャン対象外文書有りは1件。スキャン後文 書の保管は1年未満との回答が6件であった。導入し てよかった点として、全ての導入病院が省スペース化 を挙げた。課題として、文書整理や院内周知、スキャ ンエラーや漏れ等が挙げられた。その他、11件の意見 が寄せられた。【考察】未導入病院では、電子化保存 の必要性を感じているものの、コストや運用体制構築 の面がネックとなって導入に至っていないことが窺え た。導入病院の意見より、導入にあたっては、文書の 見直しとスキャン格納先等の整理、スキャンミスや漏 れを防ぎ原本性を担保する運用体制の構築が重要で あると考えられた。【結論】導入のための手順や留意 点の示唆を得た。ペーパーレス化に向けた体制構築を 進めていく。

・第65回日本透析医学会学術集会・総会(Web) 2020.11 小細胞肺癌の初回化学療法で腫瘍崩壊症候群を生じ、 血液透析で改善した一例

> (日本鋼管福山病院 透析センター) 持田 浩志、和田健太朗、奥野 哲二 (日本鋼管福山病院 内科)

> 石木 邦治、室 信一郎、橋詰 顕正 箱田 知美、岡本 毅、井原 章裕

【症例】73歳、男性【主訴】胸部不快感、下腿浮腫【現病歴】20XX年9月末の内科受診時に肝腫大と血液検査異常を指摘され、経気管支肺生検および造影CTで右小細胞肺癌、肝転移、多発リンパ節転移と診断され、10月23日(day1)よりネダプラチン100mg+イリノテカン100mgの化学療法を開始した。day3より胸部不快感、下腿浮腫を自覚し、day5、それらの症状が増悪したため、血液検査の結果、BUN113mg/dL, Cre2.91mg/dL, eGFR17.6mL/min/173m², UA21.5mg/dLであり、腫瘍崩壊症候群と診断、同日より輸液、利尿薬で治療、day6、状態が改善しないため、血液透析をday10まで連日行い、腫瘍崩壊症候群

の状態は改善し、血液透析を離脱した。【考察】小細胞肺癌で化学療法後の腫瘍崩壊症候群はまれで、血液透析で速やかに改善した例はきわめてまれであるため、ここに報告する。

・第30回日本乳癌検診学会学術総会(Web) 2020.11 当院の高齢者乳癌の検討

> (日本鋼管福山病院 乳腺外科) 藤井 清香

日本では65歳以上75歳未満を「前期高齢者」、75歳 以上を「後期高齢者」と区分している。対策型検診で は年齢の上限はないが、乳癌診療ガイドラインでは、 日本のマンモグラフィ検診の至適年齢を40~75歳とし ている。今回、当院で経験した前期・後期高齢者乳癌 の検討を行い、特に後期高齢者に対する検診の意義に ついて考察した。**【方法と対象**】当院で2015年4月から 2020年3月までに乳癌と診断した後期高齢者26例、前期 高齢者28例を対象とし、50歳代26例と発見契機、病期、 サブタイプ、Ki-67などを比較した。【結果】発見契機 では、自覚症状(後期17例、前期11例、50代10例)、 検診発見(後期5例、前期9例、50代14例)、CT発 見(後期4例、前期7例、50代2例)となっており、 高齢者では他疾患のCT検査での発見例が多くなっ ていた。病期はStage O(後期3例、前期5例、50代 3例)、Stage 1 (後期15例、前期8例、50代12例)、 Stage 2 (後期 4 例、前期14 例、50 代 6 例)、Stage 3 (後期2例、前期0例、50代4例)、Stage4(後期 2例、前期1例、50代1例)浸潤癌のサブタイプは、 ER/PR(+)HER 2(-)(後期19例、前期19例、50代18 例)、ER/PR(+)HER 2(+)(後期1例、前期2例、50代 3例)、ER/PR(-)HER 2(-)(後期 3例、前期 1 例、50 代1例)、ER/PR(-)HER 2(+)(後期0例、前期1例、 50代1例)。Ki-67 30%以上は、後期7例、前期6例、 齢による差は認めなかった。今回の検討では、後期高 齢者では検診発見より、自覚症状のある症例、他疾患 でのCT検査を契機に診断された症例が多くなってい た。また早期乳癌の割合も高く、検診至適年齢を75歳 までとしても不利益は少ないように思われた。高齢者 では疾患を有することが多くなり、CT検査を受ける機 会が多いと思われる。CT読影では乳腺に注意を払う 必要がある。

・第45回日本足の外科学会学術集会 (Web) 2020.11 70° 関節鏡を併用した鏡視下踵骨骨囊腫搔爬・人工骨

移植を施行し、早期スポーツ復帰可能であったバレーボール選手の1例

(日本鋼管福山病院 整形外科) 中島 裕貴

【目的】単純性踵骨骨囊腫は骨腫瘍類似疾患で、 学童期に発見される事が多い比較的稀な疾患である。 近年、アスリートの踵骨骨嚢腫に対して鏡視下に骨嚢 腫搔爬・人工骨移植を行う事で早期スポーツ復帰が可 能になってきた。今回、70° 関節鏡を併用し鏡視下手 術を行い早期スポーツ復帰可能となった1例を経験し たので報告する。【症例】15歳女性、バレーボール選 手。主訴は運動時の右踵骨部痛。単純レントゲン、CT で踵骨三角部に24×22×25mmの骨透亮像を認めた。 MRIでは同部位にT1強調像で低信号、T2強調像で 高信号を認め、単純性踵骨骨嚢腫と診断した。全身麻 酔下に側臥位で手術を施行した。透視下に踵骨骨嚢 腫を確認しポータルを2つ作成した。2.7mmの30°関 節鏡を用いて踵骨骨嚢腫内を鏡視し、シェーバーなど を用いて骨嚢腫内の内壁や隔壁など軟部組織を搔爬 した。搔爬後に70° 関節鏡で鏡視する事で骨嚢腫辺縁 部に残存する組織を確認出来たため、正常な骨組織が 露出するまで搔爬を追加したのちにペースト状の人工 骨を移植した。術後は痛みに応じて荷重を許可し、術 後2週よりジョギング、4週よりジャンプ動作を開始 し、7週でバレーボールへ復帰した。【考察】これま での報告と同様、踵骨骨嚢腫に対する鏡視下骨嚢腫 搔爬・人工骨移植術はアスリートの早期復帰を可能と した。70° 関節鏡は辺縁部の鏡視に優れており、後十 靱帯再建術や股関節鏡視下手術など様々な手術で用 いられている。70° 関節鏡を併用する事で骨囊腫内の 辺縁部を十分に鏡視する事が可能となり、骨嚢腫内の 組織を搔爬する際に有用な手法になり得る。

50代6例であった。【考察】サブタイプ、Ki-67には年 ・日本歯科保存学会2020年度秋季学術大会(第153回)(Web) 2020.11 齢による差は認めなかった。今回の検討では、後期高 セメント質剥離を伴う上顎左側中切歯に対して、外傷が 齢者では検診発見より、自覚症状のある症例、他疾患 歯周組織破壊を増悪させた症例

> (日本鋼管福山病院 歯科) 永原 隆吉 (広島大学大学院 医系科学研究科歯髄生物学研究室) 武田 克浩、柴 秀樹

【緒言】セメント質剥離は急速な歯周組織破壊を引き起こす。セメント質剥離の原因は不明であり、治療のガイドラインはない。セメント質剥離は高齢者に多発することが報告されており、全身疾患に配慮した歯科治療が必要となることが多い。本症例では、高齢者

の糖尿病罹患患者の外傷によって増悪したセメント質 剥離がある上顎左側中切歯の歯周組織破壊治療症例 を報告する。【患者】68歳男性。当病院内科から、歯 周治療目的で紹介された。【初診時の口腔内所見】し 1:歯周ポケットは唇側近心部6mm、口蓋側近心部8 mmで、動揺度0度、デンタルX線写真では近心に垂直 性骨欠損と歯根につながる線状の不透過像(セメント 質剥離片)を認めた。【外傷後の口腔内所見】初診か ら1か月後、上顎前歯部に外傷を受け、腫脹と疼痛を 訴え緊急来院した。1─1根尖部に波動を触知したた め切開排膿処置をした。一週間後のデンタルX線写真 では └1 近心部の垂直性骨欠損の範囲は拡大し、1 ┘ 根尖部にまで及んでいた。 🗀 : 歯周ポケットは唇側 近心部8mm、唇側中央部6mm、口蓋側近心部11mm で、動揺度1に変化し、増悪していた。1」:歯周ポ ケットは最深部 4 mmで動揺度は0であった。 $1 \perp 1$ に歯髄生活反応はあった(歯髄電気診、温度診)。

【全身疾患】糖尿病(HbA1c=8.1%)、高血圧症(当院 内科、加療)。【診断】セメント質剥離を伴う重度歯 周炎(└1)、外傷(1┴1), 【治療方針】セメント 質剥離片の除去、歯周外科治療、歯髄生活反応検査 による歯髄生活反応の確認【治療経過】線状の不透 過像(セメント質剥離片)の除去を目的に、ルートプ レーニングを実施したところ、肉芽組織が付着した硬 組織が摘出された。摘出後、線状の不透過像の消失を デンタルX線写真で確認した。次に、1¹1周囲の骨 破壊範囲を把握するため、歯科用コーンビームCT撮 影をした。 └1の1壁性骨欠損と交通した1 □ の根尖 部骨吸収があることがわかった。1 - 1の歯髄生活反 応を確認するとともに、全顎的な歯周治療を続けた。 約1年後のデンタルX線写真で、外傷によって生じた 1 □ の根尖周囲の透過像は消失したものの、初診時に 観察されたし └1の垂直性骨吸収は残存し、歯槽硬線 が消失していた。同部位の歯周ポケットは唇・口蓋側 近心部8mmであった。1¹0 歯髄生活反応があるこ とを再確認した。HbA1cは7.0%に改善し、糖尿病が良 好にコントロールされていることを確認できたので、 歯周外科治療を実施した。 └1 近心部は1壁性の垂直 性骨欠損で、根面にはセメント質剥離を疑う硬組織を 観察できなかった。欠損部の肉芽組織を除去後、リグ ロス®を塗布し縫合した。採取した肉芽組織の病理組 織検査では、線維性結合組織内に微小な硬組織片(セ・第64回春季日本歯周病学会学術大会(Web) 2021.5 メント質または骨かの判定は困難) が多数散在し、そ の周囲には細菌の存在を疑う所見を認めた(グラム染 色)。術後9か月、1¹に歯髄生活反応があった。

歯周ポケットは最深4mm、歯肉の著しい退縮はなく、 デンタルX線写真上で歯槽硬線の明瞭化を認めた。し かしながら、骨頂までの骨再生は認められなかった。 【考察・まとめ】セメント質剥離による □1の近心の骨 吸収が、外傷によって1」の根尖部までに急速に(約 1か月) 拡大した。セメント質剥離片を除去したこと で外傷によって拡大した骨吸収は改善し、歯髄生活 反応の確認の下、不要な根管治療を避けることができ た。セメント質剥離がない場合と比べてセメント質剥 離がある場合、外傷による歯周組織破壊がより急速か つ広範囲に及ぶ可能性が考えられた。歯周外科治療で 採取した肉芽組織内にはセメント質剥離片を疑う微小 な硬組織が残存し、その周囲には細菌を認めたことか ら、セメント質剥離の治療のポイントとして、セメント 質剥離片とともに骨欠損部に存在する肉芽組織を完全 に除去する必要がある。本症例では歯周組織再生療法 を行ったが、垂直的な歯槽骨の増大までは得られてお らず、スペースメイキングが必要であったかもしれな

第12回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 第46回日本整形外科スポーツ医学会学術集会(Web)2020.12 Arthroscopic Resection of Symptomatic Os Subitibiale:Reports of Two High Level Athletes

(日本鋼管福山病院)

中島 裕貴

・第12回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 第46回日本整形外科スポーツ医学会学術集会(Web)2020.12 Clinical Outcomes and Return to Sports in Patients who Underwent Hybrid Closed Wedge High Tibial Osteotomy

> (日本鋼管福山病院) 中島 裕貴

・第19回日本ヘルニア学会学術集会 (Web) 2021.5 Mesh Plug法術後の再発膀胱ヘルニアに対して TAPP法を施行した1例

> (日本鋼管福山病院 外科) 土井 雄喜

根尖を含む垂直性骨欠損に対して歯周組織再生療法 が奏功した症例 (Stage IV Grade A)

(日本鋼管福山病院)

永原 隆吉、徳丸 操 (広島大学大学院 医系科学研究科歯周病態学研究室) 古玉 大祐、本池 総太、岩田 倫幸 水野 智仁

·第64回春季日本歯周病学会学術大会(Web) 2021.5 病院歯科介入により高齢者糖尿病を有する広汎型慢性歯周炎 患者に対して歯周基本治療により血糖コントロールの改善に 至った症例

(日本鋼管福山病院)

徳丸 操

【症例の概要】当病院整形外科入院中の脱離による 紹介患者(74歳女性)は、内科通院中の血糖コント ロール不良な高齢者糖尿病であった。口腔内に関心 がなく歯科は未受診のため全顎的歯肉の発赤、腫脹、 排膿および高度な歯牙動揺を認めた。4-5mm以上 PPD: 31.7%、6 mm以上PPD: 27.8%、BOP: 64.3%、 PCR: 94%、PISA: 1341.5mm²。全顎におよぶ水平性 骨吸収も認めた。2型糖尿病(HbA1c:8.2%、グリク ラジド、トルリシティ皮下注)、高血圧(アムロジピ ン)、BMI: 26kg/m²。介護のため生活習慣が乱れてい た。【診断】広汎型慢性歯周炎(Stage IV Grade C) 【治療方針】1) 歯周基本治療 2) 再評価 3) 歯 周外科治療 4) 再評価 5) 口腔機能回復治療 6) 再評価 7) SPT 【治療経過】応急処置後、内科 医には重度歯周炎の診断を情報提供し、患者には歯 周病と糖尿病の関係性を明確にして歯周基本治療を 開始した。その結果、生活習慣を意識され、歯周基本 治療のみで口腔内の炎症消退と歯牙動揺の改善によ る咬合が安定した。また、高齢者糖尿病の血糖コント ロール目標値範囲内に糖尿病は改善された。【考察・ まとめ】歯科介入によって糖尿病のリスクファクター である歯周炎が診断され、患者と内科に対する情報提 供と医科歯科連携が可能となった。糖尿病と病態を関 連付けた口腔衛生指導・管理が生活習慣改善の契機 となり、モチベーションの向上によるセルフケアの定 着化と歯周基本治療による病状安定化によって歯科 未受診であった高齢者糖尿病の改善に繋がり、病院歯 科衛生士として患者健康と他科連携に寄与できた。 キーワード: 高齢者糖尿病、医科歯科連携、モチベー ・第70回日本医学検査学会(Web) 2021.5

· 第70回日本医学検査学会(Web) 2021.5 入院患者に発症し血管内溶血を起こした劇症型 Clostridium perfringens感染症の1例

(日本鋼管福山病院)

井上 英昭、村上 祐人、志田原成海 【はじめに】Clostridium perfringens (C. perfringens) はヒトの腸管内の常在菌であり、環境等に も常在する有芽胞偏性嫌気性グラム陽性桿菌である。 今回、入院加療中の患者が、血管内溶血を伴い全身状 態が急激に悪化し死亡の経過をとったC. perfringens感 染症を経験したので報告する。【症例】患者:70代、 男性【既往歷】20年前:下肢閉塞性動脈硬化症内服 加療。7か月前: 膵頭部癌診断、胃空腸・胆管空腸吻 合術施行。【現病歴】イレウス疑いと抗癌剤治療のた め発症10日前に入院、3日前に抗癌剤投与通常に終 了。退院を数日後に予定していた。【発症経過】当日 朝、点滴台を押しながら棟内を歩行している。(14:30) 特に訴えなし。(15:40)黒色便大量、心窩部から下腹部 に違和感あり。(16:10)トイレに行こうとし転倒、失便、 会話は可能。(16:50)レベル低下、呼名応答なし、両側 眼球上転。(17:15)脳出血疑い頭部CT撮影(出血所見 なし)。(17:30)採血、(17:50)再度採血。(18:07)永眠され る。【検査所見】宿直対応時の検査であった。最初の 採血検体を血液分析装置で測定したところ、凝固フラ グが立ち再採血を依頼した。遠心分離した生化学検体 は少量の血餅と暗赤色の血清であった。再採血の検体 も同様の所見であり、C. perfringensによる血管内溶血 が疑われることを報告した。採血後約1時間経過で採 血管内の有形成分はほぼ消失した。わずかな有形成分 をグラム染色すると、白血球とともにグラム陽性桿菌 を認めた。提出された検体の培養検査では嫌気培養で C. perfringensの発育を認めた。【まとめ】本症例は入 院治療中の患者に発症したため、発症前の状態から経 過を追えた。患者の最初の訴えから約3時間で急激な 転帰となった。当直技師が在院していた細菌担当技師 に相談し、主治医にC. perfringensによる血管内溶血 の所見を報告したが、救命には繋がらなかった。従来 の報告より血液検体の溶血も急激であり、臨床経過と 相関するものであった。救命することは困難な症例が 多いが、症例の知識、血液検体のグラム染色、嫌気培 養が診断につながると考えられた。

超音波所見から乳腺過誤腫を疑った1例

(日本鋼管福山病院 臨床病理科) 安松結香里、橋本 和代、志田原成海 小林 由佳

(日本鋼管福山病院 乳腺外科)

ション

藤井 清香

【はじめに】乳腺過誤腫は比較的稀な良性疾患で ある。今回われわれは超音波所見から乳腺過誤腫を 疑った1例を経験したので報告する。【症例】40代女 性 [現病歴] 人間ドックにて乳がん検診初診。 自覚症 状なし。触診で右外下部に腫瘤を触知し、精査目的に て当院乳腺外科受診。 [マンモグラフィ] 右乳房M・O に約5cmの境界明瞭な腫瘤を認め、C3と診断。「超 音波 | 右乳房 9 時方向に51×50×22mmの腫瘤を認め た。形状は楕円形。境界明瞭平滑。内部エコーは不均 一で低エコーと高エコーが混在していた。エラストグ ラフィ軟。C3と診断。超音波所見上は過誤腫を強く 疑ったが、葉状腫瘍、線維腺腫も鑑別に挙がり、針生 検を施行。[針生検]線維化のみで明らかな悪性所見 なし。 [経過] これらの結果から過誤腫を疑い経過観 察。3か月後も増大は見られなかったが、本人の希望 により腫瘍摘出術が施行された。 [病理結果] 55×50 ×20mmの被膜に覆われた境界明瞭な黄白色結節性病 変。結節は2層性のある腺上皮細胞、線維性結合織、 成熟脂肪組織の増生により成る。腺管は成熟脂肪組織 と近接する部分あり。過誤腫と診断された。【考察】 乳腺過誤腫は「乳房内に周囲との境界明瞭な被膜を有 する腫瘍を作る。乳房の組織成分と同一かあるいは一 部欠損した組織からなり、しかも各組織成分の割合が 著しく正常と異なるものである」と定義されている。 それぞれの細胞には異型が見られないため、生検標本 単独で診断することは困難であることが多く、今回の 症例でも針生検での診断には至らなかった。また罹患 率は0.1~0.7%程度と比較的稀で、平均3cm程度の触 知可能な腫瘤として、あるいはマンモグラフィ検診で 発見されることが多い。今回経験した症例は腫瘤径5 cm超と大きく、葉状腫瘍との鑑別を要したが、超音波 検査で低エコーと高エコーが混在する特徴的な所見を 呈しており、診断の一助となった。【結語】乳腺過誤 腫は穿刺吸引細胞診や針生検で判定困難なことが多 い。腫瘤が大きくても、境界明瞭平滑で低エコーと高 エコーが混在する超音波所見を呈する場合は葉状腫 瘍の他に過誤腫の可能性を考慮すべきである。

・日本看護倫理学会第14回年次大会(Web) 2021.5 新型コロナウイルスにより突然病院閉鎖された入院 患者の心理状態

> (日本鋼管福山病院) 林 亜矢子

・第76回日本消化器外科学会総会(Web)2021.7 高度肥満を伴う腹壁瘢痕ヘルニアに対しTransversus abdominis muscle release 法により修復を施工した1例 (日本鋼管福山病院)

門脇 大輔

・第29回日本乳癌学会学術総会(Web) 2021.7 多臓器浸潤を伴う成人T細胞白血病を併発し、乳癌 の遠隔転移との鑑別に苦慮した1例

> (日本鋼管福山病院 乳腺外科) 藤井 清香

近年、重複癌の報告が増加しているが、成人T細胞 白血病 (ATLL) と乳癌の同時重複癌は稀である。今 回、肝・骨に病変があり、乳癌の遠隔転移と多臓器浸 潤を伴うATLLとの鑑別に苦慮した1例を経験したの で報告する。【症例】77歳女性。腰痛のため歩行困難 となり、当院整形外科入院となった。CT検査にて、多 発溶骨性骨病变、多発肝腫瘍、多発皮膚結節、右乳腺 腫瘤、幽門部胃壁肥厚を認めたが、有意なリンパ節腫 大は認めなかった。鑑別診断として乳癌、胃癌が挙が り、精査目的にて当科紹介となった。骨病変のため立 位・座位が不能であったためマンモグラフィは施行で きなかったが、USにて右C区域に10mm大の不整形腫 瘤を認めた。CNBを行い、浸潤性乳管癌、ER100%、 PgR100%、HER2 score 0、Ki-67 33%と診断した。 当初乳癌StageIVと考えたが、右腋窩リンパ節腫大は 認めず、腫瘍マーカー(CEA, CA15-3)は基準範囲 内であったため、重複癌の存在を疑った。上部内視鏡 検査では、胃体上部から下部にかけてなだらかな隆起 を伴う発赤調のびらんがあり、転移性胃癌が疑われ た。びらん部の生検では、悪性リンパ腫や低分化癌が 示唆された。血液検査では、リンパ球数の上昇は認め ず、異型リンパ球も認めなかったが、可溶性IL-2レセ プターは96,200U/mLと異常高値であった。皮膚結節 を摘出生検し、表面抗原検査と血清HTLV-I抗体上 昇より、ATLLと診断した。ATLLは急性型、リンパ腫 型、慢性型、くすぶり型と分類されるが、本症例はリ ンパ腫型の増悪を来した病型であると考えられた。急 性型とリンパ腫型は予後不良で生存期間は1年以内と されているため、乳癌に対する治療は行わず、ATLL に対する化学療法を内科で行っている。状態が落ち着 けば、ホルモン療法を行う予定である。【まとめ】同時 重複癌は画像所見のみでの診断は困難なことがある。 重複癌も念頭におき、複数箇所での組織学的診断を行 うことが重要であると考える。

・第24回日本歯科医学会学術大会(Web)2021.9 Periapical Osteoperiostitisを伴う慢性根尖性歯周炎 に対して非外科的・外科的歯内療法を行った2症例

(日本鋼管福山病院)

永原 隆吉 (広島大学大学院 医系科学研究科歯髄生物学研究室) 武田 克浩、柴 秀樹 (わだ歯科クリニック) 和田圭之進 (山田歯科医院) 山田 庸二

Periapical osteoperiositits (PAO) は、慢性根尖性 歯周炎によって、隣接する上顎洞底部がドーム状に挙 上する反応性骨形成である。炎症が持続すると上顎洞 底の骨の厚みが増す。PAOは、デンタルX線写真やコ ンビームCT上でhalo状(暈状)の放射線不透過像を 示す。本報告では、PAOを伴った慢性根尖性歯周炎 に対して非外科的と外科的な歯内療法の治療が奏功 した2症例を示す。

・第48回日本肩関節学会学術集会(愛知)2021.10 一次修復不能な腱板断裂に対するCofield法の治療成績 (日本鋼管福山病院)

加藤 久佳、岩崎 裕一

【目的】一次修復不能な腱板断裂の治療は困難で、 修復には様々な治療方法がある。Cofield法は、肩甲 下筋腱上部を後方に移行する方法で、比較的簡便な 手術方法であり、肩甲下筋腱と連続性のある棘上筋 腱も修復することが可能である。しかし棘上筋腱を大 結節に整復することや均等なテンションで修復する ことは困難である。今回我々は、肩甲下筋腱に付着し ている棘上筋腱を内側にsurface-holding法で整復固 定した後、肩甲下筋腱と棘下筋腱をSuture-Bridge法 (Reduction & Holdings Suture-Bridge technique法: RH法)で修復したのでその治療成績について報告す る。【対象および方法】2018年2月から2020年5月ま でに施行した、一次修復不能な肩腱板大・広範囲断 裂症例のうち、術後1年以上経過観察可能であった 54肩 (男性25肩、女性29肩、平均年齢70歳)を対象 とした。SB法のみで修復した群(SB群:24肩)とRH 群(30肩)で、再断裂率とJOAスコア・constant score を比較検討した。Cuff integrityは術後1年のMRIで 評価し、菅谷分類(以下S) Type 4,5 を再断裂とし た。手術方法は、全例関節鏡を行い、一次修復が不 能であると判断した後、上方アプローチで、肩甲下筋

腱上方1/3を繊維方向に切離し後方に移行した。内側 アンカーは3本、外側アンカーはRH法では2本、SB 法単独では3本使用、した。【結果】JOAスコアは術 前SB群: 63.2点、RH群: 61.7点、術後はSB群: 83.0 点、RH群:83.7点に改善し、またconstant scoreも術前 SB群: 40.0点、RH群: 35.7点、術後はSB群: 65.6点、 RH群: 62.6点点に改善した。双方とも術前・後は、有 意に改善したが、両群とのスコアには有意差は認め なかった。術後Cuff integrityは、SB群 S1.2:12肩 (50%), S3:8肩(33.3%), S4.5:4肩(6.7%)、 RH群S1.2:21肩(70%),S3:7肩(23.3%),S4.5: 2肩(6.7%)認め、再断裂はRH群(6.7%)の方がSB 群(17%)より低い傾向にあった。【考察】Cofield法 は、肩甲下筋腱を後方に移行することで、一次修復不 能な断裂腱板に負荷がかからず修復することが可能 である簡便な手術方法である。またRH法は、退縮の 著名な棘上筋腱を肩甲下筋腱とともにmedializationを 行うことでより応力集中を分散させることができる。 Cofeld法は、両術式で良好な成績が認められたが、本 術式は、SB法単独より再断裂が減少したことと、修復 腱板の状態が良好であったことから有用な術式と考え られた。

・第64回秋季日本歯周病学会学術大会(愛知)2021.10 根尖を含む垂直性骨欠損に対して歯周組織再生療法が 奏功した症例 (Stage IV Grade A)

(日本鋼管福山病院)

永原 隆吉、徳丸 操 (広島大学大学院 医系科学研究科歯周病態学研究室) 古玉 大祐、本池 総太、岩田 倫幸 水野 智仁

・第64回秋季日本歯周病学会学術大会(名古屋)2021.10 各骨欠損形態に応じた歯周組織再生療法の一症例 (リグロス[®],骨補填材およびメンブレンの併用)

(日本鋼管福山病院)

永原 隆吉

【症例の概要】70歳男性(初診2018年2月)。前立腺肥大症。全顎的な歯科治療を希望され来院。4-5mm PPD:10%, 6mm以上PPD:15.6%, BOP: 31.7%, PISA:564.8mm², PCR:35.8%。臼歯部を中心に4-6mmの深い歯周ポケットを認め、└3と┌2の8mmの歯周ポケットには排膿も認めた。X線上では76┐間に水平性骨欠損、┌2近心部には縁下歯石を伴う垂直性骨欠損、┌6近心部とし└3近心部から口蓋部

にかけた垂直性骨欠損を認めた。【診断】限局型慢性 歯周炎 (StageⅢ Grade B) 、二次性咬合性外傷【治 療計画】①歯周基本治療 ②再評価 ③歯周外科治 療 (リグロス®と β -TCP:オスフェリオンDENTAL®、 メンブレン: GCメンブレン®の併用は日本鋼管福山病 院・倫理委員会で承認。患者同意を書面にて得てい る。) ④再評価 ⑤口腔機能回復治療 ⑥再評価 ⑦メインテナンス/SPT 【治療経過】歯周基本治療 後、_□6の3壁性骨欠損に対してはリグロス®_□2の 唇側壁が欠損した舌側から近心を含む2壁性/3壁性 の複合性骨欠損にはリグロス®/β-TCP。└3の唇側 壁が欠損した口蓋側から近心を含む3mm以上の幅を 持つ2壁性/3壁性の複合性骨欠損にはリグロス®/B -TCP/メンブレンの併用療法による歯周組織再生療 法の他、76 間には歯肉剥離掻爬術を実施した。口腔 機能回復治療後にメインテナンスへと移行した。【考 察・まとめ】各骨欠損形態に応じて併用療法の適応を 配慮することで、より良好な治療成果が期待できる。 骨壁数が少なく、骨欠損幅が3mm以上の欠損に対し てはリグロス®に各種マテリアルを併用したことで術 後1年以上良好な予後を得ている。歯周組織の陥凹は 認めず、X線上は骨補填材の分離像などはなく、連続 した歯根膜腔や歯槽硬線、歯槽骨頂の明瞭化を認め

キーワード:リグロス®、骨補填材、メンブレン、骨欠 損形態

・日本歯科保存学会2021年度秋季学術大会(第155回)(Web) 2021.10 歯周治療と歯内治療が奏功した根面溝と樋状根/樋状根管 を有する下顎右側第一小臼歯の4壁性骨欠損症例

(日本鋼管福山病院・歯科)

永原 隆吉

(広島大学大学院 医系科学研究科歯髄生物学研究室) 永原 隆吉、武田 克浩、柴 秀樹

【緒言】根面溝を伴う樋状根/樋状根管を有する下 顎第一小臼歯は、その複雑な形態から歯周治療や歯 内治療が困難となることが多い¹⁾。本発表は、根尖に 及ぶ4壁性骨欠損を生じた根面溝と樋状根を有する 44の重度慢性歯周炎と慢性根尖性歯周炎に対して、 コーンビームCT (CBCT) 画像よって骨欠損形態と樋 状根/樋状根管形態を把握後、歯周組織再生療法を実 施し、引き続き顕微鏡による拡大視野下で感染根管 治療を行い、良好な経過を得られた症例を報告する。

【患者】43歳男性。【主訴】右下の歯が動く。【初診 時の口腔内所見】患歯である44は歯髄生活反応(歯髄 電気診、温度診)を示した。歯周ポケット(PD)は頰 側中央部が5mm、他5点の深さは11mmであり、出血 と排膿を伴った。動揺度は2で、頰小帯高位付着の異 常を認めた。全顎的には1-3mmのPDは60.4%、4-6 mmのPDは34.9%、6mm以上のPDは4.7%、BOP陽性 率は45.8%、PCRは44.5%、およびPISAは1202.3 mm² であった。44のデンタルX線写真では、垂直性骨欠損 が根尖にまで及び、また複根管性が疑われた。CBCT 画像は、根尖付近までに及ぶ4壁性の骨欠損、近心側 に根面溝を伴う樋状根および樋状根管のFanの分類²⁾ C3bに相当する2根管を示した。側方運動時に44に 干渉が認められた。【全身疾患】花粉症。【診断】広 汎型慢性歯周炎 (Stage Ⅲ Grade C:44のX線画像上 の骨吸収像は歯根長の1/3を超え、6mm以上のPDを 有しており、骨吸収(%)/年齢は>1.0であった)。二 次性咬合性外傷。【治療方針】歯周基本治療、歯周 組織再生療法(44)、および歯髄失活時に根管治療 (44)。【治療経過】歯周基本治療:44咬合調整、口 腔衛生指導とスケーリング、ルートプレーニングを実 施した。その後も44に動揺を認めたため、エナメルボ ンドシステムを用いて45・44・43を連結固定した。歯 周外科治療:基本治療後の再評価で、17近心に最深6 mm、歯髄生活反応を示す44近遠心部に最深8mmの出 血を伴う深い歯周ポケットが残存したため、17・16間 に歯肉剥離掻爬術および44にリグロスとオスフェリオ ンDental (β-TCP) を用いた歯周組織再生療法3)と 頰小帯切除術を実施した。 なお、 リグロスとオスフェ リオンDentalの併用による歯周組織再生療法を患者に 提供するにあたっては、「日本鋼管福山病院倫理委員 会」において承認 (202002) を得た。さらに、併用療 法がリグロスとオスフェリオンDentalのそれぞれの添 付文書に記載されてない使用方法であること、併用療 法の優位性、予測される有害事象などを患者に十分に 説明し、書面同意を得た後実施した。SPT移行時:44 に歯肉退縮が生じたが、根尖部を除き歯根周囲のレン トゲン不透過性が亢進した。44の根尖部に透過像を認 めたものの歯髄生活反応を示したため経過観察した。 その後も歯髄生活反応が陽性であった。SPTに移行し てから7ヶ月後に根尖透過像拡大を認めたため、44に 歯髄電気診でなく切削診を実施し歯髄失活を確認し た。慢性根尖性歯周炎と診断し、感染根管治療を行っ た。最新時SPT (SPT移行15ヶ月):44根尖部透過像 の消失と歯槽骨の再生を認め、全顎的に歯周組織は 安定した。【考察】下顎第一小臼歯の歯根と根管の形 態多様性から根管治療と歯周治療が困難な歯とされ、

歯根・根管の形態と数を把握することが根管・歯周治療治療を成功に導くために求められる。注意すべき歯根形態は、プラークリテンションファクターとなって歯周炎を悪化させる樋状根の根面溝である。また、根管数が2根管の場合、根中央部から急な湾曲を示す舌側根管の存在を見落とさないことである。本症例のような大規模4壁性骨欠損の再生治療については、リグロス単独では限界があると考え、諸外国で有効性が検証されている β -TCPとの併用療法 3) を選択した。根管治療は、治療前にCBCTで2根管性とその彎曲状態を理解し、さらにマイクロスコープを用いた拡大視野下でアプローチできたことで良好な結果が得られた。

【まとめ】CBCTによる解剖学的形態の把握後、根面溝、樋状根/樋状根管および4壁性骨欠損を有する44に対して実施した骨補填材併用の歯周組織再生療法とマイクロスコープによる根管治療が44の保存につながった。1)Martins JHR et al.: Int Endod J, 2019. 2) Fan B et al: J Ended, 2004. 3)Cochran DL et al: J Dent Res, 2016.

・第64回秋季日本歯周病学会学術大会(愛知)2021.10 病院歯科介入により高齢者糖尿病を有する広汎型慢性 歯周炎患者に対して歯周基本治療により血糖コント ロールの改善に至った症例

> (日本鋼管福山病院) 徳丸 綾

・第18回日本肩の運動機能研究会学術集会(Web)2021.10 ARCR術後のflexion gliding ex.は肩関節機能回復の 指標となるか

> (日本鋼管福山病院 リハビリテーション科) 宇野 公裕、神尾 昌利、蔵内 啓 三鼓 善久

(日本鋼管福山病院 整形外科) 加藤 久佳

【はじめに】肩腱板修復術(以下ARCR)後療法は、修復腱板に負荷をかけることなく肩関節機能を早期に回復させることが重要である。術後成績はおおむね良好であるが、比較的早期に可動域や痛みが改善する症例、装具除去後も可動域制限や痛みが残存する症例を経験する。我々は大泉らが提唱しているStepped rehabilitationを参考に、リハビリテーションプログラムを断裂の大きさや質に応じて3段階で分け、小・中断裂に対しては早期に仰臥位でのflexion gliding exercise (以下FGE) を取り入れている。そこで本研

究では、装具固定期間におけるFGEの効果とFGEの 可不可がその後の肩自動屈曲可動域に影響があるか どうかを調査した。【対象】2020年4月~2021年3月 にARCRを行い小・中断裂術後リハビリテーションプ ログラムに沿って術後療法を行った66名66肩(64.8± 10.9歳) 【方法】術後1週から5週の各週でFGEが可 能な「FGE可群 | とFGEが困難な「FGE不可群 | に 分け、肩他動屈曲可動域、痛み(VASスコア)、術後 2ヵ月と6ヶ月での自動屈曲可動域をt検定を用いて比 較検討した。【結果】他動屈曲可動域は、術後1週で FGE可群127.4±11.5°、FGE不可群107.0±16.7°、 2週でFGE可群136.7±7.9°、FGE不可群123.6±10.4 °、3週でFGE可群136.5±7.9°、FGE不可群126.1 ±10.5°、4週でFGE可群137.1±8.6°、FGE不可群 125.9±11.8°、5週でFGE可群135.5±12.0°、FGE 不可群121.4±16.2°と、すべての時期でFGE可群が 有意に大きかった。VASスコアは両群間で有意差を認 めなかった。術後2ヶ月と6ヶ月での自動屈曲可動域 は、術後1、2、3、4週でFGE群が有意に大きく、術 後5週では両群間に差を認めなかった。【考察】FGE は腱板に負荷のかからない自動運動であり、当院では ARCR術後の後療法で積極的に取り入れている。本 研究の結果、小・中断裂の術後経過において早期に FGEが可能となれば、他動屈曲可動域を維持でき、さ らに術後2ヶ月と術後6ヶ月での自動屈曲可動域が良 好であることが明らかとなった。FGEが術後後療法と して有用であり、かつFGEの可不可を評価することで ARCR術後自動可動域の予測に有用である可能性が 示唆された。

・第18回日本肩の運動機能研究会学術集会(Web) 2021.10 **腱板断裂修復術後早期に積極的後療法を取り入れた** 治療成績

> (日本鋼管福山病院 リハビリテーション科) 蔵内 啓、神尾 昌利、宇野 公裕 三鼓 善久

(日本鋼管福山病院 整形外科) 加藤 久佳

【はじめに】当院の鏡視下腱板修復術(ARCR)後の後療法の問題点として、拘縮例や、他動屈曲可動域一自動屈曲可動域の差(lag)が生じる例が散見される。そこで、我々は再断裂の防止と機能回復を目指し、2020年2月より、stepped rehabilitationを参考に、術後早期に腱板の負荷がかからない状態での自動運動を取り入れた、新しいリハビリプログラムを導

入しその成績について報告する。【目的】ARCR後の 新プログラムにおける術後成績について検討した。 【対象と方法】ARCRを施行した小中断裂を対象とし た。2019年2月から9月までの旧プログラム群(以下 旧P群) 76肩と、2020年2月から9月までの新プログ ラム群(以下新P群)56肩の2群について比較検討し た。旧P群は術後2日目より他動運動を開始し、術後 3週で外転枕除去、術後6週でスリングを完全除去 し自動運動を許可した。新P群は術後2日目より、他 動運動と、腱板の負荷がかからない状態での自動運 動としてFlexion Gliding Exercise (FGE) とFlexion Horizontal Abduction Exercise (FHAE) を取り入れ た。その後術後2週で外転枕除去、術後5週でスリン グの完全除去と自動運動を許可した。2群間の検討項 目として、1.術後6か月時の自動屈曲可動域、2.術後 2か月から5か月の自動、他動屈曲可動域、3.術後2 か月から5か月のlag、4.再断裂率を比較検討した。統 計学的検討にはt検定を用い、P<0.05を有意差ありと した。【結果】術後6か月時の平均自動屈曲可動域、 術後2ヶ月から5か月の平均他動可動域、術後2ヶ月 から5か月の平均lagは両群間に有意差が無かった。 術後2ヶ月から5か月の平均自動可動域は、術後2、 3、4か月で両群間に有意差が有った。(旧P/新P 2 か月110.7°/121.3°、3か月124.1°/132.1°、4か月 128.1°/134.8°) 再断裂は2群とも1例ずつであっ た。(旧P/新P 1.4%/1.6%) 【考察】新しいプログラ ムを取り入れたことにより、術後早期の自動屈曲可動 域で有意に改善が認められたが、5、6ヶ月では差が 認められなかった。術後早期より腱板に負荷がかから ない状態での自動運動は、良好な肩関節機能の早期回 復を獲得できる事が示唆された。

・第18回日本肩の運動機能研究会学術集会(Web) 2021.10 大・広範囲断裂術後におけるプログラム変更後の治療 成績

> (日本鋼管福山病院 リハビリテーション科) 三鼓 善久、神尾 昌利、宇野 公裕 蔵内 啓

(日本鋼管福山病院 整形外科)

加藤 久佳

【はじめに】大・広範囲断裂は術後再断裂のリスクが高く、後療法は腱板修復を優先し他動可動域訓練を遅らせる必要がある。当院での腱板修復術後プログラムは大泉らの提唱するstepped rehabilitationを参考に新プログラムを導入した。本研究は、大・広範囲断

裂(Boileau分類3以上)の腱板修復術後成績につい て、新プログラム導入前後で比較検討した。【対象】 2019年2月から2020年9月にBoileau分類3以上で腱 板修復術を行い、6か月以上経過が可能であった68 名68肩(術前年齢68.5±8.1歳)を対象とした。2019年 2月から2020年1月までに行った旧プログラム群(以 下旧P群) (男性24名・女性22名) と2020年2月から 9月までに行った新プログラム群(以下新P群)(男 性14名・女性8名)で比較した。旧P群は術後1週よ り肩他動可動域訓練を開始し、新P群は術後3週より 肩他動可動域訓練を開始としている。なお装具固定は 両群とも術後8週間であった。【方法】両群を1)術 後3ヶ月の肩他動屈曲可動域、2) 術後3ヶ月と6ヶ 月の肩自動屈曲可動域、3) 術後3ヶ月での肩他動-自動可動域の差(以下lag)についてt検定を用いて比 較検討した。有意水準は5%以下とした。また、再断 裂率を術後6ヶ月にて調査した。【結果】1) 肩他動 可動域は、旧P群は136.3°、新P群は141.1°と有意 差 (p<0.05) を認めた。2) 肩自動屈曲可動域は、術 後3ヶ月は旧P群で103.7°、新P群は117.0°と有意差 (p<0.05) を認めた。術後6ヶ月に、旧P群に134.3°、 新P群は141.1°と有意差はなかった。3) lagは、旧P 群は32.6°、新P群は22.7°と有意差はなかった。再断 製率は旧P群7.7%,新P群では0%であった。【考察】 大・広範囲断裂術後の他動可動域訓練開始時期につ いては様々な報告がある。今回我々は、腱板修復を優 先し他動可動域訓練を遅らせた新プログラムを採用 し、良好な結果を得た。また、以前は術後7日目より 術後運動療法を開始していたが、新プログラムでは術 翌日から開始し、肩他動可動域訓練開始までの間は肘 可動域訓練、体幹訓練を中心に運動療法を行った。早 期に肩周囲の緊張軽減を図ることで、肩他動運動開始 時に起こる疼痛や修復腱板への負荷が減り、良好な結 果が得られたと考えられる。

・第48回日本肩関節学会学術集会(Web)2021.10 **腱板断裂術後の不安・抑うつの評価と疼痛との関連** (日本鋼管福山病院)

岡野真由美

【目的】近年、運動器疾患の疼痛と心理的側面との 関連性が指摘され、腱板断裂術後6ヶ月において不 安・抑うつとVASスコアが関連するとの報告がある。 しかし、術後早期の痛みと不安・抑うつの関連性を調 査した報告はない。腱板断裂術後では、早期に不安・ 抑うつを訴えることが多く、そのような患者に対する

看護ケアは、術後の痛みなのか、不安による痛みなの か、判別しにくいことをしばしば経験する。今回我々 は、術後疼痛と不安・抑うつとの関連を調査したので 報告する。 【対象】 2020年6月~2020年12月までに当 院で腱板断裂術を行った35例 (男性25例、女性10例、 平均年齢67.0歳)を対象とした。心理的因子の評価に は、HADS (Hospital Anxiety and Depression Scale) で、痛みは夜間時のVAS (Visual Analog Scale) で評価し、術前、術後2週間、術後8週間で、測定 した。不安状態 (HADS-A) は8点以上、うつ状態 (HADS-B) は11点以上とし、それぞれの項目とVAS を比較検討した。【結果】VASは、術前2.3点、術後2 週、1.1点、術後8週で1点、不安項目では、術前8.7 点、術後2週7.5点、術後8週8.0点であった。双方とも 術前・術後2週で有意差を認めたが、術後2週、8週 では有意差は認めなかった。また抑うつ項目では、術 前2.3点、術後2週で、1.1点、術後8週で1点で、有意 差は認めなかった。不安項目とVASとの関連では、術 前、不安 (+) 群2.6±4.8点、不安 (-) 群1.3±1.5で、 有意差を認めた。術後2週は、不安(+)群1.47±1.1 不安 (一) 群0.89±1.4で、有意差を認めたが、術後 8週は、不安(+)群1.05±0.5 不安(-)群0.94±1.6 で、有意差を認めなかった。抑うつ項目とVASでは、 術前、抑うつ(+)群2.3±3.38 抑うつ(-)群2.38± 8.56で、術後2週、抑うつ (+) 群1.13±1.39 抑うつ (一) 群0.75±0.02、術後8週VASは、抑うつ (+) 群 1.285±0.914 抑うつ (-) 群1±1.8で、有意差は認め なかった。【考察】疼痛と不安項目 (HADS-A) では 術前、術後2週で有意差を認めた。不安群(+)では、 不安群(一)と比べ術前、術後2週で有意にVASは高 値であった。術後2週、8週での有意差はなかった。 このことから術後早期の痛みと不安には関連は認めら れたが、抑うつとの関連は認められなかった。腱板断 裂術後早期において、疼痛管理ばかりでなく、不安に ・第31回日本乳癌検診学会学術総会 (Web) 2021.11

· 第83回日本臨床外科学会総会 (Web) 2021.11 胃癌術後の残胃転移を契機に発見された乳腺浸潤性 小葉癌の1例

対する看護ケアが必要と思われる。

(日本鋼管福山病院 乳腺外科) 藤井 清香

【はじめに】乳癌の消化管転移は比較的まれとされ るが、浸潤性小葉癌の胃転移の報告は散見される。今 回、胃癌術後の残胃に転移を来し、それを契機に乳癌 が判明した1例を経験したので報告する。【症例】70

歳女性。23年前に胃癌(低分化型腺癌、非充実型)に 対し幽門側胃切除術が行われ、無再発生存中。乳癌 検診歴はなく、胃・乳房ともに自覚症状は認めなかっ た。年1回の上部内視鏡検査時、残胃の体上部大弯に 単発性のびらんがあり、生検の結果、胃原発の腺癌と しては非典型的で転移性の疑い、原発臓器は乳腺が まず挙げられるとの結果であった。全身精査目的の造 影CT検査で、左乳房に多発する不整形腫瘤と左腋窩 リンパ節腫大を認め、左乳癌が強く疑われ、当科紹介 となった。触診では左AC区域に腫瘤を触知。マンモ グラフィでは微細鋸歯状の腫瘤を認めた、USは不整 形低エコー腫瘤が多発しており、最大のものは40×30 ×15mm大であった。CNBを行い、浸潤性小葉癌、ER score 3 a, PgR score 0, HER 2 score 1 Ki-67 5%以 下であった。PET/CT検査で、FDGは左乳房・左腋 窩リンパ節, 胃体部に集積。肺・肝に集積はなく、小 葉癌で転移が多いと言われている卵巣・子宮、腹膜・ 後腹膜、副腎などには集積は認めず、遠隔転移は胃壁 のみであった。全身治療として、内分泌療法+CDK 4 /6阻害薬を開始したが、3か月でPDとなり、パクリ タキセル+アバスチン併用療法を開始した。【考察】乳 癌の胃転移の病理組織所見は胃癌と類似しており、鑑 別が難しく、乳癌の手術既往や胃転移以外の遠隔転移 のない症例の正診率は低いとされている。遠隔転移が 胃転移のみの症例は少ないため、自験例のように胃生 検の結果から乳癌が疑われ、診断・治療につながった 症例は少ないと考えられる。治療に関しては、乳癌胃 転移は高度進行乳癌の一部分症であり、胃の手術適 応は狭窄や出血のある症例に限られ、化学療法や内分 泌療法が第一選択となるが、予後は不艮と言われてい る。自験例では胃の狭窄・出血に注意しながら、全身 治療を継続していく予定である。

当院における検診発見乳癌の検討

(日本鋼管福山病院乳腺外科) 藤井 清香

・第32回日本サイコネフロロジー学会学術集会・総会 (Web) 2021.12 新型コロナウイルス感染症流行により透析患者が困って いること・工夫していること・心がけていること

(日本鋼管福山病院)

松田 和子

・第65回日本糖尿病学会年次学術集会(兵庫)2022.5 認知症患者が持つ力を発揮できるよう介入すること で治療行動を再獲得できた一例

> (日本鋼管福山病院) 中島 友美

・第30回日本乳癌学会学術総会(神奈川)2022.6 乳管内乳頭腫と診断した5年後に非浸潤性乳管癌が 発生した1例

> (日本鋼管福山病院 乳腺外科) 藤井 清香

【はじめに】乳頭状構造を示す癌は病理診断が難 しく、針生検では良悪の判断が難しいことがある病変 として認識されている。今回、針生検で乳管内乳頭腫 と診断された5年後に腫瘍摘出術を行い、乳管内乳頭 腫内に非浸潤性乳管癌が存在していたことが判明し た1例を経験したので報告する。【症例】77歳女性。 5年前に当院で乳癌検診を受診。マンモグラフィ(以 下MG) で左乳房にFADを認め、精査目的にて当科を 受診した。初診時は触診では腫瘤・硬結は触知せず。 USで左12時方向Mに10×9×7mm大の境界明瞭な腫 瘤を認めた。CNBで乳管内乳頭腫の診断であった。経 過観察を指示したが、受診されなかった。その4年後 に左乳房腫瘤を主訴に当科を受診。触診で左AC境界 部に硬結を触知。MGは微細分葉状の腫瘤として描出 された。USでは左12時方向に17×13×11mm大の境界 明瞭な腫瘤であり、増大していた。再度CNBを行い、 良性、乳管内乳頭腫を疑うという診断であった。末梢 性の乳管内乳頭腫では異型乳管過形成や非浸潤性乳 管癌を伴うことがあるため、手術での切除を勧めた が、本人希望により再度経過観察となった。翌年(初 診より5年後)、USで18×14×12mmでサイズ変化は 認めなかったが、本人が手術に同意したため、腫瘍摘 出術を行った。病理結果は、増生細胞の核は均一で、 核分裂像も認め、ER・PgRはびまん性に陽性、乳管内 乳頭腫内に非浸潤性乳管癌が存在しているとの診断 であった。また、切除断端は陰性であった。術後タモ キシフェン内服を開始している。【まとめ】乳頭状病 変は診断が難しいため、針生検で良性と診断された場 合でも注意深く経過観察を行う必要があることを患者 に理解してもらう必要がある。そして、変化を認めた 場合は全体像を検索すべきである。

・JOSKAS-JOSSM 2022 (北海道) 2022.6 Hybrid CWHTOにおいて術後下肢アライメントが KOOSに与える影響

(日本鋼管福山病院 整形外科) 高原 康弘

・第65回春季日本歯周病学会学術大会(東京)2022.6 セメント質剥離を伴う下顎右側中切歯の唇側垂直性 骨欠損に対して歯周組織再生療法(リグロス®)が 奏功した症例

(日本鋼管福山病院)

永原 隆吉

【症例の概要】75歳女性(初診2019年11月)。 別主 訴にて来院されたが全顎検査で自覚症状の無い1~ の膿瘍形成を指摘したところ精査加療を希望された。 4-5mmPPD: 3.7%, 6mm以上PPD: 0.6%, BOP: 3.1%, PISA: 30.7mm2, PCR: 13.9% (1 ¬ を除く PPDは3-4mm)。咬耗のある唇側傾斜1¬は、唇側 中央に限局したPPD9mmと歯根中央部歯肉付近に 膿瘍形成および瘻孔を認めたが歯髄は生活反応を示 した。CBCT画像から1¬の近遠心面一部と唇側面に 歯根面から剥離した歯根長2/3の帯状の不透過像とそ れに伴う骨縁下欠損像が認められた。【診断】1¬セ メント質剥離 (Class 3 Stage C:Leeらの分類 【Lee AHC et al: Int Endod J. 2021】) を伴う限局型慢 性歯周炎 (Stage Ⅲ Grade B) 、二次性咬合性外傷 【治療計画】①歯周基本治療 ②再評価 ③歯周外 科治療 ④再評価 ⑤口腔機能回復治療 ⑥再評価 ⑦SPT【治療経過】1¬は、咬合調整(垂直性歯根 破折の└1抜歯後①┴1②歯周治療用装置を装着) と セメント質剥離片除去目的のSRPで病変の改善は認め られず、歯周外科治療を行った。歯肉翻転後にセメン ト質剥離片を明示・除去し、骨縁下欠損に対してリグ ロス®を投与した。剥離セメント質片と周囲肉芽組織 の病理組織検査から、グラム/PAS陽性細菌、セメン ト質とその小塊の散在が認められた。術後2年では、 1¬のPPD減少とアタッチメントゲイン、唇側骨縁下 欠損部の骨再生像を認めた。【考察・まとめ】セメン ト質剥離は、根尖性歯周炎、歯周炎、歯内歯周病変お よび歯根破折と症状が類似するため診断が困難で不 適切な治療につながる。その病態を理解した上での適 切な診査診断によって治療を行なうことができ、さら にセメント質剥離に起因する骨欠損に対してのリグロ ス®の有効性が示唆された。

キーワード:リグロス®、セメント質剥離、セメント質剥離の分類

・日本歯科保存学会2022年度春季学術大会(第156回)(Web) 2022.6歯内・歯周疾患について一成因の異なる3症例一

(日本鋼管福山病院 歯科)

永原 隆吉

(広島大学大学 院医系科学研究科歯髄生物学研究室) 永原 隆吉、武田 克浩、柴 秀樹

【緒言】歯内・歯周疾患は成因により3つ(1型: 歯内疾患が初発で根尖孔等を通して歯周組織へ細菌 感染が波及した場合、Ⅱ型:歯周組織の細菌感染が根 尖孔等を通じて歯髄へ波及し歯内疾患が継発した場 合、Ⅲ型: 歯内疾患と歯周疾患がそれぞれ独立して発 症した合併型)に分類される。本報告では成因の異な る歯内・歯周疾患症例を示す。【症例1:患歯5□】 74歳女性。糖尿病、高血圧。57のプロービングの深 さ (PPD, 6点法) は頰側近心部から⑧®⑥、舌側近 心部から④3④mm (○はBOP+)、動揺度2、歯髄生 活反応検査(冷刺激、歯髄電気診査)で反応を示さな かった。デンタルX線画像(X線画像)から歯髄に近 接したインレーを認め、歯槽硬線が不明瞭で、根尖部 から歯槽骨頂まで歯根を取り囲むように透過性が亢 進していたが、歯槽骨頂レベルは維持されていた。歯 周組織検査の結果は4-5mm以上PPD: 31.7%, 6mm 以上PPD: 27.8%,BOP: 63.5%,PISA: 1341.5mm²、 PCR: 94%, 歯肉の発赤と腫脹、歯の動揺および水平 性骨吸収(5~を除く)が全顎的に認められた(広汎 型慢性歯周炎:StageIV/GradeC)。5つの診断:広汎 型慢性歯周炎に罹患し、5 には6mm以上の歯周ポ ケットが3点あるも、X線画像から、歯内疾患(歯髄壊 死)が初発で、根尖孔等を通して歯周組織へ炎症が波 及したⅠ型と診断した。第一に感染根管治療を実施す ると、最深部PPDは6mmに減少した。さらに、スケー リング (SC) ·ルートプレーニングを実施したとこ ろ、全周3mm以下、動揺度は1まで改善し、X線画像 では、根尖部から歯槽骨頂まで不透過性が亢進してい た。I型は基本的に歯周治療を必要としない。本症例 では、排膿路としての歯周ポケットが形成された後、 長時間が経過し、ポケット上皮と根面にバイオフィル ムが形成されたので、歯周治療も必要だったと考え る。【症例2:患歯4√】41歳女性。4√の歯肉は退 縮し、歯根が露出していた。最深のPPDは頰側近遠心 部に④mm歯髄生活反応検査で反応を示さなかった。 X線画像では、遠心歯頚部にう蝕による透過像を認め るものの歯髄まで達していなかった。近心の歯槽骨骨 頂レベルは1/2で、さらにその部位から垂直性骨吸収 が根尖部まで達し、根尖周囲に半円形の透過像が観

察された、歯周組織検査の結果は4-5mm以上PPD: 16.7%, 6mm以上PPD:0%, BOP:5.2%, PISA: 88.7mm², PCR: 11.7%, 歯肉の発赤と腫脹は顕著でな く、全顎的な垂直性骨吸収と歯肉退縮を認めた。4~ の診断: 広汎型侵襲性歯周炎 (歯周炎の発症時期より 診断)に罹患し、4¬のX線画像から、歯周疾患が初 発で、根尖孔を通して歯髄へ炎症が波及したⅡ型と診 断した。感染根管治療(2根管性)と歯肉退縮で露出 していた近心部根面溝へのTBIとSCを併行して行っ た。その結果、全周2mm以下にPPDが改善し、X線画 像では根尖周囲の透過像は消失し、歯槽硬線は明瞭 化した。【症例3:患歯7√】53歳男性。「根管治療 開始後も膿が出る」と紹介を受けた。高尿酸血症、高 脂血症、喫煙(20本/日)。7¬のPPDは頰側近心部 から⑤⑬④、舌側近心部から333mm (頰側中央から排 膿)、動揺度は2だった。X線画像/CBCT画像は、樋 状根、歯槽骨頂から根尖部周囲にわたる広範囲な透過 像を示した。なお、6 には歯髄生活反応を認めた。 歯周組織検査の結果は4-5mm以上PPD:5.6%, 6 mm以上PPD: 0.6%, BOP: 6.2%, PISA: 137.2mm2, PCR: 18.5%であった (限局型慢性歯周炎: Stage Ⅲ/ GradeC)。7¬の診断:辺縁から根尖部に及ぶ広範 囲の歯槽骨吸収像が見られることから、Ⅲ型と診断し た。根管治療と歯周基本治療を実施したが、類側の近 遠心部に3mm、中央部に11mmのPPDが残存したため 歯周組織再生療法を行った。術後約2年、根尖部透 過像は改善し、頰側中央部PPDは5mmに減少してい た。このように、Ⅱ型とⅢ型は歯内療法と歯周治療の 両方を行う必要がある。【考察・結論】歯内・歯周疾 患の診断は、患歯のX線画像/CBCT画像所見(辺縁 から根尖部周囲の歯槽骨の透過性の亢進度, 吸収範 囲等)、PPD、歯髄生活反応等とともに、患歯周囲お よび全顎的な歯周組織の状態から総合的に行われる べきである。なお、症例1から3の患者から学術大会 等で臨床資料等を利用することの同意を取得済みであ る。

・第43回日本歯内療法学会学術大会(Web)2022.7 Periapical Osteoperiostitisと歯根破折を伴う歯根囊胞罹患歯 への自家歯牙移植術症例

> (日本鋼管福山病院・歯科) 永原 隆吉 (わだ歯科クリニック) 和田圭之進

(広島大学大学院 医系科学研究科歯髄生物学研究室)

永原 隆吉、古玉 大祐、武田 克浩 柴 秀樹

【緒言】Periapical Osteoperiostitis (PAO) は、慢 性根尖性歯周炎によって、根尖部に隣接する上顎洞 底部がドーム状に挙上する反応性骨形成であり、デン タルX線画像やCBCT (コーンビームCT) 上ではhalo 状(暈状)の放射線不透過像として現れる。今回、歯 根嚢胞によって生じたPAOと歯根破折を有する左側 上顎第一大臼歯に対して、抜歯後、自家歯牙移植術 が奏功した症例を報告する。【症例】患者:31歳、女 性。主訴:左上奥歯の違和感。現病歴:初診1~2週 間前に左側上顎大臼歯部に違和感を認め、自発痛や咬 合痛が繰り返し生じるようになったという。既往歴: 特記事項なし。現症: L6には、自発痛、根尖部圧痛 および動揺はないが打診痛と咬合痛が認められた。
し 6周囲の歯肉には発赤と腫脹はなかった。根分岐部病 変(1度)で近心部に限局的な歯周ポケット(6 mm、 Bleeding On Probing:+) が認められ、その他の部位 のプロービングの深さは3mm以内であった。歯根破 折は視認できなかった。鼻閉感等の鼻炎症状はなかっ た。 L6のデンタルX線画像では、根尖周囲の瀰漫性 透過像と上顎洞底を挙上する不透過像が確認された。 また、口蓋根管には歯根長の1/2に及ぶコアが装着さ れており、近心部に垂直性骨欠損を認めた。【診断】

L6:慢性根尖性歯周炎、PAOと歯根破折の疑い 【治療方針】感染根管治療。歯根破折が確認された場 合は、抜歯後、自家歯牙移植術。【治療経過】全部鋳 造冠とメタルコアを除去したところ、髄床底部に近遠 心にわたる破折線が確認された。自家歯牙移植術を行 うためパノラマX線写真とCBCT撮影を実施した。移 植歯は単根歯である8 とした。また、パノラマX線写 真では上顎洞底部を挙上する不透過像が認められ、 CBCT所見では、 ∟6と上顎洞との交通はなく、近遠 心頰側根を含む12×10×9mm程度の境界明瞭な透過 像とともに、上顎洞底が洞内へ挙上されたドーム状の 不透過像が認められ、PAOを確定した。抜去したL6 の根尖部病変は病理検査の結果、歯根嚢胞と判明し た。移植歯(8」)の嚢胞除去部位への陥入防止のた め、縫合と歯科接着用レジンセメントによる固定を実 施した。その後、根管治療を行い、約2か月後には最 終補綴装置を装着した。術後1年の経過観察では、上 は定着していた。【考察・結論】PAOに対しては慢性 根尖性歯周炎罹患歯に非外科的歯内治療あるいは外 科的歯内治療を行うことが基本である。本症例から、

自家歯牙移植術が、上顎洞との交通がなくPAOを伴い歯根破折による保存不可能な歯根嚢胞罹患歯に対する治療法の選択肢になりうることがわかった。

・第24回日本医療マネジメント学会学術総会(兵庫)2022.7 入退院をくり返す終末期患者への在宅療養への援助 〜複雑な家族関係からの学び〜

(日本鋼管福山病院)

藤井 直子

【はじめに】近年家族の形態は多様化している。今 回、実子、姉、内縁の妻とそれぞれ思いが違った家族 への関わりで、最期は本人の望む在宅療養が叶えら れた症例を経験した。【事例紹介】A氏70代男性、8 年前よりアルコール性肝硬変を患い入退院を繰り返 しながら療養中。内録の妻と同居。A氏は2度の離婚 歴あり前妻との間に3人の子がいる。姉が一人市内に 在住。【経過】胸水貯留、食欲低下、体動困難にて入 院。以前よりA氏は入院することを嫌がり自宅での療 養を希望しており、内縁の妻もA氏の希望を叶えてあ げたいと望んでいた。しかし、実子や姉は病院の方が 安心できると病院での療養を望んでいた。余命数か月 と予測されていたが、家族の思いが違うため最期の療 養場所の検討など必要であった。まず、家族間でキー パーソンを決めてもらうことを提案し、話し合いの結 果内縁の妻に決定した。看取りについて内縁の妻は 「最期まで家で」と希望したが、他の家族は「最期は 病院で」と強く希望されたため、内縁の妻も反論はさ れなかった。自宅退院に向けて訪問診療や訪問看護の 導入、電動ベッドなど環境調整を早急に行い、入院14 日後自宅退院となった。病院での看取りに備えて退院 後も定期的に在宅チームとA氏の情報共有を行い受け 入れ体制を整えた。実子や姉は自宅療養での内縁の妻 の献身的な姿やA氏の満足そうな姿を見て自宅での看 取りを決意された。退院後数か月を経てA氏は自宅で 最期を迎えられた。【考察】家族関係が複雑であった ためキーパーソンの選定や今後について家族間で話し 合いの場を持つよう公平な立場で関わったことで、A 氏が望む退院支援に繋がったと考える。在宅チームと も連携をし、複雑な家族関係のA氏・家族と良好な関 係を築きA氏の希望を叶えることができた。

顎洞底部を挙上していた不透過像が改善され、移植歯・第24回日本医療マネジメント学会学術総会(兵庫)2022.7 は定着していた。【考察・結論】PAOに対しては慢性 あなたの時間を守ります

~待ち時間の有効活用の取り組み~

(医療法人社団 日本鋼管福山病院)

立木真愉美

【背景】入退院支援室では入院が予定された患者に 様々な関わりを行っている。内容はクリティカルパス や術前中止薬の説明、入院費用や限度額申請などの 情報提供、アナムネーゼを聴取し必要があれば退院支 援看護師と入院病棟と情報を共有する。これらを「入 院説明 とよび、年間で2400件にのぼり、3つの個室 を使用し、3人の看護師と1人の事務職員で行ってい る。曜日によっては1日15件以上発生し、高齢者の場 合は説明に1時間近くを要することがある。そのため 入院説明の待ち時間が2時間近く発生することがあり クレームが生じていた。【目的】30分以上発生する待 ち時間を有効に活用してもらう【方法】①入院説明ま での大まかな待ち時間を伝える②30分以上の待ち時間 が発生する場合は以下の選択枝を提示する(1)同意 を得た患者に携帯番号を聞き順番がくれば連絡(2) 同日の午後に案内可能な時間を設定し、再来院(3) 後日の案内可能な日時を設定して再来院③3つのどれ かを選択した患者に同意を得てアンケートを実施する ④入院のしおりを渡し、事前に読んでもらう【結果】 アンケート回答数159名中99名(62%)回答内容は、 待ち時間を有効に過ごせた84%。 待ち時間は有効で はなかった12%。未回答4%。有効に過ごせた理由と して、「食事がゆっくりできた」「車内で待ち時間が 過ごせ、感染の不安がなく安心だった」「時間の目安 が分かり仕事の段取りができた|「用事を済まし午後 から出直すことができた」「一人で説明を聞くのは不 安だったが、日時を変更し家人に来てもらえた」「入 院のしおりを事前に読み、質問したいことを整理でき た」等であった。【まとめ】「待つ」ことに対し、時間 の目安を伝え、その上で患者に時間の使い方を選択し てもらう工夫をした事で、多くの患者が待ち時間を有 効に活用できた。それが、クレーム減少にもつながっ た。

・第65回秋季日本歯周病学会学術大会(宮城) 2022.9高齢者の薬物性歯肉増殖症を伴う広汎型慢性歯周炎に対して初期糖尿病の発見と改善および降圧剤未変更下で歯周治療が奏功した症例

(日本鋼管福山病院)

永原 隆吉、徳丸 操 (広島大学大学院 医系科学研究科歯周病態学研究室) 上田 智也、河野 祥子、岩田 倫幸 應原 一久、水野 智仁 ・第49回日本肩関節学会(神奈川) 2022.10On-lay型RSA術後の上腕骨大結節の骨吸収と臨

On-lay型RSA術後の上腕骨大結節の骨吸収と臨床 成績の検討

> (日本鋼管福山病院 整形外科) 加藤 久佳、岩崎 祐一 (産業医科大学 整形外科) 田島 貴文 (名越整形外科) 名越 充

【はじめに】On-lay型RSAは、上腕骨の外方化によ りdeltoid wrapping効果で外旋角度の改善が期待でき る。近年RSA術後に上腕骨ステム周囲の骨吸収が報 告され、特に大結節の骨吸収(Inoue分類zone 1) は 外方化が減少することになり可動域制限や肩関節不 安定症が危惧される。今回我々は、On-lay型RTSA術 後における大結節の骨吸収と臨床成績を調査したの で報告する。【対象と方法】2019年2月から2020年9 月までにRSAを施行し、術後2年以上経過観察(平均 32ヶ月) が可能であった25肩 (男性:12肩、女性:13 肩、平均年齢77.6歳)を対象とした。全例Exactech社 Equinoxe(primary stem) を使用した。最終調査時で zone 1 における骨吸収をMelisの評価法を用い、皮質 骨の菲薄・骨吸収あり群(以下吸収+群)、なし群(以 下吸収-群)に分け、2群間のLateralization shoulder angle (以下LSA)、髄腔占拠率、肩関節可動域 (屈 曲、外転、外旋) とconstant scoreを比較検討し、骨 吸収時期について調査した。【結果】吸収+群は9肩 (37.5%)、吸収-群は15肩(62.5%)であった。最終調 査時LSA,は吸収+群は90.6°、吸収-群は85.9°,可動 域(屈曲,外転,外旋)は、吸収+群: (127.2°,120.0°,33.3 °)、吸収-群: (128.5°,125.0°,31.7°) で、constant scoreは、吸収+群:60.5点、吸収-群:54.2点で、両 群間に有意差はなかった。髄腔占拠率は、吸収+群: 77.6%、吸収-群: 68.5%で、吸収+群の方が有意に高 かった。骨吸収時期は、術後半年以内が7肩(78%) で、1肩(吸収+群、術後2年)に肩関節脱臼を認め た。【考察】近年RSAの上腕骨の骨吸収は、ステムの 非セメント固定で、髄腔占拠率の高い場合多く認めら れている。骨吸収あり群は髄腔占拠率が高く、比較的 術後早期に出現したが、2群間でLSA、術後可動域、 臨床成績に有意差は認めなかった。しかし脱臼した症 例は、大結節の骨吸収が進行したため、肩関節が不安 定になったと考えられる。髄腔占拠率が高いと大結節 の骨吸収が多く認められたことより上腕骨ステム選択 には注意が必要である。

・第108回アメリカ歯周病学会共催日本臨床歯周病学会 日本歯周病学会2022年大会(Web)2022.10

Successful regenerative response of severe bone defect with cemental tear

(日本鋼管福山病院) 永原 隆吉

・第19回日本肩の運動機能研究会(神奈川)2022.10 腱板断裂術後における断裂サイズによる疼痛、他動屈曲 可動域比較

> (日本鋼管福山病院 リハビリテーション科) 松井 進、神尾 昌利、宇野 公裕 藏内 啓、三鼓 善久 (日本鋼管福山病院 整形外科) 加藤 久佳

【目的】腱板断裂術後の疼痛は、後療法を進めるう えで可動域訓練の妨げとなる。損傷範囲が大きいほど 修復部分は大きくなるが、臨床場面で疼痛は断裂の大 きさに比例していない事が多い。今回、術後早期にお いて、腱板断裂の大きさと疼痛、他動屈曲可動域につ いて比較検討した。【対象と方法】対象は2019年3月 から2019年8月の期間に当院で腱板断裂修復術を施 行した82肩(男性46肩、女性36肩、平均年齢68.3歳) を対象とし、大・広範囲断裂 (男性18肩 女性16肩) 以下、大断裂以上群。小·中·不全断裂(男性28肩 女性20肩)以下、中断裂以下群の2群間に分けた。各 群のリハビリプログラムは中断裂以下群は術後1週目 より肩他動可動域訓練開始。大断裂以上群は術後2週 目より肩他動可動域訓練開始を開始した。1、2、3、 4週のVASスコアと3、4週目の他動屈曲可動域を2 群間で比較検討した。また各郡におけるVASスコアを 経時的に比較検討した。統計学的評価はt検定を用い 5%未満を有意差ありとした。【結果】平均VASスコ アは、中断裂以下群で1週目:3.4点、2週目:2.0点、 3週目:1.6点、4週目:1.0点で、大断裂以上群で1週 目:2.3点、2週目:2.0点、3週目:1.5点、4週目:1.3 点であった。術後1週目のVASスコアは中断裂以下 群の方が有意に高かった。術後2、3、4週目以降で は、両群間に有意な差は認められなかった。経時的な VASスコアの変化は中断裂以下群の1週目のみ有意 差を認めた。平均他動屈曲可動域は3週目に中断裂以 下群131.2°、大断裂以上群128.4°で、4週目に中断 裂以下群131.9°、大断裂群129.1°と両群間に有意差 は認められなかった。【考察】疼痛において小・中・ 不全断裂が、大・広範囲断裂に比べて有意に増強する 原因として、リハビリテーションプログラムが中断裂以下群は術後1週目から肩他動可動域訓練が開始となり、炎症が治まり切っていない時期から肩他動可動域訓練が始まる事と、棘上・棘下筋の筋収縮が早く回復することで筋痙縮が起こりやすいことが考えられ、今回の結果もこれを支持する内容となった。大断裂以上群では術後2週目より肩他動可動域訓練が開始となり中断裂以下群に比べて炎症がある程度軽減した時期から肩他動可動域訓練が始まる為疼痛が軽いと考えられた。昨今早期リハビリテーションが推奨されているが中断裂以下群の術後1週目に実施するリハビリテーションでは疼痛に注意し筋痙縮を起こさないよう慎重に実施する必要があると考えられた。

・第24回日韓歯科保存学会学術大会(岡山)2022.11 包括治療により関節炎症状の改善がみられた口腔崩壊 症例

> (日本鋼管福山病院歯科) 永原 隆吉 (広大院医系科学・歯周病態) 岩田 倫幸、應原 一久、水野 智仁

・第32回日本乳癌検診学会学術総会(Web) 2022.11 境界明瞭な腫瘤が多発する硬化性腺症のある乳房に 発生した炎症性乳癌の1例

> (日本鋼管福山病院 乳腺外科) 藤井 清香

炎症性乳癌は、腫瘤を認めず、皮膚のびまん性発 赤、浮腫、硬結を示す乳癌であるが、腫瘤を認めるも のは二次性の炎症性乳癌と定義される。今回、境界明 瞭な腫瘤が多発する硬化性腺症の経過観察中に、二 次性の炎症性乳癌が発生した1例を経験したので報告 する。症例は48歳女性。マンモグラフィ(以下MG)検 診で要精査となり、精査目的にて当科を受診した。触 診では両側乳房に腫瘤は触知しなかった。MGは、両 側乳房に多発する境界明瞭な腫瘤を認めた。USでは 1-2cm大の境界明瞭な低エコー腫瘤が両側乳腺内に 多発していた。鑑別疾患として、豊胸術後、多発線維 腺腫、乳腺症を挙げたが、豊胸術歴はなかった。MRI では、両側乳房に腫瘤が多発していたが、両側C区城 に他部位より早期に濃染される腫瘤を認めたため、両 側C区域の病変にCNBを施行。両側とも硬化性腺症の 診断で半年毎に経過観察していた。初診より6年後、 左乳房発赤・腫脹・疼痛を主訴に、受診。左CA区域 に発赤・硬結を認めた。USでは、左C区域の皮膚の肥

厚、脂肪組織のエコー輝度の上昇、乳腺内に広範囲 ・第53回日本看護学会学術集会 (千葉) 2022.11 に広がる低エコー域を認めた。CNBを行い、浸潤性乳 管癌、ERO%、PgRO%、HER2 score 3、Ki-67 80% と診断。術前化学療法(EC療法、トラスツズマブ+ペ ルツズマブ+ドセタキセル)を行った後、Bt+Axを行っ た。リンパ節転移は消失したが、原発巣は4×4mm 残存していた。術後は乳房全切除術後放射線療法、 T-DM1投与を行っている。硬化性腺症内に異型を伴 う上皮成分が存在したり、DCISが存在したりすること は知られている。自験例でも、CNBで左側は異型上皮 を伴っていたが、炎症性乳癌の細胞像とは異なってお り、硬化性腺症の近傍より新たに乳がんが発生したと 考えられた。

·第84回日本臨床外科学会総会(福岡) 2022.11 乳頭内に超音波検査で混合性パターンを示す腫瘤を 認めた乳頭部腺腫の一例

> (日本鋼管福山病院 乳腺外科) 藤井 清香

【はじめに】乳頭部腺腫は乳頭内または乳輪直下乳 管に生ずる乳頭状ないし充実性の腺腫であり、皮膚の びらんや炎症、腫瘤を形成する比較的稀な良性腫瘍で ある。超音波検査では辺縁平滑、内部均一な低エコー 腫瘤として描出される。今回、乳頭内に混合性パターン を示した乳頭部腺腫を経験したので報告する。【症例】 52歳女性。右乳頭部のそう痒感・疼痛・びらん・浸出 液を自覚し近医でステロイド含有軟膏を処方されるも 改善しないため、当科紹介となった。右乳頭は左と比 較し腫大し、びらんを認めた。USで右乳頭内に15× 15mm大、境界明瞭な混合性パターンを示す腫瘤を認 めた。穿刺吸引細胞診を行ったところ、黄褐色の液体 成分を認めた。混合性パターンを呈する腫瘤の鑑別疾 患として膿瘍が挙げられるため、細菌培養同定検査に 提出。Staphylococcus lugdunensisを認めた。抗菌薬 を投与するも改善しないため、浸出液中の細胞診を行 い、乳頭状集塊を認めた。この時点で、乳頭部腺腫と 乳頭部乳癌を鑑別に挙げ、切開生検を行い、乳頭部腺 腫と診断した。良性であるため、経過観察としたが、 持続する疼痛と浸出液のため、手術希望があり、右乳 頭切除を行った。最終病理組織診断でも、乳頭部腺腫 と診断された。【考察】乳頭部腺腫は多彩な組織像を 示すとされる。そのため、超音波検査で内部均一な低 エコー腫瘤像を呈するだけでなく、混合性パターン像 を呈することがあり、注意を要する。

急性期病棟における臨地実習指導者のジレンマと指導者 育成の在り方

(日本鋼管福山病院)

田中 静華、池上知嘉子

【目的】急性期病棟では患者の在院日数は短く、場 合によっては他病棟への移動もある。学生にとって は、新たな受け持ち患者での看護展開にストレスを感 じ、モチベーションの低下をきたすため、指導者には 学生の気持ちを理解した対応が求められる。本研究 では、急性期病棟で実習指導を行う看護師が感じて いるジレンマを明らかにし、臨地実習指導の充実に向 けた伝達講習の在り方を検討する。【方法】都道府県 保健師助産師看護師実習指導者講習会を未受講で、 急性期病棟にて実習指導を行なう看護師4名に対し、 インタビューを実施した。研究の趣旨、協力と中断は 自由意思であり断っても不利益を生じないこと、デー タの管理方法と匿名性の保持について説明し、同意を 得た。インタビューガイドを用いて半構成的面接を行 い、逐語録から内容をコード化し、意味内容の類似性 に従ってカテゴリー化した。【結果】50のコードから 16のサブカテゴリー、5のカテゴリーを抽出した。カ テゴリーは<入院期間が短く疾患の展開が速いことへ の配慮><業務と実習指導の両立><病棟看護師と の関係>と、指導に関する<学生のレディネス把握困 難><指導への自信のなさ>に分けられた。【考察】 急性期病棟では1人の患者を継続的に受け持つことが 困難であり、同疾患患者や既習内容を考慮した患者選 定を行い、学生の士気を下げない関わりを工夫してい た。その中で、指導者は学生個々の知識や経験の差か ら生じる指導のジレンマも感じており、事前に教員と 面談しレディネスを把握した上で臨地実習に臨む体制 作りが今後の課題となった。また、指導者は急性期病 棟での経験が少ない中でも指導を任されるなど、不安 を抱えて実習指導を担っていた。さらには、処置や手 術などの多忙な業務を手伝えない申し訳なさを感じつ つも、学生とのケアを周囲のスタッフへ依頼するのは 気兼ねするなど、良い関係性の中で業務を遂行したい という急性期病棟特有のジレンマを抱えていた。現在 は都道府県保健師助産師看護師実習指導者講習会の 内容を抜粋し、実習指導を担う看護師へ講習を行って いるが、今後は指導者の抱えるジレンマをも配慮した 講習内容の構築と、指導に携わっている看護師への定 期的なフォローを検討したい。

・第67回日本リウマチ学会総会・学術集会(福岡) 2023.4 生物学的製剤を併用した関節リウマチ患者に対する 高位脛骨骨切り術の経験

> (日本鋼管福山病院) 高原 康弘

· 第96回日本整形外科学会学術総会(神奈川)2023.5 Current concepts in osteotomy around the knee: Indication and limitation of OWHTO and hybrid CWHTO

> (日本鋼管福山病院) Yasuhiro Takahara

·第66回春季日本歯周病学会学術大会(香川)2023.5 The teeth saving with REGROTH®~病院歯科編~

(日本鋼管福山病院)

永原 隆吉

骨移植材や遮蔽膜, 生物製剤を用いた歯周組織再 生療法による優れた臨床成績と中期(3-5年)から長 期 (5-20年) の高い歯の生存率を示したStavropoulos らの報告 (J Clin Periodontol. 2021;48(3):410-430.) の他、Corteliniらによる成果と費用対効果の評価(J Cin Periodontal. 2020;47(6):768-776.) は特記に値す る。さらに、Corteliniらによる研究報告で示されたよ うに、Baseline時の88%もの患者が、「可能であれば Hopeless teethの保存を希望されていた」ことから、 様々な全身疾患を背景に持つ患者の「想い」も同様 である。そのような患者に対し、歯周組織再生療法 の適応を検討する (J Periodontol. 2022;93(12):1763-1770.) ことで、安易な抜歯ではなく、可能な限りの歯 の保存が、真の患者利益にもつながる。それは、2016 年に市販化されて7年目の遺伝子組換えヒト型塩基性 線維芽細胞増殖因子を主成分とする歯周組織再生医 薬品「リグロス®歯科用液キット 600 μg/1200 μg」に おいても、重度歯周炎罹患歯を保存できるポテンシャ ルが秘められており、口腔内の健康を守ることが、全 身の健康も守る大切な使命を果たすことになる。日本 鋼管福山病院は15科からなる医療機関で、口腔外科 ではなく歯科を標榜していることから、医科や近隣歯 科からの紹介は少なくない。糖尿病、降圧剤による薬 物性歯肉増殖症、周術期等口腔機能管理などの患者 が医科から紹介され、連携を図る中で、リグロス®は、 おおいに歯の保存に寄与できるばかりか、医師や看護 師などから、その存在や歯周組織再生療法の外来にお ける日常臨床のルーティン化に未だ驚かれる。また、

近隣歯科より紹介を受けて歯科診療に従事しているが、各種病因に基づく歯周膿瘍による急性歯周疾患と歯内・歯周病変(Herrera D, et al. J Periodontol. 2018;89 Suppl 1:S85-S102.)は、歯の予後を著しく損なうおそれがあるため、早期診断と治療による迅速な対応が重要となる。そのため、実臨床の中で少しでも予知性を高めるために使用されてきたリグロス®は、病院歯科として地域医療に貢献ができている。そこで、本講演では、演者がこれまで実際に、当病院歯科の臨床で行ってきたリグロス®の優位性を皆様とともに供覧したい。

・第72回日本医学検査学会(群馬)2023.5 ADVIA2120iの測定項目LUCを用いた卓上遠心塗抹装置 とまつくんの使用基準の作成

(日本鋼管福山病院)

小林 由佳、黒田 都、池田 弥央 井上 英昭

【はじめに】2021年8月、新しい卓上遠心塗抹装置 「とまつくん」 (ライオンパワー社製) を導入した。ル チン業務で末梢血の標本を作製する際は塗抹標本作 製装置「SP-10」(Sysmex社製)を使用しているが、 検体によっては細胞が壊れ、細胞形態を観察するのに 不向きな標本となることがある。しかし、とまつくん では遠心塗抹をすることで細胞への負荷を軽減し、元 の細胞形態を維持することが可能となる。今回の取り 組みでは総合血液学検査装置ADVIA2120i(Siemens社 製)の測定項目であるLUC (Large unstained cell:ペル オキシダーゼ非染色性大型細胞)を用いてとまつくん の使用基準を検討、設定したので報告する。【方法】 検討は2022年2月1日から2022年7月31日の期間に当 院においてCBCの検査が行われた全患者を対象とし、 その中から無作為に検体を抽出した。標本はSP-10で ウェッジ標本、とまつくんでスピナー標本、重合ウシ アルブミン液を10%添加したEDTA血の塗抹標本の3 種類を作製し、すべての標本において白血球200カウ ントを行い、壊れている細胞の割合を確認した。デー タの分析はEZR、Stat Flexを使用し、とまつくんの使 用基準を検討した。【結果】細胞はとまつくんの標本 が最も状態が良く、ウェッジ標本と形態が類似してい たため観察しやすかった。また、LUCと標本中の壊れ ている細胞の間に相関係数0.313と弱い相関がみられ ため、LUCの値を基準に標本を作製することは妥当 と推測された。基準の作成においてはROC曲線、ヒス トグラム等を用い、LUC4.5%以上の検体をとまつくん

で作製することとした。【考察】今回LUCのデータか ら、とまつくんの使用基準を作成した。LUCを用いる ことで、実際に標本を顕微鏡観察後に引き直しを行う よりも大幅にTATを短縮することが可能である。今後 は基準設定後のルチン業務にどのように反映されるか 検証したい。【謝辞】今回統計解析するにあたり、川 崎医療福祉大学医療技術学部臨床検査学科 中原貴 子講師、片岡浩巳教授にご尽力いただきました。この 場をお借りしてお礼申し上げます。

第60回日本リハビ・リテーション医学会学術集会(福岡) 2023.6 生物学的製剤を併用した関節リウマチ患者に対する 高位脛骨骨切り術の経験

> (日本鋼管福山病院 整形外科) 高原 康弘

・第25回日本医療マネジメント学会学術総会(神奈川)2023.6 病理組織検査に関連した事故を防ぐための私たちの 取り組み

> (日本鋼管福山病院) 江草望登子

·第44回日本歯内療法学会学術大会(東京)2023.7 セメント質剥離

> (日本鋼管福山病院) 永原 隆吉

·第53回日本腎臟学会西部学術大会(岡山) 2023.10 再発性イレウスに対し真武湯が奏効した維持透析患者 ・第50回日本肩関節学会学術集会(東京)2023.10 の1例

> (日本鋼管福山病院) 和田健太朗

·第50回日本肩関節学会学術集会(東京)2023.10 腱板大・広範囲断裂に対するbiceps reroutingの治療 成績

> (日本鋼管福山病院 整形外科) 加藤 久佳、岩崎 祐一、徳田昂太郎 (名越整形外科)

名越 充 (産業医科大学 整形外科) 田島 貴文

【目的】Biceps rerouting法は、肩腱板の修復と上腕 二頭筋腱の移植を同時に行うことで、上腕骨頭の上方 化防止と肩関節安定性が向上すると報告されている。

今回、当院で一次修復不能な肩腱板大・広範囲断裂に 対して、Biceps rerouting法の有用性について再断裂 率と臨床成績で検討した。【対象および方法】Biceps rerouting法を施行した群 (BR群) 21肩 (平均68歳、 男/女:14/7肩)とBiceps rerouting法を施行しなかっ た群 (非BR群) 20肩 (平均68歳、男/女:15/5肩) に ついて、術後6ヶ月で評価した。術後6ヶ月での再断 裂率、臨床成績 (Constant score) の改善度、および 外転筋力 (Nm/kg) を評価た。Biceps rerouting法は、 上腕二頭筋腱を温存したまま大結節中央部に移行・固 定後、Cofield法を併用し、reduction & holding suture bridge法で修復した。【結果】術後の再断裂はBR群1 肩(4.3%)、非BR群2肩(10%)であった。Constant scoreは術前BR群33.9点、非BR群36.5点であり、術後 BR群52.2点、非BR群59.7点と有意に改善した。外転 筋力は術前BR群0.2Nm/kg、非BR群0.19Nm/kgから、 術後BR群0.3Nm/kg、非BR群0.44Nm/kgで有意に改 善したが、2群間で有意差はなかった。【考察】再断 裂は、BR群で1肩(4.3%)、非BR群で2肩(10%) であった。臨床成績、外転筋力は、2群とも術前後で 有意に改善した。Biceps rerouting法では上腕二頭筋 腱を移植することで外転筋力の改善を期待したが、 本研究では従来の方法と有意差がなかった。Biceps rerouting法は肩腱板大・広範囲断裂の治療において 再断裂の低下と良好な機能回復が期待される有用な 選択肢であると思われるが、症例の選択や更なる術式 の工夫、長期経過観察での検討が必要と思われた。

リバース型人工肩関節置換術後の異所性骨化の発生率 と臨床成績

> (日本鋼管福山病院 整形外科) 徳田昂太郎、加藤 久佳、岩崎 祐一 (産業医科大学 整形外科) 田島 貴文 (名越整形外科) 名越 充

【はじめに】リバース型人工肩関節置換術 (RTSA) 後に上腕三頭筋長頭腱近位に沿って発生 する異所性骨化 (heterotopic ossification; HO) の報 告が散見されるが、その臨床的意義は依然として不明 である。今回我々は当院におけるHOの発生頻度と臨 床成績について調査した。【対象と方法】2017年1月 から2021年12月までにRTSAを施行し、術後2年以上 経過観察(平均37ヶ月)が可能であった54肩(男性:

24肩、女性:30肩、平均年齢78.1歳)を対象とした。 対象疾患は、腱板断裂性肩関節症51肩、腱板広範囲 断裂2肩、その他1肩であった。検討項目としては、 HOの発生率、形態を調査し、最終経過観察時での臨 床的結果、可動域 (屈曲、外旋、内旋)をHO非発生 群とHO発生群で比較検討した。HOの形態評価は、 Modified Brooker classification of HO of the shoulder を用いた。内旋可動城については、Constantスコアに 基づいて点数化を行い、両群で平均値を比較した。 【結果】HO は19肩 (35.2%、男13肩、女6肩) で発生 し、男性で有意に多かった。HOの形態はgrade 1a:6 肩、grade 1b:7肩、grade 1c:0肩、grade 2:6肩で あった。最終経過観察時での臨床結果(JOAスコア、 UCLAスコア) は、HO非発生群: (78.0点、24.4点)、 HO発生群: (77.8点、24.1点) であり、両群間に有意 差はなかった。最終経過観察時での可動域(屈曲、 外旋、内旋)は、HO非発生群: (127.7°、29.4°、5.9 点)、HO発生群: (128.9°、27.6°、5.2点) であり、 両群間に有意差はなかった。【考察】発生頻度など HOの疫学は依然として明確ではないが、男性におい てHOの発生頻度が高いとの報告がある。本研究にお いて、HOの発生頻度は35.2%であり、過去の文献と同 様に男性において発生頻度が有意に高いという結果が 得られた。報告では、HOの存在が臨床スコアや屈曲 や外旋などの可動域に影響を与える可能性が示唆され ているが、本研究においてはいずれもHO発生群とHO 非発生群の間に有意差はみられなかった。今後は、さ らに多くの症例数を含めた長期の追跡調査が必要であ る。

・第63回日本臨床化学会年次学術集会(東京)2023.10 反応タイムコースの異常によりALTが測定不可と なった症例について

> (日本鋼管福山病院) 井上 悦子

・第20回日本肩の運動機能研究会(東京)2023.10 腱板縫合術術後における早期退院患者の肩関節機能 と再断裂

> (日本鋼管福山病院 リハビリテーション科) 神尾 昌利、三鼓 善久、松井 進 宇野 公裕、蔵内 啓 (日本鋼管福山病院 整形外科)

加藤 久佳、岩崎 祐一、徳田昂太郎 【はじめに】腱板縫合術の術後肩関節機能回復は

手術方法、適切なリハビリテーションが重要である。 リハビリテーションプログラムにおいて術後装具除去 までは基本的に他動運動が主体となるが、合わせて 生活管理も課題となる。今回、我々は装具除去前の早 期退院患者における肩関節可動域および再断裂を調 査したので報告する。【対象と方法】2020年度に腱板 修復術を受けた75歳未満の99名(100肩)を対象に、 装具を装着したまま退院した患者(以下、早期退院) と装具除去後に退院した患者(以下、非早期退院)を 比較した。断裂サイズで装具除去時期が異なっている 為、装具除去時期で2群に分けた合計4群(早期退院 小中群・非早期退院小中群間および早期退院大広群・ 非早期退院大広群間)で比較した。検討項目は、術後 1、2、3ヶ月の他動屈曲可動域、術後2、3ヶ月自動 屈曲可動域、術後6か月時点での再断裂およびコンス タントスコアとした。尚、検討にはt検定を用い有意水 準は5%とした。再断裂の判定はSugaya分類のtype 4 と5を再断裂とした。【結果】他動屈曲平均は1ヶ月 早期退院小中群132°非早期退院小中群137°、2ヶ月 早期退院小中群142°非早期退院小中群142°、3ヶ月 早期退院小中群149° 非早期退院小中群146°、1ヶ月 早期退院大広群134°非早期退院大広群132°、2ヶ月 早期退院大広群135° 非早期退院大広群137°、3ヶ月 早期退院大広群142°非早期退院大広群140°(全て p>0.05) であった。自動屈曲平均は2ヶ月早期退院小 中群122° 非早期退院小中群122°、3ヶ月早期退院小 中群138° 非早期退院小中群132°、2ヶ月早期退院大 広群92° 非早期退院大広群91°、3ヶ月早期退院大広 群122° 非早期退院大広群118° (全てp>0.05) であっ た。術後6か月時点での再断裂については非早期退 院大広群の1件であった。術後6か月コンスタントス コアは早期退院小中群平均69.7非早期退院小中群平 均59.3 (p<0.05)、早期退院大広群平均63.7非早期退 院大広群平均57.5 (p>0.05) であった。【考察】早期 退院患者では肩関節のリハビリテーションが不十分な 可能性があり、患者の日常生活での遵守度も懸念され る。しかし今回の結果で可動域、再断裂には有意な差 は認められず、コンスタントスコアでは非早期退院小 中群に対し早期退院小中群が有意に改善していた。腱 板術後のリハビリテーションにおいて早期退院は機能 回復に悪影響を与えなかったことが示唆された。

・第20回日本肩の運動機能研究会(東京)2023.10 腱板断裂サイズの違いによる肩外転筋力の治療成績 (日本鋼管福山病院 リハビリテーション科) 松井 進、加藤 久佳、神尾 昌利 蔵内 啓、三鼓 善久、字野 公裕 (日本鋼管福山病院 整形外科) 岩崎 祐一、徳田昴太郎

【目的】腱板断裂術後の肩外転筋力改善は基本動 作能力、ADL能力獲得に必須である。損傷範囲が大 きいほど術前の肩外転筋力は低下する。今回我々は、 肩外転筋力回復の特徴を腱板断裂サイズと術後リハ ビリプログラム毎に比較検討した。【対象と方法】対 象は2021年1月から2021年12月の期間に当院で腱板 断裂修復術を施行し1年以上経過観察可能であった 85肩 (男性56肩、女性29肩、平均年齢67.2歳)を対象 とし、当院の腱板修復術後プログラムK-1小中断裂 (K-1) (男性31肩, 女性12肩) K-2大断裂 (K-2) (男性8肩、女性10肩) K-3一次修復可能な広範囲断 裂 (K-3) (男性17肩、女性7肩) に分けた。K-1は 術後2日目から肩他動運動開始、14日目外転枕除去、 35日目で装具完全除去し自動運動開始。K-2は術後 2週目から肩他動運動開始、3週目外転枕除去8週目 で装具完全除去し自動運動開始。K-3は術後3週目 から肩他動運動開始、5週目外転枕除去8週目で装具 完全除去し自動運動開始した。各プログラム群で肩外 転筋力を計測した。体重1Kgあたりの外転筋力を各 群の術前、術後6ヶ月、術後12ヶ月の経時的変化、各 群間で同時期での筋力差を比較検討した。また術後 12ヶ月での再断裂を検証した。統計学検定にはt検定 を用い5%未満を有意差ありとした。【結果】3群(K-1, K-2, K-3) の外転筋力は術前 (0.6±0.4NmKg, 0.5±0.4Nm/Kg, 0.3±0.2Nm/Kg) 術後6ケ月 (0.6 ± 0.3 Nm/Kg, 0.4 ± 0.2 Nm/Kg, 0.5 ± 0.2 Nm/Kg) 術 後12ヶ月 (0.8±0.3Nm/Kg, 0.6±0.2Nm/Kg, 0.6± 0.2Nm/Kg) であった。各群で、K-1は術後6ヶ月から 12ヶ月 (P<0.01)、術前から術後12ヶ月 (P<0.01)。 K-2は術後6ヶ月から術後12ヶ月 (P<0.01)。K-3は 術後6ヶ月から術後12ヶ月 (P<0.05) 、術前から術後 12ヶ月 (P<0.01) で有意に改善した。3 群間の術後筋 力は、K-1とK-2間、及びK-1とK-3間で術後6ヶ 月 (P<0.01)、術後12ヶ月 (P<0.01) に有意差を認め た。再断裂の結果はK-1,0肩(0%).K-2,0肩 (0%). K-3, 1肩(4%)だった。【考察】外転筋力 は術後6ヵ月では3群とも術前より改善しておらず、 術後1年で有意に改善した。しかし、術後12ヶ月では 大断裂以上(K-2, K-3)はK-1より有意に低かっ た、このことから術後6ヵ月までは3群ともリハビリ や活動に注意が必要で大断裂以上群では外転筋力回 復に関し長期に追跡調査する必要がある。また再断裂はK-1,0肩.K-2,0肩.K-3,1肩で全体で1%であったことから、当院での断裂サイズによるリハビリプログラムは有効であると考えられた。

・第20回日本肩の運動機能研究会(東京)2023.10 RTSAにおける術後機能予測ツール(PREDICT+) 導入に向けた試み

> (日本鋼管福山病院 リハビリテーション科) 三鼓 善久、神尾 昌利、蔵内 啓 松井 進

(日本鋼管福山病院 整形外科)

加藤 久佳、岩崎 祐一、徳田昂太郎 【はじめに】本研究は、臨床支援ツールである術 後機能予測ツール (以下PREDICT+) を使用し、リ バース型人工関節置換術 (以下RTSA) 後の患者の 予後予測する能力を検証することを目的とし、術後 の可動域と予測値との相関関係を調査する。【対象 および方法】本研究では、Exachtec社Equinoxe PHX (Exachtec社)を用いてRTSAを施行した18肩の患者 (平均年齢81歳±4.3、男性 2肩、女性 16肩)を 対象とした。方法は、PREDICT+(Exachtec社)ソフ トウェアに術前の患者情報を入力し、予測値を取得し た。期間は2022年3月から2022年11月までにRTSAを 施行し、術後6ヶ月以上経過観察が可能であった患者 を対象とし、可動域 (屈曲、外転、外旋、内旋) の予 測値と実測値を比較検討した。統計学的検討には屈 曲、外転、内旋はPearsonの積率法の相関係数を用い た。また内旋はspearmanの順位相関を用い、P<0.05 を有意差ありとした。【結果】術後6ヶ月の屈曲可動 域予測値102.7° ±10° に対して実測値118.3° ±13° (r=0.59、P<0.01) の相関を認めた。外転可動域予 測値123.4° ±18.2° に対して実測値126.9° ±16.8° (r=0.38、P<0.1) の弱い相関を認めた。外旋可動域 予測値31.2° ±5.3° に対して実測値28.6±4.3° (r=-0.17、P<0.5) と相関が得られなかった。内旋可動域 予測値3.7±0.9に対して実測値4.3±0.7 (r =0.23、 P<0.3) と相関が得られなかった。【考察】本研究は PREDICT+を使用して、RTSA後の患者の可動域の 予測値と実測値の相関関係を調査した。結果は術後 6ヶ月の屈曲において予測値と実測値の間に正の相 関があり、予測値の高さが実測値の高さと関連されて いることが示された。しかし、外転、外旋、内旋にお いては予測値と実測値の相関が低くかった。今回、対 象の内訳が男性2例、女性16例であることと、術後6

か月と短期間であることから研究結果の妥当性を確保するためには、今後はより多様な性別の患者を対象が必要である。また、PREDCT+の基礎データは欧米人を主な対象としていることに関しても考慮する必要がある。特に小柄な日本人女性においては、体格や筋力の違いが影響を与える可能性がある。今後より多くの症例数を含めた長期の追跡調査が必要である。PREDICT+のMachine learningによる予測がより正確になれば、術後リハビリテーションのおける予後予測や計画の立案に役立つと考えられる。

・第85回日本臨床外科学会総会(岡山)2023.11 当院における高齢者トリプルネガティブ乳癌の検討 (日本鋼管福山病院 乳腺外科)

藤井 清香

高齢者のトリプルネガティブ (TN) 乳癌は若年者 と比較し悪性度が低いが、ホルモン受容体陽性乳癌と 比較すると再発率が有意に高いとされている。当院の 高齢者TN乳癌の治療・予後について検討した。2013 年4月から2023年3月に当院で治療を行った70歳以 上の乳癌は82例。非浸潤癌12例を除いた浸潤癌70例 中、TN乳癌は 14例 (20%) であった。年齢の中央値 78.5歳(70-90歳)。リンパ節転移陽性6例。Stage 1: 4例、Stage 2; 5例、Stage 3; 3例、Stage 4; 2例。手 術はPS3の1例以外で施行し、放射線治療は3例で 施行。1例で放射線照射外の皮膚転移を認めるのみ で周所コントロールは良好であった。悪性度が高いと 考えられるKi-67 30%以上の症例は13例であり、当院 では若年者と同等以上に悪性度が高い傾向であった。 Stage 1 は全例で化学療法は行わず、無再発生存期間 の中央値48か月(11-103か月)。Stage 2のうち化学療 法 (EC、毎週PTX) を完遂できなかった1例は30か月 後に乳癌死となったが、他4例は化学療法を完遂し、 無再発生存。Stage 3 では化学療法を完遂できた1例 は24か月無再発生存。化学療法なしの2例は術後5か 月と8か月で乳癌死となった。Stage 4は2例とも急速 に転移巣が増大し、2か月で乳癌死となった。(まと め) 高齢者のTN乳癌では、Stage 1 は化学療法を省略 できる可能性がある。Stage 2以上では化学療法を完 遂できた場合は予後が改善した。全身状態が許せばで きる限り化学療法を行うべきである。

・第33回日本乳癌検診学会学術総会(福岡)2023.11 当院職員におけるCOVID-19前後での乳癌検診受診 動向の比較

(日本鋼管福山病院 乳腺外科) 藤井 清香

【はじめに】当院職員の加入している健保組合で は、乳がん検診は30歳以上を対象として、毎年受診 可能である。2017年度までは検診受診料は有料(500 円)であったが、2018年度からは無料となり、2019年 度は職員検診受診率向上に向けての検討および受診勧 奨を積極的に行い、病院全体で乳癌検診を受診する機 運を高めてきた。2020年春以降C0VID-19が蔓延した ことにより、全国的に検診受診者が減少したことが報 告されている。COVID-19が医療従事者である当院職 員の乳癌検診受診に及ぼした影響を調べた。【結果】 受診率は有料であった2017年度は23%であったが、 無料となった2018年度は32%に上昇していた。受診勧 奨を積極的に行った2019年度は45%まで上昇したが、 COVID-19蔓延後は2020年37%、2021年43%、2022年 36%であり、受診率は低下した。職種別で調べると、 看護師で2019年の受診者は57例あったが、2022年は 32例まで低下していた。看護師以外では受診者数に大 きな変化は認めなかった。当院では当初はCOVID-19 患者の入院を受け入れていなかったが、2021年6月よ りコロナ病床を設置し、患者の入院を受け入れるよう になった。コロナ病床が設置された急性期病棟の看護 師の受診率は、2019年65%、2020年9%、2021年4%、 2022年20%であった。コロナ病床が設置されていない 急性期病棟の看護師の受診率は、2019年19%、2020 年11%、2021年31%、2022年63%であり、同じ急性期 病棟でもCOVID-19関与の有無で受診率が異なってい た。【まとめ】受診勧奨を積極的に行った2019年は受 診率が向上したが、その後はCOVID-19蔓延で当院職 員でも検診受診控えがおこった。2021年は受診勧奨を 積極的に行った2019年の2年後であるため、全体とし ては検診受診率が改善したと考えた。2022年度は感染 第7・8波で職員の罹患が増えたこと、コロナ病床に 関わる看護師の負担が増えたことにより、受診率が低 下したと考える。

・第54回日本看護学会学術集会(神奈川)2023.11 新型コロナウイルス感染症に対応する有熱トリアージ 外来における看護師の心理変化

一複線経路・等至性モデル(TEM)を用いて一 (日本鋼管福山病院)

滝宮 千加 (福山平成大学看護学部看護学科) 田村 美子

看護師がどの様な思いを抱えながら対応し、現在に 至っているか、看護師の心理変化を明らかにし、再度 パンデミックが起こった場合の看護師支援や職場環 境改善の在り方について示唆を得る。【方法】対象 は、202X年4月から202X年4月まで継続して有熱ト リアージ外来を対応している看護師4名。半構成化イ ンタビューを実施後、逐語録を抽出した。修正版グラ ンデッドセオリー・アプローチの分析手順に沿って概 念を生成し分析ワークシートを作成した。その後、複 線径路・等至性モデルを用いて心理変化の実相を示し た。A病院臨床研究審査倫理委員会の承認を得た後、 対象者へ研究の趣旨、個人が限定されないことや研 究参加の自由を口頭と文書で説明し、書面で同意を得 て実施した。【**結果**】新型コロナウイルス感染症に対 応する有熱トリアージ外来における看護師の心理変化 は、10カテゴリー、15の概念から構成された。複線径 路、等至性モデルでは、看護師は<みえないウイルス に対する死への恐怖心と不安: OPP>と<感染症によ る家族や周囲への感染リスクに対する不安と生活への 影響:OPP>や<医療従事者やその家族への風評被 害:SD>を受けながら有熱トリアージ外来を担ってい た。またく病院組織における反映されない現場の声: SD>や<有熱トリアージ外来スタッフのバランス調整 と運用の困難性>と<感染対策のマニュアル運用によ るスタッフ教育と監督>にジレンマを感じていた。治 療薬とワクチンが開発され、ワクチン3回目接種:BFP や、県からの手当支給:SGもあり<看護師としての意 地と使命感:OPP>を再度実感し<ワクチン開発によ る感染症への恐怖心の緩和>を受けて<みんなで団 結:OPP>を知り<感染対策への知識と技術の向上と 将来への希望: EFP>に辿り着いた。【考察】今回の 新型コロナウイルス感染症の流行により、看護師は感 染の恐怖心や死を身近に感じる辛い体験をしていた。 感染症に適した環境や運営に対する不満があり、正し い情報提供が必要であったと考えられる。専門職とし ての自覚や使命感により肯定的な感情をもたらし、困 難を乗り越える力になっていた。今回のパンデミック を通じて、感染についての知識や技術に自信を獲得す る体験となったと考えられる。今後は看護師の支援や 職場環境改善の在り方について検討していく必要があ る。

キーワード:新型コロナウイルス感染症 有熱トリアージ外来 複線経路・等至性モデル (TEM) 心理変化

【目的】コロナ禍での3年間を有熱トリアージ外来 ・第54回日本看護学会学術集会(神奈川)2023.11 護師がどの様な思いを抱えながら対応し、現在に **聴覚障害を有する患者が安心して化学療法を継続でき**っているか、看護師の心理変化を明らかにし、再度 **るための体制構築**

―FAXを用いた緊急時の連絡体制―

(日本鋼管福山病院)

池上知嘉子

【目的】先天性聴覚障害を有する化学療法中の患者 が、時期を逸せず有害事象を連絡し対応できるよう、 連絡体制を構築し看護の質向上を目指す。【方法】聴 覚障害者が受療時に抱える困難を文献検索した後、 患者がアクセスしやすい連絡ツールを検討し、医師へ の連絡体制の確立と関連部署との調整を図る。まず はFAXの活用を第一候補とし、連絡用紙への記入の 困難さや相談すべきかの迷い、病院からの返信時の問 題点に関するインタビューへの協力要請を行った。参 加は自由意思であり、拒否しても不利益は講じないこ と、個人情報の保護に努めることを説明し、同意を得 た。【結果】連絡用紙には有害事象項目ごとに発症日 時や症状の程度についての記入欄を作成し、受診調 整を見据えた内容も併せて記載した。関連職種と議論 し、FAX受信後の流れと、主治医や当直医との連携 についてのマニュアルを整備した後に、患者へは用紙 記入と送信に関する説明を行ない、24時間の対応が可 能である旨を伝え運用を開始した。実際のFAX受信時 には各職種が速やかに連携し、緊急受診により重症化 前に治療が開始できていた。インタビューでは「経過 をみて良いか悩んだが、連絡して良かった。」「返信 も早く、指定時間に行けば診察してもらえる安心感が あった。 | との意見があった。 【考察】 聴覚障害者は 医療者の時間を使うことを憂慮し我慢するのではない かと予測し、治療開始前から十分な時間を確保し、有 害事象に対するセルフケア指導とともに緊急時の連絡 方法について話し合った。早期から人間関係の構築に 努め、緊急時には患者を知る看護師が窓口となり対応 することや、診察時の同席を約束したことも安心感に 繋がったと考える。連絡用紙の作成にあたっては、否 定形の疑問文の理解が困難であるとの先行研究結果 から、婉曲的な表現を避け、さらに体調不良を考慮し 送受信回数を減らす工夫も行った。実際、有害事象の 発現を即座に把握し、スムーズな治療の開始で早期回 復に繋げられたことは、FAXが緊急時のアクセスツー ルとして有用であり、安心して安全に治療継続が可能 となることを示唆した。聴覚障害者にはメールに馴染 めない方もいる中で、緊急時にFAXで対応する施設は 19%にとどまっているとの報告もあり、聴覚障害を有

する患者への対応が十分に行われていない実情では あるが、今後も障害を有する患者の受療困難さの軽減 を念頭に置いた看護を提供したい。

チーム医療、24時間対応

・International Stroke Conference 2020 (米国カリフォルニア州) 2020.2 Unilateral spatial neglect as an independent prognostic factor for poor FIM efficiency in patients with mild to moderate ischemic stroke of acute ischemic stroke

(大田記念病院)

Shimomura R

Nishigaki M

Himeno T

Terasawa Y

Sato K

Nakamichi A

Itava T

Kohriyama T

・ESO-WSO Conference 2020 (イタリア (Web)) 2020.11 Cerebral microbleeds are the risk factor for early stroke recurrence after small vessel disease

(大田記念病院)

Terasawa Y

Shimomura R

Nakamichi A

Sato K

Himeno T

Takamatsu K

Shimoe Y

Kohrivama T

· 第29回定位放射線治療学会(Web) 2020.7

三叉神経痛発症後50年で類上皮腫がガンマナイフ 治療で改善した一例

(大田記念病院)

中崎 清之

·第61回日本神経学会学術大会(岡山) 2020.8 Microbleedsはラクナ梗塞の早期再発の危険因子で ある

(大田記念病院)

寺澤 由佳、姫野 隆洋、下村 恰 佐藤 恒太、中道 淳仁、下江 曹 高松 和弘、郡山 達男

キーワード:聴覚障害、コミュニケーション、FAX、 ・第61回日本神経学会学術大会 (岡山) 2020.8 後方循環系の血行再建におけるサポートガイディン グカテーテルとPenumbra ACEの有用性

(大田記念病院)

姫野 隆洋、下村 怜、佐藤 恒太 中道 淳仁、大田 慎三

·第45回日本脳卒中学会学術集会(神奈川) 2020.8 超高齢者の心原性脳塞栓症に対する急性期治療の現状 とその予後に関連する因子の検討

(大田記念病院)

佐藤 恒太、中道 淳仁、下村 怜 姫野 隆洋、寺澤 由佳、高松 和弘 豊、郡山 下江 達男

·第45回日本脳卒中学会学術集会(神奈川) 2020.8 急性期脳梗塞における内頚動脈剥離術についての検討 (大田記念病院)

> 寺澤 由佳、姫野 隆洋、下村 怜 恒太、中道 淳仁、下江 曹 佐藤 高松 和弘、郡山 達男、大田 慎三

·第45回日本脳卒中学会学術集会(神奈川) 2020.8 心原性脳塞栓症発症後の臨床転帰予測スコア

(大田記念病院)

怜、寺澤 由佳、姫野 下村 隆洋 恒太、中道 淳仁、下江 佐藤 豊 高松 和弘、郡山 達男

·第45回日本脳卒中学会学術集会(神奈川) 2020.8 後方循環系の急性期再灌流療法の戦略

(大田記念病院)

姫野 隆洋、下村 怜、佐藤 恒太 中道 淳仁、大田 慎三

·第45回日本脳卒中学会学術集会(神奈川) 2020.8 当院における海綿状血管腫の特徴

(大田記念病院)

中道 淳仁、寺澤 由佳、下村 怜 姫野 降洋、佐藤 恒太、下江 豊 高松 和弘、郡山 達男

・第7回日本心血管脳卒中学会学術集会(神奈川)2020.8 ・第35回日本脊髄外科学会(神奈川)2020.10 予防の有用性

(大田記念病院)

宮本 欣倫、高畠 周、大田 知子 寺澤 由佳、姫野 隆洋、下村 怜 佐藤 恒太、中道 淳仁、郡山 達男 安田廣太郎

·日本脳神経外科学会 第79回学術集会 (岡山) 2020.10 の非劣性 椎間関節および項靭帯を温存した頚椎椎弓切除術の 古典的片開き式頚椎椎弓形成術と比較した非劣性 -頸椎椎弓切除術の再考-

(大田記念病院)

· 日本脳神経外科学会 第79回学術集会 (岡山) 2020.10 C1/2レベルでの硬膜欠損による脳脊髄液漏出症に 対する外科治療の経験

(大田記念病院)

·日本脳神経外科学会 第79回学術集会 (岡山) 2020.10 開頭術後良性髄膜腫へのガンマナイフ治療後の再発 の評価

(大田記念病院)

宇野 昌明

・第35回日本脊髄外科学会(神奈川)2020.10 頚髄損傷後に自律神経障害としてアルコール性失神 を繰り返した1例

(大田記念病院)

山下 勝弘、浦崎永一郎

・第35回日本脊髄外科学会(神奈川) 2020.10 椎間板内コンドリアーゼ注入療法の検討

(大田記念病院)

山本 淳考

脳梗塞患者の冠動脈疾患発症リスク評価を用いた二次 MRI ADC値を用いた脊髄梗塞後の神経学的予後改善 の予測

(大田記念病院)

北川 雄大、大隣 辰哉、西原 伸治 大田 泰正

·第35回日本脊髄外科学会(神奈川) 2020.10 古典的椎弓形成と比較した椎間関節・項靭帯温存椎弓切除

(大田記念病院)

大隣 辰哉、北川 雄大、西原 伸治 大田 泰正、小山 素麿

大隣 辰哉、北川 雄大、野口 祥平 ·第33回放射線腫瘍学会学術集会(Web) 2020.10 西原 伸治、大田 泰正、小山 素麿 RPA 分類class 3の脳転移に対するガンマナイフ治療後 の神経機能の評価

(大田記念病院)

中崎 清之

·第36回日本脳神経血管内治療学会学術総会(京都)2020.11 大隣 辰哉、北川 雄大、野口 祥平 横-S状静脈洞部硬膜動静脈瘻に対して中硬膜動脈から 西原 伸治、大田 泰正、小山 素麿 ONYXで経動脈的塞栓した際に後大脳動脈分枝閉塞を 来し脳梗塞を合併した1例

(大田記念病院)

姫野 隆洋、中道 淳仁、佐藤 恒太 下村 怜、大田 慎三

中崎 清之、原慶 次郎、西垣 昌和 ·第36回日本脳神経血管内治療学会学術総会(京都) 2020.11 発症時刻不明脳梗塞に対するhvbrid治療

(大田記念病院)

下村 怜、姫野 隆洋、寺澤 由佳 佐藤 恒太、井上 智之、郡山 達男 大田 慎三

藤岡 裕士、大隣 辰哉、林 大輔 ・第61回日本肺癌学会学術集会(岡山)2020.11 肺癌脳転移へのガンマナイフ治療の1年後の新病変出現率 の変化の検討

(大田記念病院)

中崎 清之

野口 祥平、大隣 辰哉、西原 伸治 ·第46回日本脳卒中学会学術総会(福岡) 2021.5 急性期内頚動脈起始部閉塞に対して緊急ステント留置術 を行った患者の特徴および治療成績

(大田記念病院)

姫野 隆洋、下村 怜、佐藤 恒太 野口 祥平、郡 隆輔、大田 慎三

·第46回日本脳卒中学会学術総会(福岡)2021.5 COVID-19流行が及ぼした一次脳卒中センターにおける ・第62回日本神経学会学術集会 (京都) 2021.5 脳卒中診療への影響

(大田記念病院)

佐藤 恒太、井上 智之、下村 怜 姫野 隆洋、寺澤 由佳、高松 和弘 下江 豊、郡山 達男

・第46回日本脳卒中学会学術総会(福岡)2021.5 ・第62回日本神経学会学術集会(京都)2021.5 経口抗凝固薬内服中に脳出血を発症した患者の臨床特徴 (大田記念病院)

> 下村 怜、寺澤 由佳、姫野 隆洋 佐藤 恒太、井上 智之、高松 和弘 豊、郡山 達男 下江

·第46回日本脳卒中学会学術総会(福岡) 2021.5 急性期発症時刻不明脳梗塞に対するrt-PA治療の治療 · 第36回日本脊髄外科学会(京都)2021.6 成績

(大田記念病院)

井上 智之、姫野 隆洋、高松 和弘 下江 豊、郡山 達男

・第46回日本脳卒中学会学術総会(福岡)2021.5 ・第36回日本脊髄外科学会(京都)2021.6 因子の検討

(大田記念病院)

中村 千恵、寺澤 由佳、福嶋 朋子 安田廣太郎

·第62回日本神経学会学術集会(京都)2021.5 90歳以上の超高齢者の脳梗塞に対する血管内治療 の成績

(大田記念病院)

姫野 降洋、下村 怜、佐藤 恒太 井上 智之、野口 祥平、郡 大田 慎三

·第62回日本神経学会学術集会(京都)2021.5 超高齢心原性脳塞栓症の治療の現状と血管内治療を 含めた転帰に関連する因子の検討

(大田記念病院)

佐藤 恒太、井上 智之、下村 恰 姫野 隆洋、寺澤 由佳、高松 和弘 豊、郡山 達男 下江

Branch atheromatous diseaseの転帰の検討

(大田記念病院)

寺澤 由佳、姫野 隆洋、下村 怜 佐藤 恒太、井上 智之、高松 和弘 下江 豊、郡山 達男

脳梗塞を契機に好酸球性多発血管炎性肉芽腫症(EGPA) と診断した2例

(大田記念病院)

下村 怜、寺澤 由佳、姫野 隆洋 佐藤 恒太、井上 智之、高松 和弘 下江 豊、郡山 達男

腰椎変性辷り症または変形懸念症例に対する発展型 動的制動術の成績

(大田記念病院)

大隣 辰哉、北川 雄大、野口 祥平 西原 伸治、大田 泰正、小山 素麿

塞栓源不明塞栓症の潜在性心房細動の検出に有用な 脳脊髄液減少症に対する直達手術: DuraGenを用いた 硬膜形成術

(大田記念病院)

北川 雄大、大隣 辰哉、山本 淳考

·第36回日本脊髄外科学会(京都)2021.6 椎間板内コンドリアーゼ注入療法の実際

(大田記念病院)

野口 祥平、大隣 辰哉、西原 伸治 北川 雄大、山本 淳考

隆輔 ・第58回日本リハビリテーション医学会学術集会(京都) 2021.6 急性期脳血管障害に対するThe Mann Assessment of Swallowing Ability(MASA)を用いた嚥下障害の初期評価

(大田記念病院)

浅海 早紀、板野 智美、近本 哲士 松浦 大輔

・第30回定位放射線治療学会(Web) 2021.6 ・第37回日本脳神経血管内治療学会学術総会(福岡) 2021.11 RPA class 3の症候性脳転移に対するガンマナイフ 急性期脳血管内血行再建術の閉塞機序別実効性 治療後の薬物治療の意義の評価

(大田記念病院)

中崎 清之、板谷 崇央

·第35回日本神経救急学会学術集会(東京)2021.8 救急隊向けアプリケーションへの病院前スコア搭載 による迅速な脳卒中診療の可能性

(大田記念病院)

寺澤 由佳

・第39回日本神経治療学会学術集会(三重)2021.10 Fingolimodの減量投与中に合併したCryptococcus neoformansによる髄膜炎の一例

(大田記念病院)

佐藤 恒太、高松 和弘、佐藤 達哉 久保 智司、寺澤 由佳、姫野 隆洋 下江 豊、郡山 達男

(大田記念病院)

宮嵜 健史、郡 隆輔、宮崎 裕子 圭祐、中崎 清之、佐藤 倫由 奥 大田 慎三

・日本脳神経外科学会 第80回学術集会(神奈川)2021.10 ・第47回日本脳卒中学会学術集会(大阪)2022.3 (大田記念病院)

> 鳥居 里奈、大隣 辰哉、西原 伸治 大田 泰正、山本 淳考

·日本脳神経外科学会 第80回学術集会(神奈川) 2021.10 腰椎椎間孔狭窄および外側型ヘルニアに対する顕微 鏡下拡張椎間孔拡大術

(大田記念病院)

大隣 辰哉、鳥居 里奈、西原 伸治 大田 泰正、小山 素麿

・日本脳神経外科学会 第80回学術集会(神奈川) 2021.10 11個以上の転移性脳腫瘍例とJLGK0901 study適応例の MMSE検査によるガンマナイフ治療後の認知機能の比較

(大田記念病院)

中崎 清之

-心原性とアテローム硬化性との比較-

(大田記念病院)

宮嵜 健史、姫野 隆洋、郡 降輔 宮崎 裕子、井上 智之、佐藤 恒太 寺澤 由佳、福嶋 朋子、大田 慎三

·第34回放射線腫瘍学会学術集会(Web) 2021.11 前庭神経鞘腫のガンマナイフ治療後に対する聴力維持 のためのステロイドの使用経験

(大田記念病院)

中崎 清之

·第62回日本肺癌学会学術集会(神奈川)2021.11 脳転移へのガンマナイフ治療後5年以上生存例の ADLと有害事象の評価

(大田記念病院)

中崎 清之

・日本脳神経外科学会 第80回学術集会(神奈川)2021.10 ・第19回日本ガンマナイフ学会学術総会(鹿児島)2022.1 90歳以上の超高齢者に対するCEAの治療成績の検討 開頭手術後の孤発性髄膜腫に対するガンマナイフ治 療後の画像上の再発の評価

(大田記念病院)

中崎 清之、原慶次郎、西垣 昌和 宇野 昌明

経皮的椎間板内コンドリアーゼ注入療法の早期治療成績 ELVOスクリーンを使用した脳卒中搬送時間短縮の 取り組み

(大田記念病院)

寺澤 由佳、姫野 隆洋、佐藤 恒太 井上 智之、久保 智司、佐藤 達哉 下江 豊、高松 和弘、大田 泰正 郡山 達男

·第47回日本脳卒中学会学術集会(大阪)2022.3 SGLT2阻害薬服用中に脳梗塞を発症した患者にお ける転帰の検討

(大田記念病院)

佐藤 達哉、寺澤 由佳、姫野 隆洋 佐藤 恒太、井上 智之、久保 智司 下江 豊、高松 和弘、大田 泰正 郡山 達男

·第63回日本神経学会学術大会(東京)2022.5 症状および治療成績の検討

(大田記念病院)

姫野 隆洋、佐藤 恒太、井上 智之 隆輔、宮嵜 健史、大田 慎三

·第63回日本神経学会学術大会(東京)2022.5 ·第31回定位放射線治療学会(東京)2022.5 脳梗塞 1 年後の無症状性再発病変の検討

(大田記念病院)

寺澤 由佳、姫野 降洋、佐藤 恒太 佐藤 達哉、井上 智之、久保 智司

·第63回日本神経学会学術大会(東京)2022.5 神経筋エコーを学ぶ ~変性疾患・筋疾患を診断する~ (大田記念病院) 寺澤 由佳

・第63回日本神経学会学術大会(東京)2022.5 集中的に発症したギラン・バレー症候群13例の検討 (大田記念病院)

> 久保 智司、寺澤 由佳、姫野 降洋 佐藤 恒太、井上 智之、佐藤 達哉 下江 豊、高松 和弘、郡山 達男

·第63回日本神経学会学術大会(東京)2022.5 Successive change in MRI signs of early-stage multiple system atrophy cerebellar type

(大田記念病院)

Sato T

Sato K

Sato K

Inoue T

Kubo S

Himeno T

Terasawa Y

Takahashi K

Takamatsu K

Shimoe Y

Kobayashi H

Tanaka A

Kohriyama T

・第63回日本神経学会学術大会(東京)2022.5 血管内治療を行った頭蓋内硬膜動静脈瘻の患者の初期 民間病院における地域ぐるみでの難病診療連携のため の多職種専門チームの取り組み

(大田記念病院)

佐藤 恒太、村山 裕美、長谷川里香 北井真太郎、佐藤 達哉、郡山 達男

開頭後良性髄膜腫への定位照射の局所制御の評価 (大田記念病院)

中崎 清之

高松 和弘、下江 豊、郡山 達男 ·第37回日本脊髄外科学会(和歌山)2022.6 発展型動的制動術による放射線学的隣接椎間障害の 抑制効果

(大田記念病院)

大隣 辰哉、室谷 遊、西原 伸治 大田 泰正、小山 素麿

・第37回日本脊髄外科学会(和歌山)2022.6 日常診療における治療経験から痛感した骨粗鬆症治療 の重要性

> (大田記念病院) 大隣 辰哉

·第37回日本脊髄外科学会(和歌山)2022.6 2種類の頚椎人工椎間板置換術後の早期臨床的治療 効果と画像所見

(大田記念病院)

室谷 遊、大隣 辰哉、西原 伸治 大田 泰正

·第37回日本脊髄外科学会(和歌山) 2022.6 Arachnoid webの1例を術中エコー動画・術中所見 とともに報告する

(大田記念病院)

鳥居 里奈、大隣 辰哉、西原 伸治 大田 泰正、山本 淳考

·第41回日本脳神経超音波学会総会(東京) 2022.6 心原性脳塞栓症患者における左心耳血栓の陽性率の検討 (大田記念病院)

> 寺澤 由佳、姫野 隆洋、佐藤 恒太 井上 智之、久保 智司、佐藤 達哉 豊、高松 和弘、郡山 達男 下江

クリニカルパスの有用性

(大田記念病院)

佐藤 恒太、寺島 恭子、藤江 良典 痢 圭祐

· 日本脳神経外科学会 第81回学術集会(神奈川) 2022.9 一過性増大及びステロイドの関係調査

(大田記念病院)

中崎 清之

·日本脳神経外科学会 第81回学術集会(神奈川) 2022.9 アテローム血栓性主幹動脈閉塞に対するtPA 非併用 急性期血管内血行再建術の治療成績

(大田記念病院)

宮嵜 健史、姫野 隆洋、郡 隆輔 宮崎 裕子、井上 智之、佐藤 恒太 佐藤 達哉、福嶋 朋子、大田 慎三

・日本脳神経外科学会 第81回学術集会(神奈川) 2022.9 ・第63回日本肺癌学会学術集会(福岡) 2022.12 と投与部位の検討

(大田記念病院)

大隣 辰哉、篠原 誼、西原 伸治 大田 泰正、小山 素麿

解離部より起始する前脊髄動脈により近位側閉塞を 選択したが対照的な経過を辿った出血発症椎骨動脈 解離性動脈瘤の2症例

(大田記念病院)

宮崎 裕子、宮嵜 健史、郡 降輔 佐藤 倫由、大田 慎三

機械的血栓回収術全盛期における中大脳動脈M2以遠閉塞 として有用か に対するウロキナーゼ局所動注療法の再考

(大田記念病院)

宮崎 裕子、宮嵜 健史、郡 降輔 佐藤 達哉、井上 智之、佐藤 恒太 姫野 降洋、大田 慎三

·第37回日本環境感染学会総会(神奈川)2022.6 ·第38回日本脳神経血管内治療学会学術総会(大阪)2022.11 脳卒中急性期病院における新型コロナウイルス感染症 機械的血栓回収療法標的血管に脳動脈瘤を合併した 症例の検討

(大田記念病院)

宮嵜 健史、姫野 降洋、郡 降輔 宮崎 裕子、井上 智之、佐藤 恒太 佐藤 達哉、福嶋 朋子、大田 慎三

- 前庭神経鞘腫に対するガンマナイフ治療後の聴力と ・第6回日本リハビリテーション医学会秋期学術集会(岡山) 2022.11 脳卒中後の初回嚥下評価と経口摂取の予後
 - -The Mann Assessment of Swallowing Abilityを用いた検討-(大田記念病院)

松浦 大輔、近本 哲士、三上 幸夫 川本 定紀、矢守 茂

·第35回放射線腫瘍学会学術集会(広島)2022.11 治療時期の観点でのガンマナイフ治療での局所制御 の評価

(大田記念病院)

中崎 清之

経皮的椎間板内コンドリアーゼ注入療法の治療成績 肺癌脳転移へのガンマナイフ治療後の局所制御の最近 の傾向

(大田記念病院)

中崎 清之

·第48回日本脳卒中学会学術集会(神奈川) 2023.3 ・日本脳神経外科学会 第81回学術集会(神奈川) 2022.9 **脳梗塞1年後の無症候性再発病変およびその後の再** 発の検討

(大田記念病院)

寺澤 由佳、姫野 隆洋、佐藤 恒太 佐藤 達哉、井上 智之、久保 智司 郡山 達男

·第48回日本脳卒中学会学術集会(神奈川) 2023.3 ・第38回日本脳神経血管内治療学会学術総会(大阪)2022.11 **CVHRs解析は睡眠時無呼吸症候群のスクリーニング**

(大田記念病院)

高橋由美子、的場 稔和、横山みちる 畑野 展子

·第48回日本脳卒中学会学術集会(神奈川) 2023.3 卵円孔開存症を有する脳梗塞の再発に関与する因子 についての検討

(大田記念病院)

佐藤 恒太、佐藤 達哉、井上 智之 久保 智司、庵谷 紘美、郡山 達男

・第48回日本脳卒中学会学術集会(神奈川) 2023.3 脳卒中ノートを用いた退院指導における退院後の患者 行動変容の実態

(大田記念病院)

大塚 香織、藤井 美穂、川原 学

・第48回日本脳卒中学会学術集会(神奈川)2023.3 上肢単麻痺で発症した軽症脳梗寒患者に対するrt-PA 投与の検討

(大田記念病院)

佐藤 恒太、佐藤 達哉、井上 智之

・第48回日本脳卒中学会学術集会(神奈川)2023.3 急性期病院における脳卒中患者に対する自動車運転 支援

(大田記念病院)

宮川 板野 智美、田中 優美、松浦 大輔

・第64回日本神経学会学術大会(千葉)2023.5 脳血管障害で入院しCOVID-19陽性と診断された症例 の検討

(大田記念病院)

久保 智司、井上 智之、佐藤 達哉 の2例 佐藤 恒太、姫野 隆洋、寺澤 由佳 高松 和弘、片岡 敏、下江 豊 郡山 達男

・第64回日本神経学会学術大会(千葉)2023.5 コロナ禍での筋萎縮性側索硬化症診療への影響と多職種 イクロバブルテストの比較検討 連携の効果

(大田記念病院)

佐藤 恒太、佐藤 達哉、久保 智司 姫野 隆洋、岡本美由紀、斎藤 明子 高橋 幸治、片岡 敏、寺澤 由佳 下江 豊、郡山 達男

・第64回日本神経学会学術大会(千葉)2023.5 樹下 明典、寺澤 由佳、姫野 隆洋 ラクナ梗塞後の脳卒中早期再発に関する因子の検討 (大田記念病院)

> 寺澤 由佳、佐藤 達哉、井上 智之 久保 智司、佐藤 恒太、姫野 隆洋 高松 和弘、下江 豊、郡山 達男

·第64回日本神経学会学術大会(千葉)2023.5 てんかん発作時のarterial spin labeling(ASL)画像について 非重積例を含む検討

(大田記念病院)

佐藤 達哉、井上 智之、久保 智司 佐藤 恒太、姫野 降洋、寺澤 由佳 高松 和弘、下江 豊、郡山 達男

庵谷 紘美、寺澤 由佳、姫野 隆洋 ·第65回日本老年医学会学術集会(神奈川) 2023.6 高度の嚥下障害を呈する高齢パーキンソン病患者に 久保 智司、樹下 明典、郡山 達男 対するレボドパカルビドパ経腸療法の経験

(大田記念病院)

佐藤 恒太、岡本美由紀、久保 智司 高松 和弘、下江 豊、郡山 達男

·第42回日本脳神経超音波学会総会(東京) 2023.6 拓、寺澤 由佳、高橋 渚 後方循環系脳梗塞患者における超音波検査での椎骨動脈 起始部狭窄の検出について

(大田記念病院)

桂藤 亜衣、寺澤 由佳、畑野 展子

·第42回日本脳神経超音波学会総会(東京)2023.6 神経超音波により早期発見に至った脊髄ダンベル腫瘍

(大田記念病院)

寺澤 由佳、桂藤 亜衣、大隣 辰哉

·第42回日本脳神経超音波学会総会(東京)2023.6 経胸壁心臓超音波検査と経食道心臓超音波検査のマ

(大田記念病院)

庵谷 紘美、寺澤 由佳、井上 智之 佐藤 達哉、久保 智司、佐藤 恒太 姫野 隆洋、高松 和弘、下江 郡山 達男

・第60回日本リハビリテーション医学会学術集会(福岡)2023.6 脳卒中急性期の嚥下障害患者における肺炎発症に関連 する因子の検討

(大田記念病院)

松浦 大輔

·第68回日本透析医学会学術集会·総会(兵庫)2023.6 透析関連モニタリング技術の最前線 透析シャント音 の音響分析による血管狭窄の判別方法

(大田記念病院)

田頭 瑞萌、中川 隆文

・第16回全国看護管理・教育・地域ケアシステム学会学術大会(Web) 2023.7 A病院における身体拘束の実態調査と今後の削減への の治療経験 取り組み

(大田記念病院)

鈴木加奈子、吉野 亜希、宮崎 由佳 寺山 朋美、長谷川理香、後藤満津子

·日本外科代謝栄養学会第60回学術集会(東京)2023.7 よりメッシュ除去することなく治癒した鼠径ヘルニア 術後感染の1例

(大田記念病院)

中川 浩一

・第33回日本臨床工学会(広島) 2023.7 難病拠点病院における災害時の在宅人工呼吸器装着 患者対応の課題

(大田記念病院)

千恵、塩見 基、佐藤 恒太 平山 降浩

·第38回日本環境感染学会総会·学術集会(神奈川) 2023.7 口ペネム限定出荷時の抗菌薬適正使用支援強化

(大田記念病院)

寺島 恭子、佐藤 達哉、佐藤 恒太

·第38回日本環境感染学会総会·学術集会(神奈川) 2023.7 新型コロナウイルス院内クラスター時における病原体 検査の感度および隔離期間延長に関連する因子の検討 ・日本脳神経外科学会第82回学術集会(神奈川) 2023.10 (大田記念病院)

> 佐藤 恒太、佐藤 達哉、江村さおり 寺島 恭子、藤江 良典、平井 満子

・第17回パーキンソン病・運動障害疾患コングレス(大阪) 2023.7 レボドパ併用療法としてのモノアミン酸化酵素(MAOB) 阻害薬の使用実態調査

(大田記念病院)

佐藤 恒太、久保 智司、藤田 和久 岡本美由紀、斎藤 明子、高橋 幸治 高松 和弘、寺澤 由佳、下江 郡山 達男

・第56回日本てんかん学会学術集会(東京)2023.10 当院におけるてんかんに対するペランパネル単剤療法

(大田記念病院)

片桐 匡弥、宮嵜 健史、佐藤 達哉 隆輔、佐藤 倫由、高松 和弘 下江 豊、郡山 達男、小林 勝弘 大田 慎三

免疫賦活栄養療法とバンコマイシン濃厚液創内注入に · 日本脳神経外科学会第82回学術集会(神奈川) 2023.10 急性期脳血管内血行再建術を施行したアテローム血栓 性脳動脈閉塞におけるIV rt-PA後24hr以内抗血栓療法 の影響

(大田記念病院)

宮嵜 健史、姫野 隆洋、郡 隆輔 井上 智之、佐藤 恒太、佐藤 達哉 福嶋 朋子、大田 慎三

· 日本脳神経外科学会第82回学術集会(神奈川) 2023.10 10年間冠動脈疾患発症リスクに基づく介入が脳梗塞患者 に及ぼす影響

(大田記念病院)

宮本 欣倫

·日本脳神経外科学会第82回学術集会(神奈川) 2023.10 藤江 良典、平井 満子、江村さおり nivolumab薬価収載前後でのガンマナイフ治療後の 肺癌新規脳転移の評価

(大田記念病院)

中崎 清之

脳脊髄液漏出症の治療後における脊髄腹側硬膜外髄液貯留 の変化

(大田記念病院)

康、大隣 辰哉、酒井 恭平 武田 姫野 降洋、山本 淳考

·第64回全日本病院学会in広島(広島)2023.10 動画を利用した院内スタッフ教育の取り組みと課題 (大田記念病院)

寺澤 由佳、福嶋 朋子

·第64回全日本病院学会in広島(広島)2023.10 WOCナース介入後のパークベンチ体位における褥瘡 対策の検討

(大田記念病院)

·第64回全日本病院学会in広島(広島)2023.10 脳卒中急性期病棟におけるカテーテル関連尿路感染 サーベイランスの取り組み

~COVID-19クラスターとの関連~

(大田記念病院)

牧 芳恵、寺島 恭子、大田 章子

·第64回全日本病院学会in広島(広島)2023.10 当院における看護師と看護補助者との協働推進に向けた 取り組み

(大田記念病院)

栗原 真帆、豊田ひとみ、寺山 朋美 としての取り組みと課題 長谷川理香、田中美保子、永井 則子

·第64回全日本病院学会in広島(広島)2023.10 パーキンソン病患者の評価スケールを使用した多職 種連携

(大田記念病院)

小林 美保、長谷川理香、豊田ひとみ 小林 里奈

·第64回全日本病院学会in広島(広島)2023.10 中小病院での特定行為研修センター設立の意義 (大田記念病院)

大田 章子、大田 泰正

·第64回全日本病院学会in広島(広島)2023.10 看護補助者による環境ラウンドの取り組みとその効果 (大田記念病院)

> 仁児 弘子、山根 美咲、岩田 雅子 田口 知絵、赤瀬 幸子、新居あかね 笠原充希子、寺島 恭子、栗原 真帆

長谷川理香

·第64回全日本病院学会in広島(広島)2023.10 コロナ禍における「顔の見える地域連携」の試み (大田記念病院)

> 長谷川理香、藤井 美穂、林 ひろみ 津隈 洋子、宍戸 真紀、小亀 裕子

·第64回全日本病院学会in広島(広島)2023.10 井上 奈未、後藤 美紀、栗原 真帆 睡眠時無呼吸症候群のスクリーニングにホルター心電 図解析は有用か

(大田記念病院)

的場 稔和、高橋由美子、横山みちる 畑野 展子

·第64回全日本病院学会in広島(広島)2023.10 木村 紘規、村上 瑞稀、最知 美郷 検査容器の問い合わせを減らすために

(大田記念病院)

岡本 雅子、桂藤 亜衣、柳 静香 一條 果穂、延平 悠、畑野 展子

·第64回全日本病院学会in広島(広島)2023.10 神経難病患者に対する多職種連携における臨床工学技士

(大田記念病院)

楊 千恵、佐藤 恒太、平山 隆浩 舛本 忠幸

·第64回全日本病院学会in広島(広島)2023.10 多職種を巻き込んだ病床管理チームの取り組み (大田記念病院)

> 藤井 美穂、長谷川理香、木村 紘規 迫 広子、豊田ひとみ、鈴木加奈子 高田 明子、村上 祐介、林 ひろみ 神本 綾乃、寺澤 由佳

田中美保子、郡山 達男、下江 豊 ·第64回全日本病院学会in広島(広島) 2023.10 神経難病におけるスムーズな多職種連携のための情報 共有ツールの作成と運用

(大田記念病院)

林 ひろみ、岡田 清可、伊藤 郁恵 神本 綾乃、前田 莉沙、小亀 裕子 佐藤 恒太

・第64回全日本病院学会in広島(広島) 2023.10 ・第64回全日本病院学会in広島(広島) 2023.10 状況と自宅退院との関連

(大田記念病院)

小見山知遥、田口 誠子、佐藤弓益子 門田 育子、高見香央里、新宅あさき 小田中叶子

・第64回全日本病院学会in広島(広島)2023.10 ・第64回全日本病院学会in広島(広島)2023.10 リハビリテーションスタッフに対する、N95マスク 祥和会の"脱・昭和プロジェクト" の簡易フィッティングテストとCOVID-19発症との ~電子化に向けた財務・経理部門の取り組み~ 関連調査

(大田記念病院)

埜下 哲央、江草 実咲、村上 祐介 寺島 恭子、佐藤 恒太

- ・第64回全日本病院学会in広島(広島)2023.10 神経難病に対するHALを用いたリハビリテーション
 - ~遺伝性封入体筋炎の起立動作に着目して~

(大田記念病院)

北井真太郎、熊原 啓、大枝 直矢 ないものは作る!

·第64回全日本病院学会in広島(広島)2023.10 人工呼吸器管理下のコミュニケーションについて支援 を行った筋萎縮性側索硬化症の一症例

(大田記念病院)

亀津 優衣、佐藤 恒太、三縞明希子

·第64回全日本病院学会in広島(広島) 2023.10 心不全合併脳卒中患者に向けた包括的心臓リハビリテーション · 第64回全日本病院学会in広島 (広島) 2023.10 の導入の試み

(大田記念病院)

元廣 祐介、小林 実希、佐藤 幹久 安田 帆風、住吉 洋志、宮本 欣倫

長下肢装具作成までの回復期在院期間の二施設間比較、脳梗塞のパス 及び急性期病院での臨床関連指標

(大田記念病院)

大枝 直矢、村上 祐介、甲斐康之朗 坂本 隆徳、島谷 康司、山本 征孝 松浦 大輔

急性期脳梗塞患者における入院後の早期経栄養開始 予定全麻手術患者に対する歯科介入率の向上を目指 して

(大田記念病院)

大島 誉子、吉田 泰子、中濵加奈子 佐々木和希、佐能 紗希、猪原 園井 教裕、坪井 綾香、松永 一幸

(大田記念病院)

横山晋一郎、金口 恵

·第64回全日本病院学会in広島(広島)2023.10 院内の議事録作成をAIで簡単に! ~チャットGPTを用いた業務改革~

(大田記念病院)

横山晋一郎、大田 章子、小亀 裕子

- ·第64回全日本病院学会in広島(広島)2023.10
- 埜下 哲央、村上 祐介、佐藤 恒太 ~コロナ禍での異業種連携による感染防護具の制作~ (大田記念病院)

髙橋 重智、小亀 裕子

·第64回全日本病院学会in広島(広島)2023.10 広報業務の省人化・効率化に向けたAIツールの活用 (大田記念病院)

小亀 裕子、大田 章子、横山晋一郎

脳卒中患者の入院時キーパーソンの現状と将来予測 (大田記念病院)

> 佐藤 京子、藤岡 愛華、林 ひろみ 松岡 弘晃、大田 章子、郡山 達男

・第64回全日本病院学会in広島(広島)2023.10 ・第23回日本クリニカルパス学会学術集会(埼玉)2023.10

(大田記念病院)

中田 香奈、木村 紘規、岡崎 啓二 佐藤 達哉、中崎 清之

·第64回日本肺癌学会学術集会(千葉)2023.11 nivolumab薬価収載前後でのガンマナイフ治療後の

肺腺癌新規脳転移の比較

(大田記念病院)

中崎 清之

神経難病に対するHybrid Assistive Limbリハビリテー ションの経験 遺伝性封入体筋炎の2症例について (大田記念病院)

北井真太郎、村上 祐介、佐藤 恒太

·第41回日本神経治療学会学術集会(東京)2023.11 抗発作薬としてのアセタゾラミド内服時の注意点: 炭酸飲料に限定した味覚異常とその発現機構

(大田記念病院)

佐藤 達哉、河村 祐貴、小林 勝哉 池田 昭夫、髙橋 良輔

・第11回日本難病医療ネットワーク学会学術集会 (愛知) 2023.11 神経難病診療の多職種連携のための情報共有ツール の作成の試み

(大田記念病院)

神本 綾乃、藤井 美穂、林 ひろみ 三縞明希子、小亀 裕子、小林 寛征 佐藤 恒太

・第39回日本脳神経血管内治療学会学術集会(京都)2023.11 前脈絡叢動脈解離性動脈瘤破裂に対してNBCAで母血管 閉塞を行った1例

(大田記念病院)

姫野 隆洋、井上 智之、佐藤 恒太 郡 隆輔、宮嵜 健史、大田 慎三

・第39回日本脳神経血管内治療学会学術集会(京都)2023.11 急性期血管内治療を要した椎骨脳底動脈系タンデム 病変の検討

(大田記念病院)

隆輔 宮嵜 健史、姫野 降洋、郡 井上 智之、佐藤 恒太、佐藤 達哉 福嶋 朋子、大田 慎三

·第53回日本臨床神経生理学会学術大会(福岡)2023.11 Lateralized periodic discharge Earterial spin labelingm 画像所見の関連について

(大田記念病院)

佐藤 達哉、片桐 匡弥、井上 智之 久保 智司、佐藤 恒太、姫野 隆洋 寺澤 由佳

・第41回日本神経治療学会学術集会(東京)2023.11 ・第53回日本臨床神経生理学会学術大会(福岡)2023.11 てんかん手術施行患者における発作時脳磁図の焦点推定 (Source estimation for ictal Magnetoencephalography in patients undergoing epilepsy surgery)

(大田記念病院)

カタギリ・マサヤ ワン・アイリーン ヒルファノグル・チュグバ アルドサリ・ムバラク アウン・サンダール ワン・シャン コバヤシ・カツヤ ブラシオ・フアン ビンガマン・ウィリアム ナジム・イマド アレクソポーラス・アンドレアス アレクソポーラス・アンドレアス

伊藤 郁恵、前田 莉沙、鈴木加奈子 ·第53回日本臨床神経生理学会学術大会(福岡) 2023.11 神経超音波により早期発見に至った脊髄ダンベル腫瘍 の2例

(大田記念病院)

寺澤 由佳、佐藤 達哉、黒川 勝巳 大隣 辰哉

・第42回日本癌局所療法研究会(大阪(誌上開催))2020.5 胃GISTに対する腫瘍の局在や発育形式によるLECS を含めた術式の検討

(福山医療センター 消化器外科)

大塚 真哉、加藤 貴光、吉田 有佑 徹、北田 浩二、濱野 亮輔 鳴坂 徳永 尚之、宮宗 秀明、常光 洋輔 岩川 和秀、稲垣 優

【目的】胃GISTに対する治療は通常は胃局所切除 でよいが、部位、大きさ、形態で術式や難易度が異 なる。手術手技並びに治療成績を報告する。【方法】 2005年1月から2020年1月までの胃GIST手術症例52 例を対象にした。【成績】男性26例、女性26例、平均 年齢は67歳であった。腫瘍の局在部位はUpper32例、 Middle16例、Lower 4例、平均腫瘍経4.2cm、発育形 式は内腔発育型18例、壁外発育型16例、壁内型18例

であった。開腹手術26例、腹腔鏡下手術26例であっ た。開腹手術の内訳は局所切除22例、 噴門側切除2 例、幽門側切除2例であった。腹腔鏡下手術は局所 切除24例で(単孔式3例含む)、うちLECSは7例で あった。手術時間、出血量、 腫瘍径、術後在院日数は 有意に腹腔鏡下手術の方が低かった。腹腔鏡下手 術 としてアプローチの難しい内腔発育型及び壁内型は 18例認め、うち2例はLCSにて全周漿膜切開しエン ドループにて絞り込む、所謂壁外発育型への反転法 にて単孔式手術を施行した。LECS症例7例のうち4 例は胃壁を吊り上げて胃内容液や腫癌細胞の腹腔内 への散布を予防するいわゆるCrown法にて行い、2例 はNEWS法、1例は反転法(CLEANNET)にて行っ た。 腹腔鏡下手術26例のうち、15例にて術中内視鏡 を施行した。【結論】最近の症例は局所切除可能な 症例は5cm以上の大きなもの以外腹腔鏡下にアプ ローチしており内腔発育型や壁内型腫瘍に対しては 反転法やLECSにて切除を行い、またオプションとし て単孔式手術も取り入れており有用な術式と思われ た。

・第42回日本血栓止血学会学術集会(Web)2020.6 エミシズマブ導入期にWED子製剤を併用し運動強度 の高いスポーツを継続できた青少年期血友病A

(福山医療センター)

齊藤 誠司

(広島大学病院 輸血部)

井上 暢子、山崎 尚也、藤井 輝久 【はじめに】インヒビター非保有血友病A患者にお いて、エミシズマプ定期投与の出血予防効果が示され ているが、外傷性の出血や破綻出血を起こした際には VⅢ因子製剤による補充療法が必要となる。今回、運 動強度の高いスポーツを継続している患者での導入 を 経験したので報告する。 【症例】 16歳、男性、血友 病A中等症(FVⅢ:C 3%)。3歳頃より膝関節内出 血を認め、出血時補充療法を開始7歳からサッカーを 始めたため、試合前など予備的に標準型製剤を補充。 中学校入学後、自己注射を開始し、14歳時に内科へ 転科となった。体重増加に伴い出血回数が増えたため 半減期延長製剤に切り替え、輸注量を増量し、週2回 (38単位kg) の定期補充療法を導入。16歳時には体重 も増え、サッカーで激しいぶつかり合いが増えたこと から年2-3回足関節内出血を認めたため、52単位/kg へ増量した。この頃より定期補充のアドヒアランスが 低下し、自己注射を嫌がるようになったため、エミシ

ズマブへの変更を提案した外来にて3mg/kgで導入を行い、導入期の1ヶ月間は同日にルリオクトコグアルファペゴル52単位/kg週1回の輸注も行った。その後1.5mg/kgの維持量にて在宅自己注射を継続し、必要に応じてVⅢ因子製剤週1回程度の併用を指示した。約5か月間で大きな出血は認めておらず、追加輸注は1度のみである。【考察】今回のような運動強度の高いスポーツを継続している患者では、エミシズマプ導入時には特に出血に注意する必要があり、維持量になるまでの1ヶ月間は出血予防のためにVⅢ因子製剤を併用し、移行期の出血を抑えることが重要である。また運動負荷による破綻出血のリスクを説明し、外傷性出血時の対応や、予備的補充を指導することで、エミシズマブの定期投与でも運動強度を落とすことなくスポーツを継続できると思われる。

・第120回日本外科学会定期学術集会(Web) 2020.8客観的術前評価指数を用いた高齢者における腹腔鏡下幽門側胃切除術の有効性と安全性

(福山医療センター 外科)

大塚 眞哉、吉田 有佑、安井 雄一 北田 浩二、濱野 亮輔、德永 尚之 宮宗 秀明、常光 洋輔、岩川 和秀 稲垣 優

【はじめに】胃切除症例が年間70例前後の地域中 核病院である当院では2005年に早期胃癌に対して腹 腔鏡下幽門側胃切除 (LADG) を導入し、また2012 年から体腔内吻合による完全腹腔鏡下幽門側胃切除 (LDG) を導入した腹腔鏡下手術は開腹手術に比べ て低侵襲手術であるが、手術時間や気腹といった循 環動態に与える影響が、術前合併症比率の高い高齢 者に対しても安全に行えるかレトロスペクティブに検 討を行った。【対象・ 方法】2005年1月から2019年 7月までに当科にて施行した L (A) DG症例209例を 対象にした。手術適応はT1N0またはT2N0 (cStage IA IB) までとし、術前リンパ節転移が疑われる症 例は適応外とした。209例を75歳以上の63例(高齢 群)と75歳未満の146例(非高齢群)に別けて比較 検討を行った。術前評価指数としてPNI(Prognostic Nutritional Index), ASA score, CCI (Charlson Comorbidity Index) などを用いた。【結果】背景因子 では性別、BMI、占拠部位、組織型、Hgbでは有意差 を認めなかった。しかし、術前栄養評価指数PNIは高 齢群50.0、非高齢群52,6 (p=0.001) 、ASA scoreは高 齢群(1:47例、2:16例)、非高齢群(1:129例、

2:17例) (p=0.01)、併存疾患指数CCIは高齢群(1以下:51例、2以上:12例)、非高齢群(1以下:141例、2以上:5例)(p<0.001)と高齢群で有意に悪い傾向にあった。短期成績では手術時間(高齢群296分、非高齢群300分)、出血量(高齢群115cc、非高齢群115cc)、リンパ節郭清度、進行度、術後在院日数では有意差を認めなかった開腹移行は高齢群で4例(6.3%)、非高齢群で4例(2.7%)認めたが、有意差を認めなかった。Grade2以上の術後合併症は呼吸循環器系に関するもの高齢群2例(3.1%)、非高齢群3例(2.1%)、手術操作に関する合併症は高齢群で5例(7.9%)、非高齢群で13例(8.9%)認めたが、共に有意差を認めなかった。【考察】術前合併症の多い高齢者に対しても腹腔鏡下幽門側胃切除は安全かつ有用な低侵襲治療と考えられた。

・第106回日本消化器病学会総会(Web)2020.8 潰瘍性大腸炎に対する抗TNFα抗体治療はステロイド ナイーブ症例に使用することで効果向上が期待できる (福山医療センター 消化器内科)

豊川 達也、堀井城一朗、藤田 勲生

【目的】 潰瘍性大腸炎 (UC) に対する新規薬剤登 場により治療の幅が広がったことは患者にとっても医 療者側にとっても大きなメリットである。そして、その 利点を生かすべく現時点で抗TNFa抗休治療の効果に ついて、どのような症例に効果が高いかあるいはその 使用時期や薬剤選択などに関して当院の症例を検討 したので報告する。【方法】UCにて当院に通院中の 247例のうち抗TNFa抗休治療を実施した52例につい て、その効果、臨床的背景、治療歴、血液検査データ 等を遡及的に解析した。なお、統計学的解析にはロジ スティック回帰分析などを用い、p<0.05を有意差あり とした。【成績】52例の内訳は、男性31例、女性21例 で、年齢中央値は42歳 (13-88歳) であった。抗TNFa 抗体治療の効果について、著効25例、有効(二次無効 を含む)11例、無効16例という結果であり、著効群25 例と非著効群27例に層別化し比較検討を行った単変 量解析では、年齢、性、病型5-ASAや免疫調整剤の 使用の有無。血球成分除去療法の既往、カルシニュー リン阻害剤の使用の有無、発症から抗TNFa抗体治療 開始までの期間、さらには抗TNFa抗休治療前の白血 球数、ヘモグロピン値、CRP値、血清アルプミン値、 臨床的重症度、Mayo内視鏡スコアについては両群間 で有意差を認めなかったが、著効群の方で有点にス テロイドの全身投与無の症例が高頻度であった(32% VS.7.4%, p=0.025)。 Mayo内視鍛スコアについては全例がScore 2 もしくは3であり両群間で有意差は認めないものの、著効群でScore 2 症例が高頻度の傾向にあった(44%vs.26%, p=0.17)。次に、ステロイド投与の有無とMayo内視鏡スコアで多変量解析を行ったところ、ステロイドを使用していないことが抗TNFa抗体治療が著効する独立した因子として抽出された(OR:5.39, 95% CI 1.14-39.2, p=0.032)。【結論】本研究の結果から、抗TNFa抗体治療はステロイドナイープ症例に導入することでその効果を高める可能性が示唆された。このことは新規薬剤が登場した現在のUC治療における治療戦略に極めて有効であると考えた。

・第99回日本内視鏡学会総会(京都(ハイブリッド)開催)2020.9 小児大腸内視鏡検査における前処置についての検討 (福山医療センター 消化器内科)

藤田 勲生、門脇 由華、原 友太 【目的】小児の大腸内視鏡検査における前処置に関 しては十分なエビデンスがなく、本邦でも様々な方法 で施行されているのが現状である。今回我々は、小児 大腸内視鏡検査における有効性と受容性を明らかに することを目的とした。【方法】2011年3月から2019 年8月に、当院で小児(0~15歳)に対して大腸内視 鏡検査を施行した111例のうち、全大腸観察を目的に 前処置を施行した107例において、前処置方法の有効 性と受容性を、経口洗浄液の種類、欠食期間、前処置 薬、浣腸などについて検討した。有効性は観察時の 腸管洗浄効果とし、腸管前処置良好例は残渣を認め ないか、洗浄にて容易に全大腸観察ができる例とし、 不良例は有形便を認めるか、洗浄するも十分な観察 ができない例とした。受容性は洗浄液を変更なく服用 できた例を受容性有とし、途中で服用ができずに変更 した場合と胃管挿入して注入した例を受容性無とし た。【結果】 症例は107例 (子74例、女子33例) で、年 齢層は0歳児4例、幼児(1~6歳)35例、小学生38 例、中学生30例で、前日のピコスルファートナトリウ ム内服は74例、経口洗浄液は101例で服用しており、 浣腸は77例で施行されていた。欠食期間は検査前日 の夕食後からが46例、検査前日の夕食からの欠食例が 43例であった。前処置良好例は95例で不良例は12例 であり、前処置不良となる因子は経口洗浄液の非服用 であった。ポリエチレングリコール製剤 (PEG) とク エン酸マグネシウム製剤 (Mg) を単剤で服用した84症 例で検討すると、PEG 服用群は35例でMg服用群は 49例であり、有効性については両群間に有意差は認め

なかった。PEG製剤ではモピフレップ®27例中14例、 ムーペン®15例中10例、ビコプレップ®3例中0例、Mg 製剤では38例中8例が受容性無群となったが、Mg製 剤群はモヒプレップ®投与群(p=0.01)、 ムーベン®投与 群(p=0.002)よりも優位に受容性が高くなっていた。 Mg製剤の単剤の服用例で、Mg製剤の高張液と等張液 で検討したが、有効性と受容性に有意差は認めなかっ た。有効性や受容性を年齢層別に検討すると、乳児で は4例すべてでMg製剤を服用しており、全例で前処 置は良好で、2例が受容性無であった。有効性は幼児 から中学生までPEG製剤とMg製剤に差はなく、受容 性は幼児と小学生においてMg製剤のほうが高い傾向 であった。【結論】Mg製剤はPEG製剤と比較して、有 効性は同等で受容性は高いため、小児大腸内視鏡検 査前の腸管洗浄液に適していると思われた。

·第28回日本乳癌学会学術総会(Web) 2020.10 化学療法後にCDK4/6阻害薬で病勢を制御し得た遠隔 転移を伴うHR陽性・HER2陰性局所進行乳癌の1例

(福山医療センター)

髙橋 寛敏

· 第82回日本臨床外科学会総会(Web) 2020.10 慢性肝炎を背景とし肝細胞癌との鑑別に苦慮した肝血管筋 脂肪腫の2切除例

> (福山医療センター) 徳永 尚之

·第28回日本乳癌学会学術総会(Web) 2020.10 Strut Adjusted Volume Implant (SAVI) による乳房温 · 第28回日本消化器関連学会週間 (JDDW) 存術後の放射線治療APBI with Strut Adjusted Volume Implant (SAVI)after breast-conserving surgery

> (福山医療センター 放射線治療科) 兼安 祐子、中川 冨夫 (福山医療センター 乳腺内分泌外科) 三好 和也、高橋 寛敏

【目的】早期乳癌患者を対象とし、乳房温存術後に SAVIによる小線源治療を行い、 安全性、治療後乳房 の整容性/QOLを評価する。【対象】40歳以上、腫瘍 径3cm以下の乳管癌で乳房温存療法が予定されてお り、リンバ節転移および遠隔転移なしの患者。乳房部 分切除術または追加切除の断端陰性、センチネルリ ンパ節転移なし。非浸潤性乳管癌はセンチネル生検 省略も可。**【方法**】センチネルリンパ節転移陰性を確 認後、温存手術に引き続きSAVIスペーサーを挿入す

る。永久標本での断端陰性確認後にSAVIアプリケー タに入れ換える。SAVIカテーテル外側1cm以上のポ リュームに、皮膚/胸壁への照射線量を制限するよ う調整する。線源停留位置/時間は、3D治療計画を 用いて最適化する。適切な照射線置が得られない場 合、アプリケータを抜去し、通常照射を行う。RALS による高線量率照射を行う。1回3.4Gy、6時間以上 の間隔を空けて1日に2回、5日間の照射を行う。総 線量34Gy照射後、アプリケータを抜去する。【**結果**】 2015年10月当院IRBで承認、治療計画の見学等を経 て2016年6月より症例蓄積可能となり、2017年3月に 治療開始、現在までに4例の治療を施行した。平均年 齢53歳。線量制約の平均値はそれぞれPTV EVAL; $V200\%:12.3cc \ (\leq 20cc)$, Skin;D1cc:64.0% (\leq 110%)、Chest wall; D1cc:98.1% (≦110%) で、全例 守られていた。治療後から現在まで、整容性は全例良 好で重篤な有害事象は認められていない。SAVIと皮 膚との距離が5.1mmと小さかった症例1は、照射後、 補助化学療法を開始し、照射終了3ヶ月目にGrade2の 皮膚炎を生じた。患者は全例、SAVI治療を受けたこ とに満足していた。現在までに再発はない。2、3例 目に認められたSAVI周囲のairやfluidは、手術時の縫 合を工夫することで4例目では認められなかった。今 後さらに症例を蓄積する予定である。【結語】SAVI による治療は、RALS保有施設で放射線治療医と乳腺 外科医が協力出来れば、適格条件を有する患者にとっ て、有効な治療と考えられる。

第18回日本消化器外科学会大会(兵庫(ハイブリッド開催))2020.11 寛解後に再燃し小腸穿孔を来たしたMTX-LPDの一例 (福山医療センター 外科)

> 濱野 亮輔、吉田 有佑、嗚坂 徹 北田 浩二、德永 尚之、宮宗 秀明 常光 洋輔、大塚 直哉、稲垣 優

【はじめに】メトトレキサート (Methotrexate:MTX) は関節リウマチ(rheumatoid arthritis:RA) の治療薬 としてその有用性が確立されているが、副作用として MTX関連リンパ増殖性疾患 (MTX-LPD) が1991年 にEllemanらによって報告され、WHO分類に記載され ている。【症例】75歳女性。62歳時に慢性RAと診断 され治療開始。71歳からMTX内服開始していた。73 歳時に発熱とリンパ節の腫脹を認め、鼠径部リンパ 節生検にてMTX-LPDと診断された。MTX内服中止 により早期に寛解し経過観察中であった。今回の当 院受診日前日より腹痛症状にてかかりつけ医を受診。 CRP1.4mg/dl WBC 20230/µlと炎症反応を認め、腹 部全体の圧痛も有り、CT撮影。Free airを認め消化 管穿孔が疑われ、同日当院紹介となった。CTにて穿 孔部は不明だが消化管穿孔と傍大動脈のリンパ節腫 大を認め、手術適応と判断。開腹し穿孔部を検索した ところトライツ靱帯から95cmの小腸に腫瘍を認め、同 部位が穿孔していた。近傍の腸間膜にリンパ節腫大が 目立ったが、傍大動脈にもリンパ節腫大を認めており リンパ節郭清の意味は無いと判断し穿孔部を含めた 小腸のみ切除し吻合した。病理組織検査の結果MTX-LPDと診断された。【まとめ】MTX-LPDは比較的稀 な疾患である。歯科口腔や頭頚部領域の報告が多く、 消化器領域では少ない。医中誌により検索したところ 小腸のMTX-LPDは過去に9例しか報告例が無かっ た。今回我々は、一度鼠径部リンパ節生検にてMTX-LPDと診断されMTXの中止により寛解が得られてい たが、2年後に小腸腫瘍穿孔を契機に再燃が発覚した 症例を経験した。文献的考察を含めて報告する。

第28回日本消化器関連学会週間(JDDW)
 第62回日本消化器病学会大会(兵庫(ハイブリッド開催)) 2020.11
 当院における膵癌に対するGemcitabine(GEM)+
 nab-Paclitaxel (nab-PTX)療法の後方視的検討

(福山医療センター 消化器科) 原 友太、豊川 達也、住井 遼平 中西 彬、門脇 由華、伏見 崇 表 静馬、上田 祐也、野間 康宏 堀井城一朗、藤田 勲生、金吉 俊彦

【目的】切除不能進行・再発膵癌に対して、Gemcitabine (GEM) +nab-Paclitaxel (nab-PTX)療法は標準化学療法の1つとされている。今回、一般臨床でのデータを増やし膵癌診療への一助となる事を期待し、中規模病院である当院での治療実績について後方視的に検討を行った。【方法】当院で2014年10月から2019年9月までの間に切除不能進行・再発膵癌に対してGEM+nab-PTX療法を行った67症例を対象とし、1st-lineで使用した症例についてさらに検討した。カルテ閲覧により性別、年齢、病期、有害事象、治療経過中の採血検査などについて調査し、検討を行った。【成績】平均年齢は66.9歳(35-90)、男女比31対36、部位は頭部44例、体尾部23例で組織型は全例腺癌であった。平均で8.08コース(2-22)投与され、奏効割合はPRが20例、SD13例で奏効率

29.8%、臨床的 有効率49.2%であった。CA19-9は38 例で減少していた。手術へ移行できた症例は6例あっ た。G3/4の有害事象は好中球減少44例(65.6%)、血 小板減少6例(8.9%)、貧血10例(15%)、間質性肺 炎 5 例 (7.4%) 、胃穿孔 1 例 (1.6%) であった。1stlineで使用された症例は39症例 (58.2%) であり、平均 年齢は70.8歳(55-87)、男女比17対22、部位は頭部 25例、体尾部14例であった。平均で6.9コース投与さ れ、奏効割合はPRが15例、SD7例で奏効率38.4%、 臨床的有効率56.4%であった。CA19-9は24例で低 下していた。手術へ移行できた症例は5例あった。 G3/4の有害事象は好中球減少25例(64%)、血小板 減少4例(10%)、貧血5例(12.8%)、間質性肺炎3 例(7.6%)、胃穿孔1例(2.5%)であった。【結論】 GEM+nab-PTX療法は当院での検討でも切除不能進 行·再発膵癌に対して有効であることが示されたが、胃 穿孔や間質性肺炎など重篤な有害事象を伴う場合も あり、投与する際には注意が必要である。

・第75回日本大腸肛門学会学術集会(Web) 2020.11 大腸癌に対する術後補助化学療法の検討

> (福山医療センター 外科) 宮宗 秀明、徳永 尚之、常光 洋輔 大塚 眞哉

大腸癌に対する術後補助化学療法において、大腸 癌治療ガイドラインでは、RO切除が行われたStageⅢ 大腸癌(結腸癌・直腸癌)とされており、CAPOX、 FOLFOX, Capecitabine, 5-FU+l-LV, UFT+LV, S-1のレジメンが記載され、2019年度版からは、 Oxaliplatin併用療法が推奨されている。今回、2011 年1月から2018年12月までの間に当院において根治 術が行われたStageⅢ大腸癌、162例に対する術後補 助化学療法について検討した。男性83、女性79、全 162症例で、35から97、平均70.0歳であった。回盲部 9、上行結腸34、横行結腸19、下行結腸8、S状結 腸63、直腸S状部29例で、組織型は、pap:1、tub1: 50、tub2:98、 por:4、mile:8、scc:1例であった。 StageⅢa:16例、StageⅢb:103例、StageⅢc:43例 で、D1郭清が2例に、D2が23例に、D3が137例に行 われていた。術後補助化学療法は、112例 (69%) で 行われており。Stage III a で、16 例中 2 例 (75%)、III b で、103例中65例(63%)、皿cで、43例中35例(81%) であった。レジメンは、Capecitabineが55例(49%) で最多であり、UFT+LVが24例(21%)、CAPOXが 14例 (13%) 、S-1が12例 (11%) 、SOXが3例 (3

%)、FOLFOXが2例(2%)、UFTが2例(2%)で あった。Oxaliplatin併用療法は、19例中17例 (89%) がStageⅢcで行われていた。StageⅢ大腸癌全体の5 年無再発生存率は、73.1%、5年全生存率は、79.0% であり、術後補助化学療法により、無再発生存率は、 77.8%、全生存率は、85.8%と、有意に改善していた (p=0.008、p=0.000)。Stage別の検討では、IIIbでは、 全生存率においてのみ、術後補助化学療法により有意 に予後が改善していた (p=0.027)。Ⅲcにおいては、 無再発生存率、全生存率ともに有意に予後が改善し ていた (p=0.009、p=0.003)。レジメンごとの検討で は、StageⅢcにおいて、UFT+LVが無再発生存率およ び全生存率の予後を有意に改善しており(p=0.0029、 p=0.018)、SOXが全生存率の予後を有意に改善して いた (p=0.034)。StageⅢ大腸癌に対する術後補助化 学療法の効果はこれまでの知見のごとく明白である が、より進行度の高い病変において顕著であることが 示唆された。今後、Oxialiplatinの併用が増えることに よりさらなる予後の改善が期待される。

·第48回日本小児神経外科学会(Web) 2020.11 小児脳脊髄液漏出症患者の治療手順

> (福山医療センター 脳神経外科) 守山 英二 (姫路赤十字病院 麻酔科) 石川 慎—

【目的】昨年の本学会(第47回、新潟)では、小 児脳脊髄液漏出症患者の臨床像、冶療成績を報告し た。今回は初診から硬膜外ブラッドパッチ(EBP)治 療までの具体的な診療手順を紹介する。【初診~硬 膜外持続注入】頭痛、立ち眩み~起立性調節障害、 睡眠、覚醒障害により就学に支障がある小児患者で は、脳脊髄液漏出症を念頭に置き、脊髄MRI(脂肪 抑制T2 強調画像:矢状断、水平段)を撮影する。硬 膜外異常高(水) 信号 (fringed epidural space sign: FESS) を認めた場合は髄液漏出の可能性が高いと判 断し、診断的治療目的の硬膜外持続注入を勧める。4 日間の入院で、腰椎レベルに留置した硬膜外チューブ から細胞外液製剤を輸液ポンプで注入する。 明らかな ・第17回日本小児消化管感染症研究会(Web)2021.2 症状改善が見られた場合、EBP治療の適応と判断す る。【診断確定~EBP】保険診療でのEBP治療には厚 労省画像診断基準『確定』~『確実』所見が求められ る。現在は主に陽性率が高く、漏出部位に関する情報 が得られるCT脊髄造影(CTM)所見が根拠になる。 ほとんどの場合、上位頚椎レベルに造影剤漏出所見が

認められるが漏孔自体を同定できることは稀である。 C1/2の直接穿刺と胸椎中部に留置した硬膜外チューブ の2か所から造影剤混入自家血を注入する。【考察】 脳脊髄液漏出症を疑った患児のMRI陽性率、さらに硬 膜外持続注入~ EBP 奏効率は極めて高い。 当院での 硬膜外持続注入、CTM、EBP手技の詳細を紹介し、 今後の課題について検討する。

・第72回西日本泌尿器科学会総会(Web) 2020.11 術者の立ち位置を交互に変換した腹腔鏡下前立腺全摘 の手術成績

> (福山医療センター 泌尿器科) 長谷川泰久、畑山 智哉、長坂 啓司 増本 弘史

·第34回日本泌尿器内視鏡学会総会(Web) 2020.11 腹腔鏡下腎部分切除術後に腎摘除術を施行した一例

(福山医療センター 泌尿器科)

畑山 智哉、長坂 啓司、長谷川泰久 【緒言】腹腔鏡下腎部分切除術は小径腎癌に対す る標準的な治療法として確立されている。しかし、 より高いTrifecta達成をすることが求められ、症例に よっては適応を十分に検討する必要がある。今回我々 は、左腎癌に対して後腹膜鏡下腎部分切除術を施行 し、病理学的に断端陽性であった症例に対して、30日 後に後腹膜鏡下腎摘除術を施行した症例を経験した ので報告する。【症例】76歳、男性。近医で左腎細胞 癌cT1bNOMOの診断にて当科紹介となり、後腹膜鏡 下腎部分切除術を施行した。術中、切除断端で腫瘍 に切り込んだ可能性があると判断し、追加切除を行っ た。術後の最終病理診断にて断端陽性であったため、 30日後に後腹膜鏡下腎摘除術を施行した。最終摘除 腎にも腎細胞癌を認め、病理学的に淡明細胞癌pT3a であった。【考察】腎部分切除術において、切除断端 が陽性でも予後に影響しないなどの報告もあるが、原 則は断端陰性であり、pT3へのステージアップする症 例の術前評価が必要である。

Edwardsiella tarda腸炎を契機に発見された潰瘍性 大腸炎の中学生2例

> (福山医療センター 小児科) 藤原 倫昌、住友 裕美、猪谷 元浩 浦山 建治、坂根 朋子、岩瀬 瑞恵 山下 定儀、荒木 徹

(近畿大学奈良病院 小児科) 近藤 宏樹

【はじめに】潰瘍性大腸炎 (UC) は、主として大腸 粘膜を侵しびらんや潰瘍を形成する原因不明のびまん 性非特異性炎症性疾患であり、近年増加傾向にある。 診断は臨床経過と内視鏡所見から比較的容易である が、時に急性発症して細菌性腸炎と鑑別を要すること がある。Edwardsiella tardaは腸内細菌科のグラム陰 性桿菌で人獣共通感染症を起こすことがあるが、一 般的にはあまり知られていない。淡水や汽水域に生息 する養殖ウナギ・ヒラメ・マダイから検出され、感染 した魚介類の生食により稀にヒトに感染し、腸炎症状 を起こすことがある。今回Edwardsiella tarda腸炎を 契 機に発見された潰瘍性大腸炎の思春期男児を2例 経験したので報告する。【症例】症例1は14歳男児。 鯛の刺身を食べた5日後から腹痛と下痢が出現し、2 日間症状が持続したため当科を紹介受診した。便培養 でEdwardsiella tardaが検出され対症療法で徐々に改 善したが、断続的な下血が遷延した。間診で3か月前 から間欠的に下血を認めていたことが判明し下部消化 管内視鏡でUC(直腸炎型)と診断した。症例2は15 歳男児。2か月前より下痢と血便が出現し、2日前に 悪化したため当院内科を受診。便培養でEdwardsiella tardaが検出されたが、慢性的な臨床経過であり自己 炎症性腸疾患が疑われ下部消化管内視鏡の結果UC (左側大腸炎型)と診断した。【結語】当院では2010 年から2020年までの10年間に15歳以下の小児6例の 便培養でEdwardsiela tardaが検出されており。いずれ も腸炎症状を伴っていた。6例のうち血便が遷延した 3例に下部消化管内視鏡が行われ、うち2例がUCで あった。腸炎では原因菌が特定出来た場合でもUCを 合併している可能性があり血便や下血の遷延に注意 ・第58回 日本小児外科学会学術集会 (Web) 2021.4 が必要である。

· 第107回日本消化器病学会総会(Web) 2021.4 クローン病患者に対する抗TNF-α抗体治療の長期的 効果に関わる因子についての検討

> (福山医療センター 消化器内科) 豊川 達也、中西 彬、住井 遼平 友太、伏見 原 崇、上田 祐也 坂田 雅浩、野間 康宏、堀井城一朗 藤田 勲生

【目的】クローン病患者に対する抗TNF-a抗体治療 の効果減弱が問題となっている。長期間抗TNF-a抗 体治療を施行しているクローン病患者において、効果 減弱に関わる因子について検討した。【方法】対象は 当院で抗TNF-a抗体治療を導入し、1年以上経社を 追えているクローン病79例である。抗TNF-a抗体治療 の効果が減弱した症例と減弱しなかった例に層別化 し、その臨床学的特徴について検討した。効果減弱の 定義は、抗TNF-a抗体治療の用量増加もしくは期間 短縮あるいは無効のため製剤を変更した症例とした。 検討した項目は、年齢・性・病型・5-ASAなどの薬物 投与歴・栄養療法・抗TNF-a抗体治療の種類と発症 から導入までの期間・白血球・CRP·アルプミン値・合 併症(肛門病変や瘻孔)・喫煙・疾患活動性とした。

【成績】平均観察期間は85.5ヵ月で、最長は188ヵ月 であった。79例のうち効果減弱なし50例で、効果減 弱あり29例であった。効果減弱なし群と効果減弱あり 群で比較検討すると、白血球数 (p=0.0002)、CRP値 (p=0.034)、肛門病変あり (p=0.028) が有意差を示 した。また、有意差を認めないものの、ステロイド使 用歴がないこと、免疫調整剤使用歴があること、さら に手術歴がないことが効果減弱なしの因子である傾 向があった。その他の項目は有意差を認めなかった。 単変量解析で有意差もしくは傾向の見られたこれら5 因子について多変量解析を施行したところ、肛門病変 のないことが効果減弱なしの独立した予測因子として 抽出された (OR: 4.46.95% CI 1.07-18.6.p=0.034)。

【結論】今回の検討にて、肛門病院を有するクローン 病患者は抗TNF-a抗体治療の長期投与により効果減 弱となりやすいことが判明した。今後、長期抗TNF-a 抗体治療をうけている患者で肛門病変を有するクロー ン病症例については早期に他の生物学的製剤などへ の切り替えを検討する必要があると考えた。

右下腹部痛を訴えた腟内異物の1例

(福山医療センター 小児外科)

龍太、井深 奏司、児玉 匡 黒田 征加

【はじめに】腟内異物はあらゆる年齢の女性に認め られるとされ、海外では単施設で数十例から数百例の 症例報告がなされている。一方、本邦においては小児 腟内異物の報告は少なく医中誌で検索し得た限1970 年 代から今日までに40例弱を認めるのみである。 腟 内異物の特徴としで帯下の増量など非特異的な症状 がおおく発症から診断までに時間がかかる。今回われ われは右下腹部痛を主訴とした腟内異物の1例を経験 したので報告する。【症例】11歳女児。受診10か月前

より帯下の増量を認めており受診2か月前に初経を認 めた。右下腹部痛を主訴に前医受診、虫垂炎を疑われ 腹部単純レントゲン、CT検査を行われた。虫垂には 腫 大を認めず腟内異物が疑われ当科紹介。受診時腹 痛により歩行困難であるが、嘔吐・下痢などの消化器 症状は認めず。右下腹部に強い圧痛を認めたが、筋性 防御は認められなかった。婦人科診察では処女膜は保 たれており異物は会陰から確認不可能であった。超音 波検査でも腟内に高輝度の異物を疑う所見が認めら れた。 MRIを撮影したところ、異物は円筒状で子宮頚 部が嵌入している状態であり腹痛の程度から絞扼が否 定できないため緊急手術を施行した。全身麻酔下に腟 内を観察するとプラスチック製の玩具(円筒状)を認 め子宮頚部がはまり込む状態であった。軟性鏡で観察 しながら玩具の摘出を行った。子宮頚部は当初うっ血 していたが改善を認め、腟壁にも明らかな穿孔を認め なかったため洗浄を行い終了した。腔培養、各種血液 検査、婦人科診察の所見より性的虐待を疑う所見は認 められず院内の虐待防止委員会でも慎重な経過観察 が適当とされた。心身症を専門とする小児科医にも診 察を受け、現在継続してカウンセリング中である。術 ・第29回日本乳癌学会学術総会(ハイブリッド開催)2021.7 後6か月、再発を認めていない。【考察】右下腹部痛 ならずとも腹痛を訴える女性の診察では婦人科的な疾 患を鑑別にあげるということは従来より知られている ことではあるが、腟内異物は鑑別に挙げないと診断が 極めて困難になる可能性がある。女児の腹痛では年齢 ・第76回日本消化器外科学会総会(Web) 2021.7 にかかわらず鑑別疾患に上げる必要がある。

·第38回日本呼吸器外科学会学術集会(Web)2021.5 当科における急性膿胸の治療戦略

(福山医療センター 呼吸器外科)

二萬 英斗、吉近 高橋 健司

【背景】膿胸の線維素膿性期・器質化期では膿胸 腔が多房化しドレナージ困難となるが、近年では胸 腔鏡手術 (VATS) や線維素溶解療法の有用性が報 告されている。当科での急性膿胸の治療について後 方視的に検討した。【対象】2019年1月から2020年 12月に急性膿胸で手術または線維素溶解療法を行っ た18例を対象とした。【結果】患者の平均年齢は72.7 ±12.3歳、男女比は13:5、1例を除き糖尿病、循環 器疾患、精神疾患、慢性腎臓病、肺抗酸菌症、慢性 閉塞性肺疾患、関節リウマチ、担癌状態などの併存 疾患を認めた。介入として手術を第一選択としたOP 群が12例、ウロキナーゼ(UK)による線維素溶解療

法を第一選択としたUK群が6例であった。介入前 WBCはOP群: 17400±8513/µL,UK群7450±1882/ μL,p=0.017、CRPはOP群: 27.9±11.8mg/dL,UK群: 10.5±7.62mg/dL,p=0.017とOP群で有意に強い炎症を 認めた。OP群のうち6例は緊急手術で、VATS6例、 開胸手術5例であった。術後に線維素溶解療法を行っ た症例が5例、合併症は創感染が1例、 肺瘻が1例、 術中大量出血が1例であった。UK群のうち3例で効 果不十分のため手術を要したが、いずれもVATSで あった。このうち1例で術後さらに線維素溶解療法を 追加し、その合併症として出血が生じた。介入後ドレ ナージ期間はOP群:13.6±9.9日、UK群:10.8±11.5 日、p=0.12、介入後入院期間はOP群26.8±16.6日、 UK群: 21.33±17.4日、p=0.20と有意差はなく、両群と も在院死は0例であった。【結論】手術・線維素溶解 療法ともに安全に施行することができた。当科ではよ り重症度の高い症例で積極的に手術を選択していた。 患者の状態に応じて両者を適切に組み合わせることが 肝要と考えられる。

肝転移との鑑別を要した肝悪性リンパ腫合併乳癌の一例 (福山医療センター)

髙橋 寛敏

上腸間膜静脈 (SMV) への浸潤を認め合併切除を要 したⅢ型門脈輪状膵を伴った膵頭部癌の1切除例

(福山医療センター)

德永 尚之

諒、中居 祐大 ・第57回日本胆道学会学術集会 (東京都ハイブリッド開催) 2021.10 黄色肉芽腫性胆嚢炎に対するEGBS後3ヶ月で待機 手術を行った1例

(福山医療センター)

櫻井 湧哉、北田 浩二、内海 方嗣 德永 尚之、稲垣 優

症例は74歳女性。骨折で他院に入院中、急性胆石 性胆嚢炎と診断後保存的に加療されたが軽快せず、 発症後21日目に当院を紹介受診した腹部CT検査では 胆嚢管に嵌頓した結石と総胆管結石、胆嚢頸部から体 部にかけて不整な壁肥厚を認めた。胆嚢周囲は毛羽立 ち、接した総肝管は圧排変形し、術中損傷のリスクが 高いと考えられた。肝胆道系酵素の上昇は軽度で、急 由担管炎の併存は否定的と判断し、黄色肉芽腫性胆 嚢炎(Grade II)を第一に考えたが、胆嚢癌も鑑別に 挙がる画像所見であった。CA19-9値は478U/mlと高 値を認めた。以上から、手術先行ではなく、胆嚢癌の 除外を目的として保存的な加療の方針とした。総胆管 結石を内視鏡下に排石後、ENGBDを施行し連続胆汁 細胞診で悪性所見がないことを確認した。ENGBD後 12日目にEGBSを行い、急性胆嚢炎は鎮静化できた。 一旦退院し約1か月後の待機的手術を予定したが、諸 事情で結果的には3か月後に腹腔鏡下胆嚢摘出術を 行った。胆嚢周囲の強い瘢痕化と胆管損傷のリスクを 想定したが、意外に胆嚢の炎症所見 (TG18:術中所見 で評価した手術難度)は、胆嚢周囲の難度2、Calot 三角の難度3、胆嚢床の難度2だった。手術時間76 分、出血量1mlで合併症なく術後3日目に軽快退院し た。急性胆嚢炎で発症した胆嚢癌に対する早期手術 の治療成績は、通常の胆嚢癌と比べ不良であり、詳細 な術前評価が欠かせない。とりわけ進行癌との鑑別 を要する黄色肉芽腫性胆嚢炎に対する緊急手術は、 出血や胆管損傷のリスクに加え、癌であった場合の癌 遺残を想定しなければならず、精査を進めた上での 外科的介入が望ましいことは言うまでもない。本症例 は穿刺ルート再発等が危惧されるPTGBDではなく、 ENGBDを選択し連続胆汁細胞診を行うことで悪性所 見がないことを確認できた。更にEGBSを付加するこ とで待機手術が可能になった。胆嚢ドレナージ後、適 切な手術時期に関して一定の見解は得られていない が、本症例では胆嚢ドレナージ後3か月で比較的安全 · 第29回日本消化器関連学会週間(JDDW2021) に手術を施行できた。

・第57回日本胆道学会学術集会(東京都ハイブリッド開催)2021.10 肋間からの経皮経肝胆道ドレナージと膿胸・胆汁性胸膜炎 (福山医療センター)

> 北田 浩二、内海 方嗣、德永 尚之 稲垣 優

【緒言】肋間からの経皮経肝胆道ドレナージ (PTBD) において、穿刺ルートが胸腔を経由した場 合、膿胸・胆汁性胸膜炎となりうるが、これらの偶発 症は稀とされている。【目的】肋間からのPTBDにお ける、膿胸・胆汁性胸膜炎の発生頻度や、その特徴を 検討する。 【方法】 2010年7月から2020年8月まで、 当院で施行した肋間からのPTBD症例を対象とした後 ろ向き研究。【結果】対象は55名、60穿刺であった。 胆嚢ドレナージが19例。肝内胆管ドレナージが41例で あった。膿胸・胆汁性胸膜炎となったのは3例(5%) で、穿刺後19日目にドレーンが逸脱し胆汁性胸膜炎と なった1例が含まれた。3例はいずれも肝内胆管ドレ ナージ例で、胆嚢ドレナージ例で膿胸・胆汁性胸膜炎 を来した症例はなかった。穿刺後にCTを施行され、ド レーンの穿刺ルートを確認できたのは42例で、第6肋 間は3例、第7肋間は17例、第8肋間は14例、第9肋 間は6例、第10肋間は2例であった。第6、7肋間穿 刺であった20例の内、膿胸・胆汁性胸膜炎を起こした のは3例 (15%; p=0.09) で、いずれも第7肋間穿刺で あった。【考察】『解剖学講義(南山堂)』には、「肋 骨胸膜と横隔胸膜との間である肋骨横隔洞は深呼吸 時にも完全に肺で満たされることはない。肋骨横隔洞 の下縁は鎖骨中央線では第7肋骨下縁、中腋裔線で は第10肋骨の高さまで存在する(一部改変)」とされ る以上から、PTBDの際、肋骨横隔洞を貫いている症 例が少なからず存在している可能性を考えないわけに はいかない。今回の検討では、多くが前または中腋窩 線レベルでの穿刺であった。症例が少なく、有意差は なかったが、第7肋間より低い肋間からの穿刺で、膿 胸・胆汁性胸膜炎を起こした症例はなかった。 一方、 第6、7肋間からの穿刺でも、これらの偶発症を起こ した症例は15%のみであり、胸水の併存や穿刺方法 など、他の因子も偶発症発生に関与すると思われた。 【結語】膿胸・胆汁性胸膜炎を発症したのは5%で

あった。前・中腋窩線第7肋間の穿刺で、膿胸・胆汁 性胸膜炎を発症した。

第19回日本消化器外科学会(兵庫県ハイブリッド開催)2021.11 当院における原発性小腸癌の臨床病理学的検討

(福山医療センター 外科)

濱野 亮輔、鳴坂 徹、内海 方嗣 北田 浩二、徳永 尚之、宮宗 秀明 常光 洋輔、大塚 真哉、稲垣

【目的】原発性小腸癌は消化管原発悪性腫瘍のお よそ1~2%で比較的まれな疾患である。カプセル内 視鏡やバルーン内視鏡が普及してきたが、未だ診断や 治療が遅れ予後不良な症例が多い。当院で診断、治 療がなされた原発性小腸癌症例の臨床病理像を後方 視的に検討し、予後を解析する。【方法】2006年12月 から2020年12月までの間に当センターにて原発性小 腸癌(十二指腸・空腸・回腸癌. Vater乳頭部癌は除 く)と診断された35例のうち、リンチ症候群などで、 同時、異時性にほかの癌を合併しそれが予後に影響し た症例3例と、データが欠落しており詳細な検討が不 能と判断した症例3例を除いた29症例を対象とする。

臨床病理学的特徴と予後について後方視的に検討し た。【結果】部位の内訳は十二指腸19例、空腸6例、 回腸4例であった。初回治療は根治切除18例、非根治 切除2例、姑息的手術3例、内視鏡的切除2例、化学 療法7例(非根治切除2例、姑息的手術後3例含む) BSC2例であった。予後に関しては部位、年齢、性 別、腫瘍径は予後に影響せず、Stage、治療法(根治 切除vs化学療法vsBSC)、組織型、腫瘍マーカーが予 後を左右した。【結論】今回我々の検討では症例数が 少なく、臨床経過や治療法は多岐にわたっていた。世 界的にも小腸癌は症例が少ないため現在標準治療は 定まっておらず、大腸癌のガイドラインに準じた治療 を考慮することになっている。本邦でも大腸癌研究会 にて『小腸癌取扱い規約』及び『小腸癌治療ガイドラ イン』作成に向けての動きが進行中である。また化学 療法に関しても一次治療における標準治療が定まりつ つあるが他の消化管の癌(食道癌、胃癌、大腸癌)と 比ぺるとかなり遅れている。検査の進歩による早期発 見と、今後の症例の蓄積と研究による治療の均てん化 が望まれる。

・第29回日本消化器関連学会週間(JDDW 2021)(兵庫県ハイブリッド開催)2021.11 当院における切除不能膵がんに対するGemcitabine+nab-Paclitaxel(GnP)療法とFOLFIRINO(FFX)療法を比較 した後方視的検討

> (福山医療センター 消化器科) 原 友太、豊川 達也、住井 遼平 中西 彬、門脇 由華、伏見 崇 上田 祐也、野間 康宏、藤田 勲生 堀井城一朗

【目的】本邦の膵癌診療ガイドラインでは切除不能進行・再発膵癌に対する標準化学療法としてGemcitabine単独療法、S-1単独療法と並び、GnP療法、FFX療法が推奨されている。しかし、どの患者にどの治療を選択すべきかについて明確な選択基準は定まっていない。今回、一般臨床でのデータを増やすことを目的に当院での治療成績について後方視的に比較検討を行った。【方法】当院で2014年10月から2019年9月までの間に切除不能進行・再発膵癌に対してGnP療法を行った76症例とFFX療法を行った32症例を対象にし後方視的に比較検討を行った。【成績】GnP療法:FFX療法では、平均年齢(歳)は67.5(35-90):58.4(35-70)、男女比35対41:20対12、部位は頭部・体部・尾部=19·14·13:19·7·6、組織型はすべて腺癌であった。平均で5.79コース(1-15):9.94コー

ズ(1-90)投与、奏効率は25.0%:28.1%であった。 遠隔転移の有無で分けて検討すると、遠隔転移なし のGnP療法の奏効率は25.7%、FFX療法は22.2%、遠 隔転移ありでは24.3%と30.4%であり、遠隔転 移あり 群のFFXで若干奏効率が高い傾向が見られた。OS (全生存期間) 中央値はGnP療法で14ヶ月、FFX療 法で18ヶ月であった。grade3以上の有害事象は好中 球減少がGnP療法で47例(61.8%)、FFX療法で15例 (46.8%)、貧血が11例(14.4%)、1例(3.1%)、血 小板減少が9例(11.8%)、1例(3.1%)、GnP療法のみ で見られた有害事象として間質性肺炎が6例(7.9%) と、胃穿孔が1例 (1.3%) あった。FFX療法のみで見 られた有害事象としてはS状結腸穿孔が1例(3.1%) あった。【結論】当院において、切除不能進行・再発 膵癌に対する化学療法としてGnP療法とFFX療法の どちらも同等に効果が高いことが示された。今後も双 方を直接比較したデータを増やしていくことで、選択 する基準が明らかになることが期待される。

第29回日本消化器関連学会週間 (JDDW 2021) (兵庫県ハイブリッド開催) 2021.11当院における小腸腫瘍の検討

(福山医療センター 消化器科) 住井 遼平、豊川 達也、中西 彬 原 友太

・第29回日本消化器関連学会週間(JDDW 2021)(兵庫県ハイブリッド開催) 2021.11高齢早期胃癌患者の治療成績についての検討

(福山医療センター 消化器科)

 藤田
 勲生、豊川
 達也、住井
 遼平

 中西
 彬、原
 友太、伏見
 崇

 上田
 祐也、野間
 康宏、堀井城一朗

【目的】高齢者早期胃癌患者に対する内視鏡的切除術については、年齢や全身状態によって適応が議論されており、さらに相対適応病変に対しては、内視鏡治療か外科治療を行うかについても十分には定まっていない。【方法】今回我々は、当院で2011年1月から2017年12月までに内視鏡治療か外科手術を施行した80歳以上の他癌併存症例を除外した早期胃癌患者について、短期成績と長期成績を検討した。【成績】症例は129例で男性82例、女性47例、年齢中央値は83歳(80-94)であり、PNI (prognostic nutritional index)中央値は48.4(27-61)であった組織型は分化型が118例で未分化型が11例であり、深達度はM癌が88例、SM1癌が14例、SM2癌が27例であった。初回治療でESDを行ったのは96例で、一括切除率は92%であっ

石川 慎一

た。eCura A、B、C-1該当病変が74例で、C-2病変 は22例であり、ESD後の追加手術は6例に施行され ていた。初回治療で手術を行った症例は33例あり、 eCuraA, B, C-1に相当した病変は11例(33%)であっ た。ESD症例での偶発症は、後出血が9例(9.4%)、 穿孔が3例(3.1%)、肺炎が4例(4.2%)で、外科手 術を施行した症例ではClavien-Dindo分類のGrade3以 上を3例に認めたが、いずれの群でも治療関連死は認 めなかった。観察期間中央値は1136日(7-3604)で、 全観察期間中の死亡例は23例であった。全死亡例のう ち3例が胃癌死で、そのうちの2例がeCuraC-2での経 過観察例で、1例が術後再発例であった。治療後の長 期生存に関連した因子を検討したところ、全症例では PNI<45であることが有意な予後不良因子として抽出 され、ESD症例ではPNI<45であることとeCuraC-2で あることが予後不良因子として抽出された。【結論】 高齢者早期胃癌に対する治療選択は、根治度のみで なく栄養状態などの患者因子も考慮して判断する必要 がある。

・第24回日本低侵襲脊椎外科学会学術集会(東京都ハイブリッド開催)2021.11 胸椎疾患に対する脊椎内視鏡手術

> (福山医療センター 整形外科) 甲斐 信生

2012年から2018年までに胸椎疾患による狭窄症に 対して内視鏡下除圧術を行った18例 (男性9例、女性 9例、平均年 齢は75.5歳) の成績を報告する。疾患は 胸部脊柱管狭窄症10例(5例は腰部脊柱管狭窄症を 合併、1例はDISHを合併)、胸椎黄色靱帯骨化症7 例(1例はT12偽関節を合併)、胸椎後縦靭帯骨化症 1例であった。除圧範囲はT2/3/4OPLL症例を除く と、T9/10以下の下位胸椎であり、T11/12椎間が9例 と最多であった。手術は直径16mmのMETRx脊椎内 視鏡システムを用い、全例正中進入 (ME-MILD法) で除圧操作し、椎弓および骨化靱帯の切除は主に電 動ハイスピードドリルとSONOPETを用いた。1椎間 除圧例は9例、2椎間以上の除圧例が9例であり、腰 椎内視鏡手術との同時手術5例、PPS固定併用1例、 BKP併用1例であった。1椎間あたりの除圧時間は 平均93.5分、平均出血量は14.5ml、平均術後出血量は 82.8mlであった。術中2例に硬膜損傷をきたしたが、 フィプリン糊処置を行い髄液漏は生じなかった。術後 ・第108回日本消化器病学会総会 (東京) 2022.4 平均経過観察期間は23.8か月、改変JOA (11点満点) にて術前平均6.1点、術後平均7.3点であった。手術動 画を供覧するが、胸椎疾患でのME-MILD法による内

視鏡下除圧術は、片側侵入よりも手術操作が安全で あるなどの 利点があり、手術選択肢の一つと考えてい

・第45回日本脳神経外傷学会(奈良県ハイブリッド開催)2022.2 外傷性脳脊髄液漏出症の髄液漏出部位の検討

> (福山医療センター 脳神経外科) 守山 英二 (姫路赤十字病院 麻酔科)

【目的】脳近年SIH患者の髄液漏出部位について の研究が進んでいる。Fardらは31例のSIH患者につ いて髄液漏出部位を検討した。Digital subtraction myelography (DSM) 所見により、タイプ1:腹側硬膜 損傷、タイプ2:外側硬膜損傷、タイプ3:髄液静脈 痩、タイプ4:遠位神経根スリーブ漏、に分類した。 われわれは椎骨動脈硬膜貫通部位からの髄液漏出に 起因するSIH患者をタイプ5として報告した。今回は 外傷性脳脊髄液漏出症患者の髄液漏出部位を検討し た。【対象・方法】2020年9月~2021年4月の期間 に、当科で脳脊髄液漏出症と診断しESP治療を受け た患者は56例だった。その中で何らかの外傷後に発症 した35例 (男14、女21、平均31.4歳:14~56歳) を対 象にした。漏出部位の診断にはCT脊髄造影(CTM) を用いた。通常の倍量の造影剤を使用し、髄注後に造 影剤を頚部に誘導する姿勢を取った。【結果】受傷機 転の内訳は自動車事故21、自転車事故3、転倒事故 2、頚部外傷2、スポーツ5、DV1、マッサージ1、 だった。23例で大孔部椎骨動脈硬膜貫通部からの造 影剤漏出(診療指針「確定」所見)を認めた。残りの 12例は第2頚椎硬膜嚢腹側の造影剤貯留(「確実」所 見)が診断根拠だった。ESP治療効果は概ね良好であ り、直後のCT画像で5例に椎骨動脈硬膜貫通部から 髄液中への注入血液の逆流を認めた。(診断時、「確 定 | 所見例2、「確実 | 所見例3) 【考察】外傷性脳 脊髄液漏出症患者の多くは、椎骨動脈硬膜貫通部位 からの髄液漏出に起因することが明らかになった。こ の部位に構造的な脆弱性があり、種々の外傷~外力に より髄液漏出を発症するものと考えられる。ESP治療 を行う際に留意すべきである。

当院における小腸腫協32例の検討

(福山医療センター 消化器内科) 住井 遼平、豊川 達也、住井 裕梨 石川 順一、中西 彬、原 友太 上田 祐也、伏見 崇、坂田 雅浩 野間 康宏、藤田 勲生、堀井城一朗 金吉 俊彦

【目的】小腸は全消化管長の約75%を占めるにも関 わらず、小腸腫瘍は比較的稀な疾患である。小腸悪性 腫瘍は全消化管腫瘍の数%程度とされ、取り扱い規約 や治療ガイドラインは確立されておらず、以前より診 断・治療が困難な臓器とされてきた。今回当院で2011 年以降に経験した32例の小腸腫瘍(十二指腸を除く) について報告する。**【方法】**当院で2011年から2021年 上半期までに病理診断で小腸腫瘍と診断された32例 を対象として後ろ向きに検討を行った。【結果】症例 は1例を除いた31例が悪性疾患であった。悪性疾患 の内訳としては、小腸癌7例、悪性リンパ腫10例、消 化管間質腫瘍(以下 GIST) 11例、神経内分泌騒瘍3 例であった。悪性リンパ腫の内訳としては、びまん性 大細胞型B細胞リンパ腫7例、マントル細胞リンパ腫 1例、濾胞性リンパ腫1例であった。小腸腫瘍発見時 の平均年齢は67歳(6歳~87歳)で男女比は約3:2 であった小腸癌・悪性リンパ腫の発見契機は腹痛や 嘔気など症状があったり、貧血精査時に発見されたり がほとんどである。小腸癌では7例中3例がイレウス を契機に発見されている。一方GISTでは半数程度が CTでの偶発的な発見であった。小腸癌の診断時のモ ダリティは7例中6例でバルーン内視鏡であった。小 腸癌に対しての術式は小腸部分切除 5 例、回盲部切除 1例、胃空腸バイパス術が1例であった。術後化学療 法については7例中6例が適応と考えられ、5例で化 学療法を行っていた。レジメンとしてはテガフール・ ギメラシル・オテラシルカリウム配合、カペシタビン、 FOL-FOX+ベバシズマブが投与されていた。【結論】 小腸癌を含む小腸全般に対するカプセル内視鏡やバ ルーン内視鏡を中心とした内視鏡診断学が確立され つつあるが。いまだに小腸癌は進行した状態で発見さ れることが多い。また化学療法についても確立された 治療がないため、小腸癌の場合には大腸癌に準じた治 療が選択されている。さらなるエビデンスの蓄積がさ れ、標準的な治療法が確立されることが望まれる。

・第39回日本呼吸器外科学会学術集会(東京都ハイブリッド開催)2022.5 Tracheal bronchusを有する患者に胸腔鏡下手術を 施行した2例

> (福山医療センター 呼吸器外科) 二萬 英斗、吉近 諒、高橋 健司

【症例1】47歳、女性検診で胸部異常陰影を指摘 された。CTでは気管分岐下に最大径5cmの腫瘤を認 め、悪性リンパ腫やリンパ増殖性疾患などが疑われ た。EUS-FNAではリンパ節と思しき組織が採取され たが、確定診断には至らなかった。このため診断と治 療を兼ねて胸腔鏡下縦隔腫瘤摘出術を施行した。全 身麻酔を導入しダブルルーメンチューブで気管挿管 後、麻酔科医による気管支鏡で気管右壁から分岐す る枝の存在に気付いた。改めてCTを読影し、右S1に 入るtracheal bronchusを確認した。幸い右胸腔からの アプローチで手術を行ったので、tracheal bronchusの 存在が術中気道管理に影響を与えることはなかった。 【症例2】79歳、男性。咳嗽と血痰を主訴に前医を 受診した。CTで右肺尖に肺癌を疑うpart solid GGN を指摘され、手術の方針となった。CTでは気管右壁 から分岐し奇静脈弓の尾側をくぐって右S1の縦隔側 に入るtracheal bronchusを認めた。術中はtracheal bronchusが存在するため上葉の可動性がやや悪く感 じられた。通常の上葉気管支とtracheal bronchusをそ れぞれ自動縫合器で切離した他は型通りに右上葉切 除術、ND2a-1を4ポートcomplete VATSで完遂し得 た。【考察】気管支分岐異常の発生頻度は低いが、右 上葉の異常が全体の約75%を占め最も多い。Tracheal bronchusは気管または主気管支から分岐し上葉に向か う枝が存在する分岐異常で、その頻度は0.25-4%と報 告されている。異常気管支の同定にはCTのMPR像や バーチャル気管支鏡が有用である。気管支分岐異常の 存在は術式はもちろん術中気道管理にも影響すること があるため、術前にその走行を十分確認しておく必要 がある。

・第59回日本小児外科学会学術集会(東京)2022.5 Santulli回腸瘻造設術後に絞扼性イレウスをきたした1例 (福山医療センター 小児外科)

阪 龍太、井深 奏司、塚田 遼 【はじめに】重症心身障がい児において呑気による腸 管拡張が腸管の捻転にいたることはまれではない。今 回、われわれは繰り返す腸管捻転にともなう絞扼性イ レウス対しSantulli回腸瘻を造設した児において、回 腸瘻を軸とした捻転による絞扼性イレウスを経験した ので報告する。【症例】15歳男児。早産・超低出生体 重児であり、脳性麻痺・てんかんを合併していた。胃 瘻造設・喉頭気管分離後であり、胃瘻から経腸栄養を 行っていた。13歳時に2度目の絞扼性イレウスを認め 小腸切除・回腸瘻造設を行った。その後腸瘻周囲皮膚 炎が高度となり、腸瘻自体も陥凹傾向となったため腸 瘻閉鎖を予定したが、両親の希望で腸管のガス抜きの ためSantulli型の回腸瘻を造設することとなった。腸 瘻から吻合部を8cmとし、自動縫合器を用いて腸間膜 対側で側々吻合を行ったのちに口側回腸を腸瘻として 造設した。腸瘻から回盲部までは20cm。術後は腸瘻か ら多量の排ガスが得られるようになり腹部膨満は改善 していた。15歳時に嘔吐を認め受診。腸瘻から造影を 試みたがカニュレーション困難であり、造影CTで腸管 の捻転による絞扼性イレウスと診断、緊急手術を行っ た。開腹時回腸の色調は不良であり、癒着を剥離しな がら口側腸管を患者左側に引き出していくと捻転が解 除された。Santulli回腸瘻を軸として腸管が捻転して いたと考えられた。吻合部から腹壁までの距離がやや 長いこと、腸瘻の向きがややねじれていることが判明 したが、全身状態不良であり、整復のみに留めた。腸 管の色調はある程度回復したため腸管切除は行わな かった。術後経過は良好で術後半年イレウスの再発は 認めていない。腸管捻転のリスクがあるため腸瘻再造 設について家族に説明を行っている。【考察】Santulli 型の腸瘻は安全弁としての排ガスのために有用である が、脚の長さや腸管の向きは造設時によく確認するべ きである。

·第58回日本肝癌研究会(東京)2022.5

C型肝炎治療歴と飲酒歴のある肝硬変を背景に混合型肝癌 と細胆管細胞癌が同時性に肝両葉別区域で発生した1例

(福山医療センター)

坂田 雅浩、伏見 崇、北田 浩二 德永 尚之、内海 方嗣、表 梨華 園部 宏、金吉 俊彦、稲垣

【はじめに】第22回全国原発性肝癌追跡調査によ れば、原発性肝癌のうち混合型肝癌は1.0%、細胆管 癌(CLC)は0.5%の発生率であり、ともに極めて稀な 腫瘍である。WHO分類第5版において、混合型肝癌 亜分類としてのsub type with stem cell featuresは廃 止された。また、CLCは小型胆管型胆管細胞癌の一 亜型として位置づけられている。いずれの腫瘍も発 ・小線源治療部会第24回学術大会(東京)2022.5 癌機序については未だ不明である。【症例】症例は 70歳代男性。C型肝炎の既往、アルコール性肝硬変 で断酒によって背景肝予備能はChild-Pugh Score 6 点 (GradeA)。Liver Damage (B) である。Dynamic CTおよびGd-EOB-DTPA MRIで肝S3に10mm大(腫 瘍A)。肝S6に40mm大 (腫瘍B)を認めた。いずれも 初発である。腫瘍Aは動脈相で一部が濃染されるが

washoutは指摘困難、MRI肝細胞相や拡散低下像で その存在が明らかとなった。腫瘍Bは動脈相で全体が 濃染、門脈相から平衡相にかけてwashoutされた。腫 瘍マーカーはCEA: 3.91ng/mL、AFP: 5.16ng/mL、 CAI9-9:8.62U/mL、PIVKA-II:129mAU/mL、以 上より肝細胞癌(腫瘍Aは単純結節型、腫瘍Bは多 結節療合型)と臨床診断し、肝亜区域切除(Hr-S+ (S6+5).Hr-0 (S3))を行った。病理組織では、腫 瘍Aは細胆管増生様の構造を呈し腫瘍内に門脈域が 残存、肝細胞癌の並存は認ずCLCと診断した(腺管 構造の内面にEMA+、CK7+、粘液産生)。 腫瘍Bは古 典的な中分化型肝細胞癌と肝内胆管癌から成る混合 型肝癌と診断した(EMA-、粘液産生+)。非癌部は 肝硬変であった。【考察】同一肝の離れた区域に混合 型肝癌とCLCが初発でかつ同時に存在した例は過去 に報告がない。我が国の癌取扱い規約ではsmall duct typeの肝内胆管癌とCLCは区別されるが、本例もCLC と混合型肝癌中の胆管癌成分においてp53等の発現に 差が認められた。混合型肝癌の発生については、1) 肝細胞癌または肝内胆管癌の形質転換説、2) 肝幹 細胞・前駆細胞の癌化説が考えられているが、本例は 無治療の初発であり、前述の結果と合わせて2)説が 支持される可能性がある。本例の混合型肝癌病巣に CLC成分は指摘できず、肝内転移も否定的である。各 種免疫組織学的解析を含めて考察し、結果を提示す

・第103回日本消化器内視鏡学会総会(京都)2022.5 生物学的製剤(Tofacitinibを含む)にて粘膜治癒が 得られた潰瘍性大腸炎症例の再燃予測因子の検討

(福山医療センター 消化器内科)

豊川 達也、石川 順一、住井 裕梨 彬、住井 遼平、門脇 由華 中西 里美、原 林 友太、伏見 崇 上田 祐也、坂田 雅浩、野間 康宏 堀井城一朗、藤田 勲生

子宮頸癌放射線治療後の腟ダイレーターの利点と欠点

(福山医療センター 放射線治療科) 兼安 祐子、中川 富夫

(福山医療センター 放射線技術部門) 澁谷 皓平、松屋 亮平、上原 健二 山本 修平

(福山医療センター 産婦人科)

早瀬良二、山本 紀章 暖、今福 藤田 志保、岡田 真紀、山本 梨沙 杉原 花子、栗山 千晶

当院では、2014年より子宮頸癌に対する根治的また は術後放射線療法後の腟壁癒着や線維化を防ぎ、内 診時の疼痛を緩和したり、子宮頸部細胞診検査の施行 を可能にする目的で、希望する患者に腟ダイレーター の使用を試みてきた。現在までに、使用が有用であっ た症例と合併症を経験したので報告する。【利点】73 才、子宮頸癌4A期、化学放射線療法後、CRとなっ た。RT後から腟ダイレーターを使用していたが、徐々 に腫瘍マーカーSCCが上昇し、CCRT後1年で局所再 発を生じた。当初、原発巣再発は内診と細胞診/組織 診からは、不明であった。しかしその後、患者は腟ダ イレーター使用時に不正性器出血を来したため、再度 内診を施行したところ、再発腫瘍が認められた。患者 が腟ダイレーターを毎日使用していたため、接触出血 を来し、再発腫瘍を比較的早期に発見する事が出来 た。【**欠点**】61才腟癌(Tis,UICC2009)、既往歴: 55 才で子宮頸部腺癌に対して手術施行。腟癌に対して 30mm径のシリンダーを使用して、 腟腔内照射を施行 した。腔内照射後、1ヶ月で腟ダイレーターの使用を 開始した。4-5回使用後に、腟入口部の疼痛を自覚 し、ダイレーター使用を中止した。内診では明らかな 裂傷はなかったが、会陰部の疼痛が高度になり、坐位 になると 疼痛が悪化するため、座れなくなった。 高圧 放射線療法を2回施行し、徐々に疼痛は改善してき た。【結語】腟ダイレーターを使用していたことで再 発腫瘍の早期発見に繋がった。一方、数回の使用で腟 壁裂傷を生じた症例があったため、以降、初回使用時 は、外来で主治医の指導のもとに使用してみるのがよ いと考えた。

·第30回日本乳癌学会学術総会(Web)2022.6 周術期化学療法終了後短期間で再発したHER2陽性進行 乳癌に対しT-DM1が著効し長期に奏効維持している1例 (福山医療センター)

髙橋 寛敏

·第30回日本乳癌学会学術総会(Web) 2022.6 乳腺Solid papillary carcinomaの2例

> (福山医療センター 乳腺・内分泌外科) 松坂 里佳、高橋 克敏、三好 和也 ·第44回日本癌局所療法研究会(大阪) 2022.7 (福山医療センター 放射線科) 中川 富夫、兼安 祐子

(福山医療センター 病理) 梨華

【はじめに】乳腺Solid papillary carcinomaは、乳 管内で充実性乳頭状に増殖する乳管癌の特殊型で比 較的稀である。高齢者に好発し、予後は良好とされ ている。今回我々は、乳腺Solid papillary carcinoma を2例経験したので若干の文献的考察を加えて報告 する。【症例①】68歳女性、腫瘤自覚を主訴に受診。 左乳房DC区域に硬結を蝕知。マンモグラフィーで L-MLO-Mにdistortion、USで左DC区域に低エコー 域を認めた。針生検では、浸潤性乳管癌、ホルモン受 容体陽性、HER2陰性、Ki-67 7%のluminal-Aであっ た。乳房切除及びセンチネルリンパ節生検を施行し、 術後の病理標本では、乳管内増殖と一部に粘液産生 を認めた。synaptophysin陽性、chromograninA陰性 で、Solid papillary carcinomaの診断で、ホルモン受 容体陽性、HER2陰性、Ki-67 5%、luminal-Aであっ た。現在は術後の補助療法としてホルモン療法中で、 再発なく経過している。【症例②】78歳女性、血性乳 頭分泌を主訴に前医受診。右乳房C区域に20mm大の 腫瘤を蝕知。MMGで境界明瞭な分葉状高濃度腫瘤、 USで18x19x18mmの境界明瞭な低エコー腫瘤を認め た。針生検では、浸潤性乳管癌、ホルモン受容体陽 性、HER2陰性、Ki-67 25%のluminal-Bであった。乳 房切除及びセンチネルリンパ節生検を施行し、術後の 病理標本では、乳頭状あるいは胞巣状の増殖を認め、 synaptophysin陰性、chromograninA陰性であった。形 態学的にSolid papillary carcinoma with invationの診 断となり、ホルモン受容体賜性、HER2陰性、Ki-67 32%、luminal-Bであった。現在は術後化学療法中であ る。【考察】乳腺Solid papillary carcinomaは乳管内 に充実性乳頭状増殖する乳管癌で、細胞内外に粘液 貯留と神経内分泌分化を示すことが報告されている。 頻度は全乳癌の1%未満から1.7%と比較的稀である。 平均年齢は70歳台と高齢者に多く、予後は良好という 特徴があり、報告された症例の多くはホル モン受容体 陽性、HER2陰性のluminal-Aであるが、遠隔転移例も 報告されている。5th Edition・WHO classification of epithelial tumours of breastではPapillary neoplasms の項目にSolid papillary carcinomaとして明記されてい る。

局所療法としての胃GISTに対する腹腔鏡下手術の検討 (福山医療センター 消化器外科)

大塚 眞哉、濱野 亮輔、近藤 碧 櫻井 湧哉、內海 方嗣、北田 浩二 德永 尚之、宮宗 秀明、常光 洋輔稲垣 優

【目的】胃GISTに対する標準治療は胃局所切除と され、低侵襲の腹腔鏡下手術の良い適応であるが、 部位、大きさ、形態で術式や難易度が異なる。腹腔 鏡手術を中心に手術手技並びに治療成績について報 告する。 【方法】 2005年1月から2022年3月までの胃 GIST手術症例60例を対象にした。【成績】腫瘍の局 在部位はUpper38例、Middle18例、Lower 4例、平均 腫瘍経4.1cm、発育形式は内腔発育型又は壁内型40 例、壁外発育型20例であった。手術方法は開腹手術 28例、腹腔鏡下手術32例であった。開腹手術では胃 局所切除は22 例 (78%) であったが、腹腔鏡下手術 では胃局所切除30例(94%)であり、うち単孔式手術 は3例、LECSは9例であった。手術時間、出血量、 腫瘍径、術後在院日数は有意に腹腔鋭下手術の方が 低かった。腹腔鏡下手術としてアプローチの難しい内 腔発育型及び壁内型は22例認め、うち2例はLCSに て全周漿膜切開しエンドループにて絞り込む、所謂 壁外発育型への反転法にて単孔式手術を施行した。 うち9例はLECSで行い、5例は胃壁を吊り上げて胃 内容液や腫瘍細胞の腹腔内への散布を予防するいわ ゆるCrown法にて行い、3例はNEWS法、1例は反転 法 (CLEANNET) にて行った。Modified-Fletcher分 類によるリスク分類では超低及び低リスク49例、中リ スク5例、高リスク6例であった。再発は開腹手術3 例、腹腔鏡下手術1例に認め、5年生存率は100%、5 年無再発生存率は98%であった。【結論】5cm以下の 症例はほぼ全例、腹腔鏡下に外科切除しておりアプ ローチの難しい内腔発育型や壁内型腫瘍に対しては 反転法やLECS法も駆使して、良好な治療成績を上げ ており有用な術式と思われた。

・第41回日本小児内視鏡外科・手術手技研究会(岡山)2022.10 葛西手術後9日目に肝門部出血を来たし肝門部空腸再吻合術 を施行した一例

> (福山医療センター 小児外科) 塚田 遼、竹村理璃子、井深 奏司 坂 龍太

・第71回日本アレルギー学会学術大会(東京)2022.10 コントロール不良喘息として紹介されたが、喘息が 主病態ではなかった学童6例の検討 (福山医療センター 小児科) 藤原 倫昌、大平 純也、松尾 逸平 坂本 朋子、荒木 徹

【背景】小児気管支喘息治療・管理ガイドラインの 普及により、小児喘息のコントロールレベルは大きく 向上した。その一方、プライマリケアの現場では喘息 のようなcommon diseaseは過剰診断・治療となる傾向 が高い。【目的】コントロール不良喘息として紹介さ れたが、喘息が主病態ではなかった学童の実態を明ら かにすること。【方法】2019年4月から2021年12月に コントロール不良喘息として紹介された症例のうち主 病態が喘息ではなかった学童6例を対象とした。診療 録から年齢、性別などの背景、治療内容、最終診断、 転帰を抽出して後方視的に検討した。【結果】6例の うち気管支喘息は2例のみで、肺動静脈瘻と百日咳を 各々合併していた。最終診断が気管支喘息ではなかっ た4例のうち1例はびまん性汎気管支炎で、残りの3 例は自閉症スペクトラム障害を背景とした心因性咳嗽 と診断した。全例で高容量吸入ステロイド薬をはじめ とするstep4の治療に加えて、全身ステロイド投与が頻 回に行われていた。全例で吸入ステロイド薬の中止ま たは減量を行い、全身ステロイド投与や予約外受診を 要することもなくなった。【結論】コントロール不良の 気管支喘息児を診療する際には、定期的に診断の見直 しや合併症の検索を行うべきである。

Japan Digestive Disease Week (JDDW 2022 FUKUOKA)
 第64回消化器病学会大会 (福岡) 2022.10
 当院における消化管再建術例に対するダブルバルーン内視鏡の実績

(福山医療センター 消化器科)

原 友太、豊川 達也、住井 裕梨 林 里美、中西 彬、門脇 由華 伏見 崇、上田 祐也、坂田 雅浩 野間 康宏、堀井城一朗、藤田 勲夫 金吉 俊彦

【目的】消化管再建術後例の胆道結石や胆管炎、膵炎に対する内視鏡的治療のアプローチとしてダブルバルーン内視鏡が選択されるようになり、当院でも乳頭到達率、治療成功率の向上を認めている。今回、当院におけるダブルバルーン内視鏡を用いたERCP(DB-ER-CP)の治療実績について後方視的に検討してみた。【方法】当院で2012年1月から2022年2月に施行したDB-ERCP症例、全158例についてカルテ上の情報を基にデータを収集し、検討を行った。【成績】症

例は全158例で男性68例、女性90例、平均年齢は73.6 歳 (31-92)、術式はRoux-en-Y再建77例、Billroth II 再建29例、Child (変) 法52例であった。疾患は胆管 結石・膵管結石が84例、胆管炎49例、膵炎11例、胆 管がん8例、膵癌5例、熱源精査目的が1例であった 検査時間は平均88.9分 (18-260) であった。乳頭到達 率は92.4%(158例中146例)で、非到達例12例のうち 11例は検査時間が長くなったため断念し、1例は途 中でスコープの上下アングルのワイヤーが断線したた め検査中断となっていた。合併症は膵炎4例、出血2 例、穿孔1例であった。2012年1月から2017年12月ま での79例(前半)と、2018年1月から2022年2月まで の79例(後半) を比較すると、検査時間について、前 半は平均107.8分であったのに対し、後半は平均70分 で短縮していた。また、乳頭到達率については前半で 91.1%に対し後半で93.7%と若干向上していた。胆管結 石は前半47例で結石除去成功は39例(83%)、後半37 例中結石除去成功は36例 (97%) と結石除去率も向上 していた。【結論】当院のDB-ERCP症例について検 討したところ、経時的に検査時間が短縮し、乳頭到達 率も若干向上していることが確認できた。再建術式に 合わせて操作に工夫が必要であり簡単な手技ではな いが、穿孔を含めた合併症に注意しながらも適応のあ る患者には積極的に施行すべき検査であると考える。

Japan Digestive Disease Week (JDDW 2022 FUKUOKA)
 第104回消化器内視鏡学総会(福岡) 2022.10
 大腸憩室炎における合併症リスク因子の検討

(福山医療センター 消化器科) 藤田 勲生、石川 順一、住井 裕梨 住井 遼平、中西 彬、林 里美 門脇 由華、原 友太、伏見 崇 上田 祐也、坂田 雅浩、野間 康宏 堀井城一朗、豊川 達也

・第139回中部日本整形外科災害外科学会・学術集会(大阪)2022.11 **尺骨非定型骨折の2例**

> (福山医療センター 整形外科) 中居 祐大、宮本 正、日野 知仁 宮澤 慎一、甲斐 信生、渡邉 典行

【はじめに】ビスホスホネート製剤の長期投与に関連する非定型骨折は大腿骨での発生がよく知られており、全大腿骨骨折の0.5~1%と報告されている。しかし、近年では尺骨に生じる症例も散見される。尺骨非定型骨折を治療した2症例を経験したので報告す

る。【症例】症例1:88歳女性。骨粗鬆症に対しビス ホスホネート製剤を処方されていた。明らかな受傷機 転なく左前腕痛を自覚し、前医受診、左尺骨骨折と診 断されギプス固定とテリパラチド製剤にて保存加療さ れていたが骨癒合得られず、手術を希望され当科紹介 となった。骨折部は偽関節形成しており、可及的に新 鮮化した後、肘頭からの骨移植を併用したplate固定を 施行した。術後4か月で骨癒合が得られた。症例2: 82歳女性。10年以上前からビスホスホネート製剤を処 方されていた。明らかな受傷起点なく左肘痛を自覚さ れ、前医受診、左尺骨骨折と診断され当院紹介となっ た。骨折部をdrillingし、肘頭からの骨移植を併用した plate固定を行った。術後テリパラチド製剤開始してい たが副作用のため2か月で中止した。現在術後1年経 過しており、骨癒合傾向であり、疼痛消失している。 【考察】非定型尺骨骨折の報告は少なく、比較的稀な 疾患であるため、標準化された治療方針は確立されて いない。骨癒合遷延の傾向があり、偽関節形成を認め る症例も少なくないため、手術時にはdrillingや骨移 植など、骨癒合を促進させることが重要であると考え る。

・日本臨床麻酔学会 第42回大会(京都)2022.11 術中に一過性ST上昇を認め,術後に冠動脈攣縮から 心停止に至った頭頸部手術の一例

> (福山医療センター 麻酔科) 岸田 牧子 (岡山大学病院 麻酔科蘇生科)

翼、松岡 義和、森松 博史 吉田 非心臓手術における周術期冠動脈攣縮は、稀である が重篤な合併症である。頭頚部手術後に冠動脈攣縮 によって心停止をきたした症例を経験したので報告す る。症例は70代女性。口腔底癌に対し全身麻酔下に舌 口腔底全摘、下顎亜全摘、気管切開、頚部リンパ節郭 清および再建術を施行された。20歳代に詳細不明の狭 心症の既往があったが自覚症状はなく術前の心電図検 査でも異常を認めなかった。術中に誘因なく四肢誘導 でST上昇を認めたが3分間程で自然に改善し、以降 は心電医変化を認めなかった。11時間半の手術の後、 挿管・鎮静下に集中治療室へ入室した。入室5時間後 に誘因なく2度房室ブロック・徐脈から血圧低下・心 停止へ至り、2分間の心肺蘇生の後に心拍再開した。 蘇生後の心エコーで心室前壁中隔の局所壁運動異常 を認めたため、緊急冠動脈造影を施行したが、有意狭 窄はなく臨床的に冠攣縮性狭心症と診断された。その

後の経過は問題なく術後1日目に抜管し、術後2日目 に一般病棟へ転棟した。経時的に変化するST上昇所 見は急性心筋梗塞や冠動脈攣縮を疑う必要があり、本 症例の場合も術中からの積極的な対応をすべきだった と考えられる。

・第36回日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会総会(兵庫)2022.11 当院における腹腔鏡下腎部分切除術の手術成績

(福山医療センター)

長谷川泰久、藤田 曙、行廣 和真 増本 弘史

【目的】手術支援ロボットのない当院での腹腔鏡下 腎部分切除術の手術成績を検証。【対象と方法】対 象は2011年9月より2022年3月に腹腔鏡下腎部分切除 術を施行した80例(術者8名)。アプローチは腹腔36 例後腹膜44例であった。腫瘍径 (中央値) は25mm、 RENAL nephrometry score (RNS) の中央値は7.6以 下が35例、7-9が33例、10以上が12例であった。2019年 12月以降より可能な症例に限りinner suture施行後の early unclampingを導入し、18例に施行した。【結果】 手術時間(中央値)は176分、気腹時間(中央値)157 分であった。腎盂開放を36例(45%)に認**めた**。腎阻 血時間(中央値)は21分で25分以内が52例(65%)で あった。出血量(中央値)は70ml、同種血輸血は1例 (1.3%) に施行。術中術後合併症は12例(15%)、う ちClavien-Dindo分類grade3以上は4例 (5%) に認め た。70例(87.5%)が病理学的に悪性所見を認め、良 性疾患の2例 (2.5%) にRM陽性を認めた。Trifecta達 成は48例(60%)であった。再発は2例(2.9%)に認・第109回日本消化器病学会総会(長崎)2023.4 めた。【結論】比較的良好な成績で安全に施行されて いると考えるが、さらなる手術成績向上を目指し、可 及的早期に手術支接ロポットの導入が望まれる。

· 第84回日本臨床外科学会総会(福岡) 2022.11 超高齢者に対する胆道癌手術の適応と限界

(福山医療センター 外科)

内海 方嗣、北田 浩二、德永 尚之 碧、柚木 宏介、櫻井 湧哉 近藤 濱野 亮輔、宮宗 秀明、常光 洋輔 大塚 真哉、稲垣 優

【はじめに】胆道癌手術は侵襲が大きく、術後合併 症が多い。さらに再発転移率も高く予後不良である。 本研究では80歳以上の超高齢者胆道癌手術の適応と 安全性を評価することを目的とした。【対象と方法】 2008年7月から2022年3月の期間に当院で胆道癌 の手術を施行した136症例を対象とし以下の内容を retrospectiveに検討した。80歳以上の高齢者と80歳未 満の非高齢者の2群に分け治療成績の比較を行った。 さらに全生存期間に対する予後規定因子の解析を行っ た。【結果】高齢者群は44例(32.4%)であった。疾患 は肝内胆管癌32例、胆嚢癌37例、胆管癌32例、乳頭 部癌20例、肝門部胆管癌15例であった。高齢者群で 有意に術前の栄養状態の低下を認めた。出血量、手術 時間、合併症発生率、在院日数には両群に差は認めな かった。全生存期間と無再発生存期間はともに両群で 差を認めなかった。全生存期間に対する予後規定因子 の多変量解析において、全症例では腫瘍の分化度、リ ンパ節転移陽性で有意差を認め、高齢者では腫瘍の 分化度、リンパ節転移陽性、 PNI42以下で有意差を みとめた。【結論】胆道癌術後において高齢者の外科 治療成績は非高齢者と変わりなく安全に施行可能で ある。しかし高齢者群では術前より栄養状態の低下を 認め、PNI42以下が独立予後規定因子となっており、 低栄養症例では栄養療法の介入が必要である。

第35回日本内視鏡外科学会総会(愛知) 2022.12 右側肝円索を伴う胆嚢癌に対して腹腔鏡下胆嚢摘出後に 二期的肝床切除を行った1例

(福山医療センター 消化器外科)

柚木 宏介、内海 方嗣、櫻井 湧哉 濱野 亮輔、德永 尚之、宮宗 秀明 常光 洋輔、大塚 真哉、稲垣 優

免疫チェックポイント阻害薬(ICI)による消化管障害 の検討

(福山医療センター 消化器内科)

藤田 勲生、何本 佑太、住井 裕梨 石川 順一、住井 遼平、門脇 由華 友太、伏見 崇、上田 裕也 坂田 雅浩、野間 康宏、堀井城一朗 豊川 達也

【目的】近年、ICIの様々な癌腫への有効性が報告 され、適応が拡大されてきている一方で、免疫関連 有害事象 (irAE) を生じることがあり、消化管障害 による下痢や血便も報告されている。今回我々は、 irAEの消化管障害の特徴や発症のリスク因子を明ら かにすることを目的とした。【方法】当院で2018年1 月から2020年12月の間に新規にICI投与を開始した 181例を後方視的に検討した。【結果】対象の年齢中

央値は70歳(36-90)、癌腫は非小細胞肺癌が107例 と最も多く、投与薬剤はPembrolizumab (Pemb) 89 例、Nivolumab (Nivo) 43例、Atezolizumab (Atezo) 29例、Durvalumab (Dur) 6例、Ipilimumab+Nivo (Ipi+Nivo) 14例であった。下痢か血便を伴った消化 管障害は21例 (11.6%) で、CTCAEはGrade1が9例、 Grade2が7例、Grade3が5例であった。投与開始か ら消化管障害発症までの日数中央値は65日(7-341) で、原因薬剤はPemb8例、Ipi+Nivo6例、Nivo5例、 AtezoとDurが1例ずつであった。CT検査は13例に施 行されており、2例に腸管壁の肥厚を認めたが、11例 には異常所見を認めなかった。大腸内視鏡検査は9例 に施行されており、全大腸に浮腫状粘膜で発赤びら んを4例に認め、1例は回盲部に潰瘍を認めていた。 治療はGrade3の4例とGrade2の2例に副腎皮質ステ ロイドが使用され、発症後のICIは休薬が5例、休薬 後再開が9例、継続が7例であった。消化器症状は 不変が8例、再開後の再燃が1例、改善が12例であっ たが、ステロイド投与例は全例で改善していた。消化 管障害の発症に関するリスク因子を検討したところ、 lpi+Nivo投与例が他のICI投与例と比較して有意に消 化管障害を増加させる因子であった。【結論】消化管 障害はIpi+Nivo投与例で生じやすいが、いずれのICI でも生じる可能性があり、発症までの期間が長い症例 もあるため、常にirAEを念頭におきながら、休薬やス テロイド加療を速やかに行うことが望ましい。

・第3回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー感染症学会(和歌山)2023.4 好酸球性副鼻腔炎のDupilumab治療中に好酸球性肺炎 の増悪を認めた1例

> (福山医療センター 耳鼻咽喉科・頭頸部外科) 福島 慶、竹内 薫、中谷 宏章 (鳥取赤十字病院 耳鼻咽喉科) 竹内 裕美

難治性慢性副鼻腔炎症例に対して近年、抗体製剤の治療ができるようになった。デュピルマブは2020年3月に鼻茸を伴う慢性副鼻腔炎に保険適応となり3年が経過する。このデュピルマプは好酸球やB細胞、肥満細胞などの細胞上にあるIL-4Raに対する抗体で、IL-4、IL-13両方のシグナル伝達を阻害する。今回、好酸球性中耳炎、好酸球性肺炎、気管支喘息を合併している好酸球性副鼻腔炎に対してデュピルマプで治療し、ステロイド減量中に好酸球性肺炎が悪化した症例を報告し、治療法を考察する。症例は59歳女性。合併症として好酸球性中耳炎、好酸球性肺炎、気管支喘

息、既往歴に45歳で乳癌治療。現病歴は鼻閉、嗅覚低 下、耳閉感で受診し、55歳時に内視鏡下鼻副鼻腔手 術を施行。以後、嗅覚障害は改善したが、耳症状の増 悪軽快を繰り返し、右鼓膜チューブ挿入。内視鏡下鼻 副鼻腔手術以降、中耳炎の急性増悪時には経ロステ ロイド薬を短期増量しながら継続していた。58歳時に デュピルマブを導入し耳漏は軽減したが、経口ステロ イド薬漸減中に肺炎を発症し、呼吸器内科入院となっ た。入院時末梢血好酸球数は16,443/μ1(63%)、肺 胞洗浄液でも好酸球増加を認め、好酸球性肺炎増悪 の診断でステロイド点滴治療を施行し軽快した。現在 経ロステロイドを漸減継続中である。好酸球性肺炎合 併した好酸球性副鼻腔炎の治療でデュピルマブを導 入し経口ステロイド薬の減量を行う場合、経口ステロ イド薬の減量は血中好酸球数や症状をモニターしなが ら慎重に行わなければならない。経口ステロイド薬を 漸減して、好酸球数の増加を認めた場合、好酸球数が 減少するまでその量を維持量とするか、もしくは漸増 することが必要である。今後、デュピルマブの長期治 療のデータを期待する。

・第105回日本消化器内視鏡学会総会(東京)2023.5 生物学的製剤治療にて粘膜治癒が得られたクローン病症例 の効果減弱予測因子の検討(長期経過観察例について)

> (福山医療センター 消化器内科) 豊川 達也、中西 彬、住井 遼平 上田 祐也、野間 康宏、堀井城一朗 藤田 勲生

【目的】クローン病(CD)治療に生物学的製剤が 有用であり、粘膜治癒 (MH) を治療目標にすること で再燃を防止できる。ただし、MHが得られた症例で も効果減弱を来たすことがあるのも事実である。今回 われわれは、長期間経過観察できているクローン病患 者で生物学的製剤にてMHが得られた後に効果減弱し た症例を検討し、その予測因子について検討すること を目的とした。【方法】当院にて生物学的製剤(Bio) にて治療し1年以上経過観察できているクローン病患 者でMHを確認できた60症例について、経過中に効果 減弱を来たした症例と来さなかった症例に層別化し、 Bio導入時の患者背景、内視鏡所見、臨床データを比 較検討した。今回の効果減弱の定義は、経過中に症状 等の悪化により治療強化または製剤変更などを行なっ た症例とした。【結果】対象の60例中、Bio導入後の 経過観察(平均86.8ヵ月、12-200ヵ月)中に再燃した のは23例 (再燃率38%) であった。効果減弱あり23例 となし37例に層別化し検討したところ、単変量解析で はBio導入時の白血球数が効果減弱あり群で有意に高 値であり (平均8100/µIvs 6400/µI, p=0.038)、CRP も有意に高値であった (平均2.96mg/di vs 1.46mg/ di,p=0.046)。また、有意差はないものの効果減弱あり 群で手術歴のない症例が多い(22% vs 43%,p=0.090) 傾向を示した。Bio導入時の疾患活動性やBio製剤の 既往、内視鏡所見については両群間で有意差を認め なかった。【結論】今回の当院での検討では、CD治療 においてBio使用にてMHが得られても40%近くが効果 減弱を来していた。またその予測因子としてBio導入 時の白血球数やCRP値が重要であることが判明した。 すなわちBio導入時にこれらの数値が高値の症例は MHが得られても効果減弱リスクが高いことを念頭に おいて治療に努めるぺきである。このことは今後CDに 対するBio導入および導入後の治療ストラテジー構築 に非常に重要な知見と考えた。

・第31回日本乳癌学会学術総会(神奈川)2023.6 Strut Adjusted Volume Implant(SAVI)による乳房温存 術後の放射線治療の経過

> (福山医療センター 放射線治療科) 兼安 祐子、中川 富夫 (福山医療センター 乳腺・内分泌外科) 三好 和也、高橋 寛敏、松坂 里佳

【目的】早期乳癌患者を対象とし、乳房温存術後に SAVIによる小線源治療を行い、安全性、治療後乳房 の整容性/QOLを評価する。【対象】40歳以上、腫 瘍径3cm以下の乳管癌で乳房温存療法が予定されて おり、リンパ節転移および遠隔転移なしの患者。乳房 部分切除術または追加切除の断端陰性、センチネル リンパ節転移なし。非浸潤性乳管癌はセンチネル生検 省略も可。【方法】センチネルリンパ節転移陰性を確 認後、温存手術に引き続きSAVIスペーサーを挿入す る。永久標本での断端陰性確認後にSAVIアプリケー タに入れ換える。SAVIカテーテル外側1cm以上のボ リュームに、皮膚/胸壁への照射線量を制限するよう 調整する。線源停留位置/時間は、3D治療計画を用 いて最適化する。適切な照射線量が得られない場合、 アプリケータを抜去し、通常照射を行う。1回3.4Gy、 6時間以上の間隔を空けて1日に2回、5日間の RALSによる高線量率照射を行う。総線塁34Gy照射 後アプリケータを抜去する。【**結果**】2015年10月当院 IRBで承認、治療計画の見学等を経て2016年6月より 症例蓄積可能となり、2017年3月に治療開始、現在ま でに5例の治療を施行した。平均年齢56歳。線量制約 の平均値は各々PTV_EVAL;V90%:96.2% (≥90%)、 Skin;D1cc:67.6% (\leq 110%) 、Chest wall;D1cc:98.6% (≦110%)で、全例守られていた。治療後から現在ま で、整容性は全例良好で重篤な有害事象は認められ ていない。SAVIと皮膚との距離が5.1mmと小さかっ た症例1は、照射後、補助化学療法を開始し、照射終 了3ヶ月目にGrade2の皮膚炎を生じた。患者は全例、 SAVI治療を受けたことに満足していた。現在までに 局所再発はないが2例目は3年8ヶ月目に孤立性腸骨 転移を生じ、50Gyの放射線治療で制御された。また、 1例目と4例目はそれぞれ3年4ヶ月、3年時に対側 乳癌を生じ、温存療法を施行した。2、3例目に認め られたSAVI周囲のairやfluidは、手術時の縫合を工夫 することで4、5例目では認められなかった。【結語】 SAVIによる治療は、RALS保有施設で放射線治療医 と乳腺外科医が協力出来れば、適格条件を有する患 者にとって、有効な治療と考えられる。

・第73回日本東洋医学会学術総会(福岡)2023.6 腹痛を目標とした大建中湯の使用について ~当院救急外来での使用状況調査から~

(福山医療センター)

坂田 雅浩

腹痛が一般的な目標であった。【目的】腹痛に対す る大建中湯の使用状況について調査する。【方法】 2015年4月から2022年3月までに当院で漢方エキス製 剤が処方された患者5705例を対象とし、救急外来部門 での漢方薬処方実態、特に大建中湯の使用状況を調 査した。当院概況:年間平均救急患者数3800例、漢方 科の標榜はない。【結果】救急外来部門での漢方薬処 方記録は65例 (1.14%) のみであった。大建中湯は演 者の経験症例1名(発表で供覧する)を含めて合計8 例に処方されていた。そのうち5例が腹痛に対する処 方であった。いずれも漢方医学的には背景に寒証が存 在すると考えられた。【考察】近年、救急医療におけ る漢方の有用性が多く報告されており、これは漢方薬 が西洋薬にない特徴を備えている事が理由と考えられ る。その一つが冷え (寒証) の概念であるが、医学中 央雑誌で検索する限り、寒証の腹痛に対する大建中湯 の適応について、学術・学会誌での報告は意外にも数 例のみである。今後、寒証の西洋医学的な特徴を明ら かにすることで、日常臨床における大建中湯の適応範 囲がさらに拡大すると考えられた。

・第25回日本医療マネジメント学会学術総会(神奈川)2023.6 ・第78回日本消化器外科学会総会(北海道)2023.7 報告の基準作成や啓蒙活動による医師のインシデント 報告増加への取り組み

> (福山医療センター 外科) 大塚 真哉、稲垣 優

【目的】重大事故1件に300件のインシデントが存 在すると言われている(ハインリッヒの法則)。安全 な治療や検査を行うためには、インシデント報告の収 集、分析、対策は医療安全管理部の最も重要な仕事 の一つであるが、当院では特に医師からの報告が少な く、2018年医療安全管理部長として就任後、最重要 課題であった。 【方法】 2017年4月から2022年3月ま でのインシデント報告を基に分析を行った。【結果】 2017年度の報告は2903件あり医師からは78件(2.7%) と各部署に比べて低調であった(看護部79%、薬剤部 8.4%)。また報告者は26人で一人平均3回(14-1回) であった。全く報告しないものが医師全体の3/4を占 めており、明らかにインシデントを経験しても報告し ないものも居た。報告をしない理由としては①報告の 仕方が分からない、②何を報告したらいいかわから ない、③報告する必要がない・面倒などであった等で あった。①に対しては当院で採用しているインシデン ト報告分析支援システムについて直接指導を行い、② については2018年8月に「医師がインシデント報告を すべき25項目」としてA.医療行為に関わらず予期せぬ 急変事例(4項目)、B.医療行為にともなうもの(13 項目)、C.診断に伴うもの(2項目)、D.その他(6 項目)として一覧表にして周知徹底した。③に対して は医療事故に関する報道や過去の医療裁判の判例や 死亡事故症例の調査報告書等を基に「医療安全・医 療裁判ニュース | を毎月発行して 医療安全の必要性 を訴えた。また具体例によるオリジナルの全体講演 会も適宜開催した。2019年度は127件(全体の4.8%) と2017年比で63%の増加であり、コロナ禍で あった 2020年度は167件(同6.3%)、2021年度147件(5.9%) と順調に推移した。【結論】インシデント報告の基準 を作ることにより医師からの報告が増えて対策もより 行えるようになった。また、効果的な教育により医療 安全の意識が高まった。

·第31回日本乳癌学会学術総会(神奈川) 2023.7 術後補助療法に難渋した先天性門脈体循環シャント 合併乳癌の1例

> (福山医療センター) 髙橋 寛敏

術前肝細胞癌と鑑別困難であった肝血管管筋脂肪腫 の3切除例の検討

> (福山医療センター 外科) 柚木 宏介、德永 尚之、櫻井 湧也 内海 方嗣、北田 浩二、濱野 亮輔 宮宗 秀明、常光 洋輔、大塚 眞也

稲垣 優

【緒言】 肝血管筋脂肪腫(以下肝AML)は平滑筋、 血管および脂肪細胞由来の3つの成分が様々の割合 で混在する良性間葉系腫瘍である。構成成分により多 様な画像所見を呈し、肝細胞癌との鑑別に難渋する。 今回我々は肝細胞癌と鑑別困難であった肝AMLを経 験したため報告する。【症例】(症例1)52歳女性。 慢性B型肝炎のスクリーニング目的の画像検査で肝外 側区域に腫瘤を指摘され精査加療目的に当科紹介。 造影CTでは腫瘍は強い早期濃染と後期 wash out、 左肝静脈への早期還流所見も認めた。EOB-MRIでは T1WIでlow、T2WIで淡いhigh、DWIで拡散低下、肝 細胞相ではdefectを呈した。術前診断は肝細胞癌で 鑑別疾患に肝AMLを挙げ、肝外側区域切除を施行し た。病理組織学的検査で肝AMLと診断した。(症例 2) 38歳女性。慢性C型肝炎の経過観察中の画像検査 で肝外側区域に腫瘤を指摘された。1年後の経過観 察で腫瘤の増大を認め手術目的に当科紹介となった。 造影CTでは早期濃染、後期wash outを呈した。EOB-MRIではT1WIでlow、T2WIで淡いhigh、DWIで拡散 低下、肝細胞相ではdefectを呈した。肝細胞癌の術前 診断で腹腔鏡下肝外側区域切除を施行した。病理組 織学的検査で肝AMLと診断した。(症例3)72歳男 性。腰部脊柱管狭窄症の術前CTで肝後区域に腫瘤 を指摘され精査加療目的に当科紹介となった。造影 CTでは強い早期濃染と後期wash outを呈した。EOB-MRIではT1WIでlow、T2WIでhigh、DWIで拡散低 下、肝細胞相ではdefectを呈した。術前診断は肝細胞 癌で鑑別疾患に肝AMLを挙げ腹腔鏡下肝拡大亜区域 切除を施行した。病理組織学的検査で肝AMLと診断 した。【考察】肝AMLは1976年Ishakらによって初め て報告され、現在までに300例近い報告例があるが今 なお明確な治療戦略は確立されていない。診断が得ら れ一定の条件を満たせば経過観察も可能とされている が、肝細胞癌との鑑別が難しく手術を施行した報告を 散見する。生検での診断を推奨する報告もあるが正診 率78.1%との報告もあり確定診断に至らないこともあ る。また多血性腫瘍が故に生検による腹腔内出血や播

種の可能性があり慎重な対応が必要である。悪性転化する症例は少ないものの、経過観察中に21.4%の症例が増大傾向を示したと報告もありmalignant potentialを有する。悪性腫瘍と鑑別診断が困難な場合や診断出来ても増大傾向を示すものに対しては診断と治療を兼ねた外科的切除は許容され、低侵襲治療の選択がより重要になると考えられる。

・第78回日本消化器外科学会総会(北海道)2023.7早期胆嚢癌に対する腹腔鏡下全層胆嚢切除術の成績と安全性の検討

(福山医療センター 外科)

内海 方嗣、北田 浩二、柚木 宏介 常光 洋輔、德永 尚之、櫻井 湧哉 濱野 亮輔、宮宗 秀明、大塚 眞哉 稲垣 優

【はじめに】2022年4月より胆嚢悪性腫瘍に対する 腹腔鏡手術が保険適応となったが、早期胆嚢癌の正 確な術前診断は困難なことが多く、疑診例としての対 応を要する。当院では早期胆嚢癌(T1)疑診例に対し て腹腔鏡下全層胆嚢的手術+no12c LN samplingを基 本術式としている。【対象と方法】2015年から2022年 12月の期間に胆嚢癌 (T1) 疑診で腹腔鏡下全層胆摘 を施行し病理組織所見で胆嚢癌と診断された10症例 を対象とした術前画像所見、病理学的所見、治療成 績を評価し、治療戦略の妥当性を評価した。【結果】 術前腫瘍マーカー (CEA,CA19-9) は1例のみ高値で あった。造影CT、MRI、EUSで術前評価した壁深達 度はM:6例、MP:4例であった。病理組織学的所見 はTis/T1a/T1b/T2b: 3/2/2/3で12cリンパ節はすべ て陰性であり最終Stageは0/1A/1B/2B:3/2/2/3例で あった。術中胆嚢穿孔は認めなかった。Clavien-Dindo Ⅱ以上の術後合併症は認めなかったT2症例は全症例 で初回手術から約1-2カ月後に開腹にて肝床切除+ 領域リンパ節郭清を行った。T2症例は慢性胆嚢炎や 胆嚢腺筋症を合併しており広基性病変であった。術後 観察期間中央値13ヵ月 (8-93) で全症例無再発生存中 である。【結語】正確な術前深達度診断が難しく適応 は慎重に判断する必要があるが、胆嚢癌 (T1) 症例に 対して腹腔鏡下全層胆嚢摘出術は安全で有用な術式 である。

・第40回日本呼吸器外科学会学術集会(新潟) 2023.10 Pulmonary tractotomyと遊離皮下脂肪被覆の併用で 修復した胸腔ドレーンによる肺損傷の1例 (福山医療センター 呼吸器外科) 二萬 英斗、高橋 健司

【背景】胸腔ドレーン挿入は気胸や胸水貯留などに 対し広く行われる処置であり、呼吸器専門医以外が施 行することも多い。しかし肺損傷など重大合併症のリ スクも潜んでおり、呼吸器外科医は胸腔ドレナージの 合併症への対処法を熟知しておく必要がある。胸腔 ドーレーンによる肺損傷に対する手術を経験したので 報告する。【症例】80歳代、男性。既往に重度の肺気 腫があり、呼吸苦を主訴にかかりつけ医を受診した。 右続発性気胸の診断で当科へ紹介となり、胸腔ドレー ンを挿入し入院加療を開始した。ドレーン挿入前のCT では胸腔内に癒着が散見されたが、十分なスペースが ある位置からドレーンを挿入、特に抵抗なく肺尖方向 に進めることができた。胸腔ドレーン挿入後も肺拡張 が得られず多量の空気漏れが続いたため第2病日に CTを撮影したところ、胸腔ドレーンが右上葉肺実質 内に約6cmにわたり迷入していた。肺瘻の自然閉鎖は 見込み難いと判断し、第3病日に手術を施行した。胸 腔ドレーンを抜去した孔へ自動縫合器のアンビルを挿 入し損傷部を開放、開放された損傷部に認めた多量の 空気漏れは遊離皮下脂肪被覆で修復した。術後は空 気漏れの再燃なく経過し、術後3日目に胸腔ドレーン を抜去した。その後、約2週間のリハビリテーション を行い、在宅酸素を導入して退院となった。【考察】 Pulmonary tractotomyは貫通性肺損傷に対する肺温 存術式として報告されたが、本症例のような非貫通性 肺損傷に対しても応用できる。また肺瘻の閉鎖に遊離 脂肪被覆が有用との報告も近年散見される。重度気 腫肺に生じた胸腔ドレーンによる肺損傷にPulmonary tractotomyと遊離皮下脂肪被覆の併用が奏功した1例 を経験したので報告する。

・第65回日本小児血液・がん学会学術集会(北海道) 2023.9 腹部リンパ管奇形に対しシロリムスを使用した 1 例 (福山医療センター)

塚田 遼、井深 奏司、阪 龍太 【はじめに】リンバ管奇形は全身に発生しうるが、その中でも腹部リンパ管奇形は5%と稀である。また 個々の症例で病態が大きく異なり、治療の介入時期は確立されていない。今回、感染で発見された腹部リンバ管奇形に対しシロリムスを使用した症例を経験したので報告する。【症例】1歳5ヵ月の女児。11ヵ月時に発熱、腹部膨満を主訴に前医受診。腹部CT検査で多数の嚢胞を主体とした腹腔内巨大腫瘤を指摘さ

れ、当科紹介となった。血液検査でWBC13500/μI、 CRP17.7mg/dlと炎症反応の高値を認め、腹部リンパ 管奇形の感染と診断した。また画像から腫瘤に包まれ るように盲腸と上行結腸を認め、腫瘤の一部は後腹膜 への進展が疑われた。MEPMの投与を開始し一度は 改善したが炎症が再燃したため、試験腹腔鏡を施行 した。多数の嚢胞を回盲部から上行結腸の腸間膜に認 めた。嚢胞全切除は、回盲部切除を必要としたため可 及的に嚢胞壁を切開し開窓、ドレナージを行った。嚢 胞内容液は乳び様腹水であった。術後、速やかに炎症 は改善し術後11日目に退院となった。術後半年経過時 にMRI検査を施行したが、ドレナージ後に縮小した腫 瘤は再度、増大を認めた。シロリムスの内服を1.0mg/ 日、隔日で開始し、血中濃度を確認後に1.0mg/日の連 日内服に変更した。内服開始後6ヵ月時にMRI検査で 評価した。腫瘤は服用前と比較し80%以上の縮小率 を認めた。シロリムス内服による副作用は認めておら ず、現在、内服を継続している。【考察】腹部リンバ 管奇形の幼児例にシロリムスを使用し、腫瘤の著明な 縮小を認めた。腹部リンパ管奇形のシロリムス治療報 告例はこれまでなく、特に外科的切除による根治が困 難な症例においては、治療の選択肢の一つになる可能 性が示唆された。

·第88回日本泌尿器科学会東部総会(北海道) 2023.10 放射線性膀胱炎の発症リスクと治療に関する臨床的検討 (福山医療センター)

> 增本 弘史、河野晋太郎、藤田 曙 長谷川泰久

【緒言】泌尿器科や婦人科癌に対する放射線治療 (以下RT) 後の放射線性膀脱炎は、血尿による膀脱 タンポナーデを起こし、緊急処置が必要となり患者の QOLが著しく低下する有害事象である。【目的】当院 における放射線性膀脱炎の臨床経過をレトロスペクテ イプに検討する。 【方法】 2015年4月から2023年3月 までに当院で骨盤内RTを施行した泌尿器科癌243例 および婦人科癌303例について、放射線性膀脱炎に対 する治療法や発症リスクを検討した。【結果】発症年 齢は中央値73歳(36~86歳)、観察期間中央値52か 月(2~96か月)で、泌尿器科的な処置を要した放射 ・第33回日本小児外科QOL研究会(徳島) 2023.10 線性膀腕炎を全RT患者の9.5%の50例 (男性18例、女 性32例) に認め、婦人科癌による放射線性膀脱炎の頻 度が高かった。発症リスクは抗血栓薬の有無(18% vs 14%, P<0.01)、前立腺癌における根治RTに対する救 済RT (2% vs 14%, P<0.01) で有意に高かった。3回

以上、膀脱タンポナーデを繰り返した5例に対して高 圧酸素療法を施行し、いずれも施行後の経過は良好 であった。麻酔下の経尿道的電気凝固術を8例、尿路 変更まで必要であった症例は婦人科癌の5例 (尿管皮 膚瘻2例、両側腎瘻3例)であった。【結論】放射線 性膀脱炎は治療に難渋する症例も多く、症例に併せた 治療指針を早めに立てる必要がある。

·第141回中部日本整形外科災害外科学会·学術集会 (兵庫) 2023.10

後方要素の強直により椎体破壊が進行した腰仙椎移行部 脊椎炎の2例

(福山医療センター)

中居 祐大、渡邉 典行、甲斐 信生 宮澤 慎一、宮本 正、日野 知仁

【はじめに】びまん性特発性骨増殖症などに代表 される前方要素の強直はよく遭遇する病態であるが、 後方要素での強直はまれである。今回我々は、後方要 素の強直により椎体破壊が進行した腰仙椎移行部脊 椎炎の2症例を経験したので報告する。【症例】症例 1:59歳女性。X-5年より腰痛が出現し、腰椎椎間板 症、変形性腰椎症の診断で前医にて保存加療を行う も腰痛が増悪し、MRIでL5/Sの脊椎炎が疑われるた めX-3年に当院へ紹介。感染症は否定的と診断し、前 医で保存加療を継続するもX-1年より腰痛増悪してお り、当院へ再紹介となった。CTでは経過中に棘突起 間の強直を認め、椎体の骨破壊が進行していたため、 L5/S後方椎体固定術を施行し、術後1年で骨性癒合 を認めた。症例2:61歳女性。X-4年より腰痛が出現 し、X-2年に増悪したため近医受診。 化膿性脊椎炎と 診断、経椎弓根的にL4/Sのドレナージを施行された が、細菌は検出されなかった。X-1年より徐々に腰痛 が増悪したため、当院へ紹介となった。CTではL3/4 椎間関節の強直により、椎体の骨破壊を認めたため、 L4/S後方椎体固定術を施行し、術後8か月で骨性癒 合を認めた。【考察】棘突起間など後方要素での強直 は比較的まれな病態であり、本症例ではこれにより前 方要素である椎体に著明な骨破壊が生じたと考える。

総排泄腔遺残症術後に順行性洗腸による排便管理で QOL が向上した1例

> (福山医療センター) 岩﨑 駿

・第73回日本泌尿器科学会中部総会(奈良)2023.10当院の腹腔鏡下膀胱全摘除術+回腸導管における導管 尿管吻合の臨床学的検討

(福山医療センター)

藤田 曙

【目的】回腸導管は普及している尿路変更ではある が、導管尿管吻合は様々な方法が試みられている。そ こで当院における回腸導管の導管尿管吻合の臨床学 的検討を行った。【方法】2017年3月から2023年3月 までに当院で腹腔鏡下膀胱全摘除術(LRC)を施行 した55症例のうち回腸導管を選択した42例を対象にし た。回腸導管および導管尿管吻合は全例完全体腔外 で作成し、導管尿管吻合を弘前大法とNesbit法で後方 視的に比較検討した。【結果】年齢中央値71歳(51-88)、男性31例、女性11例、導管尿管吻合(弘前大法 13例、Nesbit法29例)であった。術後の合併症として 腎盂腎炎は6例(弘前大法2例、Nesbit法4例)を認 めた。術後の導管尿管吻合部狭窄は弘前大法で1例、 Nesbit法も1例で有意な差を認めず、術後の吻合部尿 漏に関しても弘前大法では0例、Nesbit法で2例であ り有意な差を認めなかった。気腹を終了し回腸導管作 成から手術終了までの平均時間に関しても弘前大法 で250分 (190-372) 、Nesbit法で269分 (157-466) で あり有意な差を認めなかった。退院までの日数は弘前 大法23日 (13-94)、Nesbit法23日 (13-53) であった。 【考察】当院における導管尿管吻合の方法においては 弘前大法とNesbit法のどちらにおいても術後の吻合部 狭窄や手術時間は変わらなかったため、施設において 施行し慣れた方法を選択することが重要と考えられ た。

・第37回日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会総会(鳥取) 2023.11 福山医療センターにおける腹腔鏡下仙骨膣固定術の 初期成績

> (福山医療センター 泌尿器科) 長谷川泰久、河野晋太郎、藤田 曙 増本 弘史

【目的】当院における腹腔鏡下仙骨腟固定術 (LSC) の初期手術成績を検証。【対象と方法】2020年3月より2023年6月までに骨盤臓器脱に対してLSCを施行した39例。術者は3名、卒後22年が27例、卒後25年11例、卒後7年が1例施行した。全例ダブルメッシュ法で施行し、子宮ありの29例に対しては子宮上部切断を行った。年齢は76(50-86)歳、BMIは23.3(16.4-34.6)kg/m²、術後観察期間は12.1(0-39)か月

であった。術前POPQ stageはⅢ9例、IVが30例で、うち直腸脱合併例は2例ありventral rectopexyを行った。NTRの既往は4例、TVMの既往は1例、下腹部手術既往は14例でS状結腸癌手術2例、直腸癌手術1例、直腸脱腹腔鏡手術1例、子宮筋腫手術7例、卵巣摘除1例、虫垂炎手術2例であった。【結果】手術時間は204(143-265)分、気腹時間は176(119-242)分、出血量は5(0-100)ml、輸血施行例はなし。術中合併症は膀胱損傷1例。術後合併症は一過性尿閉1例と熱発1例。今のところstageⅢ以上の再発は認めず、de novo SUIを7例に認め、1例にTVTを施行した。【結論】手術既往の多い症例群にもかかわらず、安全かつ有効、低侵襲にLSCを導入することができた。

・第65回日本消化器病学会大会 JDDW2023 (兵庫) 2023.11当院での胃癌に対するニボルマブ投与例の現状

(福山医療センター 消化器科)

住井 遼平、藤田 勲生、何本 佑太 住井 裕梨、石川 順一、中西 彬 原 友太、伏見 崇、上田 祐也 坂田 雅浩、野間 康宏、堀井城一朗 豊川 達也

【目的】ニボルマブは2021年に化学療法との併用 療法による「治癒切除不能な進行・再発胃癌」が保険 承認され、治療効果が注目されている。当院での胃癌 に対するニボルマプの治療成績と、免疫関連副作用 (irAE:immune-related Adverse Event) の関係性に ついて検証する。 【方法】 2017年6月から2022年8月 までに当院で胃癌に対してニボルマブを投与した44 症例について後方視的に検討した。【成績】全44例の 年齢中央値は71歳で、男性29例、女性15例であった。 投与開始時のPerformance status (PS) はPS 0が23 例、PS 1以上が21例であった。切除不能進行胃癌が 29例、術後再発例が15例であった。レジメン内容は5 例がニボルマブと化学療法の併用で、39例がニボル マブ単剤投与であり、2次治療以降でニボルマブを 使用したのが40例であった。観察期間の中央値は243 日であった。irAEの発生は13例(30%)で認め、内訳 としては皮膚障害(7例)、関節痛・筋炎(4例)、下 痢(6例)、肝機能障害(1例)、間質性肺疾患(1 例)、甲状腺機能障害(2例)であった。発症までの 期間は投与開始から1ヶ月程度が多く、筋炎症状、間 質性肺疾患、甲状腺機能障害で3例が投与中止となっ た。最良効果は、CR:1例、PR:5例、SD:13例、

PD:25例で、奏効率(CR+PR)が14%、病勢制御率(CR+PR+SD)は43%であった。irAEの発生の有無と治療効果の関連を検討すると、病勢制御率はirAE群で69%、非irAE群で32%、無増悪生存期間の中央値はirAE群で189日、非irAE群で54日、全生存期間の中央値はirAE群で1001日、非irAE群で592日であり、いずれもirAE群で良好な結果となった。【結論】胃癌に対してのニボルマブの治療では、irAE発生と治療効果の相関性が示唆される。irAEが発生した際にも、ニボルマブでの治療を継続する方法を探ることが重要と考える。

・第85回日本臨床外科学会総会 (岡山) 2023.11 術前評価指数を用いた高齢者の腹腔鏡下幽門側胃切除術 の安全性と有効性の検討

> (福山医療センター 消化器外科) 大塚 真哉、柚木 宏介、櫻井 湧哉 岡林 弘樹、内海 方嗣、濱野 亮輔 徳永 尚之、宮宗 秀明、常光 洋輔 稲垣 優

【はじめに】地域中核病院の当院では2005年に腹腔 鏡下幽門側胃切除を導入し、2012年から完全腹腔鏡 下幽門側胃切除を導入した。腹腔鏡下手術は低侵襲 手術であるが、手術時間や気腹といった循環動態に 与える影響が、高齢者に対しても安全かどうか検討を 行った。【対象·方法】2005年1月から2023年3月ま での早期胃癌を中心にT2N1 (cStage II A) までの257 例を対象とした。257例を75歳以上の77例(高齢群) と75歳未満の180例(非高齢群)に別けて検討を行っ た。術前評価指数としてPN、ASA、CCIなどを用い た。【結果】背景因子では性別、BMI、占拠部位、Hgb では有意差を認めなかった。しかし、PNIは高齢群 50.2、非高齢群52.3 (p=0.001)、ASA は高齢群(1: 60例、2:17例)、非高齢群(1:162例、2:18例) (p=0.01)、併存疾患指数CCIは高齢群(1以下:63 例、2以上:14例)、非高齢群(1以下:174例、2以 上:6例) (p=0.001) と高齢群で有意に悪い傾向に あった。手術時間、出血量、リンパ節郭清度、開腹移 行率、進行度、術後在院日数は有意差を認めなかっ た。Grade2以上の術後合併症は呼吸循環器系に関す るもの高齢群2例(2.6%)、非高齢群3例(1.7%)、 手術操作に関するもの高齢群で6例(7.8%)、非高齢 群で16例 (8.9%) 認めたが、共に有意差を認めなかっ た。高齢群でpStage II 以上を5例認めたが、長期予後 も良好であった。【考察】術前合併症の多い高齢者に

対しても腹腔鏡下幽門側胃切除は安全かつ有用な低 侵襲治療と考えられた。

・第85回日本臨床外科学会総会 (岡山) 2023.11 完全内蔵逆位と腸回転異常症を合併し、腸重積をきたし 肛門まで脱出した盲腸癌の1例

(福山医療センター 外科)

岡林 弘樹、柚木 宏介、櫻井 湧哉 内海 方嗣、北田 浩二、濱野 亮輔 德永 尚之、宮宗 秀明、常光 洋輔 大塚 真哉、稲垣 優

症例は62才の男性。腹痛・腹満を主訴に当院に救 急搬送された。初診時、腹部膨満、腹部全体に圧痛を 認めたが筋性防御は認めなかった。胸腹部CTで腸閉 塞、腸重積、多発肺転移、多発肝転移、多発リンパ節 転移と完全内蔵逆位・腸回転異常症を認めた。直腸指 診で肛門すぐに重積腸管触れ、先進部に2型腫瘤あ り。病理でGroup5、adenocarcinomaを認めた。CS (下 部消化管内視鏡)を施行したが重積は解除できなかっ た。来院後から泥状便・排ガスは継続してあり、腸閉 塞の増悪はないものの、再度CS行っても重積の解除 はできなかった。大腸の閉塞解除目的に手術を施行し た。術中所見は腸重積は解除されておらず直腸内に腫 瘍の先進部を触れた。non rotation型の腸回転異常症 を合併していたために、左上腹部に回盲部が位置して いた。回腸が盲腸内に引き込まれているように見えた が、用手的に重積の解除を試みるが不可能であった。 外観からは重積している腫瘍の基部がはっきりしない ものの、回盲部付近と思われ、口側は回腸末端で切 離した。摘出標本では、虫垂開口部あたりに基部を持 つ、盲腸癌の粘膜脱と思われたが、その後、病理診断 にて盲腸癌の腸重積症が確定した。完全内臓逆位症 と腸回転異常症を合併し、盲腸癌が重積し肛門まで脱 出するというまれな症例を経験したので報告した。

・第33回日本耳科学会 総会・学術講演会(群馬) 2023.11 炎症を繰り返した第一鰓裂性嚢胞の1例

> (福山医療センター 耳鼻咽喉・頭頚部外科) 中谷 宏章、福島 慶

【はじめに】第一鰓裂性嚢胞は鰓性嚢胞の中では比較的まれで、発生部位によっては粉瘤や耳下腺腫瘍と間違われることもあり、適切な治療が行われなければ、再発を繰り返すこともある疾患である。今回我々は、当初粉瘤と問違われ、不適切な手術治療を受けたために炎症を繰り返した症例を経験したので報告す

る。【症例】22歳女性。5、6歳頃から左耳後部の感 染を繰り返していたが、20歳時に他院皮膚科を紹介受 診。左耳後部粉瘤の診断で、局所麻酔下の手術を受け た。術中所見では嚢胞内からおから状の内容物の排出 があり、嚢胞壁の可及的な摘出が行われたが、術後1 週目に創感染を生じた。保存的治療により炎症は改善 したが、嚢胞遺残を疑われ、同院耳鼻咽喉科紹介。初 回手術から5か月後に全身麻酔下に再手術が行われ た。手術では顕微鏡下に耳後部~耳下部の皮下瘢痕 組織が摘出されたが、術中に嚢胞や瘻管様構造物は 確認できず、摘出組織からも嚢胞組織の遺残は確認さ れなかった。その後も感染を繰り返し2回目の手術か ら1年4か月後に当院形成外科に紹介となった。受診 日に施行されたMRI検査では左外耳道下方から耳下 腺背側に進展する膿瘍所見が認められ、病変部位とこ れまでの経過から第一鰓裂性嚢胞が疑われ、治療を依 頼され当科紹介となった。切開排膿処置と抗生剤投与 により感染のコントロールを行い、当科初診約1か月 後に手術を行った。病変は耳後部から耳下腺に及ぶた め、皮膚切開は耳下腺手術に準じたS字切開に耳後部 切開を加えたY字切開を行った。耳後部皮下瘢痕組織 中に嚢胞組織があり、嚢胞を含む瘢痕組織を耳介軟骨 から剥離すると嚢胞先端部はポインター直下の外耳道 皮膚に交通していた。嚢胞先端を外耳道から離断した 後、耳下腺浅葉に進展した嚢胞部は浅葉組織を付け、 病変部を摘出した。しかし、術後5か月目に炎症が再 燃した。再検したMRI検査では外耳道後壁裏面に小さ な嚢胞用病変が確認された。このため、再手術を勧め たが希望されず、その後5回の再燃をきたした。最終 的に初回手術後4年7か月目に再手術を行った。皮膚 切開は前回の手術創を利用した耳後切開を行った。皮 下の瘢痕組織を側頭骨から剥離していくと外耳道後壁 近くで嚢胞壁が確認された。嚢胞壁は外耳道皮膚に接 しており、外耳道皮膚から嚢胞壁を剥離していくと嚢 胞最深部はポインターの手前にあった。同部を外耳道 皮膚から慎重に剥離して病変を摘出した。摘出組織に は重層扁平上皮に囲まれた嚢胞を認め、一部に硝子軟 骨成分や脂腺などの皮膚付属器も確認された。術後 経過は良好で、術後1年目に施行したMRIでも外耳道 後方の嚢胞所見は消失していたが、現在術後1年10か 月を経過し、再発は認めていない。【考察】第一鰓裂 性嚢胞は非特異的嚢胞性腫瘤の所見を示す例も多く、 他の嚢胞性疾患との鑑別が難しい場合もあるが、本疾 患を念頭に置き、画像検査による外耳道との関連性の 確認や細胞診による内容物の確認を行えば、その診断

は必ずしも難しくはない。単なる皮下嚢胞や膿瘍と考えて不適切な治療を行えば再手術時の操作が困難となる。再発をきたさない手術を行うためには、術前に的確な診断を行い、本疾患を疑って手術を行うことがもっとも大切であると思われた。

・第65回日本消化器病学会大会 JDDW2023 (兵庫) 2023.11 当院における表在型十二指腸非乳頭部上皮性腫瘍に 対するUEMRの成績

(福山医療センター 消化器科)

原 友太、豊川 達也、何本 佑太 石川 順一、住井 裕梨、住井 遼平 中西 彬、門脇 由華、伏見 崇 上田 祐也、坂田 雅浩、野間 康宏 堀井城一朗、藤田 勲生、金吉 俊彦

【目的】十二指腸上皮性腫瘍に対する内視鏡治療 の成績については疾患の希少性から報告例が多くな い。近年、消化管内腔を水で満たし、局注を行わず切 除を行うUnderwater EMR (UEMR) が報告された。 手技の簡便さや術中の穿孔リスクが低いことなどから 当 院でも施行例が増えており、今回は当施設での成 績について後方視的に検討した。【方法】2019年8月 から2023年2月までの期間に、当院で表在型非乳頭部 上皮性腫瘍に対してUEMRを施行した16例について カルテに記載された情報を基に検討した。【成績】患 者の年齢は69歳、男性11例(69%)、女性5例(31%) であった。病変部位は乳頭より口側が9例に対し、肛 門側は7例と大きく差はなかった。病変は平均9.4mm で最大のものでも18mmであった。最終病理診断は腺 腫が14例、腺癌が1例、過形成性ポリープが1例で あった。一括切除できた症例は12例であり一括切除 率は75%であった。術中の偶発症としては出血を3例 (19%) に認めた。術中、術後ともに穿孔した症例は 無く、術後に出血を認めた症例も無かった。分割切除 となった症例も含め、これまでに局所再一発を認めた 症例は無い。【結論】当院での表在型非乳頭部上皮性 腫瘍に対するUEMRの治療成績について検討したと ころ、10mm未満の病変はすべて一括切除できていた が、10mmを超える病変では7例中4例が分割切除と なっていた。穿孔や出血など偶発症を恐れた結果と思 われるが、分割切除では局所再発率が高いとされてい ることから、手技の習熟により一括切除率を向上する ことが今後の課題と考えられた。

・第36回日本内視鏡外科学会総会(神奈川)2023.12 妊娠30週で腹腔鏡下胆嚢摘出術を施行した有症状 胆嚢結石症

(福山医療センター)

北田 浩二、抽木 宏介、櫻井 湧哉 岡林 弘樹、内海 方嗣、濱野 亮輔 德永 尚之、宮宗 秀明、常光 洋輔 大塚 真哉、稲垣 優

症例は31歳初産婦。妊娠28週から心窩部痛を自覚 するようになった。一旦、保存的に軽快したが、再 増悪したため、妊娠30週0日の時点で当院産科へ紹 介となった。血液生化学検査成績はWBC 10900、 CRP 0.05, AST 14, ALT 15, yGTP 55, T-Bil 0.4, pAMY 53で炎症マーカーの増加は軽微だった。腹部 超音波検査では、胆嚢は委縮していたが壁は把厚し多 数の結石を認め、Murphy's sign陽性であった。MRI では胆嚢壁肥厚と濃縮胆汁を指摘されたが、浮腫状の 変化は明らかではなかった。上部消化管内視鏡検査で 心窩部痛の原因となる病変がないことを確認し、軽症 急性胆嚢炎(Grade I)の診断となった。 短期間に強 い症状を繰り返しており、出産予定までの2か月間待 機するのは困難と判断し、同日、腹腔鏡下胆嚢摘出術 を施行した。超音波検査で子宮底の位置を確認し、心 窩部open法で12mmポートを留置した後、気腹し5mm ポートを3か所追加して手術を行った。手術時間93 分、出血量0mlであった。病理組織学的には好中球の 集族はないものの、厚い線維化と粘膜面の出血を認め 慢性胆嚢炎と診断された。術後経過は良好で、第5病 日に退院となった。以後、腹部症状は軽快し、妊娠41 週4日、健常な女児を経腟分娩した。

・第37回日本エイズ学会学術集会・総会(京都)2023.12 COVID-19パンデミックがエイズ中核拠点病院の HIV/AIDS診療に及ぼした影響とパンデミック下に おけるエイズ診療の課題

(福山医療センター 感染症内科)

齊藤 誠司

(福山医療センター 広島県東部地区エイズ治療センター) 山崎 由佳、河野 泰宏、安岡 悠典 野田 綾香、野村 直幸、木梨 貴博 飯塚 暁子、福井 洋介

【はじめに】当院は広島県東部地区のエイズ診療を支える地方都市に位置する中核拠点病院である。 2023年3月末現在、通院患者数70名、累計診療件数は97件であり、診断の遅れからいきなりエイズ例が多 いことが課題である。コロナ流行期に保健所のHIVス クリーニング検査件数は激減し、エイズ発病で診断さ れる症例が相次いでいる。【対象と方法】パンデミッ ク前の2018年4月~20年3月の2年間とパンデミック 下の20年4月~23年3月までの3年間で、新規診断 症例を対象に患者背景、検査値、エイズ発病率など を診療録から後方視的に調査した。保健所で実施さ れたHIVスクリーニング検査件数の推移も考慮し、 COVID-19パンデミックが診療に及ぼした影響とパン デミック下におけるエイズ診療の課題について考察し た。【結果】パンデミック前とパンデミック下で新規 診断例のいきなりエイズ率は40%(6/15例)から79% (11/15例) へと上昇した。エイズ関連死亡率は16% (1/6例) と18% (2/11例) であった。福山市 保健 所におけるHIVスクリーニング検査件数(2年間)は 18-19年で530件から20-21年では146件へと減少して いた。【考察】保健所でのスクリーニング検査件数減 少や医療機関への受診控えによってHIVの早期発見が 遅れ、いきなりエイズ率の上昇に繋がったと考える。 またHIV感染の急性感染症状や体調不良などで受診し ても、コロナ検査のみで終了して診断に繋がらなかっ た可能性も考えられる。パンデミック下でもHIVスク リーニング検査を減らさない体制作りが必要である。

・第44回日本高次脳昨日障害学会学術会(Web)2020.11 利用行動(Utilizationbehavior)が疑われる症状が 下肢にも観察された一例

> (福山リハビリテーション病院 リハピリテーション部) 岡本 淳志、溝部 佳史、川原 薫 山中 崇

【はじめに】利用行動は物品を見たり、触れるだけで使用してしまう行動(Lhermitte1983)である。今日までの報告の殆どは両手での道具使用例だが、今回、下肢にも利用行動が疑われる一例を経験した為、考察を加え、以下に報告する。【事例】70歳代、男性、右利き。【並存疾患】血圧圧症、痛風、アルコール性肝障害。【現病歴】X年2月に自室で倒れており、A病院へ救急搬送。頭部CTにて両側前頭葉に血腫を認め、脳室穿破していた。家族が手術を希望せず、保存的治療施行後、当院回復期病棟へ人院となる。【神経放射線学的所見】頭部CT画像から、前補足運動野、補足運動野、前部帯状回を含む両側前頭葉内側面、脳梁膝部から体部、右前頭葉眼窩面に出血を認めた。

【神経学的所見】入院から1ヶ月頃よりJCSⅡ-10.軽度左片麻痺、両手、右足趾に把握反射、両手に本能

性把握反応あり。腱反射は明らかな左右差なし。病的 反射なし。座位でpushingあり。【神経心理学的所見】 聴理解は短文レベル、自発話は少なく、乞様で保続あ り。復唱は可能、呼称は困難であった。机上に道具を 提示すると禁止指示下においても両手での使用がみら れた。また、両下肢では床に置いたスリッパを見るな り引き寄せて履く行為を繰り返す、コップを挟んで掴 む等の行為がみられ、何れも自身で抑制する様子はな かった。【考察】利用行動と道具の強迫的使用との鑑 別点は、行為に対する抑制の有無であり、本例では外 部観察上、抑制はみられなかった。下肢の利用行動の 報告は極めて少ないが、利用行動と類縁である下肢の 道具の強迫的使用について後藤ら(2015)は貢任病巣 を前部帯状回、補足連動野、脳梁膝部を含む前頭葉内 側面、脳梁前方部としている。本例の病巣とも合致し ており、下肢の行為にこれらの領域の関与が示唆され る。また、本例の場合、半球内、半球間の抑制機構が 破綻した結果、下肢にも利用行動が出現した可能性が 考えられる。

・第45回日本精神科看護学術集会 (Web) 2020.6 前頭葉側頭葉萎縮をもつ統合失調症患者の行動制限 解除後のかかわり丁EACCHの構造化を用いてかか わった1例

> (福山友愛病院) 手嶋 浩一

・第45回日本精神科看護学術集会 (Web) 2020.6 精神療養病棟における職員接遇の意識改善の取り組み オアシス運動と褒めカードの効用

> (福山友愛病院) 道下真由美、山口 麻紀

・第35回バイオメディカル・ファジィ・システム学会年次大会(兵庫)2022.12 **精神状態とは?精神、心とは?**

(福山友愛病院)

行正 徹

・第48回日本精神科看護学術集会(北海道)2022.6 PEG増設後早期に経口摂取へ移行できた1例

(福山友愛病院)

柴田 健、土屋 浩恵、橘高由里子

・第11回広精協学会(広島)2023.6 精神科デイケアにおける多職種のかかわり

~円滑な対人交流を目指して~

(福山友愛病院)

岡田あゆみ

田中志保里、古賀 沙羅、進藤 洋子

・第41回日本小児心身医学会学術集会(和歌山)2023.9 起立性調節障害と脳髄液漏出症の診断を共に満たす 6症例の検討

> (細木小児科・福山医療センター 小児心療内科) 細木 瑞穂 (岡山大学病院 小児心身医療科)

【目的】脳脊髄液漏出症は、脊髄レベルの髄液漏出 から二次的に髄液量減少と髄液圧低下をきたし、起立 で悪化する頭痛や倦怠感、頸部痛、嘔気などが出現す る疾患である。起立性調節障害(OD)と症状が類似 するため、特に特発性ではその異同や併存が問題とな る。今回、ODと脳脊髄液漏出症の診断基準を共に満 たした症例について検討を行った。【方法】2017年か ら2022年に当院でODと診断後(体位性頻脈症候群5 例、起立直後性低血圧1例)、受傷歴や経過から脳脊 髄液漏出症を疑われ、脳神経外科で診断を受けた6 例(初診時11~14歳、男児2例、女児4例)を対象と し、診療録から後方視的に症例の特徴と経過、硬膜外 自家血療法 (EBP) の効果を検討した。【結果】明ら かな外傷歴からOD治療を行わず、EBP施行後OD症 状が消失した症例は1例(症例1)であった。OD治療 で新起立試験の正常化を認めたがOD症状が継続した 2症例のうち、硬膜外生理食塩水注入のみで症状が消 失したのは1例(症例2)、EBP施行後に症状が改善 したのは1例(症例3)であった。OD治療で新起立試 験もOD症状も改善を認めず、EBPを施行した3症例 はいずれも症状は改善したが、1例はEBP後の新起立 試験が正常化(症例4)、残り2例はEBP後も新起立 試験は正常化しなかった(症例5、6)。症例3-6の 4症例は、OD症状や不登校、片頭痛などのため、小 児科での継続治療を要した。【考察】対象には、ODと 診断されたが脳脊髄液漏出症であったもの、ODと脳 脊髄液漏出症が併存していたものが混在していた。全 例に脳神経外科的治療効果を認めたことから、OD診 療中も外傷歴や起立で著明に悪化する頭痛を認める 場合は、脳脊髄液漏出症を疑い治療につなげることが 重要である。【結語】今後も両疾患の関係について症 例の蓄積が必要である。

編集後記

このたび、福山医学第30号を発刊する運びとなりました。第29号の発刊から約3年、2022年8月以来

の刊行となり、大変喜ばしく思います。

本号には10編の論文が掲載されています。その多くは2023年11月に開催された第27回福山医学祭に

おいて発表された演題の中から選出された優秀演題を論文化したものです。従来より本誌は福山医学祭

の演題やシンポジウムをまとめたものを主な内容としてきましたが、2020年から2022年にかけてのコロ

ナ禍により福山医学祭が中止となったため、本誌も休刊を余儀なくされていました。

本号は「投稿論文」「第27回福山医学祭抄録集」「福山医師会関連医療機関の学術業績」の三部構成

となっています。学術業績については2020年1月から2023年12月までの3年分を収録しており、充実し

た内容となっています。コロナ対応で多忙を極め、学会活動も制限された状況下にもかかわらず、着実

に学術活動が継続されていたことに深く敬意を表します。

福山医学祭の演題と同様に、本誌に掲載されている論文や学術業績は、近隣の医療機関の診療内容、

得意領域、熱意をもって取り組んでいる分野を知る手がかりとなります。これらは医療連携を推進する

上での貴重な資料となるとともに、各医療機関が自院の特色をアピールするための情報発信メディアと

してもご活用いただければ幸いです。なお、製本版に加えて、第26・27・28合併号、第29号、そして本

号は福山市医師会のウェブサイト上でも閲覧可能です。

2025年5月

福山医学担当理事 田中 朗雄

190

『福山医学』投稿規定

1. 投稿資格:

投稿者(筆頭著者)は、原則として福山市医師会員とする。

会員でない者が投稿する場合には、あらかじめ福山市医師会員からの推薦状の提出により編集 委員会の承認を得るものとする。

2. 内容:

臨床医学に関するものとし、既に他誌に発表されたもの、または投稿中あるいは投稿予定のものは受け付けない。

人を対象とした論文についてはヘルシンキ宣言にのっとり、個人情報保護を考慮にいれたものでなければならない。したがって原稿の記載に当たっては、個人が特定できない記載を心がけること。

3. 原稿の採否:

採否は、編集委員会にて決定する。審査は査読制を採用し、加筆・訂正などを求められることがある。

4. 原稿の種類:

投稿原稿は総説・原著・症例報告を原則とする。その他投稿については編集委員会で決定する。

5. 原稿の分量:

原稿枚数: 原稿の長さは以下を目安とする。

*図・表は、各1点を原稿用紙1枚とみなし、上記枚数に含める。

6. 原稿の書き方

1) 表紙:

・題名、著者名、著者所属およびこれらの英訳の順に記し、下段に連絡者名、住所、電話、FAX、E-mailを明記する。

2) 論文要旨:

・400字以内の和文要旨と200語以内の英文要旨を付け、和文要旨に3~5語のキーワードを付ける。

3) 本文:

- ・研究は緒言、方法、成績、考察、文献の順に記し、症例報告は緒言、症例、考察、文献の順に記す。
- ・楷書、ひらがな、横書き、当用漢字、現代仮名づかいを用いる。
- ・Word、A4版、横書き、MS P明朝、フォントサイズ12ポイント、横書きで20字詰×20行で 印字する。
- ・医学用語は日本医学会編、医学用語辞典による。
- ・外国語は原語のまま用いるが一般に日本語化しているものは、片仮名を用いて良い。
- ・数量の単位は、kg、g、mg、km、m、cm、mm、 μ 、 ℓ 、d ℓ 、mEq/ ℓ を用いる。

4) 図·表·写真:

- · そのまま製版できる鮮明なものとする。 (大きさに指定のある場合はその旨明記する)
- ・図 ・表・写真はそれぞれ 1 枚ずつ別紙にまとめ、本文の欄外に挿入箇所を指示する。写真は図として取り扱い、表 1、図 2 などと記載する。

5) 略語:

・タイトルには原則として略語を使用しない。論文、要旨中でたびたび使われる語は略語を 用いても良いが、初出の時は正式な語を用い、(以下…と略す)と記載する。

6) 文献:

- ・主要なものを厳選し、記載は引用順に番号をつけ、本文中に1) 2) として、引用場所を明示する。
- ・著者が3名以上の場合、筆頭者以外は「ほか」「et al.」とする。
- ・欧文雑誌名の略称は、"Index Medicus"に準拠して記載する。
- ・記載は、以下の形式に統一する。

【雑誌】 -著者名:論文題名. 雑誌名 巻数:初頁-終頁, 年号.

- 例1) 清水俊明ほか:新しい便潜血試験. 小児科 28:939-940, 1987.
- 例2) Einhorn MS et al: Concentrations of antibodies in paired maternal. J Pediatr 111:783-788, 1987.

【単行本】-著者名:論文題名.編者名:書名,巻数,版数,出版社名.初頁-終頁,年号

- 例1) 寺田義光:日常生活指導. 三河春樹(編):喘息児, 医学書店. p15-48, 1986.
- 例2) Mcmillan CW: Vascular disoeder. In: Miller DR (eds) Blood Diseases, 5th ed, CV Mosbe, pp804-807, 1984.

7. 原稿の送付:

原稿の送付は、以下のとおりとする。

1)直接持参:

原稿と同一内容の電子データが格納された電子メディア(USB、CD-RWなど)を添える

2) 簡易書留による郵送:

封筒の表に「投稿原稿在中」と明記し、原稿と同一内容の電子データが格納された電子メディア(USB、CD-RWなど)を添える

3) E-mail:

メールに添付もしくはオンラインストレージなどを活用する

原稿送付先:

〒720-0032

福山市三吉町南2丁目11-25

福山市医師会 総務課 「福山医学編集委員会」

E-mail igaku@fmed.jp

8. 著者校正:

1回とする。その際、脱字、誤植以外の訂正、変更、削除、挿入は差し控える。

9. 著作権:

本紙に掲載される著作物の複製権、二次物著作権利用権、譲渡権は福山医学会に属する。

10. 掲載料:

原則として無料とする。

11. 別冊:

最小部数は30部とし、それ以上は有料とし20部単位で受け付ける。

12. 推薦状 (別紙)

国山医学編集委員会 至 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日					
委	員	長	殿		

*推薦者(福山市医師会員)

所属

氏名

印

推薦状

下記の医学論文は非会員(医師以外)の執筆によるものですが、福山医学の投稿規定に基づき、目的に沿った内容と考え、投稿を推薦しますので、ご審議をよろしくお願い申し上げます。

記

論文名

執筆者

所 属

役職名

連絡先・連絡方法

E-mail

*推薦者は、福山市医師会員であること。

『福山医学』 第30号

発 行 者 福山市医師会

発行責任者 西岡 智司

編集委員長 平田 教至

編集委員 田中 朗雄 宇髙 毅

水田 昭文 高橋 正彦

中村 信義 石岡 英彦

瀬﨑 伸夫 森 雅信

藪下 和久 黒瀬 恭平

山本 昌彦 貞森 裕

印 刷 株式会社 正文社印刷所

The Journal of The Fukuyama Medical Association